都山流師匠・准師範

受験準備講習録

318
127

始

特219
640

駿準備講習録

上卷

藤井隆山編

序

講義録といふものは、元来無味乾燥なものので、読むに堪へぬものが多い。たとひ努力して読んでみても、其効果は余り芳しくないものである。況んや受験準備用のものと来ては、只どう肩が凝るのみで、題目を見たゞけでもウンザリする。さりとて実用上からは是非無くてはならぬものであり、当流にもこんな本の一部や二部は、あつてもいゝ筈だ それが今日まで出なかつたのは、即ち以上の理由からである。

隆山君が、それを肩のこらぬやう、面白く読ますやう、そしていつのまにやら樂理を覚えさせるやう、と試みたのが本書である。

予に序文を徵せられたので、内容をのぞいて見ると、大体その目的を達せられてゐるやうに思はれる、或部に至つては、後進を教へ導くのに懇切を極め、一々噛んでふくめるやうに説いてある。

下巻の問題解答集も、平凡といへば平凡だが、あのうるさい仕事を克明にやつてくれたといふことが、どれだけ後進者のためになるかわからぬ。

要するに此の著は、ジミなパツとせぬ仕事であるが、その奥、非常に必要な仕事であり後進者がどうしても一度は読んで見ねばならぬものので、而かも読んで息塵を感じないやうに、その記述に非常な苦心が拂はれて居るといふことに帰する。

この故を以て、この著に敬意を表し敢て江湖に推挙すと云爾

竹琳軒大師範

はしがき

受験!! 夫れは恐ろしくとあり又樂しい事でもあります。ズラリと並んだ試驗委員の面前で貧しい自分の技倆や学力を試される事は何と云ふ恐ろしい事でせうか、然し又日頃きたへた自分の立派な腕前や優秀な技術を試驗委員が、びつくりする程の立派さで、やつてのけたら、又、何と云ふ愉快な事でせうか。夫れは一つに諸君の努力如何に依つて栄冠はチヘられるのです。でも空しき努力であつては何らの効果も有りません、即ち準備の仕方を上手にやらないと折角の努力も何にもなりません。茲に於て私は何か系統的に準備の仕方を、まとめて見たいと思つたのであります。私は非常な熱心さを以て今本書を作らむとするものです。諸君も近き將来に於て受驗せられる方々です、勿論熱心に勉強せられる事と信じます。其処に両者の心が合する時ならば落第と云ふ、いまわしい事がある道理が無いと思ひます。故に私は本講習録に依つて勉強せられた方は一人も残らず及第せられる意気込みで居ります。然し呉々も申し上げたい事は必らず諸君の努力を要する事です。若し及第せなかつたと云ふ方がありましたら、其方は書いてゐる私程の熱心さが無かつたと申さなければなりません。

大正十五年二月

都山流三十周年を記念として

隆山識

第三版発行に当つて

一二版受講者中受験せられた方が大部分登第せられたと云ふ事は本書の光栄とする処であります。尚ほ年々試験の内容が変つて行くので本書も之れに応じて改訂し万遺憾なきを期して居ります。上巻は専ら師匠検定試験用とし、上巻と中巻を合して准師範試験用と為つて居ります。下巻は問題集と解答集より成り上中の巻に於て得たる智識を実際に練磨すると云ふ仕組に致しました。

講義は試験に不必要な事は余り書きません、但し過去に於て必要であつたもの、将来に於て必要と認められるものは掲載致します。そして大切な事は非常に細密に、くどく書いたり、あまり必要で無いものはアッサリと書く事に致します。要するに諸君に試験を通過するだけの実力を養成する事に最も力をそゝぎました。御讀みに為る中に不審の点がありましたら直ちに御照会下さい。喜こんで御答致します。

目次

總論

一、試験はどんなものか

イ、師匠検定試験

ロ、准師範試験

ハ、試験の模様

二、受験者の取るべき道

イ、準備の仕方

ロ、受験者の心得

第一章　樂理之部

第一節　口述

一、口述とは如何なるものか

二、記憶に関する事

イ、当流に関する事

ロ、解説に就て

ハ、暗記すべき事

49 44 35 35 33 31 31 29 26 25 23 18 14 14 13 頁

三、理論に関する事……57
イ、音とはどんなものか……57
ロ、音の性質……58
ハ、樂理とは何か……60
ニ、十二律の話……61
ホ、尺八の長短……73
四、計算問題の解き方……78
イ、八寸管に於ける音律の計算……79
ロ、長短各管の計算……82
第二節　筆答……92
一、樂理筆答とは如何なるものか……93
二、箏三絃の智識……96
イ、三絃に就て……96
ロ、箏に就て……109
三、今迄に出た問題……122
イ、ロ述問題……122
ロ、筆答問題……128
第二章　唱譜之部……140

第一節　小間拍子……140
一、小間拍子とは如何なるものか……142
イ、拍子の説明……143
ロ、唱譜の準備……148
二、唱譜の練習……153
イ、練習の仕方……153
ロ、拍子の取り方……160
ハ、練習問題……163
三、今迄に出た問題……165
イ、試驗曲目……165
ロ、臨時唱譜……167
第二節　其他の拍子……170
一、大間拍子とは如何なるものか……170
イ、基本的説明……171
ロ、其の練習……174
二、三拍子とは如何なるものか……176
イ、基本的説明……179
ロ、其の練習……180

三、其他の拍子……182
イ、基本的説明……183
ロ、其の練習……186
第三章　吹奏之部……189
第一節　歌物吹奏……189
一、歌物吹奏とは如何なるものか……190
二、吹奏の準備……192
三、歌物吹奏の練習……196
イ、練習のしかた……197
ロ、音律……198
四、今迄に出た曲名……200
第二節　手事吹奏……201
一、手事吹奏とは如何なるものか……201
二、手事吹奏の練習……202
イ、練習の仕事……204
ロ、誤り易い手……207
三、今迄に出た曲名……210
第四章　作譜之部……211

第一節　基本的説明……211
一、作譜とは如何なるものか……211
二、予備智識……214
イ、音階の話……214
ロ、旋律の話……220
ハ、音階の計算……225
三、三分損益……227
イ、順八逆六の話……229
ロ、三分損益とは何か……228
ハ、和声の話……231
二、協和音……232
四、旋法の話……235
第二節　作譜のしかた……244
一、旋律の練習……245
イ、旋律の訂正……245
ロ、音律の練習……248
ハ、何旋律か……250
二、作譜の練習……261

イ、尺譜……288
ロ、盛り込み……281
ハ、抜き手……279
第三節　今迄に出た問題……276
一、樂理科……276
イ、口述問題……276
ロ、筆答問題……275
二、作譜科……270
附錄　全曲調査表……261

總論

尺八の試驗だからと申しましても、矢張り普通の学校の試驗と変りはありません、心を落ちつける事は最も大切であります。殊に吹奏や唱譜等と申しますと丁度一人宛口頭試問を受ける樣なものゝで離れでも多少は上がつたり、固くなつたりするものです。平素立派に吹けた尺八も鳴らなくなつたり、平素間違いもせぬ箇所を間違つて吹いてしまつたりする事が多いのですから、冷靜に、落ちついて受驗をせなければなりません。よく試驗は運だ等と申します、然し勉強した人程幸運なる事は勿論です。勉強せずに居つて運が好くて及第したなんと云ふ事は、あり得る事ではありません。總べて自信が無くては心に落ちつきが無いものです。竹角諸君は先生に就て習つて下さい。試驗の中でも実科即ち、吹奏唱譜等と云ふものは筆で書き表はせるものではありません。従つて本書は実科は斯うして勉強すべしと云ふ仕方を述べるに過ぎないのですから、本書を熟ら御讀みになつても、吹奏が上手になる道理がありません、之れに依つて自ら研究しなければ何の効果も無いのであります。次に学科の方面は大分自信を以つて書きました。殊に樂理は本書を御讀みになれば、もう宜しいでせう。然し之れとても自分で一々やつて見なければならぬのです。之れは私の方へ御見せ下さる方らは喜こんで訂正して御上げ致しますから遠慮なく御送り下さい。それから暗譜、書取等と云ふ科目は自分一人では課習

出来ません、必らず先生より友人よりに吹奏して貰つて下さい、之れ等は全く練習の回数が多い程必らず効果があるものです。

扨て以上種々申し上げた事を一々履行して、そして本書に示されて勉強の仕方に依られたならば、必ずや得る処があるでせう。大体が音樂を斯うした通信等で教へると云ふ事は出来ない相談でありますが、夫れをやらうと云ふのですから、諸君と真剣に御勉強あらむ事を祈ります。即ち單に本書を讀んだ位で師匠に成れたり、准師範に成れたりする様な、生ま優しいものでは無い事を吳々も申し上げて置きます。本讀習録を御取りになつた位の方ならばきつと熱心に御研究せられる事と存じますが、何卒本書の命するまゝに実行せられて有終の美果を得られむ事を切つに祈り上げます。

一　試験とはどんなものか

都山流の試験には二つの種類があります。一つは師匠検定試験で、一つは准師範試験であります。本書はどちらの試験にも通用出来る様に順次稿を進めます。つまり都山流に於ける總べての試験が本書に依つて明らかにもつてゐる譯けであります。

1　師匠検定試験

師匠検定試験とは名の如く都山流尺八を指南せむとする人は、先づ此の試験に通らなければなりません、そして指南免許状が宗家から下付されたら、初めて指南開始届を宗家へ出して、茲に立派に師匠となるのです。今都山流規定を開いて見ますと、

興傳免状ヲ有スル者ハ師匠検定試験ヲ志願スル事ヲ得
師匠検定試験ハ試験委員二名以上ト共ニ宗家之ヲ執行ス
師匠検定試験ハ毎年二回六月及ヒ十二月ニ之ヲ執行ス

とあります。之は大阪枝方の宗家の道場で執行されるのでありますが、近時都山流の急激なる発展に依り、漸次右以外の月でも臨時に全国の枝要都市で執行さるゝ予定の様に聞きました。其時は必らず都山流樂報に発表になります。

次に此の試験委員は宗家が准師範以上の方々に任命されるのでありまして、准師範以上の方は又自分から希望して委員に採用される事とあります、が自分の門人が受験する場合には委員を希望しても、成る可く採用にならぬ様であります。之は勿論試験の公平を期する上から考慮されるのでありまして、当日迄どなたが委員に成られるか殆ど不明であります。

処で茲に師匠特別検定試験と云ふ制度がありますが、之は右の様な正規の試験を受けずに、單に其人の師匠の興書に依つて、申請のみで許可せられるのであります。要するに試験をせずに直ちに師匠に成れるのであつて、之は土地の情況なり事情に依つて許可せられるのです。然し京阪神地方は師匠過剰の故を以つて此の制度に浴する事が出来ません。とう一つ、准師範以上の職格者は何時でも師匠をする事が出来ます。

以上をまとめますと、

尺八を指南するには
- 一　師匠検定試験を受ける必要なき事
- 二　准師範になれば師匠試験を受ける必要なき事
- 三　京阪神以外の在住者は無試験で許可を得られる事あり

尚ほ手續を一応記して置きませう。准師範試験と之れと同一であります。

一　師匠検定試験受験志願者ハ試験執行ノ前月末日マテニ戸籍抄本及ヒ履歴書（普通学職業履歴及ヒ樂歴ヲ明細ニ記スヘシ）ト受験志願書ヲ添ヘ当該師匠ヲ通シテ宗家ニ申請スヘシ

一　前條ノ場合ニ於テ師匠ハ志願書ニ適当ノ者ト認メル旨ノ具書ヲ爲スヘシ

一　師匠検定試験料ハ五円

扨て話しが大分横道へ入りました。今試験の内容を説明致しませう。大体左の六科目を経なければなりません。

第一科　樂理筆答
第二科　口述
第三科　唱譜
第四科　吹奏（歌物）
第五科　吹奏（手事）
第六科　臨時唱譜

之を見ますに第一第二は学科で理論や記憶を検されるのです。第三から第六迄は実科で師匠には欠く可からざる唱譜吹奏が課せられます。先づ何れか欠けても師匠の資格が無いものと見なければなりません。故に一科目でも落第点があつては当然及第は出来ませんが、其辺は其時の委員の意見に依つて及落が決定されるのでありまして、五十点からは及第点で總得点と其人の人格等が案配されて順位が定められるのであります。処で茲に諸君の注意を促し度いのは試験科目は常に右の六科目かと云ふと決して左様ではありません、大正十四年十二月に施行されました全試験は

第一科　樂理（問題五題中一つは作譜なり）
第二科　唱譜
第三科　吹奏（歌物）
第四科　吹奏（手事）

の四科目でありました。斯う眺めた処それ以上科目が減ずる事は決してありますまい或は將来作曲とか他の科目が入るかも知れません。兎に角科目の増減は其時の受験者の多寡に依つて決せられるものと思考されます。大正十五年に施行せられた全試験は、

第一科　樂理（問題五題中二つは作譜は、二つは樂理計算、一つは暗譜なり）
第二科　唱譜
第三科　吹奏（本曲、歌物）
第四科　吹奏（手事）

第五科　臨時唱譜

昭和二年十二月全試驗

第一科　樂理（五題中二題は作譜、他は計算問題）

第二科　吹奏（歌物）

第三科　吹奏（手事）

第四科　臨時唱譜

斯くの如く例へ科目が減じても内容は遂年難かしくなる一方であります。故に大体は准師範試驗と同樣の科目を課せられるものと思へば間違ひありません。師匠檢定試驗とて侮る可からざるものであります。

ロ　准師範試驗

准師範と云ふ名稱は一体何かと云ふと都山流に設けられた職格名です、御承知の通り階級には初傳中傳奥傳秘傳の級があつて全部の階級を經れば皆傳免許狀が下げせられるのです。この皆傳免許者は准師範試驗を志願する事が出來るのであつて、及第すれば准師範の職格が得られ、同時に山號が許されて何山と改号する事になつてゐます。職格は准師範の上に師範と大師範とがありますが、何れも流に対する功勞、技術の優劣等に依つて宗家から付与せられるのであつて、准師範以上は別つに試驗制度は設けてありません。

扨て准師範試驗は実に左の十二科目から成つてゐます。

第一科　作譜

第二科　作曲

第三科　樂理筆答

第四科　書取

第五科　暗譜

第六科　口述

第七科　吹奏（歌物）

第八科　吹奏（手事）

第九科　吹奏（本曲）

第十科　唱譜（小間柏子）

第十一科　唱譜（大間柏子）

第十二科　変譜吹奏

これは毎年二月枚方の宗家道場で施行せられるのです。試驗委員と三名以上と成つてゐます。試驗委員任命は師匠檢定試驗と同じ事であります。近来は受驗者が急激に増加するものですから、九月頃東京の宗家本邸で臨時試驗がある事は毎年の例と成つた樣であります、又大正十四年九月には金沢市で臨時試驗が施行されました、大正十五年九月には、広島でも施行されました。臨時と申しましても決して内容が容易くなる事はあり

ません、遂年程度が高くなりつゝありますから、受験者も益々深く広く準備をして行く必要があります。

尚ほ大正十四年度に行はれた試験科目は左の如くでありました。

第一科　作譜
第二科　作曲
第三科　樂理（筆答と口述を含む）
第四科　書取
第五科　暗譜
第六科　吹奏（歌物）
第七科　吹奏（手事）
第八科　吹奏（本曲）
第九科　唱譜（小間拍子）
第十科　変譜吹奏

此の試験は、いつも二日間で行はれるのですが、近来受験者が多いものですから三日間を要する様な風です。右の十二科目が十科目に変更されたと云ふのも実は時間を要する関係上減少されたものと思考されます。何となれば樂理と口述は同じ内容のものであり、大間唱譜と小間唱譜にしても大同小異である処から十科目となつたのでありませう以前の試験には未だ聴覚試験とか答手合調試験等がありました、又同じ作譜の試験にしましても現今では内容が全然昔と変つて終つてゐます。今大正十五年二月に施行された全試験の科目を掲げませう。

第一科　作譜
第二科　作曲
第三科　樂理
第四科　暗譜
第五科　書取
第六科　唱譜
第七科　吹奏（歌物）但し生田流
第八科　吹奏（歌物）但し山田流

右の通り八科目となつて終いました、然し採点は第七科第八科に限り二百点満点、其他は百点が満点とされましたから、点数から云へば十科目あると同様であります。

昭和二年二月全試験の科目は次の通りです。

第一科　作譜
第二科　作曲
第三科　樂理
第四科　暗譜
第五科　書取

第六科　臨時唱譜
第七科　吹奏
第八科　臨時吹奏

昭和二年九月東京臨時試験科目は次の通り

第一科　作譜（盛必）
第二科　作譜（神作）
第三科　樂理
第四科　書取
第五科　暗譜
第六科　吹奏（歌物）
第七科　吹奏（手事）
第八科　臨時唱譜
第九科　変譜吹奏

昭和三年二月全試験科目

第一科　作譜
第二科　樂理
第三科　書取
第四科　吹奏

第五科　臨時唱譜
第六科　変譜吹奏

右に掲りますと暗譜、作曲が無くなりましたが、最早や廃止になつたものと考へるのは早計でありますし、矢張り準備をして置かねばいけません。

斯様に漸次科目や採点法に変化がありますから、受験者どウッカリして居れません。周到なる準備が必要であります。

ハ　試験の模様

今試験の大体を記して諸君の注意を促したいと思ひます。試験方法は師匠検定と准師範試験と同様であります。

先づ科目を二日間に分けて第一日目は学科第二日目は実科と云ふ風に行はれます。尤も受験者が多い時は実科に二日間を要して総体で三日間となる事があります。何れも午前九時頃から始まりますが終るのは一定しません。第一日目の学科は試験場で受験者が全部一勢に受験しますから、午后四時か五時頃に終りますが、二日目の実科は一人宛受験させられるのですから、終るのは各自違つて来るのであります。斯くの如く、実科は一人宛の試験ですから、受験順番が当然定められなければなりません、之は抽籤で定められます。（試験委員に於て公平に抽籤せられるのであつて、受験者直接するのではありません）然し一度受験願書受付順で行はれた事となります。

扨て実科は今申した様に、一人宛受験させられるのですから、中々時間がかゝります。殊に一番に当つた人は、最先きに試験が終つて了います。又後番の人は、夫れ丈け待つてゐなければなりません。然し必ずしも控室で待ち合はせてゐなくてはならぬと云ふのではありませんから、順番を見計らつて控室へ入場すれば宜しいのですから、遠方から来た人は直ちに帰国する事も出来ます。だ人は退場すれば宜しいのですから、遠方から来た人は直ちに帰国する事も出来ます。自分が後の順番に当つたとしても、事情を話して、早い順番の人と代つて貰ふ事も出来ますから、受験者が多数で三日間を要するとしても、早い順番なれば二日目の午前に帰国する事も出来ませう。成績発表は翌日試験場へ登第順で張り出されます、が先きに帰らねばならぬ人は、知人に依頼されて電報で知らせて貰ふ事にすれば宜しいでせう。及第すれば指南免許状、准師範免許状が夫れ〳〵下付せられます。準師範免許状は左の通り記してあります。

其許儀多年当流熱心依技術上達今度改号何山准師範相許候事

又横道へ話しが行きました。今試験場の模様を申しませう。大阪枚方の道場で行はれるのは、普通の学校の教室の様に椅子に腰掛けて受けるのです。私が受りた頃は一人に机一脚でしたが、此頃は受験者が多いから、一つの机に三人宛並らぶ様に聞いて居ります。又東京の宗家本邸では、日本座敷ですから、皆座ぶとやるのだそうです。之れは受験者が隣り同志接近しては咎が見えますから、公平な事を云へば、一人一脚でなければなりません。又前後の受験者同志で話し合つたりせんとも限りませんから、最初に同門者はお互に席を替へさせられる事があります。近来委員から席順を指定されるとの事であります。然し何と云つても、試験には同門者が多い程徳であります。只にお互に心強い許りでも大変和益があります。

又同門の人は順番をお互に替へても構ひません。尤も替へたい時は早速委員へ申出なければなりません。順番が後になる程練習時間が多いのですから、同門者はお互に助け合ふ事が出来ます。吹奏試験では近来試験曲を第一日目に発表せられるそうですから、尚ほ更ら受験者には好都合であります。尚ほ実科の採点法は比較採点であります。其方法は最初三人迄の受験者の採点を委員合議の結果定められるのださうで、後は委員各自に採点し、終つてから委員各自につけた点を合計して平均点を出すと云ふ方法との事であります。

二　受験者の取るべき道

受験者は公明正大に、自分の力を以つて戦はねばなりません。そして自分がどうゝ之れ丈けなら及第は出来ると云ふ自信を以つて臨まれるならば、心の安定丈けでも大した違ひであらうと思ひます。尤も地方に居られる方は、自分の実力が果して受験する資格があるかどうか疑つてゐられる方とある事と信じます。本講習録では門題を後送する事に

してゐますから、答案さへ呈出せらるれば夫れに依つて諸君が資格ありや否や決定する事が出来ませう。

昭和二年十月の都山流樂報に宗家から受驗者へ注意があります。其の概略を申しますと「近頃の准師範受驗者は各科目の答案が不平均不揃で如何にも未熟なる感を抱かせるものが多い、之れは受驗者の数が近年著しく増加して来た結果其の試驗の内容の如何を毫も顧みず、單に兎と〳〵と受驗する爲であらうとは考へられるが、准師範試驗は常に時代の進運に連れて問題の内容及び採点の標準に就いて次第〳〵に向上し来つて居るのであるから受驗者は其の受驗準備をするに方つては各科に就いて十二分に勉強し、練習と重ねて貰ひたいものである、中には試驗期日の発表せられたのを見て、急に之に応ずる考を起して、急仕込みの勉強を思ひ立つて僅か一ケ月か二ケ月位樂理の勉強をした位の程度で試驗場に出て来て居る人とある様であるが、これは余りに准師範試驗を軽く見過ぎたものと言はざるを得ぬ」

諸君も充分の勉強を積んで、この轍を踏んではなりません。

イ　準備の仕方

扨て愈々受驗するとせば誰れでも落第したくありません。処が受驗者数の一割から三割位迄は毎回落第者がある様です。尤も、落第者は捲土重来、次回の試驗には優等の成績で及第せられた方も少くありません。故に本人に取つては尻から及第をするより、夫

れ丈け実力を付て反つて宜しいのですが、然し之は理窟で及第するに越した事はありません。又及第するからには一番でも上席で出たいのが人情であります。夫れには試驗の採点法を考究して、一点でも余計に取る方法を講じなければなりません。

先づ作譜作曲と云ふ科目は最も大切であります。宗家が申さるゝには「作譜作曲が良ければ他の科目が悪るくても及第さすし考へだと云ふ事を洩らされた事があります」又夫れ丈けの価値がある科目と云つて宜しいでせう。之は平素から最も練磨が肝心です。然し諸君は一点でも余計に取るべきものは之れではありません、筆答とか口述暗譜ですと等は各が一つ違つた丈けで十点二十点と差引かれるのです。之を百点宛取つて御覧なさい、後のものが悪るくても平均すると、そう悪い成績にもなりますまい。尤も五十点から及第ですから夫れ以下の科目が一つでもあつては、總得点の順位が上席でも、三四番位迄は下がるものと思つて下さい。然し之れと程度もので落第点があつては芳しくありません。殊にどの科目も六十点位で中に落第点の物が一つと二つとあると云つた時は当然落第と見なければなりません。要するに樂理暗譜で最高点を取り、後は落第点を取らぬ様に心掛けたら宜しいのです。

次に実科の方即ち、吹奏唱譜等は、どんな人でも、如何な上手な人でも八十点以上の点は取れないそうです。(百点を満点とした時で、之れが二百点が満点となる時は自然倍加と見て宜しい)従つて受驗者の得点の開きは殆ど学科と左右せられると云つても過言ではありますまい。何故なら受驗しやうとする程の

人が、そう〳〵吹奏が悪い事どありますまい。そして今申しました様に委員の方では、吹奏の採点は百点が満点の時でも、八十点を最高として居られるそうです（むゞこの採点法は将来も斯うであるかどうか保証は出来ませんが）から自然学科に左右せられる事となるのです。

以上述べた事に依つて、大体準備の方針がお判りになつたでせうが、吹奏と暗譜とは何と云つても表藝ですから、絶えず練習しなければいけません。ちつとも鳴らぬ様では資格が無いではありませんか。私は一度宗家に「受験者をどん〳〵本風に教へたら良いでせうしと伺ひました、処が宗家は「一生懸命に吹かせろ」と仰せられた事を記憶してゐます。

尚ほ一つ申し上げて置き度い事は

准師範試験ヲ楽理試験実技試験ノ二部ニ分チ各部ノ登第ハ当該試験以後二箇年間其ノ効ヲ有ス

の規定がある事です。之れに依りますと、今吹奏の中の歌物吹奏科で落第点を取り、他の実科及び学科を全部及第点を取つたと致しませう、すると この人は、歌物吹奏一つの為めに惜しくも落第する事になります。之れはどうも可愛そうだ、次の試験の時は学科は已に及第してゐたのだから、やらなくとも良い、落第した方の実科だけ受験さして及第点を取れば、夫れで上げてやらうと云ふ非常本恩典であるのです。若し諸君の中に、実科は見込みがあるが学科はだめだと云ふ人、又は、学科は大丈夫だが実科はだめだと

云ふ人がありましたら、この恩典に浴して、一方完に全力をそゝいで、二回受けられる事も無益本事でもありますまい。何とかなれば、初めて受ける人は右の様に二部組になつてゐましても、両方とも受け本ければ本らぬのですから、一回でも場馴れする事は決して悪い事ではありません。然し二回目には、この人は前期に落第した人だと明白に判る事も余り感心した事でもありません。まあ、一度に及第したに越す事はありません。只不幸にして落第した本らば、この恩典があるからと思つて余り悲観し本い方が宜しいでせう。

ロ　受験者の心得

受験者は試験当日左記物品を持参し本ければなりません。

愛管（一尺八寸管、若し愛管が一尺九寸なれば、夫れでも差支へありますまい、然し其他の長さの管はいけません）

都山流音譜全部（未公刊のものも勿論持参せねばなりません、無いものは揃ろへて置かぬといけません。吹奏や唱譜の試験は總べて目分の譜で試験せしめられるのですから、秘傳級に属する音譜は勿論必要ありません）

唱譜に使用する扇子

以上は実科の試験日に使用するものですが、実科は二日目とは云ひ乍ら、受験者少数の

場合は第一日目の終りに実科の一部分をやられぬとは限りませぬ、次に学科の日は答案用紙（便箋等よりも半紙判型或は美濃判型の西洋紙が宜しい。書取の時は大きな紙を使用する程宜しく、二三十枚は用意せなければなりません）

其他に万年筆、鉛筆三四本、消ゴム、ナイフ、時計等は是非必要です。答案は鉛筆で書いて宜しいのです、殊に書取等は鉛筆でなければ慣です。次に学科の時に試験室へは参考書や音譜等は持つて入る事はなりません。試験室の着席は指定せられるそうですが、若し隣意なれば時に依つて前面の黒板に光線が反射して見悪い箇所があるかも知れません、さんな時には席を立つこと宜しいか、夫れ丈け時間を空費する事がありますから注意して下さい。即ち樂理や作譜等は前面の黒板に書かれるのですから、黒板に向つて右側に着席すれば、早く問題を読む事が出来ます、何故かと云ふと、黒板へ文字を書かれる委員の体の陰に成る処へ着席した人は、委員が体をズラされる迄待つてゐなければならないからです。斯様に考へて見ると、着席するのにも周到の注意が肝要であります。

次に服装は羽織丈けは故付のお宮しいと思ひます。然し別に制定してある訳でもありませんから各人の自由でありますが、袴丈けは是非着用せなければなりません。尚ほ准師範試験の際は、既に師匠である人は幹部記章を佩用して下さい。

第一章　樂理之部

本章に於ては、口述と樂理筆答とに分けて講義しますが、何れも内容は同一でありますから、この通り讀んで行つて下さい。

第一節　口述

口述は従来一つの科目として独立してゐました、所謂口頭試問であつて最も恐れられる学科の一つでありますが、然し此頃は時間の都合で廃止になつてゐる様ですが、例へ廃止になつてゐても、以下解く事位は口頭で云へる様になつてゐなければ受験する資格がないと見なければなりません。其のつもりでよく御研究の程祈つておきます。

扨て今迄は第一日目の午後から開始され、抽籤に依つて定められた順番で一人宛試験室へ呼び出されました。試験室には鍵型に机が置いてあつて、泉家始め試験委員が正面

に控へられ、横の机には樂報記者が列して居られます、其前面椅子に掛けさせられるのであります。如何に樂理に自信があるにしてもい室内へ一歩入るや否や、気を呑まれて了つて、中にはガタ〳〵顫へ出す人少無きにしもあらずです。全く神聖と云ひませうか、壮重と云ひませうか、室内の空気に圧せられて了ひます。

そこで先づ礼をして着席したら、下腹にウンとカを入れて気を落ち付けなければいけません。此時宗象から姓名を問はれ、續いて問題を五題矢つぎ早やに呈出されます。受験者は問題が了解出来なければ何回でも繰り返へして聞いて差支へありませんが、この時こそ、慎重に落ちついて考へなければ、一箇処でも意味を取り違へると、答が違つて了ふのですから、余程気を落ちつかしてやる事です。一問毎に考へる余裕は充分与へて下さるのですから、緩つくり考へて、自信がついたら答を申し出なさい。

旋律等の問題は時には紙片に書いて示される事とありますが、殆ど口述は受験者へ口頭で以つて問題を申し聞かされるのであります。

然しこの口述も、大正十四年二月の准師範試験には廃止、全年六月の師匠検定試験にもありませんでしたが、全年九月の東京、金沢の准師範試験には左の様な形式で復活しました。尤も大正十五年に入つてからは廃止の状態にあります。

先づ受験者全部が試験場に着席してゐます。前面には宗象初め委員全部が起立して受験者全部を見渡して居られます。そこで宗象が次の様な意味を一同に申し渡されます。「之れから口述試験をやるから、受験者は膝の上に手をのせて、決して鉛筆を持つたり又は脈を動かしてはならぬ、顔を上げて前面を見てゐる様に」申され、第一……と口述の問題を二三回繰り返へして申されます。質問は多少許されます。そこで「鉛筆を持つて答を記せ」と云はれる時には、受験者全部が一勢に答丈けを答案用紙へ書き止めます。次に第二……の問題が出され、同様に答を記入すると同時に、委員が全部の答案を集めに廻はつて取つて了ふと云ふ風でした。共間全委員が監視をして居られますから、以前の一人宛の口頭試問と何ら変りはありません。それが二題と、あと樂理筆答三題、合計樂理科五題として採点されたのであります。

一　口述とは如何なるものか

今迄に出た口述問題は左の四つに区別する事が出来ます。

(一)常識問題

之れは受験者の人物を見る為めかと思ひます。口述と云ふものの全般から云つても、其人の人格態度を見る事が主眼でありますから、特としては、此の種の問題を課せられたものと思ひます。と云つても、尺八や音樂、都山流に関した事のみでありますが、尤も、現下の如く、口述が無い時代には出なかつたらうと思ひます。

(二)樂理計算問題

計算問題は筆答の方で主として出るのですから、口述が独立してゐた頃には一題位しかゝ出なかつたのです。然し大正十四年度の如く、口述が二題とあつては、一題丈けは此の計算問題である事を覚悟しなければなりません。

(三)記憶に関する問題

之れは是非記憶してゐなければ、点を取る事が出来ません。例へば「楓の花の華の一は何譜かし」とか、「本曲潮風は誰れの作曲なりや」とかの種類で、口述科独立の時代では斯うした単独の形で、よく出ました。然し計算問題へ一緒に織り込む事も出来る事ですから、今後共、記憶すべき事は必らず憶えてゐなければなりません。

例へば「一尺七寸管と六段を合奏せる華の三は何律かし」等と云ふ問題は、華の調子を記憶して居なければ出来ないのであります。記憶すべき事は、本書では最も苦心をして取捨しましたから、迫ひ〳〵と発表して、諸君に記憶して載く考へであります。

(四)旋律に関する問題

これも将来は必らず出るだらうと思ひます。之れは作曲作譜と関聯してゐますから、其章で綴つくり説明する事として、此の章では(一)(二)(三)を順次講義する事と致します。

夫れから、採点は先きに申しました通り、一科目に就き百点が満点ですから、口述が独立してゐた時は五題出て、一題は二十点宛と定めてありました。ですから一題違つた丈けでも非常な打撃であります。尤も筆答の方では一問の中に又四つとか五つに分けられて出る事もありますから、そう悲観すべきものでもありません。

尚ほ問題は総べて呉家が作製せられるのであつて、試験委員の方々は別に作製には預かられぬとの事であります。

二　記憶に関する事

では愈々之れで予備智識も済みましたから、講義に入ります。

此の記憶に関する事項は其の取捨に苦心をしたのですが、若し時間の余裕さへあれば今少し詳しく諸君で調らべて、どう少し範囲を広くして置かるゝならば、万全の策と云へませう。

一　当流に関する事

都山流は、中尾都山師が明治二十九年二月、大阪天満に指南の看板を揚げられたのが始まりであります。都山の号は、都山師の母堂三都子刀目の都を冠して、故山を偲ぶ意味であるとの事です。又、先生の御名前が琳三であるゆゑから、琳に竹を冠して竹琳軒と称され、この称号は大師範の職格者に允許して居られます。

例題一　都山流発祥の年代は如何(師一三・一二)

答　只今説明した許りですから略します。
（師一三・一二）とは師匠検定試験大正十三年十二月に出た問題なる事を示したのです
従つて以後其つゞりで居て下さい。師の代りに准とある時は准師範試験問題の略で
あります

例題二　本年は当流創始何年に当るや

答　三十二周年にあります（昭和三年の時）

当流の音譜は明治四十一年九月に初めて出版されました。ヴアイオリンの音譜は明治
三十九年九月に発行せられました。御承知の通りヴアイオリンでの革曲の音譜を都山師
が著作して居られますが、現今でゞ師の音譜は最ゞ正確で巧みに採譜してある事は一般
の定評であります。

例題三　都山流樂譜公刊最初の年代は如何（師一三・一二）

答　略

先生は京都と大阪の中央、淀川の畔枚方町に明治九年十月御出生遊ばされたのです。
先生の母堂は寺内検校の息女で、第三絃の技に長じて居られたのですから、都山先生の
音樂的天才たるや又故なきに非ずです、即ち祖父の代より遺傳性として其血管内に通ふ
て居つたものであります。

次に都山流規程を抜萃して見ませう。

宗家ハ流祖中尾琴三ニ始マリ中尾家相續者コレヲ継承ス

宗家ハ都山流ヲ統轄ス

宗家ハ免状及ヒ免許状ヲ発行シ参与会議及ヒ評議会ヲ召集ス

参与ハ宗家之ヲ選任シ参与ハ宗家ノ諮詢ニ応フ任期ハ三年トス参与ハ評議員トナルヲ
得ス定員五名

評議会ハ議案ヲ審議シ毎年之ヲ召集ス評議員ハ任期三年トシ師匠互選無記名式投票ニ
依テ全国ヨリ平均ニ二十名ヲ選フ

指南免許状若シクハ准師範以上ノ免許状ヲ有スルモノハ師匠タル事ヲ得、師匠ハ宗家
ニ申請シテ免状ノ発行ヲ受ケ之ヲ交付スルノ権利ヲ有ス、師匠ハ評議員ノ選挙權及ヒ
被選挙權ヲ有シ評議会ニ建議スルヲ得、師匠ハ資金半期五円ヲ納付スルノ義務及ヒ当
流ノ発展ニ努カスルノ義務ヲ負フ

資金（都山流資金）ハ師匠其他ノ納入金及ヒ一般ノ寄贈金ヨリ成ル、資金ハ宗家之ヲ
保管シ尚本資金監査員（定員二名任期三年）之ヲ監査ス、監査員ハ評議員中ヨリ選出
ナシ資金ハ公用ノ爲メ宗家ノ名ヲ以テ理事之ヲ使用ス

理事ノ任免ハ宗家之ヲ爲シ欠員ノ時ハ宗家之ヲ兼任ス、理事ハ評議会ノ決議ヲ宗家ノ
名ニ於テ施行ス

当流ニ功労アル者ハ宗家之ヲ賞ス、本規程ニ違背スル者ハ評議会ノ決議ニ依リテ之ヲ
罰ス、譴責、謹慎、選挙權停止、指南差止、除名ノ種類アリ

扨て都山流資金は昭和三年二月発表せられたものに依ると、現在高二万九千円台であ

りますが、序ですから記載しませう。

初傳免状　三万二十台
中傳免状　一万二十台
奥傳免状　四十台
皆傳免許状　十三百台
准師範免許状　五百八十四通
師範免許状　百二十四通
大師範免許状　十九道

次に現在は理事は欠員でありますから、宗家が兼摂して居られます。
参与は左の五師であります。

北京重山師（大阪）
古林周山師（神戸）
金森高山師（和歌山）
小池玲山師（大阪）
倉川蕭山師（東京）

次に評議員二十名は左の諸師です。昭和四年二月が改選期になつて居ります。

第一区　畑中康山師（札幌）
第二区　安部香山師（東京）　細田楊山師（仙台）

第三区　平塚珖山師（名古屋）　矢吹汪山師（大津）
第四区　藤井隆山（金沢）
第五区　大橋鴻山師（京都）
第六区　上田貫山師（豊岡）
第七区　川口靖山師（大阪）　吉田泰山師（大阪）　藤田紫山師（大阪）
第八区　池田静山師（和歌山）
第九区　富田溪山師（神戸）　須方湖山師（姫路）　藤塚珖山師（神戸）
第十区　野上春山師（岡山）
第十一区　紙谷白山師（呉）
第十二区　松岡清山師（福岡）
第十三区　中西宏山師（松山）
第十四区　佐藤令山師（京城）

次に大師範現存各師は左の通りです。

北京重山師（大阪）
古林周山師（神戸）
金森高山師（和歌山）
小池玲山師（大阪）
倉川蕭山師（東京）

吉田泰山師（大阪）
牧野直山師（姫路）
中村晃山師（廣島）
谷脇宮山師（大阪）
高山顯山師（山口）
富田溪山師（神戸）
細田楊山師（仙台）
池田靜山師（和歌山）
大橋鴻山師（京都）

次に師匠諸師の分布を大畧記しますと、次の通りです。今便宜上評議員選挙と域別を以つて記載致します。

○印は大師範、×印は師範の方々であります。

尚ほ宗家中尾柳山師は東京市芝区白金台町一丁目十七番地に在住して居られますが、郷里枚方町にも邸宅を御持ちですから毎月西下され、又全国へ講習或は演奏に東奔西走席の暖まる事なく流に盡して居られます。

枚方町の宗家邸には尺八道場もあります。定期の試験は常に此の道場で行はれるのですから遠方の方に対して左に地図を掲げて置きます。京都乃至大阪から京阪電車の急行にお乗りになれば一番便利です。

第一区　（北海道・樺太一円）
函館×用瀬靈山　札幌×畑中康山　室蘭×村垣容山　旭川　伊藤彩山

第二区　（奥羽・関東一円）
盛岡　八木南山　仙台○細田楊山　酒田　渋谷斗山
東京○倉川蕭山　東京×片山雄山　東京　西村陽山

第三区　（静岡・愛知・三重・岐阜・滋賀・山梨・長野一円）
名古屋×平塚珖山　名古屋×大木景山　滋賀×矢吹汪山　松本×澤登昌山

第四区　（北陸道一円）
新浮×渋沢露山　富山×田島昇山　富山×西村晴山
富山×今井越山　金沢×藤井隆山　七尾×山内鳴山
福井　鷲田翁山　武生　京谷慢山

第五区　（山城国一円）

京都○大橋鴻山　京都×森田鶯山

第六区（山陰道一円）

豊岡×上田貫山　松江×赤松天山

第七区（大阪府一円）

大阪○小池玲山　大阪×井上黄山

〃　○吉田泰山　〃　×藤田紫山

〃　×植村章山　〃　○谷脇宮山

〃　×古中桂山　〃　×永田洞山

第八区（和歌山・奈良一円）

和歌山○金森高山　和歌山○池田静山

第九区（兵庫縣一円）

神戸○古林圃山　神戸○富田渓山

神戸×橋本濤山　神戸×服部呂山

第十区（岡山縣一円）

岡山　野上春山　岡山×虫明圭山

第十一区（広島・山口縣一円）

広島○中村晃山　広島×岡本業山

第十二区（九州・台湾一円）

福岡×松岡清山　台湾×水原秋山

第十三区（四国一円）

松山×中西窓山　松山　越智承山

第十四区（朝鮮・満洲・支那一円）

京城×佐藤令山　釜山　若狭花山　奉天　辻　興山

ハルピン　浅野露山　米国　岡本逢舟　多度津×浜田南山

扨て以上長々と述べましたが、之れ丈け迄は知つて居らぬと都山流はどんな状態にあるかと云ふ事が判りません。

従来当流に関した事を常識問題として出された事があるのですから、諸君も御記憶あらむ事を希望致します。

勿論大ザッパに書いたのですから、又到底細かく書く事は、紙面の都合で不可能の事でありますから、先輩諸師の芳名も脱してても居ませうし、諸君の先生の芳名も脱して居るかも知れません。其点は幾重にも御寛恕の程願つておきます。

大正十五年は丁度都山流三十周年に当ります。当流研究は今や二十万に達せむとする盛大さである事を附記して置きます。

例題四　当流師匠の権利義務に就て論ぜよ（師六・一二）

答　只今述べましたから略します。

例題五　都山流創始年代及び師範以上の氏名を挙げよ（師九・一二）

例題六　四国及び九州に於ける当流幹部五名以上を挙げよ（准六・二）

註・幹部とは師匠の事です。

例題七　京都以東に於ける当流師匠の名を挙げよ（准六・五）

例題八　当流評議員の名をあげよ（師六・九）（師一二・六）

例題九　本土以外の当流師匠の名を挙げよ（准六・九）

例題一〇　山陰道に於ける当流師匠七名以上の名をあげよ（准七・三）

例題一一　朝鮮支那及び外国に於ける当流師匠五名をあげよ（師一二・六）

例題一二　准師範を希望する理由（准九・二）

ロ　「解説」に就て

「解説」は当流に於ける樂典書とも称すべきもので師匠たるものは充分研究して置かねば本らぬ本でありますから、諸君は是非熟讀して下さい。

今其大体を説明しませう。

当流音譜の主音は何かと云ふと ロ ツ レ チ ハ の五音譜であります。従つて之れ以外の音譜は補助音であります。

音譜の種類には、普通者譜と、特殊音譜の三種があります。

普通音譜は各孔を全開するものであり、半音譜は各孔を半開又はメリに吹くべきものであつて、小さな音譜文字で表はされるものであります。故に全開音は全音と称し、半

開音は半音と申して居ります。之に対して特殊音譜と云ふのは ㅁ と云ふ音譜は最高音として必要なものでありますが、他は尺八音独特の音色を持つてゐるので、尺八の味はひを出す為めに使用されて居ります。

次に、尺八は息の具合と、ロの関係で甲音と乙音の両様を出す事が出来ます。

甲乙の定義は、解説第六頁に出て居ります。然し音に依つては、乙音であり乍ら甲音の部に入り、甲音であり乍ら乙音の部に入つて居るものがあります。

ビ ビ ビ ル ル は前者であり ロ は後者であります。甲乙両様共使用出来るのは次の如きものであります。

ロ ロ ロ ロ ツ ツ ル レ レ レ チ ウ チ ウ チ チ ハ ハ ハ ヒ ヒ ヒ ヒ

以上の外に ツ と云ふものもありますが、殆んど必要ありませんから略します。

又甲音のみのものは フ ナ タ タ ㅁ

乙音のみのものは リ リ ル ル ラ ㅁ ㅁ

右のメリ音カリ音中には、解説にも出てゐるものいものが沢山あります。之等はどうして出来るか、どんな場合に必要かと云ふ事は、旋律の部で詳しく説明致します。今はそれ丈

けの種類があると云ふ事を憶えておいて下さい。

音譜の種類 ｛ 全音譜 / 半音譜 / 特殊音譜 ｝

次に、拍子符号の種類には全音符、二分音符、四分音符、八分音符、十六分音符、三十二分音符があり、其外に半加全音符、半加二分音符、半加四分音符、半加八分音符とがあります。

半加符とは、普通の拍子符の下へ更らに短線を引くのであつて、之を半加線と申します。半加線は上の符号の半分の時間を意味するのであります。

拍子符号の種類 ｛ 拍子符 / 半加符 ｝

尚ほ解説に依つて、各音符と拍子との関係を御記憶下さい。即ち四拍子を全音符として居るのですから、其割合で各音符の拍子を定めてあるのです。

次に、休止符と云ふものがあります。休止符とは曲中休息すべき時間を示す符号であつて、拍子符と同じ種類があります。

此の外に、複譜運指法に就ても調らべて置かなければいけません。注意を要する事は指を揺る場合と、指を打つ場合とがあるのです。墨いてある孔を動かすのは揺るのであり、開いてある孔を動かすのは打つのであります。

其他、複譜練習は漸段的に初歩者に教へ込む様に考案されてあるのであつて、第一は普通音譜と、拍子は一拍子に就ての練習、第二は拍子外の練習、第四は半加八分音符と十六分音符との練習、第五は四分音符と八分音符の練習であります。

尚ほ近来の楽譜は一小節毎に切る様になりましたから、解説にある諸種の記号以外に沢山の記号が増して居る訳であります。特殊の記号は夫れ〴〵楽譜に記してありますからお判りでせう。

例題一三　ウの複数は何れの指にて揺るか（師六・九）

答　第四孔を揺る。

例題一四　ヒウリタ　の複数は如何にするか（師六・五）

例題一五　タ四　の複数の指遣ひに就て（師六・一二）

例題一六　リヒウヒ井　の複数の指遣を説明せよ（師七・四）

例題一七　第二孔を全開する事に依り発する音譜全部を挙げよ、但し他孔の補助は可なり（准八・二）

例題一八　レレレレ　メメメメ　チチチチ　タタ四タ　ヨ　ロ　タ　ヨ　ラ　二四五あけは何譜なりや（師九・五）

答　夕

例題一九　四分音符一個、半加八分音符一個の処へ式符を加へて四拍子とせよ（師六・九）

答　十六分音符一個と二分音符一個

例題二〇　半加二分音符一個、八分音符四箇、半加八分音符一個の上へ何を加へたら綱子を整へる事が出来るか（准六・五）

答　十六分音符一個。

例題二一　茲に半加八分音符一個、四分音符一個、十六分音符一個、八分音符一個その何れにてもよし各符間に何音符と何音符とを挿入して行つたら完全なる四拍子が出来るか（准六・九）

答　各音符に順次十六分音符一個、半加八分音符一個、八分音符一個を入れたら宜し

例題二二　十六分音符一個、半加八分音符一個、八分音符六個を加ふれば何拍子となるか（師六・九）

答　四拍子

右は何れも答式問ですから、実際はまづつきます。拍子符をよく暗記して下さい

例題二三　解説綴譜練習第四を初心者に判る様説明せよ（師八・一二）

答　既に第三迄は会得してゐるのですから、茲では半加八分音符と十六分音符が加はつて一拍子となる事を説明したら宜しいのです。即ち3/4拍子と1/4拍子とを加へたら一拍子となる事、半加線は上の符の長さの半分の價値がある故

レ|ロ を分解すれば レ|ト|レ|ロ となります。半拍子と四半拍子との長さが半加八分音符である事を説明すれば宜しいのです。

例題二四　尺八に於ける甲乙の区別及び其作用を述べよ（准九・二）

答　甲乙の区別は、尺八の音は高い音と低い音と両方出す事が出来ます、其高い方と低い方との境目は ロ と ハ とであつて、ロ より上は甲音、ハ より以下は乙音であります。

次に作用は、尺八は若し甲乙何れか一方しか音が出ないとすれば、音域が狭く単調に流れて、妙味を発揮する事が出来ません、甲乙双方を利用して、広い範囲の律を用ひ、音域を大ならしめる為めであります。

例題二五　都山流師匠一地方一名宛七名をあげよ（師一三・二）

八　暗記すべき事

次に記載する事項はかず暗記せねばなりません。実は、之れ丈け位の暗記では一

十少けなくて、万一茲に記載した以外のものが試験に出るとなると、諸君に対して申訳ありません。が、私の意のある処を御諒察下されて、あとで不足を申されぬ様お断りしこ置きます。

兎に角、次に記載する之れ丈けは、是非覚えておかぬと、試験場へ出る資格がありません。

▽調子表

本調子――ゆき　八重衣　夜の憶（おく）

二上り――里の暁　若葉　若葉　木枯

三下り――黒髪　越後獅子　湖上の月　霜夜

低二上り――春霞　朝雲（但し途中から特調する）　磯馴松　夕顔　袖香炉　袖の露　万才　梅の月

松の響

▽箏の一が

ロ――十鳥　春　秋　冬　改訂夏

――夏　茶音頭

ハレ――秋風

▽箏平調子で一の絃が

レ――黒髪　ゆき　越後獅子　残月　星　青柳

ハ――夕顔　根曳　今小町　詠（ながめ）　松竹梅

ロ――暁　若葉

箏半雲井調子で

ロ――玉川　情枕　萩　松風　宇治　笹　千代の鶯　七小町　衣

段物（五段　六段　七段　八段　九段　みだれ）は全部

三絃は本調子で箏はレの平調子、曲の始めはレで、終りもレです。

曲の始め　終り

ロ　ロ　十代の鶯　ゆき　暁　松風

レ　ロ　情枕　春　根曳　残月

ロ　レ　黒髪

レ　段物全部　今小町　衣　萩

レ　チ　宇治　青柳　御山

ロ　チ　笹　七小町

チ　ロ　若葉　秋　冬

ハ　四　星　秋風　松竹梅

ハ　レ　詠　千鳥

ハ　ハ　夕顔　夏

四　ハ　越後獅子

チ　レ　茶音頭

▽三絃轉調表（本―本調子　ニ―ニ上リ　三下―三下リ　高三下―高三下リ　低二―低二上リ　三上―三上リの各異本リ）

本―二　千代の鶯　相槌　残月

本―ニ―高三下　青柳　御山　七小町　宇治　笹

本―三下―本　荻　新娘

本―三下―本―ニ　玉川　松風

三下―本―ニ　星

六下―三下　茶音頭

低二―三下　詠

低二―三上―本　今小町

低二―三上―本―ニ　松竹梅　さむしろ

▽三上リ調子を使用するもの

博川　松竹梅　今小町　さむしろ　さくらべ

▽作曲者表

左記は没せる人

一　箏曲の泉象は八幡検校―段物作曲

菊岡検校―夕顔　茶音頭　相槌　今小町　笹　御山

吉沢検校―千島

吉沢検校作にて松坂検校補―春　夏　秋　冬

峯崎勾当―越後獅子　ゆき　残月

三津橋勾当―松竹梅　根曳

松浦検校―暁　詠　若菜　宇治

幾山検校―荻

山田検校―小督　熊野　長恨歌

山木（山田流）―松風

光崎検校―星　秋風　鶯　七小町

石川勾当―青柳　衣

右表は、わざと曲の略称を以て記しました。新娘と云へば新娘道成寺、鶯と云へば十代の鶯、衣と云へば八重衣である事は既に御承知の事と思ひます。笹は又酒と云ふ略称

かあります。「みだれ」は生田流では十段の調、山田流では十二段と申すそうです。松竹梅はバイと云ひ、明治松竹梅は明梅と一般に呼んでゐます。

左記は現存大家

潮風――本手　金森　高山師　替手　中尾都山師

比翼の蝶　夏の夜は森川龍山師

寒砧――本手　大橋鴻山師　作都山師　替手　都山師

蓴菜検校――橘草　雲の峯　最仲の月　銀世界

宮城道雄――秋の調　谷間の水車　和風樂

町田嘉章――佐渡の印象　春信幻想曲　秋の鄙唄

津田検校――春の声

米川親敬――收穫の野

例題二五　凱歌の曲、御国の誉の箏の一、西行櫻、根曳、虫の音の三絃の一を答へよ（準六・九）

例題二六　楓の花、春の曲、秋の言葉、荻の露、こすのと、の各箏及び三絃の一を問ふ（準六・五）

例題二七　深夜の月の三絃の一、秋の言葉箏の一を問ふ（師六・二）

例題二八　越後獅子、里の曉、八段の三絃の一、春の曲、岩上の松の箏の一を問ふ（師七・四）

例題二九　夜々の星、露の蝶、鉄輪、椙枕、押樂初の各三絃の一を問ふ（師七・六）

例題三〇　椙枕、名所土産、今小町、八重霞の各三絃の一、楓の花の箏の一を答へよ（師七・九）

例題三一　下の曲の最初の調子を問ふ。夜々の星、松竹梅、磯千鳥、櫻川、八重衣（師一〇・六）

例題三二　三絃と合奏の場合ロを一の絃に合はす調子の四五種をあげよ

答　畑の露、畑香燈、七草、梅の月、松の書等即ち低二上り調子の曲名を申せば宜しいのです。之等の樂譜を見ますとバ－ニ－ミ－レ－ミ－バ－と書つてゐますが、実は一のバと云ふのはロが実際の高さ本のです。大体三絃の調子は一の絃が一番低いのです。バ－ニ－であつては一が反へつて高く本ります。之は單にロ等と云ふ音譜は初歩の人には判り悪いですから便宜上バを以つて一を表はしたに過ぎ本いのであります。

例題三三　楓の花は、いつ頃の李候を歌つた曲本りや（師一二・一二）

答　初夏の候です。曲の内容と少しは調らべて下さい。鶴の声は鶴の事を歌つたのではなく、ゆきと雪の景色等を歌つたのではありません。

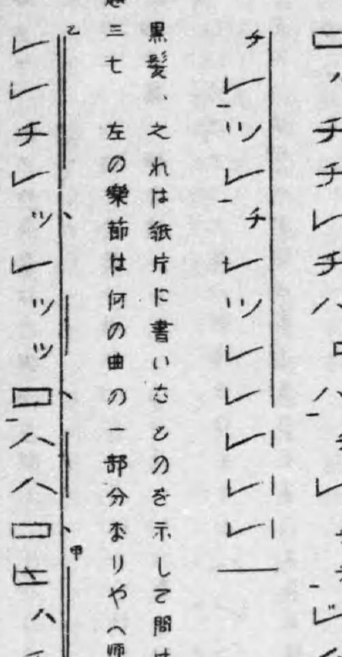
例題三四　レの音譜より初まる樂曲三曲をあげよ（師一三・一二）

例題三五　チの音譜より初まる樂曲二曲をあげよ（師一三・一二）

例題三六　左の樂譜は何曲なりや（師七・四）

答　黒髪、之れは紙片に書いたものを示して問はれるのです。

例題三七　左の樂節は何の曲の一部分なりや（師一五・六）



答　松竹梅

例題三八　千鳥の曲の手事十拍子内外を示せ（師一五・一二）

答　略、之は暗譜に屬するものであります、將來この種の問題が出る事と思ひますから、相當準備の必要があります。先づ左に記す曲は全曲ならず暗記して下さい。決して無益な事ではありません。

黒髪、千鳥、松竹梅、八重衣の四曲。

三　理論に関する事

今我々が知つて居らねば本らぬ大体の音の智識を説明し、續いて理論に入りませう。

1　音とはどんなものか

音とは如何なものかと云ひますと、手に取つて見る事と出来なければ、嗅いで見たり味はつたりする事も出来ません。只私達の耳に依つて聞かれるものであります。

其れでは我々が聞き知る源は何処にあるかと云ふと、夫れは物体であります。其物体が如何して音を発するのでせうか、今音を出してゐるものを、よく見ますと必らず其物体が動いてゐる事が判ります。大鼓の皮、箏、三味線、ヴァイオリンの絃、皆細かく然かも速やく動いてゐます。故に音と云ふものは一つの物体が振動する事に依つて起ると

云ふ事が判ります。此の起つた音を我々が、どうして聞き知るかと云ひますと、其物体の振動に依つて物体の周囲を取巻いてゐる空気が擾き乱されて恰も静かな水面へ石を投げ入れた時に四方へ波と成つて傳はつて行くと同じく空気の波が起つて遠く傳はり我々の耳に入つた時に音と云ふ事を知るのであります。

で振動してゐる物体は皆音を出すかと云ふに、そうゆう事はありません、余り遅くても又速やくても聞え不いのです。つまり或範囲内にある時に限つて音が聞えるのであります。この振動が幾ら位かと云ふ事を計るには其物体が一秒間に何回振ふかと云ふ数ご計算するのです。これを振動数と云ひます。私達には其振動数は凡そ十六から三万位の間が聞えるそうで、凡八では一番低い音は凡そ二百五十八、四、一番高い音は凡そ千三百四、八の振動であるそうです。

扨て音と云へば、いろんな音があります、車の走る音や硝子が破れる音、雷や大砲花火の音、之等は振動数を計る事が出来ません、何と成れば一つか二つ振へたゞけだつたり、長く聞えてゐても振へ方が一様でない、即ち不規則な振動であつたりする為めです之等を噪音と称せられてゐます。之れに対して鳥の声や虫の音、さては尺八や箏等と云ふ楽器類の音は規則正しく振動してゐます、これを楽音と申します。之れから述べるのは総べて楽音の事に就ていあります。

一　音の性質

音の性質には長短、強弱、高低、音色の四つがあります、今簡単に説明しますと、私達は長い音でも短かい音でも勝手に出す事が出来ます、夫れは息を切らずに吹いてさへ居れば長いく音が出ます、即ち音の長短は夫れが振動してゐる時間に比例するのであります。又私達は尺八で強い大きな音も出せますし、弱い小さな音も出す事が出来ます之はどうしてなるのかと云ふと、今琴か三味線の絃を指で弾いて見ますと、絃の中央が脹らんで見えます。之は絃が左右に速やく往復振動をしてゐるのです。そこで今絃を強く弾くと強い大きな音が出て中央の脹らみも大きく成ります。弱く弾くと中央の脹らみが小さくて音も弱くなるのです。一般に振動する物体中の或る点の往復振動する幅を振幅と申します。故に音の強弱は其発音体の振幅の大小に比例する事になるのです。

次に私達は高い音や低い音を出す事が出来ます。之の高いのです。これは発音体の振動数に比例すると云へます。つまり振動数が多い程音が高いのです。又私達は箏と尺八の音を聞いて假令どちらも同じ音の高さであつても間違ふ事なく聞き分ける事が出来ます。斯様に音には固有の味がある事を音色と申します。音色の違つた音を出す発音体の振動の仕方が皆違つてゐると云ふ事です。

例題三九　音の高低に就て論ぜよ（准七・九）

例題四〇　音の強弱は何の為めに必要か（准一三・二）

答　強弱とは抑揚の事で曲の表情を自由ならしめる為めであります。

例題四一　音の性質に幾種類ありや

答　長短強弱高低音色の四種あり

ハ　樂理とは何か

樂理とは音樂に關する總べての理論を云ふのであります。故に音樂に就て少しでも理窟を云へば夫れは音樂の理論であります。然し乍ら之を大別すると音樂とは、どう云ふものかと云ふ音樂の原理と、音樂は斯ういすればよいと云ふ方法論との二つに別ける事が出來ます。音樂の原理では音響学、音響心理学、音樂美学等があります。方法論としては音階、旋律、樂典、和声法、作曲法、樂式論等があります。之れから其方法論に就て述べやうとするのですが、日本音樂は右の樣な学問はあまり発達してゐません。今後諸君の御研究を希望しておきます。こゝで一寸申し上げておきたい事は樂典と云ふ言葉です。樂典と樂理とは全然意味が違ひます。樂理とは今云つた通りですが、樂典と云ふのは音樂を譜に記す方法や音階の話や拍子の事等を説明する極めて初歩的のものです。都山流解説しは云はゞ都山流の樂典とも称すべきものであります。

扨て音樂とは何かと云ひますと、簡單に云へば種々の感情を音に依つて表はす事で、夫れには調子と拍子とが経緯をなし、拍子の長短と調子の高低とが相倚り相和して之れに強弱と緩急との自然的調節を得て渾然一体となつて妙用変化窮り無きに至るものを云ふのです。故に一つの樂曲の基礎、要素とも称すべきものは、旋律と拍子と和声の三つからなつてゐるのであります。この表はし方を論理的に集めて統一したものが樂理であります。で私達の言葉と云ふものが生れてから文字が出來、然して文法が出來たのです音樂も之れと同じく音の流れは樂曲を生み、樂曲を研究して樂理が出來上つたのです。

次に音樂を大別すると声樂と器樂とあります。声樂とは人声を以つてするのであつて器樂とは樂器を以つて奏するのであり、この樂器を大別すれば絃樂器、管樂器、撃樂器の三種となります。昔支那ではこの樂器の分類を八種類に区別して八音と称してゐました。金石土革絲木匏竹であつて尺八は竹論竹の部に属するものです。管樂器であります。尚ほ序だから申しますが、琴は琴と云ふ文字で表はす事があります、が琴とは箏にあるが如く無くて絃丈け張つたものを云ふのです、今日使はれてゐる琴はこの箏の文字で表はすのが本当であります。

例題四二　樂曲組織の要素をあげよ（准八・二）

答　旋律拍子和声

ホ　十二律の話

一体十二律とは何かと申しますに、日本音樂の音律が十二あるので十二律と云ふのです。即ち音の名稱であります。では音律とは何かと云ふと、樂音は必ず一定の律を本してゐるのであります、之れを音律と云ふのです。どの人にも名前がある樣に、又總べてのものに名前がついてゐます。音にも名前をつけておかないと呼ぶ事が出來ません。すると諸君は不審に思はれるでせう、□とかツは名前ではないか、あれで通らぬ事は本か

らう、今□の音が欲しい時には尺八を吹いてこの音だと云つたら判らぬい事はありますまい。如何にも夫れで判ります、然し□やツは尺八同志で判る音の符牒で夫れは單に諸の名であるのみです。もつと通俗な例を申しますれば、單に尺八の□と云つても一尺八寸管の□と一尺六寸管の□とは高さが全然違つてゐます。余談になりますが大体□とかツと云ふ尺八の譜は、T度人間の名前を記しておくやうなものですが、知らない人に向つては名前では其人自身を思ひ浮べる事は出来ません。この種の樂譜をタブレクチュアと申して居ります。兎に角この種の樂譜は特殊の樂器にだけ非常に便利でありますが声から他の凡ての樂器までを共通に写し出さうとすると不便が多く起ります。夫れから云ふと西洋の近世の樂譜は凡て音響其ものを直接に記さうとするやり方であります、即ち音の性質を記すやり方で、例へば精密な油絵の肖像画に匹敵するものであります。ですから尺八の譜は名前を文字で書いて其人間を表はしてゐるに対して、洋樂譜は名前等を抜きにして其人間を其まゝ画で表はしてゐる様なものです。

扨て愈々それから云ふ音の名前——律名と云ふ——はそんな一部にしか通用せぬ名前ではなくて、日本音樂が出来てからいつの名前であります。此の音の名即ち十二律名を左に列記して見ませう。下に書いてあるのは尺八の音譜で、解説に少無い幾種もの音譜がありますが、理論上之れ丈け出来るのです。又一つの律の下に幾個も書いてあるのは皆同じ律なのです。それを同律の譜と申します、尤も乙音と甲音とを、ごつちやに書きましたが、甲音と乙音は、本当は十二律の差があるので、同律とは

申されませんが律名はちつとも変りませんから、一緒に書いたのです。

一壱越（ーチコツ）ロ
二断金（タンギン）ツ
三平調（ヒヤウデウ）ツ
四勝絶（ショウゼツ）ツ
五下無（シモム）レ
六双調（サウデウ）レ
七鳧鐘（フショウ）レ
八黄鐘（ワウシキ）チ（コウショウと読むべからず）
九響鏡（ランケイ）ハ
十盤渉（バンシキ）ハ
十一神仙（シンセン）ハ
十二上無（カミム）ロ

右は左へ行く程音が高くなつてゐます、では上無の上は名の如く、上が無いかと申すと決してそんな事はありません。上無の上に又壱越断金とこの通り順次にある訳です。只違ふ点は一の壱越を乙音とすれば十二に出てくる壱越は甲音の壱越で即ち一音階丈け高い事になります。

即ち世の中にある凡ゆる高さの音——それは無数にありますが——を全部この十二の音律に

当てはめて了ふのであります、故に音律の名は十二しか無くても、この十二の律名が上下に無限にあると思つて下さい。今例として左の一行に書ける丈け、この十二律を並らべて見ませう。←――の方向は上の方に本るに従つて音が高いと云ふ事を示したのです。

調	平	断	壱	上	神	盤	鳧	黄	鳧	双	下
金	断	壱	越	無	仙	渉	鏡	鐘	鐘	調	無

勝	平	断	壱	上	神	盤	鳧	黄	鳧	双	下
絶	調	金	越	無	仙	渉	鏡	鐘	鐘	調	無

勝	平	断	壱	上	神	盤	鳧	黄	鳧	双	下
絶	調	金	越	無	仙						

こん本風に上にも下にも無数にありますが、これを縮めて見れば律が十二しか本いのです。例へば「時」と云ふものは私達が生れ本い先きから続いてゐます、そして私達が年が老いて死んで了つても今後無限に続くでせう、其の「時」を私達がどうして勘定してゐるかと申しますと、一月二月三月と云つた様に月と云ふものの十二で一年として勘定します。だから単に一月と云へば去年の一月も今年の一月も来年の一月も同じ一月として呼んでゐます。即ち壱越律と云ふものも、これには乙音の壱越とあれば甲音の壱越とある。本だ上の甲の壱越とある（之れを大甲（たいこう）の壱越と云ふ）が総べて之れを壱越と呼んでゐるのであります。六十三頁の律名の下に甲乙ごつちやに書いたのもこの理由からであります。では当流の音譜を最も高い音から順次最低に至る迄配列して見ませう。

平	四 最高音
断	夕
壱	ヒ
上	ヒ
神	八
盤	八
鳧	八
黄	チ
鳧	ウ
双	レ
下	レ
勝	ル
平	ソ
断	ロ
壱	ロ
	ロ
上	ロ
神	ロ
盤	ロ
鳧	ロ
黄	ロ
鳧	ロ
双	ロ
下	ロ
勝	ロ
平	ロ
断	ロ
壱	ロ
上	ロ
神	ロ

右表に依りますと当流の尺八音域は二十九律であります。最高音譜は四最低音は㋹（之れを四の大メリと云ふ）乙音中の最高音譜は㋺乃至㋻、甲音中の最低音譜は㋹（即ち四の大メリ）であります。尚ほ注意すべきは㋺㋻の乙音は四の甲音と同律である事、㋺が存在せずに㋻が存在する事、㋺には神仙律と壱越律と両方ある事等であります。

扨て先き程申した様に最も高い音から低い音に至る凡ゆる音は皆、十二の音律に充てられます。故に基音より十二の階段を以つて一音階と称します、即ち右の表に依り、四（壱越）から上へ順次十二番目の㋺（上無）に至る十二の音階を一音階とします。そして其上に三律共次ぎの四（壱越）からヒ（上無）に至る十二音を一音階とします。そして其上に三律あり、一番下の四の下には二律あります。尺八には二音階と五律有する事になります。尺八には二音階と五律有する事になります。尺八には二音階と五律有する事にな

るのです。

次に右表中のカリ音やメリ音が沢山並らんでゐますが、之等は吹奏上或は理論上出来るのであつて、どうしてこんな譜が出来るかと云ふ事は追い〳〵説明する事とします。殊にレ㋐んと云ふのはレと何等変りがないのですが、理論上では時には必要が生じるのです。又同律の譜と云ふ言葉は先きに申しましたが、当演では十二律の差即ち一音階の差へ甲と乙との差の事〻も矢張り同律として取扱ふ場合が多いのであります。

例題四三　ロと同律の各音譜を挙げよ
答　ロビヒビヒフリ召

例題四四　ツと同律の各音譜を挙げよ
答　ツルルルビル

例題四五　レと同律の各音譜を挙げよ
答　レダチヴウ

例題四六　チと同律の各音譜を挙げよ
答　チ

例題四七　ハと同律の各音譜を挙げよ
答　ハロロビヒビリラ召与

例題四八　ツと同律の各音譜を挙げよ
答　ツタロビヒビ

例題四九　ツと同律の各音譜をあげよ
答　ツ四

例題五〇　レと同律の各音譜をあげよ
答　レルルル

例題五一　チと同律の各音譜をあげよ
答　チヴウ

例題五二　ハと同律の各音譜をあげよ
答　ハ井チチ

例題五三　ハと同律の各音譜をあげよ
答　ハ

例題五四　ロと同律の各音譜をあげよ
答　ロリビヒビヒ

例題五五　タと同律の各音譜をあげよ
答　ツツロロビヒ

例題五六　チと同律の各音譜をあげよ
答　チハハ井

例題五七　ヒと同律の各音譜をあげよ
答　ヒビヒビハロロリラ召与

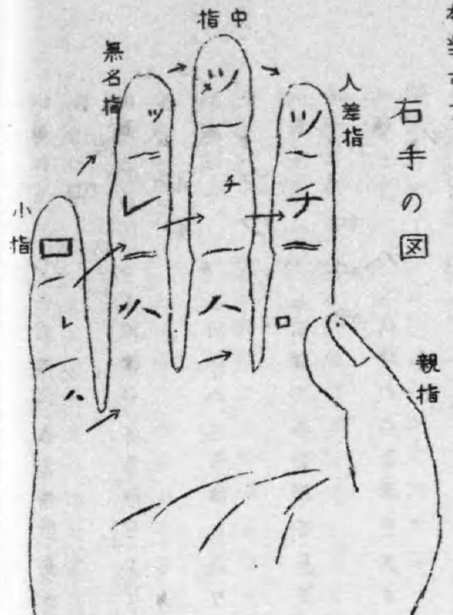
扨て私達はこの十二律の名前と音譜との対照を是非暗記しなければなりません。夫れには次の如く代表的の音譜を選んで一緒に憶えると宜しいのです

□ロハ乂ハチチレレツツ□

壱上神盤高黄黄双下勝平断壱壱
越無仙渉鐘鐘鐘調無絶調金越

右表は下から上へ讀んで下さい、段々音が高くなると云ふ意味でこんな書き方をしたのです。故に一番上の□は甲音で一番下の□は乙音で丁度一音階の違ひとなります。上から下へ讀んだら段々音が低くなるのです。が普通は壱越、断金、平調と讀んで行くのが本当です。

右手の図



之れをどんな風に憶えるかと云ふと先づ上図の様に指に当て嵌めるのです。丈と之れは右手でやる仕方ですが、左手に嵌めた方が何かにつけ便利な様です、然しどちらにしても、そう違ったものではありません。今後は全部右手に嵌めるものとして説明致します。

先づ小指の先きを□とするのです。次が無名指の先きをツ中指の先きがツ人差指の先きがツです、今度は小指の中がレと云ふ風に図の通りに嵌めて讀んで御覧なさい、讀む時は親指で一つ〳〵其処を押へて讀むのです。右図は丁度親指で人差指の根元、ロを押へてゐる処です。この次は又小指の先きへ移ります。斯うしてドン〳〵矢の方向に讀んで行くならば、夫れは音がダン〳〵高い方へ昇つて行くのですが反対に左の方へ数へるのは低い音へ下がって行く事になります、今この音譜を見るに

□はロ□のニつ
ツはツツツのミつ
レはレレレのニつ
チはチチのニつ
ハは乂ハのミつ

となってゐます、即ちツと乂丈けが三つ宛、どっと判り易く云へばツと乂丈けがメリ音が入り、残りは半音と全音ニつ宛であります。何故ツと乂丈けにメリ音が必要かと申しますと、こいらが尺八の欠点とでも申しませうか、樂器が余りに簡單であるが為めに半音と全音だけでは足らないのであります、始めに申しました通り都山流の尺八の基音は□ツレチハの五つであります、その五つが半音と全音とニ個宛ある為ら十律しか吹く事が出来ません、自然残りの二律は技巧音譜たるメリ音を使用せなければならなくなるのです、若し將来諸君が尺八改造を思ひ立たれるならば、このメリ音の処へ、適当な全音が出る様に孔の開け方を改造せられむ事を望みます。其他の処へ孔を増しても何ら

の効果がありません。ではツと八丈けにメリ音があつて他の音譜に何故にメリ音が無いかと申しますと、それは尺八の孔の開き方に依るのであつて現代の尺八がそんな風に出来てゐるからです。

扨てこれを讀む時は□ツツツレレチチ八八八□□と讀む方が宜しいのです。ツツツ等と讀み方に敢で区別せずにツツツと讀んだら最初が半音で真中がメリ音、最後が全音と指の押へ箇所で判るのですから簡單に讀んで下さい。そして親指で必ず其箇処を押へ下ら讀むのです。尤も右手の各指へ音譜を嵌め込んで、左手の人差指で一々押へ下ら讀むのも悪くありませんが、左手迄使ふ様な癖はつけない方が宜しい。それに吳々も申し上げておき度い事は其手指を見つめてゐなければ出来ないといふやり方は決して良法ではありません。指の先きを本んか、ちつとも見ないでも親指でさへ押へれば決して間違ふ事はありません。即ち練習する時は右手を机の下へ入れ、後へ手を廻す事りして、其手指をちつとも見ないでゐて問題を解く様にせなければなりません。斯様にして十二の音譜を手指に当て嵌めてスラ〳〵と云へる様になつたら、今度は逆に小指の先きの□を基点として音が下がつて行く時の練習をせなければなりません。即ち□□八八八チチレレツツ□と今迄と反対の讀み方をやるのです。

今手の格構を一々書く事は非常に煩雑ですから左図の様に書いて見ます。之れでも充分お判りになるだらうと思ひますから、爾後全部こん本風に書きます。

左図の1～12の数字は音の高さが漸次昇る時の讀み方です。音が低くなる時の讀み方

人差指
中指
無名指
小指

一 1	十二 2	十 3	十一 4
□	ツ	ツ	ツ
九 5	八 6	七 7	六 8
レ	レ	チ	チ
九 9	四 10	三 11	二 12
八	八	八	口

先き中機元

は一二三の日本数字で表はしました。初めの中は、どちらへ讀んだら音が高く本るのか迷ふ事がありますから、よく練習して下さい。右へ右へ、そして下へ下へと讀むのは音が高くなる時です。左へ左へ、そして上へ上へと讀むのは音が低くなる時です。そして小指の先きと人差指の根元とは逆ら本つてゐるのですから間違は本い様に願ひます。

斯うしてあちらからも、こちらからも讀むうちには人差指の真中はチだとか、小指の根元が八だとか自然に諳んずる様になるでせう。諳んじた時こそ愈々問題を解き得る力が備はつた時なのです。親指で何処でも押へて見て、こゝは何でつたらうと考へてゐる様では未だめです。スラ〳〵と押へた箇処がツであるとかチであるとかと直ぐ浮び出本ければは何の効果も本いのです。

之れを憶えたら今度は愈々律名と又当て嵌めて前図様に確つかりと憶え本ければ本りません。

上図の如く小指の先きを壱越とおいて順次各指に当て嵌めます。

勝	平	断	壱
黄	鳧	双	下
上	神	盤	鳥

イナコツ　ヒヤウデウ
ショウゼツ　サウデウ
フシヨウ　ランケイ
タンギン
シモム
ワウシキ

未だ憶えられぬ方は頭字丈けをイッタン、ヒヤウシヨウ、シソウ、フオウ、ラバンシカと云へたら今度は逆に、カシ、バラ、オウフ、ソウシ、ショウヒヨウ、タンイナと憶えて下さい。次にカミム、シンセン、バンシキ、ランケイ、オウシキ、フシヨウ、ソウジヨウ、シモム、ショウセツ、ヒヨウジヨウ、タンギン、イチコツ（之れは讀み易い様に書いた丈けで本当のフリガナではありません）と讀み、更らにいろ〳〵に唱へて見て下さい。或ひは律名を各指先きに相当する箇処へペンでいと書いて憶えると宜しいでせう。とにかく二日間程起きるから眠る迄ちよい〳〵思ひ出してはロの中で称へて御覧なさい。必ずしましたが、ワウシキは実際はオーシキと讀めば宜しいのです、フシヨウはウシヨウと讀みます、サウデウとはソージヨウ、ショウゼツはショウセツと讀みます。然しソンギンはTANGINであつて決してダンギンと讀んではなりません。

扨て以上右手の各指先きに音譜と律名とニつ宛憶えて貰ふ事になりましたが、この二つを同時に憶える事に依つていろ〳〵の問題が解けるのであります。然し呉々も申し上げ度い事はスラ〳〵に憶えて了ふ事で親指で所々を押へてど直ぐ律名と音譜とが浮び出なければいけないのです。今迄憶えた事を、まとめてもう一度書いて見ませう、又文字と振り假名も正確に憶えて下さい。

走越　断金　平調　勝絶　下無　双調　鳧鐘　黄鐘　鸞鏡　盤渉　神仙　上無

ヨウシ ウゼツ ツ	ヒ デウ ツ	タ ギン ツ	イ コツ □
ワ シキ チ	ア ヨウ チ	サウ デウ レ	シ モム レ
カ ミム ロ	シン セン ハ	バン シキ ハ	ラン ケイ ハ

之れで一サレ、た問題が解けます。「尺八のチは何律かしと云へば黄鐘律と答へられます。「双調は尺八の何譜かしと云へばレと答へられると云つた具合です。又先きに述べました同律の譜を記憶して下さい。例へば「尺八の最高音は何律かしと云へば最高は□です。□はリと同律ですから平調律と答へられるのです。

尺八の長短

先き程から音譜と律名とを憶えて貰つたのは、あれは一尺八寸管の尺八の音譜と十二律との関係であります。即ち走越律が　だと云ふ事は一尺八寸管の場合の事であります。之れは一尺八寸管へ一般に譬して八寸管と呼ぶ）が尺八を代表してゐるからです。大体尺八なる名称からして一尺八寸なるが故に尺八と云つてゐるのであります。（之れにはいろ〳〵異説とありますが、例へば昔の短い一節切が一尺八分ありました、そこから出た名だとか等の説がありますが一尺八寸だから尺八と考へた方が至当であります）ですから一般に尺八の音譜なり、十二律との関係なりを説明する時は八寸管で述べたら宜しいのです。そこで今一尺九寸管（略して九寸管と云ふ。この長さで　ど多くは一尺の尺を譬します、例へば六寸管とは一尺六寸の尺八を云ふのです。以下總べて譬して申しますゝを持つて来たらどう本なるかと云ふと、尺八は寸が違ふ毎に律が全然違つてくるのであります。で尺八が長く本なる程音が一体に低く本ります。どれ丈け低

くなるかと云ふと、尺八の長さが一寸違ふ毎に一律宛の差が出来るのです。之れと最格に云へば正一寸毎と云ふ事は云へなくなるのですが、律の計算としては一般に一寸が一律としてあります。故に一寸以内の何分又は何分何厘と云ふ端のついた尺八は律に合はないとして、樂理上では全然取り扱ひません。実際上に於ても決して使用致しません

扨て九寸管が一律低いものとすれば八寸管の□は壱越律ですから、九寸管の□は壱越より一律低くなつて上無律となります。二尺管の□は更に一律低くなります。ですから神仙律となります。この理由に依つて八寸管の事を壱越管と云ひ、九寸管は上無管、二尺管は神仙管と呼ばれてゐます。では短い尺八はどうなるかと云ふと一尺七寸管へ略して七寸管）の□は八寸管より一律高いのですから断金律となります。

九寸管	二尺五寸管	九寸管	三尺五寸管
六寸管	二寸管	二尺管	四寸管
七寸管	三寸管	二尺二寸管	二尺五寸管
八寸管	四寸管	二尺五寸管	

六寸管）の□は更に一律高くなりますから平調律となります。例に依つて七寸管は断金管と休し、六寸管は平調管と休します。

左図は例に依つて右手の各指に当嵌めて見た処です。こゝに書いてある箇処が夫れ夫れの長さの尺八の□に当る処です。□は尺八の筒全体が鳴る音ですから之れを筒音と申します。左図の管の長さは成る可く現在使用する長さの尺八を書いて見たのですが繁理上では何尺の尺八でも、又只の七寸の長さの尺八でもの音律が判ります。例へば二尺三寸管と書いた箇処は又一尺一寸管の筒音にも相当致します。

で上図に依つて人差指の根元が九寸管の筒音に相当する事が判ります。何故かと云ふと人差指の根元は上無律の箇処で、壱越から一律下がつてゐるからです。何れの場合でも小指の先きが八寸管の□である事さへ知つて居れば何寸管の律でも知る事が出来ます。この点をよく了解して下さい。考へ違ひをすると何にも分りません。宜しいですか。以前に諸君に記憶して戴いた律名と□ツツツと云ふ音譜を各指に当て嵌めるのは一尺八寸管の時の話しです。ですから八寸以外の尺八の音譜を調らべるには全然音譜の嵌め方が違つてくるのであります。然し律名丈けは絶体に変りません従来の経験に依りますと錯覚を起して九寸管の壱越だ等と律名迄も移動する様に考へられる方が間々あります。律名は絶体に移動しません。尺八の長短に依つて音譜丈けが移動するのですから間違はぬ様願ひます。

勝	黄	上	
平	鳧	神	
断	双	盤	
壱	下	盤	

くどい様ですが上掲の律名の在り箇処は如何なる場合でも変らないものと思つて下さい。そして尺八の長さが異る毎に□ツツツの音譜丈けの位置が変ります。九寸管の場合はどうなるかと云ふと、先き程申しました様に、九寸管の□は八寸管の□より一律下がつた処ですから中図の様になります。

ツ 壱	ツ 断	ツ 平	レ 勝
レ 下	ツ 双	チ 鳧	ハ 黄
ツ 盤	ハ 盤	ツ 神	□ 上

故に九寸管のレは下無律であり、チは鳧鐘律である事が判ります。

同様に七寸管の断金レが鳧鐘となる図りだらうと思ひますから下図の如くに□がります。然し斯う申しますと、非常に複雑で御ん。八寸管の□は何処かよく御存じでせう——小指の先きです——今欲する管の長さ丈け、一寸毎に一律宛この小指の先きを基本として移動して勘定すれば

ツ 壱	□ 断	ツ 平	ツ 勝
ツ 下	レ 双	レ 鳧	ナ 黄
チ 盤	ハ 盤	ツ 神	ハ 上

其管の□が得られるのです。どつと簡単に申しますと、尺八の長さが一寸違ふ毎に一律足違ふから八寸管を基点として一律宛移動せしむれば宜しいのです。然し注意したい事は短い尺八の□は律が高い事で、長い尺八の□程律が低くなる事であります、例へば五寸管の筒音は何律か」とあれば小指の先きをまづ親指で押へて八寸と唱へて下さい、

八寸	七寸	六寸	五寸
□			

次に上図の如く七寸六寸五寸と唱へて見ると、五寸は人差指の先きへ来るのですへ尺八は短い程律が昇るのだから矢の方向へ辿むのです）で人差指の先きは勝絶である事は既に御存じでせう、故に五寸管の□は勝絶律であります

では「五寸管のレは何律か」とあれば今五寸管の□は勝絶律なる事が判つてゐますから、この人差指の先きを□と見て、こゝを親指で押へて□と唱へて下さい。

			□
ツ	ツ	ツ	レ
レ			

次に上図の如く、矢の方向に□ツツツレと一つ宛親指で押へ来から唱へて下さい、すると□は小指の根元へ参ります、小指の根元は雪鍵律である事は既に御存じでせうから、五寸管のレは雪鍵律であると云へるのです。

では「五寸管のチは何譜か」とあれば、今五寸管の□は人差指の矢きである事が判つてゐますから左図の如く□ツツツレレチチと昇つて行く来らば中指の根元なる事がお判りでせう、中指の根元は八寸管のハですがら、五寸管のチは八寸管のハである事が判りますへ八寸管の音譜の位置は前に記憶して貰つた筈ですから諸君は已に御承知の事と察します）之れで長短の尺八の計算の仕方はお判りの事と思ひます。若し判りにくい処がありましたら、い

			□
ツ	ツ	ツ	レ
レ	チ	チ	

つでも御照会下さい、喜こんで御回答致します。斯うした根本的の事がよく了解しまいと、後に本つて分らなくなつて了ひます。今一度繰り返へして申しませう。何寸管の筒音は何律かと云ふ事は記憶してゐる必要がありません、八寸管の音譜の在り箇処さへ知つて居れば宜しいのです。そして長い尺八の筒音を出したり本らば一寸毎に律を一つ宛下げて行けば、いつでも何尺管の筒音でも出す事が出来ます。指の方で云へば左へ向つて進みます、又短い尺八の筒音を出すには一寸毎に律を上げて行けば宜しく、指の方で云へば右へ向つて進めば宜しい。

上図の数字18とは一尺八寸管の事で、この場所は取りも直さず、小指の先き竜越律であります即ち八寸管の筒音が竜越である事を示してゐるのです。そして19は一尺九寸管20 21と讃んで律を下げて行けばどんな長い尺八の音律でも知る事が出来ます。故に30即ち三尺管は竜越律である事が上図に依つて分ります、又下図は短い尺八の筒音を求めんとして、一律宛昇つて行つたときの

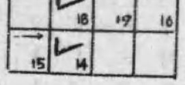
30 基点18	29	28	27
26	25	24	23
22	21	20	19

で、7とあるは只の七寸の長さの尺八の筒音の在り箇処で上無律である事が判ります。

「二尺三寸管のレは何律か」やつて見ませう、二尺三寸管の□はどこか失ご調らべ本ければ本りません。右上図の如く18（小指先き）19（人差指根元）20 21 22 23と下がつて行きますと、二尺三寸管の□は人差指の真中に当ります。此場合人差指の中は黄鐘律であると云ふ事は必要ありません、只こゝを□と見て□ツツツレレと唱へ乍ら一律宛昇れば宜し

18	17	16	15
14	13	12	11
10	9	8	7

いのです、すると レ は小指の先きに当ります。即ち二尺三寸管の レ は黄楽律である と答へ得るのであります。



上図は「尺四寸管の レ は何律か」と云ふ問題を解いた処です。即ち レ 18 とは八寸管の レ が此処だと云ふ事を意味するので諸君は已に御承知の筈です。そこで図の如く 17 16 15 14 と律を上げて行くと一尺四寸の レ は無名指の根元に当りました、こゝは已に御承知の通り盤渉律の商やですから、一尺四寸管の レ は盤渉律である事が判ります。斯様にいろ〳〵の仕方を以て種々の問題を解く事が出来るのであります。

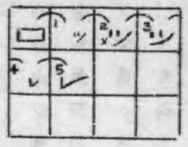
III 計算問題の解き方

今迄の智識で以つて愈々問題を解く事が出来ます。では それから説明致しませう。然し夫れには指に当て嵌められた音律と八寸管の音譜とを確つかり憶えてゐなければ全然出来ませんから必らず記憶してから、この章に入つて下さい。又説明は総べて指を使つて解答致します、他の方法で解く必要がありません。後章筆答科では勿論筆答の仕方を述べますが、成る可く指で解く方が何へ筆答であつても便利でありますから、指で計算する事をこの章で確つかり憶えて下さい。

1 八寸管に於ける音律の計算

A 譜の計算

「ロ から レ 迄幾律あるか」小指の先きから無名指の真中迄幾つあるかと云ふのです。上図の通り ロ 2 ツ 3 リ 4 ツ 5 レ 6 レ で六律あります。一体何々から何々迄と云へば何々其物から何々自身迄を数に入れるのです、それを ロ を抜かして次から ロ ツ 2 リ 3 ツ 4 リ 5 レ 6 レ と譜んだり ロ ツ 2 リ 3 ツ 4 リ 5 レ として五律と云つたり、各譜の間を譜んで ロ 1 ツ 2 リ 3 ツ 4 リ 5 レ 五律と答へるのは間違ひです。必らず六律と全部の譜を数へねばなりません。然し次ぎの問題だと違ひます。



「ロ と レ は幾律の差ありや」と云ふ問ひ本らば ロ と ツ 一律の差 ツ と リ 一律の差 リ と レ 一律の差 レ と レ 一律の差があつて合計五つ、五律の差がある事になります、何故かと云ふと ロ と ロ は同律で律の差がありません。ロ と ツ で初めて一律の差が出来るのです、故に律と律の間を数へる事に本りますが、こんな時の数へ方は次の様にすると宜しいと思ひます。

ロ ツ リ ツ レ レ
0 1 2 3 4 5

いので、「レ と ハ は何律の差があるか」といふ問題と右と同じで五律の差があるのです。これは始終使ひますから数へ方を確つかりと憶えておいて下さい、然し次の様に「ロ と レ との間に幾律あるか」と云ふ問ひには大分議論がありますが、左の通りに思つて居れば宜しいと思ひます。

□とレを数に入れないで、其間の音譜数四個丈けを勘定して四律あると申せば宜しいのです。これは□とレとの間に律名が幾つあるか、音譜が幾つあるかと云ふ意味に使はれてゐるのであつて、其他の意味には使はれてゐませんから惑はぬ様にして下さい。

0 □	1 ツ	2 ソ	3 ソ
4 レ	0 レ		

「□から五律昇れば何譜か」□から一律昇れば ツ 又一律昇れば ソ、斯くして五律昇れば レ と成ります。レから五律降れば何譜かと云ふのも同じ様に 0レ 1レ 2ソ 3ソ 4ツ 5□ 五律下がつて □ と成ります故に斯うした問題では常に最初の音譜は数に入れないで次の音譜から一二三四と数へて行けば決して間違ひません。

0 □	1 ツ	2 ソ	3 ソ
4 レ	5 レ		

「或譜から五律昇つたら レ であつた或る音譜とは何か」

5 4 3 2 1 ㄨ ↑ そしたら レ であつたのですから ㄨ 0 1 2 3 4 5 で レ から五律下がつたㄨが答となります。即ち □ です。

0 レ 1 レ 2 ソ 3 ソ 4 ツ 5 □

「或音譜から五律下がつたら □ であつた或音譜とは何か」

□ 5 4 3 2 1 ㄨ 0 1 2 3 4 5 そしたら □ だつたのです、五律下かれば ㄨ 1 2 3 4 5 故に □ から五律昇れば 0□ 1ツ 2ソ 3ソ に計算しなければなりません。下がつたと云へば昇つて勘定し、上がつたと云へば降つて勘定せなければなりません。一寸御注意申します、こんなに □ ツ ソ ソ と云ふ文字を書きましたが、諸君が実際に練習せられる時は必らず親指で、小指無名指と其音譜に該当する箇所を一々押へてやつて見て下さい。紙に書いてやつてゐては口述の効能にはなりません。

例題五八　ツ と 井 との中間に幾律を有するか（師七・四）　答 四律

〃　五九　ル と ウ との中間に幾律を有するか（師七・六）　答 二律

〃　六〇　ツ と チ の中間に幾律ありや（師八・六）　答 五律

茲で説明したいのは、音譜に甲乙を明記してない場合は常に甲音と思つて下さい。之れは慣習となつてゐますから迚はない様に。故にツが高くチが低いのです。この問題は上に読んでも下へ読んでも五律ですから宜しい様なこの次の場合は違つて参ります。

例題六一　レ と ベ の中間に幾律ありや　答 六律

〃　六二　チ と ル の中間に幾律ありや（師七・二二）　答 一律

B　音律の計算

「壱越と勝絶とは幾律の差ありや」

次図第一表の様に三律の差があります、

「壱越から十律下がれば何律か」なれば第二表第三表續けて見て下さい、即ち壱越は小指の失きです、下がるのは人差指の根元へ行つて左へ〳〵と1 2 3と讀んで行けば10は中指の失きになります

表一　本

壱 0	断 1	平 2	勝 3

表二　第

壱 0			

表三　第

		平 10	9
8	7	6	5
4	3	2	1

から平調律であります。

「或律より八律下がつたとのが盤渉なりと云ふ或律とは何かし　或律から八律下がつたら盤渉だと云ふのですから盤渉から上図の通り八律昇れば宜しいのです。無名指の真中に当りますから双調律です。

	盤	1	2

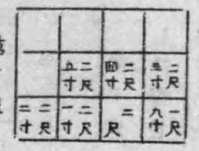
3	4	5	6
7	8		

斯様にして或律と申せば必らず隣の判つた律から繰らねばなりません、従つて最も注意を要する事は逆に律を讀むのですから下がつたのから上がつて数へ、上がつたのから下がつて数へねばなりません。

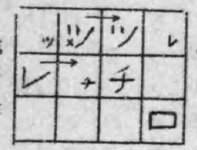
ロ　長短各管の計算

A　長い尺八の計算

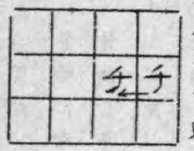
之れから愈々複雑になります。先きに申しました通り、九寸管のロは人差指の根元でありますが、之れより尺八が一寸宛長くなる毎に一律宛下がります。念の為め次に図を掲げます。前にも申しました通り二尺とあるは二尺管のロが神仙律なる事を示してゐるのです。即ち第一表の各長さを書いた箇処が其の長さの管の筒音であり、其の筒根が其処に相当する律名に当るのであります。で各管のロが尺八が長くなる程一律宛下がつて行くのであります。



第一表



第二表

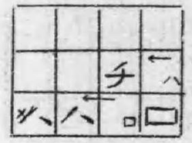


第三表

「九寸管のチは何律か」と云へば第二表の如く先づ人差指の根元を親指で押へてロと

唱へて、次に小指の先きを押へツ右へ順次ソソツレレチチと昇つて行けば、九寸管のチは中指の真中である事が判ります、中指の真中は長鐘たる事は已に御存じでせう、故に九寸管のチは長鐘であります。尚ほ第三表の如く人差指の真中は八寸管のチであります。九寸管は一律下がれば好いのですから、一つ左へ下がつて長鐘と答へても構ひません。然し之れは余りお勧めしたくありません。第二表のやり方さへ確つかり憶えてゐたら安全第一です。

「九寸管のレは八寸管の何譜か」は今と同じ事で人差指の根元からロツソツレレと昇つて見れば、レは小指の真中である事が判ります。然るに小指の真中はレの箇処ですから八寸管のレである事が判ります。之れを先き程の第三表の様に、九寸管はー寸丈け長いのだから律が全体に一律下がる、故に八寸管のレであるとする仕方は便利な様ですけれども一つ〳〵八寸管と較らべる事は複雑になり易く、時には間違ふ事があります。故に今説明した様な原に指で一つ〳〵数へて行くのは絶対に考へ違ひをしませんから、この方法が宜しいと思ふのであります。又



「九寸管のチは何律か」と云ふ際にはロツソツと昇つて讀むより、ロ。ハソハと下がつて讀んだ方が早いのです。つまり指で数へる時は甲音と乙音に関係せず上がつても下がつても構ひません。要するに早く讀む程宜しいのですから近道を選ぶ事が肝心です。で答は長鐘律です。

「二尺管に於ける勝絶律の譜をあげよ」　二尺管のロは中指の根元です、

一方勝絶律と云ふのは人差指の先きであります、中指の根元から人差指の先き迄上図の様に讀めば判ります。即ち答としてはレをあげれば宜しい。

B　短い尺八の計算

短い尺八は一寸毎に一律宛高くなる事は先きに話した通りです

即ち各短管の□の位置は下図の通りであります。まあ簡單に云へば短い尺八の□は各指の先きの方だと思へば間違ひありません、之れに対して長い尺八の□は各指の根元の方だと云ふ事になります。

ソ	ツ	レ	レ
		□	ツ

「七寸管のレは何律か」　左上図の通り七寸管の□は無名指の先きですから、其処から□ツソツレレと昇れば中指の真中となります、中指の真中は鳧鐘律ですから答は鳧鐘律であります。

ソ			
ツ	レ		
	□		
ツ	レ		

「六寸管に於ける双調律は何譜か」　六寸管の□は八寸七寸六寸と指の先きを昇って昇って見ますと中指の先きとなります、夫れから双調律は無名指の真中であります。今中指の先きを□として、無名指の真中へ来る迄□ツソツと昇って見ますと、ツに相当します。故に答はツであると云へるのです。

ツ	ツ	ツ	ツ
ツ	ツ	ツ	ツ
レ			
ロ			

「八寸管のソは一尺四寸管の何譜か」　八寸管のソは御承知の通り無名指の根元であります、一方四寸管の□はセ寸六寸と数へて行くと小指の真中となります、故にこゝを□として無名指の根元迄□ツソツレレと讀んで行きますとレに当ります、即ち一尺四寸管のレに相当するのであります。

八寸	七寸	六寸	五寸
四寸	三寸		

例題六三　勝絶律は二尺管の何譜か（師六・九）　答　レ

〃　八寸管の井は何律か（師六・九）　答　鳶鏡律

〃　二尺管のツは何律か（淮六・五）　答　断金律

〃　八寸管のウは何律か（淮六・九）　答　鳧鐘律

〃　九寸管□の律名は如何（淮六・九）　答　断金律

此の場合□はソと同律だと云ふ事を知って、□ツソと昇ると直ぐ出ます。

タでとツと見れば宜しい其他總べて代表音に直して考へなければなりませ

〃

例題六八　黄鐘律は一尺八寸管の何譜か（師六・二二）　答　チ

〃　六九　二尺管に於ける神仙律の各譜を示せ（師七・四）　答　□又其同律

〃　七〇　二尺管に於ける一尺八寸管リと同律の各譜をあげよ（師七・六）　答　ツヅタ等

〃　七一　一尺八寸管に於けるルは何律か　答　勝絶律

〃　七二　七寸管に於ける断金律に相当するとの全部をあげよ（師七・九）　答　□等

〃　七三　二尺管に於ける八寸管チと同律の各譜をあげよ（師七・二二）　答　バハ　井カラ　チガ

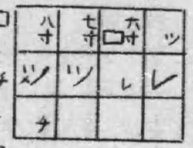
〃　七四　一尺九寸管の上無律に属する各譜をあげよ（師八・二二）　答　□等

C　長短各管の比較

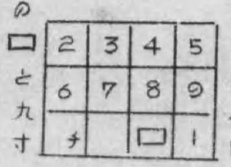
愈々複雑になりますから確つかりと了解する迄讀んで下さい。

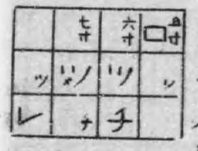
「九寸管のロと六寸管のチとの中間に幾律ありや」　九寸管のロは何処かと云ふと、

九寸の□は人差指の根元ですから一つ下かつて中指の根元が□であります、この箇処を憶えておかければなりません、夫れには左手の人差指で押へておくと宜しいのです、次に六寸管のチは何処か見おければなりません、六寸管の□は上図の如く中指の先きです

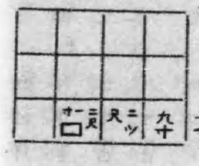


こゝから□ツソツレレチと昇れば六寸は小指の根元である事が判ります、其処で先きに押へておいた中指の根元と今の小指の根元とを比較して見れば宜しいのですがこゝで考へおければならぬ事があります、どちらの音が高いか調べる事です。即ち下図の様に1 2 3 …… と九律あるのか、それとも□とチとが接近してゐるから其間の一律が答おのが判りません。先きにも申しましたる通り問題中の音譜に甲乙を指定してない時は常に甲音と見れば宜しいのです、故に今の場合とどちらも甲音と見ませう、だから正当な答は中間に九律あると申せば宜しいのです。何故かと云ふにチは高い音です、六寸管の□と九寸管の□と較らべて已に六寸管の方が高いのですからチの方がズット高い事は当然である

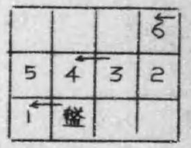




「一尺九寸管のチは二尺一寸管の何譜に当るか」　九寸管の□は人差指の先きであります、□ツソツソレレチチと昇れば中指の根元に成ります、こゝを左手指で押へて次に、二尺一寸管の□は何処か見おければなりません、九寸、二尺、二尺一寸と下がりますと無名指の根元である中指の根元に同つて無名指の事が判ります、今左手で押へてゐる



根元から□ツと昇つて讀むとツに当ります、故に答はツであります、然し茲でも考へなければならぬ事は九寸管のチは甲と見るのが至当なれはツではなくてタが本当の答であります。

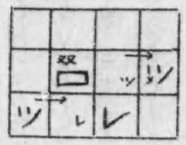


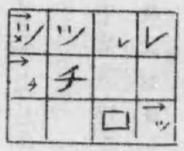
「盤渉律から六律下がつた箇処は二尺管の何譜か」　盤渉は無名指の根元です、こゝから六律下がれば人差指の先きとなります、抜て二尺管の□は中指の根元です、人差指の先き迄□ツソツレレと数へて行けばレとなりますから答はレであります。

其他の計算

「鳧鐘管のレは何律か」　鳧鐘管と云ふのは鳧鐘律を筒音とする管の事です、故に鳧鐘たる中指の真中を□と見て□ツソツレレと昇れはレは人差指の根元に成ります、こゝは上無律ですから答は上無律であります。

「双調律のレを筒音とせる管のチは何律か」　双調管と云ふのは先きと同じ様に双調律を筒音とせる管の事です、其レは下図の通り中指の根元です、次にこの箇処を筒音即ち□として□ツソツソレレチチと昇つてチの箇処を見れば無名指の真中ですから答は双調律であります。





「二尺三寸管の最高音と勝絶管の井とは幾律の差ありや」　尺八の最高音は□であります、□はソと同律ですから二尺二寸管のソは何律か先づ見れば宜しい。二尺二十管の

ロは小指の根元です、こゝをロと見てロッリと上がれば中指の根元となります、こゝを左手指で押へて、扨て次の勝絶管の井を調らべなければなりません、勝絶管とは甲寸近き音である尺八の事です、井はハと同律ですから、勝絶をロとして出しても同じ事ですが下がつた方が近道であります（此の場合ロッリと上がつてハるとは幾律の差があるかと云ふと隣り同志ですから一律の差しかありません、故に答は一律であります。

例題七五　七寸管のリは八寸管の何譜に当るや　答ロ
〃　七九　九寸管のウは八寸管の何譜に当るや　答レ
〃　七七　八寸管の井は九寸管の何譜に当るや　答ハ
〃　七八　八寸管のヲは九寸管の何譜に当るや　答ヲ
〃　七九　二尺管のメは八寸管の何譜に当るや　答ハ
〃　八〇　八寸管のレは二尺管の何譜に当るや　答チ
〃　八一　八寸管のロは七寸管の何譜に当るや　答ロ
〃　八二　六寸管のチは八寸管の何譜に当るや　答ハ
〃　八三　八寸管のヲは六寸管の何譜に当るや　答ヲ
〃　八四　二尺管のタは七寸管の何譜に当るや　答ハ

〃　八五　二尺管のロと八寸管のレとは幾律の差ありや　答七律
〃　八六　九寸管のヅと七寸管のヅとは幾律の差ありや　答四律
〃　八七　二尺管のリと六寸管の井とは幾律の差ありや　答九律
〃　八八　二尺管のメと六寸管のハとは幾律の差ありや　答二十八律
〃　八九　六寸管のヨと二尺管のメとは幾律の差ありや　答三十二律
〃　九〇　七寸管のロと二尺管のメとは幾律の差ありや　答六律
〃　九一　九寸管のロチリの各律名を示せ　答上無、見鐘、平調
〃　九二　六寸管のヨメハの各律名を示せ　答下無、壱越、上無
〃　九三　七寸管のウハヒの各律名を示せ　答黄鐘、盤涉、断金
〃　九四　二尺管のタハレの各律名を示せ　答上無、見鐘、平調
〃　九五　六寸管のリリ井の各律名を示せ　答双調、断金、神仙
〃　九六　二尺管に於ける勝絶律の音譜二種を挙げよ　答レレ、
〃　九七　二尺管に於ける神仙律の戦音譜三種を挙げよ　答ロヒヒ
〃　九八　七寸管に於ける平調律の甲音譜二種をあげよ　答ッタ
〃　九九　七寸管に於ける黄鐘律の乙音譜二種をあげよ　答ヅヴ
〃　一〇〇　二尺管のロと八寸管のレとの中間には幾律を有するや　答十八律
〃　一〇一　六寸管のメと九寸管のロとの中間には幾律を有するや　答十一律
〃　一〇二　ヲとヨとの中間に幾律ありや（正四・七）　答七律

〃　一〇三　ウ及び四と同律の各譜をあげよ（師六・一二）　答　省略

〃　一〇四　ソ及び口と同律の各譜をあげよ　答　省略

〃　一〇五　越天沢山の音譜があり、其譜本全部を遺憾なく吹奏して行かんと思へばレの音譜を幾らに吹き別ける必要があるか

答　全音及び全音のメリ、半音、半音のメリの四通りを尚ほ甲乙に吹き別ける必要がある故八通りとなります、之れは65頁の表を御覧に本ると分ります、此種の問題を一通り説明して置きませう。

レは右に申しました様にレ゛レ゛レ゛レ゛レ゛レ゛レ゛レ゛メ゛メ゛八個あります、然し

問題　一〇六　レを幾律に吹き分けたら完全に諸本を吹奏出来るか

答　この場合は答は三律に吹き分けると好い事になります、何故かと云ふと大体メレと云ふのはレと同律でありますから単にレレメレの三通りとなつて了ふからです

問題　一〇七　商音は沈り浮りを使用すれば幾律を出し得るか八十管にて其律名を順に述べよ（進六・九）

答　下より順に神仙、上無、壱越、断金の四律でありますが、即ち65頁の表を御覧になると判りますが口にはメロロ口口の四種あるからです、同様にヒチと四律に吹き分けます、ヒツハは三律の種類あり、言ヒウ多は二律の種類ルタ四ツ

ナは一律丈けしか出ません

問題　一〇八　甲音及び乙音の最低音を示せ（進四・七）　答　メロ゛　メ゛

〃　一〇九　九十管に於ける八十管レと同律の譜及び七十管に於ける八十管の井と同律の譜を示せ

答　(一)チ　(二)チ

問題　一一〇　一尺六十管の最高音より二尺管の最低音までの音域に於て幾階段ありや（進七・九）

答　三十三階段

問題　一一一　七十管に於けるメと九十管四とは幾律の差ありや（師七・一二）　答　九律

〃　一一二　神仙律を商音としたる管のソは八十管の何譜に当るか（師七・一二）　答　メハ

〃　一一三　上無律より九律高い八十管の各譜をあげよ（師七・一二）　答　八共他

〃　一一四　九十管メと七十管の口とは幾律の差ありや（進八・二）　答　八律

〃　一一五　八十管に於ける二尺管タと同律の譜は何か（師八・六）　答　ヒ

〃　一一六　神仙律を商音としたる管の下無律に相当する各譜をあげよ（師九・二）　答　チ共他

〃　一一七　平調管の四は八十管の何譜に相当するか（師九・三）　答　レ

〃　一一八　六十管に於ける八十管ハと同律の各譜をあげよ（師九・六）　答　ハ共他

〃　一一九　九十管メと六十管メとの中間に幾律の音律を有するや（師九・一二）　答　三律

〃　一二〇　平調管のレを商音としたる管のソは何律なりや（師一〇・六）　答　盤涉

〃　一二一　八十管のソより二律高い二尺管の各譜をあげよ（師一〇・一一）　答　ソ共他

〃　一二二　九十管レと六十管ソとは幾律の差ありや（師一一・六）　答　一律

〃　一二三　二尺管の最低音より六十管乙音の最高音迄に幾律ありや（師一一・六）　答　二十律

〃　一二四　六十管の最低音譜より五律高き音譜と二尺管商音の乙音とは幾律の差ありや（師一二・二）

〃　一二五　二尺管のレと六十管のハとは幾律の差ありや（師一二・一二）　答　七律

以上沢山の例題を掲げました。口頭試験には此外に旋律や三絃箏に関する問題も多くあ　答　九律

ります。何れにしても追ひ〳〵と全問題を掲載致しますから、諸君は之等を只讀むだけでなしに、実地に一々計算して見て答が丁度合ふかどうかやつて見なければ決して実力がつきません。ですから必ず自分で答を出して見て下さい。若し自分の答が記してある答と符合せぬ時は、何時でも御照会下さい。兎に角問題を一々自分で解いて見なければ決して上達しないと云ふ事を吳々も申し上げておきます。

第二節　筆答

前章に於て計算問題の基礎を述べました。之れから樂理筆答科に移りますが、筆答と云つても解き方を紙に書くのでなく答だけを紙に記すのですから、天張り容易いものは例の指に依つて計算する事とします。現在に於ては口述科は廢止の状態ですが若し將来あつてもマゴつかない様に指に依る計算法を熟練しておく事は非常に便利なのであります。すからこの章でも指に依る計算を説明致します。そして主として第三級の計算問題に就いて説明致します。

一　樂理筆答とは如何なるものか

樂理筆答は試驗場の黒板に總計五題書かれます。試驗委員が書き終つて了はれると、時には指名して讀ませられる事もあります。眞間も少し位は許される筈です。それから一時間の余裕が与へられます。尤も近時筆答問題が二題より出ない様ですが其時は時間も一時間以内に定められるかも知れません。

大低は第一日目最初が作譜科で次きが作曲、これで午前が大体済みます。次にこの樂理筆答となりまして、初めに着席した処が常に自分の席となるのであります。

今此の試驗に就て二三の注意を申しませう。どの試驗でも冷静に、心を落ちつける事は最も大切であります。よく問題の意味を取り違えて思はぬ失敗をする事が多いものです。問題は何回も讀んでから答を出して下さい。尤も讀んで不審に思ふ点は質問をして下さい。分らぬまゝで答を出しては完全な答が出るものではありません。其上時間があれば検算をやつて下さい。次に黒板に書かれた問題を紙に一々写してから答を出す人がありますが、あれは写す時間丈け損をします。それより黒板に書いてあるのを其儘讀んでは答を出すに越した事はありません。次に答案には姓名を書く事を忘れてはなりません。成る可く最初に書いて了つておいた方が宜しいと思ひます。尤も姓名と云つても姓と竹号です。そして答案は丁寧に明瞭に書く様に心掛けねばなりません。処で注意しておきたいのは、普通の学校の試驗と同様に一通り問題を全部讀んで見て一番容易なもの

から解答して行きます。即ち答案は㈠㈡㈢と順序よく並らべる必要はありません・五番目が自分に容易ければ答案の初めに㈤と書いて答を書けば宜しい。つまり若し㈠が非常に難かしいものであつたら其の㈠はかりに一時間を要したとしたら後の四題が自分に出来るカがあつても時間が無くなつて解答出来ないで行けば宜しいのです。此の為めに答案の㈠㈡と云ふ番号があとさきになつても一向差支へありません、但し順序よく並らべて書くとしても㈠とか㈡とか㈢とか云ふ番号を答に付ける事を決して忘れてはなりません。そして答案は答丈け書けば宜しいので別に途中のやり方だの解答順序だのは書く必要がありません。尤も問題に順序を示せ――今迄一度もありませんが――と云ふのだつたら、この限りではありません。又どうしても出来ない問題ならば順序なり図解でも書いておけば、幾らか点がもらへられるかも知れませんが、普通には答さへ書けば宜しいのです。

扨て樂理筆答はどんな内容のものかと申します上、主として律の計算であつたのですが、普通の計算は今の所一寸行きつまりで之れ以上難しい問題も無さそうです――と云つた処で諸君は未だ何ものつて居られませんから之から勿論行きつまり迄練習致しますが――さて本訳ですから今後は音階の計算や記憶問題或は第三級の新らしい問題が出るかも知れません、今最近の樂理試験問題を種類別にして見ませう。

大正十四年二月准師範試験

樂理計算問題二　記憶問題二　音階問題三　旋律問題一

全年九月東京全試験

樂理計算問題三　音階問題一　旋律問題一

全年九月金沢全試験

樂理計算問題三　音階問題一　旋律問題一

全年九月広島全試験

樂理計算問題二　記憶問題二　音階問題二　旋律問題一

全年九月東京全試験

樂理計算問題二　音階問題一　記憶問題一

次に採点法は百点が満点ですから五題の時は一題二十点であります・一題の中にイロハニ等と幾つにも別れる事がありますが四つに分れたら一つ五点、二つに分れたら一題十点となります・又最近の様に問題が二つより出なければ一題五十点と思考されます。

次に師匠検定試験の樂理科は准師範試験と大いに趣きを異にしてゐます。何故かと云ふと師匠検定試験には作譜作曲暗譜等の科目がありませんから自然夫等の問題と幾分加味せられるからであります。今最近の試験問題を種類別にしましせう。

大正十四年六月　作譜問題四　旋律問題三　樂理計算問題二

全年十二月　作譜問題二　旋律問題一　樂理計算問題二　音階問題

大正十五年六月　作譜問題二　記憶問題二　音階問題一　樂理計算問題一

全年十二月　作譜問題二　記憶問題一　樂理計算問題二

昭和二年六月　作譜問題二　樂理計算問題三

全年十二月　作譜問題二　樂理計算問題三

大正十五年二月全試験

樂理計算問題二　音階問題四

昭和二年二月全試験

樂理計算問題一　記憶問題（上記問題に含む）旋律問題一

昭和三年二月全試験

樂理計算問題二

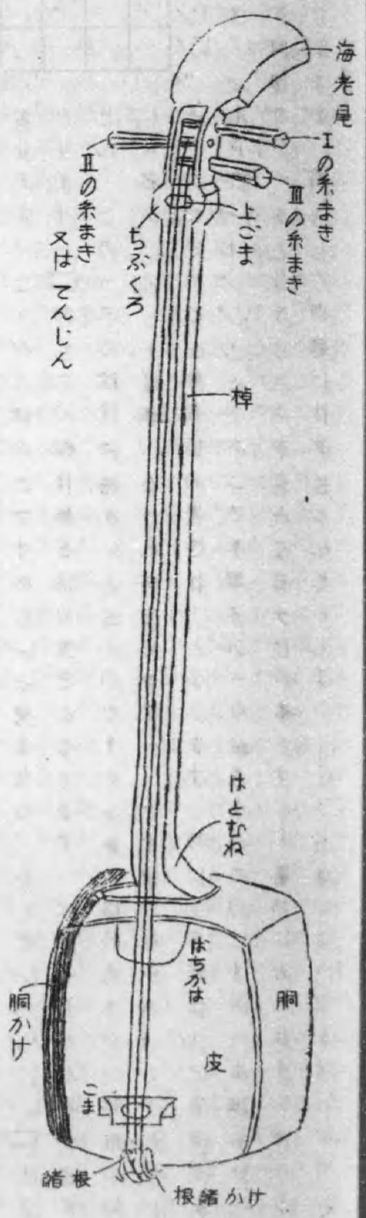
右の様な次第ですが作譜旋律音階の諸問題は作譜科で詳述するとして、それから專ら樂理計算法に就て述べようと思ひます。

二　箏三絃の智識

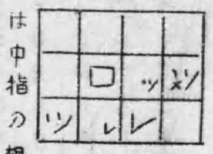
口述科では大体の問題の解き方を述べました。筆答と雖ども簡單なものはあんな風に指でやると宜しいのです。では之れから箏三絃の問題をやりませう。

イ　三絃に就いて

三絃とは勿論三味線の事でありますが、むづ難かしく云へば三筋の絃を掛けた樂器の總称ですが現今では專ら三味線の事を云ふのであつて、当流では如何なる場合でも三絃で通つて居ります。三絃には一体どんな調子があるかと云ふと、本調子、之が三絃の基本調子であります。尺八の譜で申せば□ゾ□ミ□と本ります、一と二は五律、二と三は七律の差を有するものを云ふのです。律名で云へば一の絃が壱越、二の絃が双調三の絃が甲音の壱越と本ります。然し樂理上では実は何律を一の絃としても宜しいのです。此点をよく了解して貰はなければ本りません。実際に三絃を弾く場合でも、どんな音の高さにしたつて本調子は矢張り本調子であります。只尺八と合奏しようかと云ふ時にのみ、三

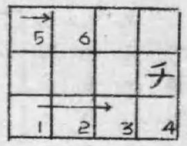


絃の一を尺八の□に合せなければ合奏出来ない丈けの話しで、尺八と合奏せない場合はどんな高さにしても構はない、即ち何律を一に持つて行つても構はない事になります。故に結極本調子と云ふものは一と二が五律、二と三が七律の差さへあれば其一二三各絃が全体に渉つて高からうが低からうが本調子には違ひないのです。又旋律上では高本調子だの低本調子だのと云ふ風な名称のものが出来て来ますが、これは皆尺八と合奏した時、又は尺八を基礎として考へる時に自然とそんなものが生れて来るのであつて、三絃其ものには只本調子と云ふものが一つあるのみであります。然し代表的に申せば勿論尺八の□を一とし、従つて二の絃がレ三の絃が□となるのであつて、之れを計算問題に使用するときも單に本調子とは□レ□一点張りでどんな問題でも解く事が出来るのであります



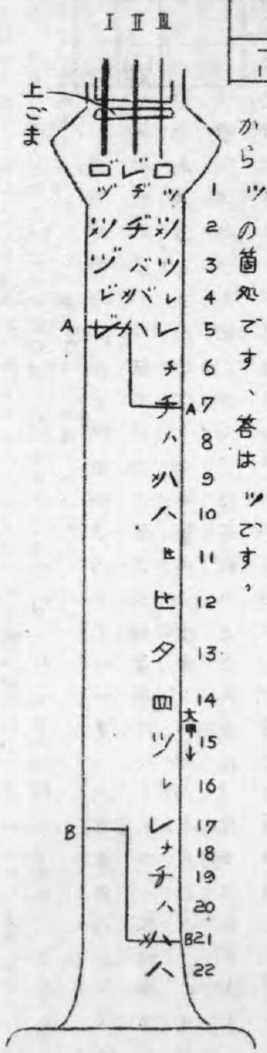
「双調を三絃本調子の一とせばニは何律か」　双調律は何処かと云ふと無名指の真中であります。こゝが本調子の一ですから、ロと見るのです。そしてニの絃は何処かと云ふ事を見るには、レがニの絃だからレが何処か見れば答が出てくるのであります。即ち上図の如くロッソツレレと上がつて行けばレは中指の根元となります、故にニの絃は神仙律と云へるのであります。斯様に本調子と云ふものは常にロレロだと云ふ事を知つて居れば、どんな本調子の問題でも解く事が出来ます。だからーとニの差が五律、ニとミの差が七律と云ふ事と実は憶えて居るに越した事がありませんが殆ど必要がないと云つても宜しいでせう。まあ左記の様な場合には多少律の差が役立つ位なものです。

「ヴを三絃本調子のニとせば三の絃は何譜か」　ウとはチと同律ですから中指の真中であります。こゝが三絃のニですからレと見ませう、そしてレレツソッロと下がりますとロ即ち三の絃は無名指の先きとなります、之れでは未だ答が出ません、この「三の絃は何譜か」と云ふのですから無名指の先きが一体何の譜に当るか、もう一度調べなければなりません、で中指の真中がチですからチレレツソッと下がつて行くと無名指の先きはッとなります、故に三の絃はッであると云へます。之れはウレレツソッと下がつて本調子の一の絃を求めたのですが、本調子は一と三で同律で只一が乙音なら三が甲音となる丈けの事です――厳格に云へば十二律の差がありますが、斯うした問題には其差を必要としない――から近い方へ早く讀んで行つ



たのです。故に答はッの甲音であります。処で今の場合はウの箇処を先づレと見做してロを求め、次にウレレと下がつてロの箇処が何譜かと調べたので合計二回数べました。之れは指の計算でも最もまづい計算法であります。此時ニと三が七律の差、ーとニが五律の差と云ふ事を憶えてゐたら一回にウレレと教へたら答が出る様ですが、大同小異で夫れより他に沢山憶えて貰ひたい事がありますから本調子は常にロレロとさへ憶えて居れば宜しいでせう。

「三絃本調子の三がチ」　チ、三の絃の六番目のツボは何譜か」ツボと云ふ言葉は三絃の長い棹を指で押へて種々の音を出します、其の押へる箇処をツボと云ふのです。此のツボも実際は全然押へぬツボもあるのですが、樂理上では矢張リロッソツと十二律が順次に並らんでゐるものと見做します。故に六番目のツボと云へば上律上がれば宜しいのです。こんな易い問題は又とありません、即ち人差指の中がチですから次の小指の根元から1234560と上がつて讀めば6は無名指の先きです。



（右図は本調子ロジロとした場合のツボを示したものです。AB線は棹の棹目です。一、二、各絃にも二十二のツボがある訳ですが一は7、8位迄には18位迄は一般に使用されます。然七の文化三味線譜では右図4のツボを尺番としてこれに当る棹目の箇所を4のツボとしてあります。所謂くそつぼか。）

ツ	ツ	レ	レ
		尺二	尺八 ツ九

「二尺管のレを三絃本調子の二とせば其一の十番目のツボは何律か」

一の絃でも二の絃でも三の絃でも何番目のツボと云へば何番丈け上がつて数ふれば宜しいのです。二尺管のレは先づ何処かと云ふと、二尺の口は中指の根元です、上図の如くレ迄を数へると人差指の先きとなります、次に之れを三絃の二とすれば其一は矢張りレレツツ口と下がつて中指の根元となります、こゝから十番目のツボを求めるには、中指の根元の次から1234…10と昇つて讀んで下さい。

すると小指の根元となります、小指の根元は鶯鏡律ですから答は鶯鏡であります、

一体三絃にはどん本調子があるかと云ふと、本調子は今述べた通り、他には次の如きものがあります。

三下リ調子　ゴ-ニ ロ-ジ ニ-バ ミ

此調子は本調子より三の絃を一音即ち二律下げます、故に三下りと云ふ名が生れたのであります。一と二は五律の差、二と三も五律の差であります、今一音と云ふ事を申しましたが、この言葉は洋樂に使ふ言葉かと思ひます。即ち一音（おん）程と云ふ語の略ならうと思ひます。故に日本音樂には必要が本い様に思ひますが当流間に於ても使用されてゐますから使つて見ました。一音の差は二律であります、半音が一律の差でありまして、此時に使ふ半音と尺八の小文字なる半音譜の畧称半音とは全然別個のものですから混同せ

ぬ様に願ひます。口より半音昇れば ツ、口より一音昇れば リ であります、然し レ から一音昇れば チ で ハ から一音昇つても口ですが、チ から一音昇れば ホ であります。とにかく夫れ丈けの智識があれば沢山でせう。

六下リ調子　ゴ-レ ロ-ジ ニ-チ ミ

此調子は三下リ調子より又、三の絃を一音半即ち三律下げるのであります。三下りの又三を下げるから、六下りと稱するので或ひは「又下り」とも云ひます。一と二は五律の差、二と三は二律の差で、此調子の曲は余り見受けません、茶音頭あたりが一般に知られてゐます。

二上リ調子　ロ-チ ニ-ロ ミ

此の調子は本調子より二の絃を一音即ち二律上げるのです、故に二上りと云ふ名稱が付けられたのでせう。一と二は七律、二と三は五律の差があります。次に述べる低二上リ調子より凡てに於て一音高いのです。之れは「普通二上り」と呼ばれてゐます。

低二上リ調子　バ-レ ニ-バ ミ

此の調子は本調子の二の絃を動かさずして、一の絃と三の絃を各一音即ち二律下げます。一と二は七律、二と三は五律の差がある事は何ら「普通二上り」と異りません。又変つてゐたら二上りではないのです。それは前にも述べた通り尺八と合奏する關係上「普通二上り」なの「低二上り」なのゝ調子が出来たのであつて、三絃其どのから見れば何じ二上り調子です、只音が全般に高くなるか低くなるかの違ひ丈けです。故に二上り

調子には高ニ上り調子と云ふものと出来る訳です。即ち「普通ニ上り」より一体に一音下げたものが「低ニ上り」ですから反対に一音上げたら「高ニ上り調子」が出来る勘定です。

高ニ上り調子　ソ゜ーソ゜ーレ゜ーソ

然し之れは実際に使用する事は殆どありません。斯様に高低の二上り調子が出来上がると云ふのは尺八との合奏上から生ずるのでありまして、例へば「松竹梅」の譜本を御覧下さい、最初は「低ニ上り」で始まりますが「三上り」に轉じ「本調子」に轉じ遂に「ニ上り調子」――之れは普通ニ上りです――で終つてゐる様な次第であります。こん本時トは同じニ上り調子であり乍ら最初はベ゜ーレ゜ーベ゜であり、彈き終る頃にはロ゜ーチ゜ーロ゜となつて終ひますから、自然と三絃のニ上り調子に低いのや高いのを造らへておいて初めて見全に合奏出来るのであります。

どう一つ説明したい事は低ニ上りはベ゜ーレ゜ーベ゜であると説明しました、当流の樂譜には常にこん本風に記してあります。然し之れは正確に云ふと間違ひでありますベ゜ーとレ゜ーとは何れが音が高いでせうか、諸君にはお判りでせう、勿論ベ゜ーの方が高いです、実際の三絃は決してニよりーが高い事はありません、之れは一の絃がベ゜よりー音階低い音本のですけれ共、略してベ゜と書き表はしてあるので、正確に書けばロ゜ーレ゜ーベ゜であります、だからベ゜と書いてあつてと実際は一音階低いのだと云ふ事を忘れないで下さい、どん本調子でも絶て三絃は、三が一番高く、一が一番低い音であります、従つて一の絃は一番太く三の絃

は一番細いのであります。之れは物理の本を御覧になると判ります。三絃の各絃は同じ長さであります。之れを同じ強さで張つて谷絃を彈いて見る本らば太い絃程低い音が出て細い絃程高い音が出る事は当然であります。

尚ほ本調子にも低本調子、高本調子が出来る訳であります。三絃の各絃は同じ通本調子と見れば宜しいので、他は独立しては使用されませんから、こゝには略しておきます、そしてこの高低を分けて単独によく使ふのは低ニ上りと普通ニ上りのみであります。

三上り調子　ベ゜ーレ゜ーロ゜

此の調子は本調子より一の絃が一音即ち二律下がつてゐる故「一下り調子」と云ふ方が適称であります。然し多くの場合低ニ上り調子から変化して三の絃を一音上げる故に「三上り」と云ふのであります。一とニとは七律、ニと三とも七律の差があります、音域の点から云へば三絃の調子中一番音域が大であります、此の調子もベ゜とありますのは、実際はベ゜より一音階低いのでロ゜ーレ゜ーロ゜と書くのが正当本のであります。

高三下り調子　ソ゜ーチ゜ーロ゜

此調子は二上り調子ロ゜ーチ゜ーロ゜の一の絃を一音即ち二律上げる、即ち本調子より一の絃とニの絃を一音（二律）宛高くするのであつて、前項の三下り調子よりは一体に一音高い三下りであります。此の調子も独立して使用するのでなく途中轉調をして止むを得ず出来てくる調子で、普通の三下りと何ら律の差が異りません。

扨て以上大分調子名を挙げましたが、計算問題には次の事丈けを憶えて居れば宜しいのです。

本調子　ロ-ロ-レ=ロ=ミ
六下リ　ロ-レ=ロ=チ=ミ

二上リ　ロ-チ=ロ=ミ
三上リ　ハ-レ=ロ=ヘ-ミ

（一下リと云ふ）

三下リ　ロ-レ=ハ=ミ

今は之れ丈け知つてゐたら沢山です。低ニ上リだの高三下リだのと云つた処で各絃の律の差は右に掲げたのと変りはありません、万一高三下リだのが必要の時は右の三下リロレハを全体に二律上げれば何時でも出せるのです。

「或音を三絃の二上りの二に取つた処其三の絃は双調なりと云ふ、或音は何律か」

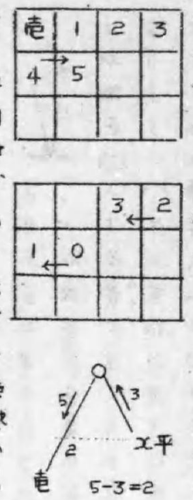
こんな時は必ず逆に律の判つた処からやると宜しい、或音譜とか或律とかが先きに出たら最後の判つた処から逆に解くのであります。今の場合は双調が三だと云ふのです、こゝを□と見て チ が何処か探せば好いのです。何故ならば二上りは ロ-チ=ロ=ミ です、三は □ で二は チ ですから、双調を □ と見て上図の如く下がると チ は小指の先きである事が判ります。即ち或音は壱越律であります。

「或律より三律下がりたるどのが三絃六下りの三なり、今九寸管と此三絃を合せたどのとせば或律は何か」　大分問題が持つて廻つてゐますが、先づ九寸管と合せた六下りの三は何律か何律かと云ふ事になります、何律か見なければなりません。之れは九寸管の チ ニ=ミ で、何故ならば六下りは ロ-ニ=ミ チ であり、何寸管であらうと六下りは常に ロ レ チ と見れば宜しいのです。チは前頁左図に依り中指の真中であります。

扨て問題は或律より三律下がつたどのが六下りの三であります、そこで今六下りの三は中指の真中でした。故にそこから三律下がるか、上がるかゞ肝心の処です。三律上がつて答は無名指の根元盤渉律であります。若し下がるのが答としたら大変な誤りです。何故かと云ふと或律から三律下がつたどのが何々と云ふのですから、この或律を見たい時は何々から三律昇らねば出る道理がありません。で右の仕方は暗算法です——と云つて指を使つたのですが——若し紙に書いて出すのでしたら次の通りになります。

六下リ　ロ レ チ
或律　ニ
九寸管の律　ニ　ニ　チ
鳳　上

故に鳳鐘より三律昇つて答盤渉



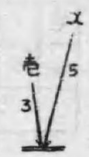
「或律から三律上がつて五律下がれば壱越なりと云ふ或律は何か」　「或律から三律下がつたら壱越なりしと云ふ時は壱越から三律上がらないと或律が出ません、或律と云ふのは壱越から見れば壱越は確かに三律下がつてゐます

然し壱越から或律を見る時は、三律上にあるのです

この理を間違つてはなりません。

扨て壱越から五律上がつて三律下がれば答が出ます、平調律であります、壱越から二律上がつてゞも宜しい。

「或律から五律下がつたどのと亀越から三律下がつたどのとは同じいと云ふ或律は何か」



亀越から三律下がつて五律上がれば或律が出ます。答は平調律。

「双調管と合奏せる三絃三下りの三の五番目のツボは何律か」　双調管とは双調を□とする管です、三下りは□ーニミ レ ハですから双調管のハは何律か見れば好い事にまります。ハは人差指の先きに当りますから勝絶です、それが三下りの三の絃ですからそれから五律昇らねばなりませんすると小指の根元となりますから答は鳧鐘律であります。

「九十管と合せた三絃三上り調子の一は何律か」　三上りはハ レ ロ ニミ で九十管のハが何律が見れば宜しいのです、無名指の根元となりますから答は盤渉律であります。

答七律

例題一二六　三絃本調子の二の絃と三の絃とは幾律の差ありや

一二七　低本調子とは如何　答　普通本調子より各絃とも二律下がりたるロー ニミ ツ ニミ ベ です

一二八　高本調子とは如何　答　普通本調子より各絃とも二律上がりたるリ ニミ チ リ ニミ ツ です

一二九　低二上り調子とは如何　答　普通二上りより各絃とも二律宛下りたるロー ニミ レ ニミ ベ です

一三〇　高二上り調子とは如何　答　普通二上りより各絃とも二律宛上りたるリ ニミ チ リ ニミ ツ です

一三一　□を三絃の一にとり本調子とせば其二の絃は何譜か　答　レ

一三二　チを三絃本調子の二にとれば其三の絃は何譜なりや　答　ソ

一三三　八十管のハを二上りの一にとれば其二及び三の絃は何律か　答　二双調三神仙

一三四　二尺管のロを三下りの一にとれば其二及び三の絃は何律か　答　二勝絶三鳧鐘

一三五　九十管のレを一下りの二にとれば其一及三の絃は何律か　答　一盤渉三上黍

一三六　勝絶律を二上りの二とせば其一の絃は何律なりや　答　鳧鐘

一三七　盤渉律を六下りの三とせば其一の絃は何律なりや　答　平調

一三八　上無律を三上りの一とせば其三の絃は何律なりや　答　神金

一三九　九十管のロを本調子の一とせば其二の絃は七十管の何譜なりや　答　ツ

一四〇　六十管のハを二上りの一とせば其二の絃は八十管の何譜なりや　答　チ

一四一　二尺管のロを二上りの一とせば其二の絃は七十の何譜なりや　答　レ

一四二　九十管のロを三下りの一とせば其三の絃は七十管の何譜に当るや　答　ハ

一四三　七十管のハを六下りの三とせば其一の絃は九十管の何譜に当るや　答　レ

一四四　本調子の三が神仙律なれば其二の絃は何律なりや　答　勝絶

一四五　三下りの三が鳧鐘律なれば其一の絃は何律なりや　答　神仙

一四六　本調子の二が八十管のヴなれば其一の絃は九十管の何譜に当るや　答　ソ

一四七　三下りの三が二尺管のソなれば其二の絃は七十管の何譜に当るや　答　チ

一四八　亀越管のレを筒音とせる管のレは何律なりや　答　神仙

一四九　神仙管のチを筒音とせる管のリは何律なりや　答　黄鐘

一五〇　平調管のツを筒音とせる管のベは何律なりや　答　平調

一五一　上無管のチを筒音とせる管のベは何律なりや　答　平調

一五二　断金管のレを筒音とせる管の井は何律なりや　答　亀越

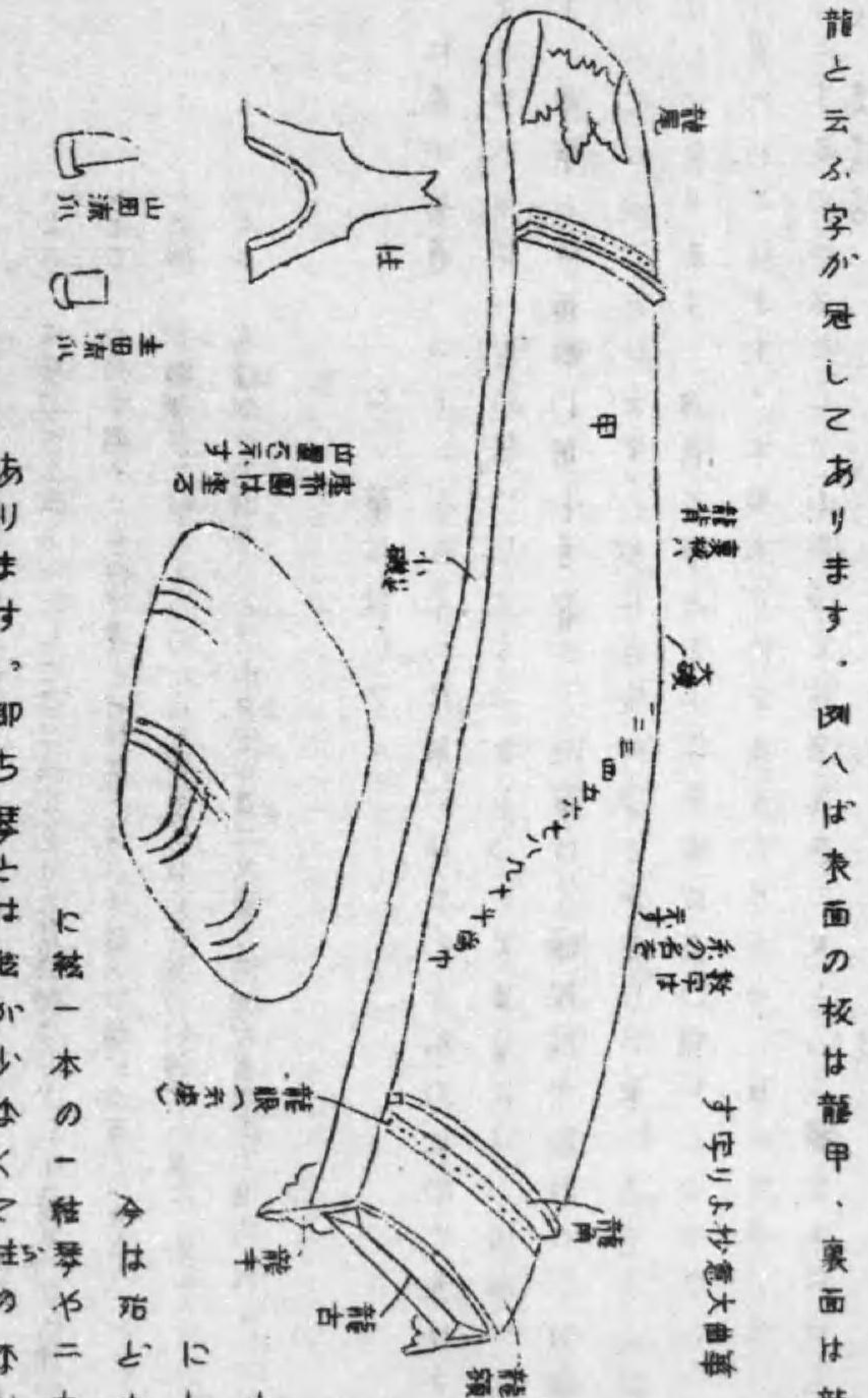
〃　一五三　九寸管のソを商音としたる管のレは八寸管の何譜に当るや　答　ヂ
〃　一五四　二尺管のヂを商音としたる管のヂは八寸管の何譜に当るや　答　ロ
〃　一五五　鳧鐘管のベを商音としたる管のツは七寸管の何譜に当るや　答　チ
〃　一五六　二尺管にて合奏する左の三絃各調子の各絃の律名をあげよ（師一二・一二）
答　(一)鳥、断、鳥　(二)毛、双、神　(三)鳥、勝、神　(四)鳥、勝、鳥　(五)神、勝、双
(二)低本調子　(三)高三下リ　(三)一下リ　(四)低二上リ　(五)六下リ
例題　一五七　ヂを三絃本調子の一にとりたる其二は何譜か（師七・九）　答　ロ
〃　一五八　毛越律を三としたる六下リ調子あり其一の絃は八寸管の何譜か（師七・九）　答　レ
〃　一五九　九寸管のハを三にとりたる六下リの二の絃は何律か（師七・一二）　答　黄鐘
〃　一六〇　九寸管のチを三上リの二とせば其一の絃は何律か　答　上無
〃　一六一　黒髪を二尺管と合奏せば三絃三の五番目のツボは何律か（師九・六）　答　断金
〃　一六二　二尺管ロを一としたる本調子二の五番目のツボと同律なる八寸管の各譜をあげよ（師九・二）　答　バ其他
〃　一六三　神仙律を一としたる六下リ調子三の五番目のツボは八寸管の何譜と同律か（師一〇・二）　答　ハ
〃　一六四　三上リ調子三絃三の五番目のツボが黄鐘なれば其一の絃と同律の八寸管の音譜如何（師一〇・二）　答　ロ
〃　一六五　三絃三上リ調子一の絃の五番目のツボより一音階高き音律は二の絃の何れのツボと同律か（師一二・三）　答　十番目
〃　一六六　神仙を三絃の一にとり二上リとせば其二は二尺の何譜に当るか（師七・五）　答　チ
〃　一六七　七寸管のウを一として二上りを作れば其二は九寸管の何譜に当るか（師七・九）　答　ツ
〃　一六八　絃に管絃「神楽」初の合奏あり其最初の音譜は勝絶律なりと云ふ三絃の一は何律か（師七・二）　答　鳥鐘律

〃　一六九　絃に尺八と三絃の「祭音頭」の合奏あり最初の音譜は双調なりされば其管の最高音は何律か（師八・二）　答　毛越律
〃　一七〇　武人の チは八寸管のハを三絃の一にとり本調子とし又その二の絃と同律なり此人のロは何律か（師九・三）　答　鳥鐘律
〃　一七一　絃に尺八三絃の「若菜」の合奏あり其曲の最初の音譜は鳥鐘なり此管のロは何律か（師九・六）　答　上無律
〃　一七二　武管チを三絃の一としたる三絃三下リ三は勝絶なりされば武管ヘは何律か（師九・一二）　答　鳥鐘律
〃　一七三　三絃本調子二を勝絶律とせば其一は八寸管の何譜に当るか（淮五・六）　答　ハ
〃　一七四　双調律を三絃二上りの一とせば其二は七寸管の何譜か（淮六・五）　答　ロ
〃　一七五　鳧鐘律を本調子一とすれば其三は二尺管の何譜に当るか（淮六・九）　答　ツ

ロ　琴に就いて

私達が普通「コト」と云ふのは琴ではなくて琴の文字で表はすべきものであります。之れは本当は「箏の琴」と云ふのであつて大体琴には「俗琴」と「樂琴」とがあるのです。樂琴とは雅樂に用ふる琴で、俗琴は八橋検校が創制した所謂私達が「コト」と呼んでゐるものであります。故に当流に於ては専ら「琴」と云ふ文字を以つてコトを書き表はして居ります。諸君の琴と云ふ字を使はずに「箏」と云ふ文字を使つてコトを書き表少異にして居ります。生田流では全長を六尺三寸、首の広さ八寸一分、尾の広さを七寸八分とするのを法とし、山田流では全長を六尺とし、幅は生田流と同じであります。之等を「本間物」と云つて之れより短いものを「中間」と云つて五尺から五尺五寸に及ぶものがあります。其上短いのは「小間」又は「半ゴト」と云つて四尺以上五尺以下を

云ひます。「本間もの」は演奏会等に使用し、全体の用材は桐で作られてあります。箏は元来其全体を龍に象(かたど)つて作られたものであつて、各部の名稱は多く龍何々と云ふ様に龍と云ふ字が冠してあります。例へば表面の板は龍甲、裏面は龍腹と云ふ様に其他總べてこんな名稱であります。とにかく箏と云ふのは絃が多くて柱(じ)のあるものを云ふのであつて琴は「緊(きん)の琴」と云つて七絃琴(きん)と云ひ支那では古くは五絃だつたのですが周(しう)の文王の時に七本にしたと云ふ事であります今は殆どなくなつてしまつて、わづかに絃一本の一絃琴や二本の八雲琴(やくもごと)があるのみであります。即ち琴とは絃が少なくて柱(じ)のないものを云います。柱(じ)とはコマとも申す様ですが本当はコトヂと申します。扱て箏は十三の絃が掛けてあります・絃の名は弾ずる人の向ふ側から一低い音から順



箏(箏曲大意抄より写す)

に一二三四……と呼んで行きますが十一は斗(と)、十二は為(い)、十三は巾(きん)と呼んでゐます、即ち一二三四五六七八九十斗為巾で十三本となります・三絃の基本調子は本調子と申しました、箏の基本の調子は何かと云ふと平調子(ひらぢょうし)であります。平調子から種々一部分宛音の高さを変へて沢山の調子が出来て居ります。普通用ひられる箏の調子は一の絃と五の絃は同じ高さで、二の絃は一より低い音であります、故に実際は二の絃から順次音が高くなつて行くので、一の絃丈けは一寸(ちよつと)、抜けとのです・然し計算問題に使用する時は一は矢張り二より低いものとして計算する事になつて居りますから、此点を誤解のない様に記憶してゐて下さい・例へば計算問題では平調子はロ゛一レ゛二ヂ゛三と云つた風に取扱ひますが其の実は、ロ一レ゛二ヂ゛三であつて ロ は甲音なのです。左記は平調子の音の高さを示してゐます・同律のものは‖の記号で示しました・但し一と五のみが同律で他は十二律の差がある訳ですが、一音階の差は同律の如く当流で扱つてゐますから、こゝに同律と稱した迄の事です、

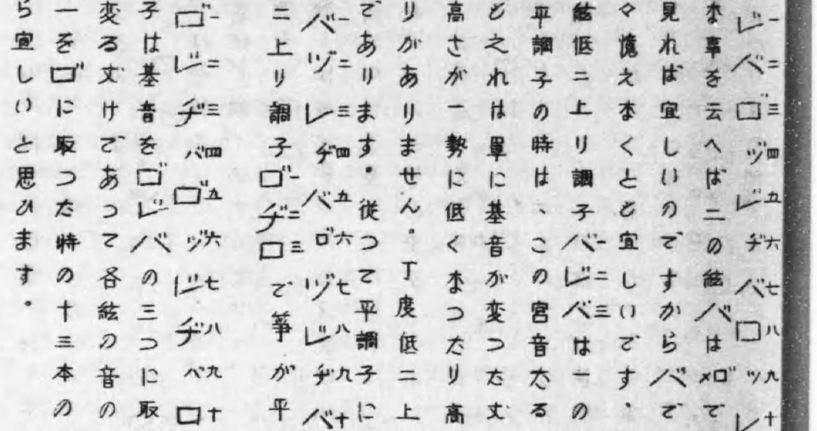
ロ｜一‖五‖十
レ｜二‖七‖為
チ｜三‖八‖巾
ハ｜四‖九
ツ｜六‖斗

斯く、せんじつめて見ますと十三本から絃があつて複雑であるかの如く見える箏も五種の律名で片付いて終ひます・これも記憶してゐると大変便利であります・憶え方は五十

とか三ハとかニセとか云ふ割り合ひですから至極憶え易いのであります。

扨て右に示したのは平調子の一を□に取つた場合ですが、実は平調子には一の絃をレに取る時とベに取る時と□に取る時の三種あります。他のどんな本調子にどこんな本のはありません。この平調子丈け三種に取らねば本るのであります。何故平調子丈け三種に取らねばならぬか、それはよく質問を受ける事です。よく憶えて置いて下さい。尺八箏三絃三つの楽器で合奏するのは三曲合奏と申します、つまり三曲にして初めて三つの楽器が最も合奏味を発揮する事が出来るのです、でこの三つの楽器を、うまく合せるには、どうして□本ら□丈で作つた平調子のみでは具合が悪いのです、即ち三絃が本調子で箏が平調子の時はと云ふと、箏の一の絃はレで取らぬと合はす事が出来ません、どうして斯くなるかと云ふ事は音階の構成に依る事で、未だ音階に就て説明する機会がありませんが、後章で精しく説明致す事としませう。然し概略申しますれば、音階には宮音と云つて基本の音があるのです。三絃の本調子はまとして本調子旋律と云ふ一つの音階が使はれます。其宮音は何かと云ふとレの音即ち二の絃に本るのです。箏にしたゞこの音階を地る以上は宮音たるレを一の絃に取らぬ事には何かにつけ不便であります。斯うした関係から三絃本調子の場合は箏の一をレに取つて平調子とすると云ふ事に本るのであります夫れから三絃が三下りで箏が平調子の場合ど箏の一はレに取ります、これと大体が三絃の本調子から三丈け下げて三下りが出来上がるので、宮音は依然として二の絃にあるからです、箏の一をレに取つた時の各絃の高さを音譜で表はして見ませう。

平調子



但し正確本事を云へば二の絃ベはメロです。これは111頁に申した通り計算上ではニよりーが低いと見れば宜しいのですからベで表はすのであつて夫れで通用するのですから面倒本事は一々憶え本くとも宜しいのです、

次に三絃低ニ上り調子

子で箏が平調子の時は、この宮音たるベを箏の一に取ります。其時の平調子は次の通りです。尤も之れは単に基音が変つた丈けで、低ければ低い本りに高ければ高い本りに全体の音の高さが一勢に低く本つたりするのであつて各絃の律の間隔即ち律の差には何ら変りがありません。丁度低ニ上り普通ニ上りと一つの二上りに高低が出来るのと同じ理由であります。従つて平調子には違ひはありません。

平調子

次に三絃ニ上り調子

で箏が平調子の場合は□が宮音ですから箏の一は□と本ります。

平調子

以上平調子は基音を□レベの三つに取る為めに複雑に見えますが今ど申しました通り単に基音が変る丈けであつて各絃の音の間隔は絶体に変りありませんから、諸君が憶えておく時は一を□に取つた時の十三本の絃は何譜に当るかと云ふ事丈けを確つかりと記憶してゐたら宜しいと思ひます。

此の外に沢山の調子の種類があります。雲井調子と云ふのは平調子より三と八と巾を一律下げ、四と九を二律上げたものです。雲井調子以下は平調子の様に幾つも其音を変へる事は全然ありません

雲井調子　ロ　ヒ　ニ　チ　ハ　ヘ　ロ　ツ　レ　チ

半雲井調子は平調子より八を一律下げ、九を二律上げます。丁度弦の半分丈けが雲井調子に変る意味で斯く申すのでせう。

半雲井調子　ロ　ヒ　ニ　チ　ハ　ヘ　ロ　ツ　レ　チ

次に古今調子は名古屋の故吉沢検校が創始せられた調子でありまして古今集から和歌を撰んで十鳥の曲や春夏秋冬の曲をこの調子で作曲されたのであります、夫れで古今調子と命名されたものと思ひます。之れに使用する音階は全く他のものと異つてゐるのでありまして、金森高山先生は之れを古今調子旋法と命名されました。

古今調子　ロ　ヒ　ニ　チ　ヘ　ロ　ツ　レ　チ

之れは平調子より四と九を二律上げたので半音があまりありませんから陽気に感ずる旋法であります。この二の絃丈けは他の普通の調子よりも一音階高くしますから、一の絃よりも二の絃の方が高いのであります。次ト中空調子と云ふのは平調子より六と斗を一律上げ七と鳥を二律下げたものです。

中空調子　ヘ　ツ　ヒ　ニ　チ　ヘ　ロ　ツ　レ

曙調子と云ふのは平調子より三と八を一律下げ四と九を二律上げます。

曙調子　ロ　ヒ　ニ　チ　ヘ　ロ　ツ　レ　チ

岩戸調子とは平調子より四と九と六と斗を一律上げ五と十と鳥を二律下げます。

岩戸調子　ヘ　ツ　ヒ　ニ　チ　ヘ　ロ　ツ　レ

二重雲井調子と云ふのは雲井調子より五と十を一律下げ六と斗を二律上げます。

二重雲井調子　ロ　ヒ　ニ　チ　ヘ　ロ　ツ　レ　チ

四九上り調子とは平調子より四と九を二律上げたものです。

四九上り調子　ロ　ヒ　ニ　チ　ヘ　ロ　ツ　レ　チ

六上り調子とは平調子から六と斗を一律上げたものです。

六上り調子　ヘ　ツ　ヒ　ニ　チ　ヘ　ロ　ツ　レ

中十とは平調子より斗を四律鳥を二律巾を五律上げたものです。

中十　ロ　ヒ　ニ　チ　ヘ　ロ　ツ　レ　チ

扨てこれで十一種の調子を説明致しましたが此外に変り調子と云つて名前がつかず其曲丈けの調子のものも少なくありません。今左に例を挙げて見るならば

金剛石、水は碧、三の景色、嵯峨の秋、大内山、紅薔薇、秋の調、ひぐらし、椎児櫻、時鳥の曲、明治松竹梅、枕屏、御園の松

新菓笹、摘草、雲の峰、最仲の月、銀世界、玉の宮居

等多数ありますが之等は殆ど三絃が入らず、夫れに使用する旋法も普通旋法を使用せぬものが多く、殊に宮城氏の新筝曲に至つては従来使用されて居らなかつた洋樂の旋法まで使用されて居るのであります。斯うした特別の調子は樂譜に全部書き並らべてあります

すから夫れに依つて御研究下さい。要するに今後益々新らしい箏の調子で以つて新らしい弾き方や旋法が生れて来る事と信じます。日本音樂の改造は愈々この辺から生れて来つゝあるのでは本いでせうか。

以上十一種の箏の調子を説明しましたが最も普通に使用せられるのは平調子、雲井調子、半雲井調子等で其他轉調に依つて生じる場合もあるかと思ります。箏の轉調は柱を移動させるのであつて、どの絃を移動さすかは先きに記した各調子の表を御覧に本れば判ります。今平松応山師著尺八通解六〇頁に依れば

松竹梅に就て三絃と箏の轉調工合を比較して見れば

（三絃の調子）	（箏の調子）
三上り調子	半雲井調子
三上り調子	仝
本調子	平調子
二上り調子	中空調子

右の如くである。処が三絃はツボを利用すれば轉調せずとも適分弾けるが箏にはツボがない為め三絃のやう本訳にはゆかぬ。例へば「八重衣」にしても、三絃は本調子のツツ通しで色々な調子の旋律を弾いてゐるが、これに対して箏は一つの調子で相手する事が出来ない。最初半雲井、次は中空、平調子、半雲井と四回に亘つて轉調してゐる。云々。

大変話が岐路に入りましたが、斯様に箏の調子は沢山あつて中々複雑でありますが、今之れを計算問題に使用する時は大体左の事柄を知つて居れば宜しいのです。

平調子、古今調子、半雲井調子は ロ-ニ レ-ミ チ-ミ

雲井調子は ロ-ニ レ-ミ チ-ミ

右は各調子の一二三の各絃の高さを表はしたのでありまして、平調子、古今調子、半雲井は一二三の絃は皆同じい ロ-ニ レ-ミ チ-ミ であります。雲井調子丈けは ロ-ニ レ-ミ です。然し之れは今と申す通り計算問題の時丈けで、古今調子とは如何本るどのかとか、平調子の十の絃云々と云ふ問題になれば自然總ての習慣が本ければなりません。又平調子には三つの種類がありますが計算に使ふ時は ロ-ニ レ-ミ チ-ミ 一つでやれば宜しく、ハ-ニ ソ-ミ レ-ミ や ハ-ニ レ-ミ ロ-ニ の方は使ふ必要がありません。何故かと云ひますと、計算では律の差を主とするのですから、律の差から見れば右の三種の平調子には何らの差異がある訳けでは無いのですから ロ-ニ レ-ミ チ-ミ のみで計算すれば宜しいのです。

「或音を箏中調子の一に取れば其三は七十管のレに相当するといふ或音は何律かし最初に或音と出てゐる時は最後の律の判つてゐる処から解いて行かねば本りません、即ち其三は七十管のレだと云ふ処からやつて行けば宜しいのです。尤も此の問題は非常に簡單ですから前からでもやれますが、まあ後の方からやれば無難です。平調子とは ロ-ニ レ-ミ チ-ミ です、七十管のレは一体何律かと云ふと中指の真中で鳧鐘律です、之れが箏の三の絃であり又チでもあります。結極中指の中を チ と見て ロ を求むれば宜しいのです、答は人差指の根元で上無と本りますから或音は上無律であります。

「黄鐘律を雲井調子の一とせば其三は何律かし 雲井調子は ロ-ニ レ-ミ チ-ミ です、黄鐘を ロ と見れば チ は断金と本りますから答は断金律であります。

「茲に六下り調子の三絃あり、其三の放絃は鳧鐘律なり、今其一を箏の平調子の二に取りたる三の絃は或管のチと同律なり或管井は何律かと　六下り□レチの三が鳧鐘だと云へばチが鳧鐘だと云ふ事になります、すれば□は何律かと云ふと上無です、上無はレと見下りの一の絃であります、之れを平調子□レチのニとすれば三は何律か・上無をレと見てチを求むれば出るのです、即ち断金律である或管の井は何律かと云ふ事になります。井はハと同律でチの上隣りで平調律が井の律に当ります。之れを箏答で計算するとすれば上記の如くなります。(イ)は上図の書き初めで(ロ)(ハ)(ニ)と書いて行つたのです。即ち(イ)(ロ)(ハ)(ニ)は書き方の順序を示す。

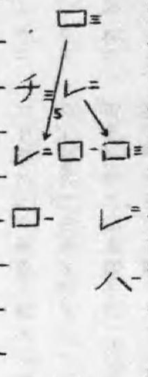
(イ) 律名　(ロ) 鳧双　(ハ) 下勝　(ニ) 平断　(ホ) 壱上
(ヘ) 六下り　(ト) チ　(チ) チ　(リ) レ　(ヌ) レ　(ル) □
(ヲ) 平調子　(ワ) 井　(カ) チ　(ヨ) チ　(タ) ソ　(レ) メソ
(ソ) 或管　(ツ) 井　(ネ) チ

「甲三絃（本調子）の三は乙箏（半雲井調子）の二より五律高く、丙三絃（三上り）の三の絃は甲の二より五律高きものが神仙律なりと云ふ、されば甲乙丙各一の絃は何律かと　之れは只複雑なる丈けで左程難かしいものではありません。夫で最後の律の判つてゐる乙からやりませう乙の三より五律高きものが神仙ならば、神仙から五律下がつたものが乙の三です、即ち双調です。乙は箏半雲井□レチですから、チが双調となる故に□は神仙なります、□とは申す迄もなく乙箏の一です。之れが答の一つ。次に甲の三は乙の二より五律高い、乙の二はレで勝絶ですから、勝絶から五律昇れば鳥鐘で、之れが甲の三であり又一であります（本調子は□レ□ですから一と三と同律）之れが一つの答。次に丙は甲の二より五

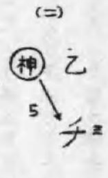
律低いとあります、甲の二は鳥鐘、之れを□と見てレを求むれば出ます、即ち断金律、断金より五律低いものを見るには断金より五律下がれば宜しい。で小指の根元鳥鐘であります、丙の三は壱鏡です、丙は三上り ハレ□で三の絃は□で一を求むるのであれば ハを探せば宜しい。壱鏡から□ロハと下がると鳧鐘ですから答は甲鳥鐘、乙神仙、丙鳧鐘、

今之れを箏答でやつて見ませう。問題の通りを図に書けば左の様になります。左の(ニ)に依つて各音譜の音律が判つて来ますから(一)と(ニ)と律名とを合せると次図の通りになります。

(一)



(ニ)



律	乙	甲	丙
神			
壁			
壱	5		□
黄	4		ロ
鳧	3		ハ
双	チ		ハ
下	チ		ハ
勝	レ		チ
平	レ		チ
断	ソ		レ
壱	メソ		レ
上	ツ		ソ
神	□		メソ
壁			ツ
壱		□	□
黄			ロ
鳧			ハ

例題　一七大　箏平調子の一の絃と二の絃とは幾律の差ありや　答　乙神仙　甲壱鏡　丙鳧鐘

〃　一七七　箏平調子の二の絃と三の絃とは幾律の差ありや　答　五律

〃　一七八　ベを箏平調子の一とせば其二及び三の絃は何譜となるや　〃　二律

〃　一七九　壱絃律を箏平調子の一とせば其二及び三の絃は八寸管の何譜となるや　〃　ニソ　ニレ

〃　一八〇　黄鐘律を箏平調子の一とせば其二及び三の絃は八十管の何譜か　〃　ニレ　ニチ

〃　一八一　平調律を箏雲井調子の一とせば其二及三の絃は八十管の何譜か　〃　ニロ　ニソ　ニチ　ニバ

例題 一八二　二尺のレを等雲井調子の一とせば其三の絃は七寸の何譜に当るや　答 バ
〃 一八三　七寸のチを等平調子の一とせば其三の絃は九寸の何譜に当るや　〃 レ
〃 一八四　六寸のヴを雲井調子の三とせば其二及一の絃は八寸の何譜に当るや　〃 ニチ
〃 一八五　九寸のレを平調子の三とせば其二及三の絃は七寸の何譜に当るや　〃 ニヅ
〃 一八六　八寸のチを平調子の二とせば其一及三の絃は六寸の何譜に当るや　〃 ニバ
〃 一八七　危越律を三絃本調子の一と其二を等平調子の一とせば其二は何律なりや　〃 一ロ
〃 一八八　神仙律を二上りの一とし其二を等平調子の一とせば其二は何律なりや　〃 ニチ
〃 一八九　鶯鏡律を三下りの三とし其二を等雲井調子の一とせば其三は何律なりや　〃 仲仙
〃 一九〇　上無律を三上りの一とし其二を等雲井調子の二とせば其三は何律なりや　〃 整涉
〃 一九一　八寸管のバを等平調子の一とし其二を三絃本調子の一とせば其三は何律なりや　〃 黄鐘
〃 一九二　九寸管のレを等雲井調子の一にとり其三を三絃三下りの一とせば其二は何律なりや　〃 鶯鏡
〃 一九三　六寸管のヴを等平調子の一にとり其三を三上りの二とせば其一は何律なりや　〃 鶯曉
〃 一九四　斷金律を三絃本調子の一とし其二を等平調子の一とせば其三は八寸管の何譜に当るや　〃 鶯鏡
〃 一九五　整涉律を三絃本調子の一とし其二を等平調子の二とせば其三は二尺管の何譜に当るや　〃 ツ
〃 一九六　鳧鐘律を三絃二上りの二とし其一を等平調子の一とせば其三は九寸管の何譜に当るや　〃 チ
〃 一九七　双調律を三絃三下りの一とし其三を等雲井調子の一とせば其三は七寸管の何譜に当るや　〃 チ
〃 一九八　勝絶律を三絃六下りの一とし其三を等雲井調子の一とせば其三は六寸管の何譜に当るや　〃 ハ
〃 一九九　下無律を等平調子の一とし其三を三絃本調子の二とせば其一は八寸管の何譜に当るや　〃 ヅ
〃 二〇〇　神仙律を等平調子の二とし其三を三絃二上りの二とせば其一は九寸管の何譜に当るや　〃 チ

〃 二〇一　上無律を等雲井調子の一とし其三を三絃三下りの三とせば其二は二尺管の何譜に当るや　〃 ヅ
〃 二〇二　黄鐘律を等雲井調子の三とし其一を三絃六下りの一とせば其三は七寸管の何譜に当るや　〃 チ
〃 二〇三　鶯曉管のロを荷音とした る管のヂを一とした る等雲井調子の三の絃は何律なりや　〃 鶯曉
〃 二〇四　鳥籠管のルを荷音とした る管のヴを一とした る等平調子の三の絃は何律なりや　〃 神仙
〃 二〇五　下無管のバを荷音とした る管のチを三とした る等雲井調子の一の絃は何律なりや　〃 危越
〃 二〇六　双調管のレを荷音とした る管のヅを一とした る三絃二上りの二の絃は何律なりや　〃 黄鐘
〃 二〇七　神仙管のチを荷音とした る管のヒを一とした る三絃三下りの三の絃は何律なりや　〃 黄鐘
〃 二〇八　上無管のバを荷音とした る管のレを三とした る三絃三上りの二の絃は何律なりや　〃 黄鐘
〃 二〇九　平調管のチを荷音とした る管のヅを二とした る三絃三上りの一の絃は何律なりや　〃 平調
〃 二一〇　整涉管のヅを荷音とした る管のヅを三とした る三絃六下りの一の絃は何律なりや　〃 黄鐘

一寸御注意申しておきます。以前にも話したと思ひますが、單にロとかツと云ふ音譜があれば、これは甲音と思つて下さい。乙音には必らず濁点をつける事になつてゐます。

例題一八三の答はレではなくてレとなります、即ち甲のレが正当な答であります。又普通に書き記す律名は乙音と思つて下さい。大体律名は甲乙を度外視してゐる有様ですが甲乙判明しないものは乙音と見れば間違ひありません。従つて例題一八〇の答はロツが正当であつてロヅとするは正当とは申されません。全一八一にしても答はチバかチハとするは正当と申されません。

例題二一　或管の□を一としたる三絃本調子の二の絃は神仙律なり其管の〆は何律か

答　勝絶

二一二　或管のチを一としたる三絃二上りの二の絃は竜越律なり其管の□は何律なりや

〃　神仙

二一三　或管の〆を一としたる三絃三下りの二の絃は蕚鍵律なり其管の〆は何律なりや

〃　竜越

三　今迄に出た問題

今迄に出た問題は例題中に大分掲げましたが、此項で全部書いておきませう。今今後出そうな問題を掲げてあるのですから、讀者は必ず始めから、即ち例題一から一々回答して自分の答が間違ひがないか試みて下さい。問題を一つでも余計自分で解いて見れば夫れ丈け実力がつくのですから、試験を受ける程の方ならば、夫れ丈けの熱心さがなければ試験場に臨む資格がないと思つて下さい。尚ほ旋律、音階に関する問題は作譜作曲の項で研究致します。

1　口述問題

例題二二四　旋律とは何か（師九・五）

答　色々の音律を綴つたものの節廻しの事である（作譜の條で詳しく申します）

例題二二五　一尺九寸管にて春の曲を吹奏する時最初の音譜は何律か（師九・三）

答　春の曲の最初の音譜は何かと云ふ事を知つて居らねばなりません。楽譜を御覧なさい。最初は甲のレです。そこで九寸の□は人差指の根元ですから、こゝから□ツリ〆ツレレと昇つて行きますとレは小指の真中となります。故に答は下無律であります。試験場、殊に口述は音譜等見る事も出来ないのですから、春の曲の始めは甲レだと云ふ事は知つて居らねばいけません。計算をする時は右の様に指でやつても構ひませんから安心して指でやる事を常から稽古して下さい。例へ口述が将来ないとしても指で平素やつておく事は何かにつけ便利であります。

例題二二六　八寸管にて八夏衣を奏する時最初の音から、一尺六寸管の乙音の最高音迄幾律の差ありや（師二一・六）

答　先づ八重衣の最初の音譜が何か知つて居らねば此問題は出来ません。本書始めに於て暗記しておく様に記しておきましたから、諸君は已に御存じの事と思ひます。初めの音譜はレであります。之れは八寸管のレですから双調律なる事がお判りでせう。次に乙音の最高音は何か知つてをらねば此問題は出来ません。乙音の最高音は〆です。扨てこの〆は六寸管のものと見なければなりません。〆は八寸管の譜とすれば断金ですが六寸管ですから夫れより二律上がります、尤も六寸管の□は八寸、七寸、六寸と昇つて中指の先きです。〆はツと同律ですから人差指の先きとなります。従つて勝絶なる事が判ります。結極双調から勝絶迄の律を見れば宜しい事になりますが、此時反対に数へぬ様注意して下さい。双調は乙音の双調ですし、勝絶は乙音でなく、甲音の勝絶ですから

其差はなの通り十律となるのです。之れを勝絶を乙としたら、二律の差となつて、折角こゝまで解いた事が水泡に帰して了ひます。

答は十律

双鳧黄鐘神上壱断平勝
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

例題二七　フラは如何にして出すか（師九・五）

答　フは甲の口でラは第二孔と第五孔とを開けて乙音で吹きます。ラはやゝ口の次に来るとのでスから フは第二孔を揺る事になります、然し フは甲音の口と同律ですから乙の口の次に来る時は口で息をぬすみ、改めてラと出さねばなりません。

例題二八　乙音階中に於て而も同律にして異りたる音譜二個以上を有するものを挙げよ（師九・一二）

答　ヅ＝ゴ　ヅ＝ル＝メジ　ビ＝ビ＝メジ　レ＝ヴ＝メヂ　ヂ＝ヴ　バ＝チ
ベ＝ロ＝ラ＝メビ＝メビ＝メリ　リ＝ビ＝ビ＝ビ＝ビ＝ロ＝リ　ビ＝リ　以上

例題二九　甲管は乙管より二律高し、乙管のチは双調律なりとすれば甲管ハは何律か（師一〇・九）

答　甲管の方が二律高いのです、乙管のチが双調なら双調から二律昇つた黄鐘は甲管のチに当ります。チハ、と昇れば、ハは盤渉律となります。

例題三〇　チが双調律なる管を以つて残月を奏すれば最初の音譜は何律か（師一〇・一二）

答　残月の吹き初めはレです、チが双調ならチチレと下がつて見ればレの律が出ます、答は勝絶です。之等は総べて口述問題ですから必らず指で計算して見て下さい。

例題三一　神仙管のレを商音としたる管を以つて若葉を奏せば最初の音は何律か（師一〇・一二）

答　神仙管とは神仙を口としたる管です、此管のレは何律かと云ふと中指の根元（神仙）を口として口ツ〆ツ〆レと昇つて下さい、すると レは勝絶である事が判ります、勝絶を商音とせる管で若葉の最初の音を調らべる事になります、最初の音はチですから、勝絶を口として口ツ〆ツ〆レレチチと昇れば答が神仙律と出てきます。

例題三二　一尺七寸管のレとニ尺管のヂとは幾律の差ありや（師一〇・一二）

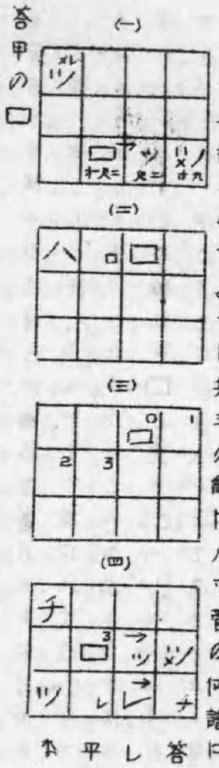
答　七寸管のレは何律か調べませう、七寸の口は薬指の先きです、こゝから口ツ〆ツ〆レレと昇りますとレは中指の真中となります、鳧鐘です。次にニ尺管のヂは何律か見ませう、ニ尺の口は中指の根元です、こゝから口ツ〆ツ〆レレチチと昇るとヂは双調となります。以上の鳧鐘と双調とを較らべて見ますと、鳧鐘は一律高いのですから答は七寸管のレの方が一律高しとなるのです。

例題三三　八寸管にて低ニ上リ調子としたる三絃の一を一としたる箏平調子三とニ尺管三上リ調子の三絃ニの絃の四番のツボとは何れが幾律高きや（師九・二）

答　低ニ上リはハ＝ニ＝ハ＝ニです、故にハ寸のハは三絃の一に当ります、このハとは中指の根元で神仙です、これを一としたる平調子の三は何律か見なければなりません、平調子は口＝レ＝チ＝ニですから神仙を口と見て口ツ〆レレチチと昇れば薬指の中、双調が平調子の三であります。次に三上リとはハ＝レ＝口＝ニであつてニ尺管で三上リとしたる時のニの絃は何律か見ませう、三上リのニはレです、ニ尺のレは勝絶です、勝絶から四律昇ると黄鐘となります、黄鐘はニの絃の四番目のツボに相当するのです、結極双調と黄鐘とは幾律の差が

あるか見れば宜しい事になります。黄鐘は二律高いから答は二尺管の方二律高し、

例題二二四　二尺一寸管甲メレを三の絃としたる三絃三下り調子の一の絃の三番目のツボを箏平調子の一とせば其三の絃は八寸管の何譜に当るか（師九・五）



答　上図は指で計算して行く順序を示したどのです。

平調子の三は(四)表の如く小指の先きと一致しますから八寸管の□に当ります。

答甲の□ツはメレと同律、三下りは□レ八ですから第二表の八は三の絃□は一の絃、平調子は□レチで第四表はそれです。

例題二二五　六寸管にて本調子としたる三絃の三の絃とは何れが幾律高きや（師一三・九）

答　本調子は□レ□です、六寸管のレは何律か見れば三絃の二が判るのであります、六寸の□は中指の先きでレは黄鐘となります。次に三下りは□レ八ですから二尺管の八は三下りの三に当ります、鶯鏡です。どちらが高いと云へば黄鐘より鶯鏡が一律高いから答は二尺管の方が一律高し。

例題二二六　双調律を箏雲井調子の一にとれば其三の絃は九寸管の何譜に当るか（師一三・九）

答　雲井調子は□レチです、双調を□とすればチは上無です、上無は九寸管の□で

すから答は□であります。

例題二二七　(イ)松竹梅の最初の音譜　(ロ)千鳥の曲の最後の音譜　(ハ)六段調の最後の音譜　(ニ)春の曲の最初の音譜　(ホ)根曳の松の最初の音譜

右は（師一三・九）に出た問題です、斯様に有名本曲はよく憶えてから試験場へ臨んで下さい、答略す

例題二二八　暗譜試問　千鳥の曲　磯千鳥

右は（師一三・一二）に出たどのので紙片に右の曲中二十拍子位抜き出してあるどので夫れを見て何の曲か曲名を答ふれば宜しいのです

例題二二九　古今を通じて箏三絃曲の著名本ろ作曲者五名を挙げよ

答　八橋検校、生田検校、皆一流を編み出した作曲家です、又古今調子を創めた吉沢検校其他沢山あるが殆ど故人であります。現代では宮城道雄氏は新日本音楽で最も人気を博して居られます。演奏会を催す時には作曲者名を番組に掲げる事は好い事だと思います。斯くする時は曲名と同時に作曲者名も自然に憶えられて都合がよいと思います、夫れと云ふのはどの曲にも作曲者の匂ひと洋楽では必らず番組に作曲者名を記します、夫れを作風と云います。演奏を聴いてハハアと申しませうか、一種のクセがあるどので、之れはモザートの曲とか判るどのであります。夫れはヴエトヴエーンの作品とか、之れは必らずあるどのです、諸君は宮城氏の曲を聴いて直ちに云ひ当てる事が出来るでせう、又菊原氏の曲はどれを聴いても曲の名が判別しに

くい程似てゐる事等に依つてどこの処の作風と云ふものをよく御了解の事と思ひます。

ロ　筆答問題

例題二三〇　一尺六寸管レと二尺一寸管チとは何れが幾律高きや（師八・三）

答　右はロ述問題でいとやれる様な易いものであつて、それを以つてしても遂年問題が難かしくなる事が判ります。らこんなに易いのであつて、それを以つてしても遂年問題が難かしくなる事が判ります。宗家が毎回問題を作られるのですが絶べて前回試験問題を参照せられて退ひく〳〵と少しづつ難かしくして行かれるのであつて准師範と師匠との試験の区別ゞ只前回とならつてやらるゝ事ですから、其間、判然たる区別がある訳ではありません。扨て六寸のレは黄鐘です、二尺一寸のチは下無です。故に答は六寸の方三律高し。

例題二三一　甲管は乙管より二律低し而して甲管の四は断金律なりとされば乙管に於ける上無律の各譜をあげよ（師八・一二）

答　ハと同律なる各譜（略す）

例題二三二　盤渉管のリを筒音としたる管のレを三絃本調子の一にとり其二を箏平調子の一とせば其三は何律か（師七・一二）

答　双調

双調答（ホ）＝チ　チ　レ　レ　ツ　ツ　リ　リ　ツ　ツ（ニ）

Ⅱレ＝（一）ロ　レ　ツ　リ　リ　ツ（ハ）

ロⅠ＝レ　レ　ツ　リ　ツ（ロ）

（本調子）　ツ＝ロ　リ　ツ

（イ）ロ＝盤

甲勝平断　壱上
乙四＝2↑四↓
ヲ比比　ハ→

右図は見にくいかと知れませんが(イ)(ロ)(ハ)(ニ)は書き方の順序を示し、最後に出た平調子の(ニ)が何律か見さら答が出るのです、最初の(イ)で□が盤渉と出たのですから右の音譜一つ宛つが一律宛あるのですから順に上へ数へます上双調となります。

例題二三三　茲に尺八箏の春の曲合奏あり箏の一の絃は神仙律なり尺八のレは何律か（師七・二）

答　春の曲は□レ（ニ）チ（ニ）です。□が神仙なれば

神上壱断平勝

□　リ　リ　リ　レ　レ

答は勝絶律です

例題二三四　戎管リを三絃の一にとりて二上り調子とし其二を箏平調子の一とせば其三は平調律なりと云ふされば此管の筒音は何律か（師八・二）

答　平　○　○　○　○　○　○　黄　○　○　○　壱上　神

チⅢ＝平　チ　レ　レ　ツ　リ　ツ　ツ　ツ　ロⅠ（平調子）　ツ＝ツ　ツ　ロ＝

二上り　Ⅰチ＝チ　レ　レ　ツ　リ　ツ　ツ　ロⅠ＝

答　神仙律

例題二三五　鶯鏡律を三絃の一にとりて三上り調子としたる三の絃を一とせる箏平調子三は八寸管の何譜に相当するか（師九・三）

答　レ

例題二三六　古今調子の曲を一尺八寸管に於て吹奏する上箏の第一絃を何律とするが都合よきや二律をあげよ（師九・五）

答　壱越律、双調律　之れは古今調子は□レ（ニ）チ（ニ）と取つたのが一番よく、夏の曲は

ゴー　図、上上
同種ミミ駅つ
使り。田こ
ゲれ、□音のあります
田はム音子は一音子
乙音ばりすが
ら双
調
体ばミ演生。
乙音（ハ・ホ）
兼ミ
ハ上兼
（ハ・ホ）
ニ上ム
詩本

ウ　図、
陸記事
（ハ・ホ）
井一□＝上↑ヂ
（ハ）
ハ　○
チ　○
（ハ）レ
ヘ　○
ハ　○
（ハ）ハ
（ロ）ハ＝是↑ハ＝メ＝□
（ニ）乙音
○　○　○　○
Ⅱ＝上（ホ）
ハ上兼
（ホ）

ホ　図、
神仙ミル
チ
下同音上
勝
（ヘ）
ヘ
（ト）
ヘ
（チ）
ヘ
（リ）
ヘ
（ヌ）
ヘ
（ル）
ヘ
（ヲ）
ヘ
（ワ）
ヘ
（カ）
ヘ
（ヨ）
ヘ
（タ）
ヘ
（レ）
ヘ
（ソ）
ヘ
（ツ）
ヘ
（ネ）
ヘ
（ナ）
ヘ
（ラ）
ヘ
（ム）
ヘ
（ウ）
ヘ
（ヰ）
ヘ
（ノ）
ヘ
（オ）
ヘ
（ク）
ヘ
（ヤ）
ヘ
（マ）
ヘ
（ケ）
ヘ
（フ）
ヘ
（コ）
ヘ
（エ）
ヘ
（テ）
ヘ
（ア）
ヘ
（サ）
ヘ
（キ）
ヘ
（ユ）
ヘ
（メ）
ヘ
（ミ）
ヘ
（シ）
ヘ
（ヱ）
ヘ
（ヒ）
ヘ
（モ）
ヘ
（セ）
ヘ
（ス）
ヘ
（ン）
チ＝□
ヘ　ロ
ヘ（ヘ）チ＝ヘ
ヘ（ヘ）チ
ヘ（ヘ）チ
ヘ（ヘ）チ

例題二四四　黄鐘律を一としたる三絃にて若菜を吹奏するに最初の音が甲管レに当り乙管を持てばハに当るされば甲管ロは何律か又乙管に於て神仙律は何譜か（師一〇・二一）

（若菜吹出）　勝Ⅱ　平調壱上神盤黄（Ⅰ三絃の一）

（甲管）　レ　ツ　ツ　ッ　ロ
（乙管）　ハ　ハ　チ　レ

答　甲管ロは神仙律　乙管の神仙律の譜はレ

例題二四五　或管ロを三絃三としたる三下リ調子ニの八番目のツボは勝絶律なり今其管を以て朝綠を奏せんとせば最初の音は何律か（師一〇・二一）

答　壱越律

例題二四六　或ニ上リ三絃三の十六番目のツボは平調律にして其ニの七番目のツボは或管リと同律なりされば或管に於ける下無律の音譜は如何（師一〇・二一）

答　ツ

例題二四七　或管ハを一としたる拍平調子三は盤渉律を三としたる三絃六下リ調子のニの三番目のツボと同律なり今其管を以つて八寸管の奏するたの音譜に合奏せんと思へは如何なる音譜を使用すべきや　ツレリツロハ（師一〇・二一）

（六下リ）　盤　黄鐘　双下勝
（平調子）　チ←3　チ←2　レ←1　ロ←0（三番目のツボ）
↓　レ　ツ　ツ　ッ　ロ←1
ハ←0（或管）

次にツレツロハは八寸管ですから勝双勝壱律と成ります。或管のハは勝絶ですから或管の各音譜の律名は直ぐ出ます

答は　ハ　ロ　ハ　チ　レ　と成るのです。

例題二四八　或管レは勝絶律なり其管を以つて二上リとしたる三絃ニの五番目のツボは八寸管の何譜か（師二・六）

答　八

例題二四九　一尺九寸管にて本調子としたる三絃三の五番目のツボと一尺八寸管にて低二上リ調子としたる三絃ニの八番目のツボとは幾律の差ありや（師二・六）

（九寸）　5　4　3　2　1　ロ←Ⅲ（本調子）
（八寸）　0　0　0　ツ　ロ←ロ←Ⅱ
8　7　6　5　4　ハ←ハ←ハ←ハ←ハ←Ⅱ
3　2　チ←チ←チ←チ←チ←Ⅱ（低二上リ）
1　0　レ←レ←レ←レ←レ←Ⅱ

答九寸の方三律高し

例題二五〇　或管リを一としたる拍平調子三は黄鐘律を三としたる三絃三上リ調子一の絃と同律なりされば一尺八寸管リは或管の何譜に当るか（師二・六）

答　ツ

例題二五一　或管ハは一尺九寸管の最低音を一としたる三絃三下リ三の五番目のツボと同律なりされば此管のタは一尺七寸管の何譜と同律なりや（師二・二）

答　ツ

例題二五二　鶯鳴律を一としたる三絃二上リ調子ニの七番目のツボは一尺六寸管にて六下リとなしたる三絃三の何番目のツボと同律なりや（師二・二）

答　一番目のツボ

例題二五三　或管の口は二尺管の最低音を一としたる三絃二上リ調子のニの絃の五番目のツボと同律なり其管に於ける勝絶律の音譜を示せ（師二・六）

答　チ

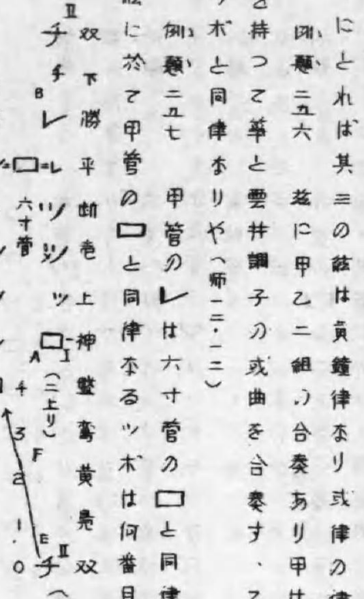
例題二五四　盤渉律を一としたる三絃三上リ調子のニの放絃は七寸管にて「六段調」を合

奏したる三絃三の絃の何れのツボと同律なりや（師一二・六）

例題二五五　或律を三絃三上り調子の一にとり其二の絃の五番目のツボを箏雲井調子の一にとれば其三の絃は貞鐘律なり或律の律名を示せ（師一二・一二）　答　三番目のツボ

例題二五六　茲に甲乙二組の合奏あり甲は九寸管にて三絃と「黒髪」を合奏す、乙は神山管を持つて箏と雲井調子の或曲を合奏す、乙の箏の三の絃は甲の三絃の三の絃の何番目のツボと同律なりや（師一二・一二）　答　断金律

例題二五七　甲管のレは六寸管の□と同律なり、神山律を一とせしたる二上り三絃の二の絃に於て甲管の□と同律なるツボは何番目なりや（師一三・九）　答　七番目



例題二五八　或管と合奏せし本調子三絃の三の絃は勝絶律なりされば其管のレを三と

例題二五九　甲三絃（六下り調子）の三の絃の八番目のツボは乙三絃（本調子）の二の絃の五番目のツボより三律高し而して八寸管のタは乙三絃の三の絃の十番目のツボと同律なりされば甲三絃の二の放絃は九寸管の何譜ト当るや（師一四・六）　答　ツ

例題二六〇　或三絃の一の絃の五番目のツボは八寸管のチと同律なり、二の絃の三番目のツボは六寸管のベと同律なり、三の絃の十五番目のツボは双調律なり、されば其三絃の調子は如何、又其宮は何律なりや（師一四・一二）　答　チ

答　ソ－ニ－ミ－ソと云ふ調子になります、之れは高本調子であつて□－レ－□の普通本調子より一体に二律見昇つた調子であります、宮は黄鐘です、然し宮に就ては後述します。

例題二六一　六寸管のレは二尺管にて六下り調子としたる三絃の三の絃の十番目のツボと幾律の高低ありや（師一五・六）

答　六寸管四律高し、故に四律の高低

例題二六二　平調管を以て低二上り調子としたる三絃の二の絃の五番目のツボは二尺管のリと幾律の高低ありや（師一五・一二）

答　此場合は低二上り調子はベ－ニ－バ－ミであると云ふ事を知つてをらねばいけません、平調管とは笛音が平調律の管を云ふのですから、先づ一尺六寸と見るのが適当であります・扨て六寸管で低二上り調子としたる三絃の二はレの律であります、卿ち黄鐘、五番目のツボは黄鐘から五律昇れば出ます。壱越となります・此の場合は甲の□であります。次に二尺管のリは盤渉ですから、甲の壱越と比較すると壱越の方が三律高い事になります・管は平調管が三律高し・

例題二六三　或管を以て六下り調子としたる三絃の三の絃の十番目のツボは鳧鐘律なり、一下り調子とせば其三の絃に於て八寸管のレは何れのツボなりや（師五・一二）

答　六下り調子はロ－レ－ヂ一下り調子はベ－ニ－□です、六下りを一下りにするとしたら一を二律下げミのヂを□に上げると云ふ事になります、従つて別つに難しく考へる必要

はありません、三のチが□になる丈けの事です。扨て鳧鐘律から十律下がると六下りの三の律が出ます、鶯鏡と本ります。之れが六下りの三だからチと見て下さい。之れを一下りとする為ら、一下りの三は□ですから、チから□へ昇って律を勘定すると□は断金と本ります。次に八寸管のレは双調ですから、断金から双調へ昇って数へると四律ありますから答は四番目のツボであります。

例題二六四　戎三絃の一の絃の三番目のツボは断金律にして二の絃の五番目のツボは六寸管のウと同律本り、三の絃の八番目のツボは九寸管を以て二上り調子としたる三絃の二の絃の十番目のツボは何律か調らべて見ませう、問題には「一の絃の二番目のツボは断金律」とあります、故に断金から三律下がると一の絃が判ります、即ち神仙律であります。次が二の絃「二の絃の五番目のツボは六寸管のウと同律」と云ふのですから、六寸管のウは先づ何律か調べて見本ければ本りません。六寸管の□は平調律ですからウは鶯鏡律であります。そこで鶯鏡はこの絃の五番目のツボに当るのですから、鶯鏡から五律下がると二の絃の律が判ると云ふものです、で二の絃は勝絶律と本ります。次ドニの絃は「三の絃の八番目のツボは九寸管を以て二上り調子としたる三絃二の絃の十番目のツボと同律」と云ふのですから、次の様に解くと宜しいのです。

九寸管を以て二上り調子としたる三絃の二は何律か。其十番目のツボは何律か。以上を出したら、夫れから八律下がると三の絃が出て参ります。二上り調子は尺八では□ゴ□チ□

と見て宜しいのです、従って九寸管のチの律が判ると、夫れが三絃の二の絃の律に本るのです、九寸管のチは鳧鐘律、鳧鐘から十律昇ると下無律、下無から八律下がると鶯鏡律と本ります。故に三の絃は鶯鏡律と本ります、之れで各絃の律が判りました。即ち一の絃神仙、二の絃勝絶、三の絃鶯鏡、従って一と二の絃は五律の差、二と三の絃は五律の差がありますから答は三下り調子と云へるのであります。又斯う見て宜しいでせう三絃の調子を尺八音譜にすれば普通一の絃はベかロに限る事ですから、今一の絃神仙をロと見れば二の絃はレ三の絃はベと本りますから一層明らかに判るのです。

例題二六五　六寸管に於ける竜越律に属する音譜全部を示せ（師二・六）

答　六寸管の□は平調律であります、従って竜越律はハに相当致します、答は左の通りです。ベハ、ロ、ロ、ヒ、ヒ、ヒ、リ、ヨ、ヨ、ヨ、ヨのラ

例題二六六　七寸管を以て三下り調子とせる三絃の三の絃の六番目のツボは二尺管の何譜に当るや（師二・六）

答　三下り調子は尺八の音譜では□レハ三であります、七寸管の八の律を出せば宜しいのであります、七寸管の笛音は断金律ですから二律下がれば上無と本ります、上無律がベですから三の絃と本ります。之れから六番目のツボを求める時は、上無から六律昇れば出ます。即ち双調と本ります、二尺管の□は神仙律ですから双調はチと本ります、で答はチであります。何譜に当るかと云ふ事に本ると、甲乙の関係も調らべ本ければ本りません、夫れは左図に依って明らかであります。

七寸管

6 ベ
5 ベ
4 チ
3 チ
2 レ
1 ツ
0 ツ
ッ ロ
ロ ベ
ベ ベ
チ チ
レ レ
ヅ ヅ
ヅ ヅ
ヅ ヅ
ロ ロ

二尺管

故に答は チ（甲音）であります。

問題二六七　二尺管と合奏せる三絃の三の放絃は双調律なり、されば何調子なりや（師二二）

答　先づ双調律は二尺管の何譜に当るか調べなければなりません、二尺管と云ふのは神仙律が□に当る尺八ですから双調はチとなります、三絃の三の放絃がチなれば□レにチと云ふ六下り調子よりありませんから答は六下り調子であります。尤も三の絃が□とでも出るなれば二上りと本調子と□ですから自然二の絃の高さと判らないと何調子か定める事は出来ませんが此場合チとなるのですから考へる余地もありません。

問題二六八　二尺管で低二上り調子とした三絃の二の絃の十番目のツボと六寸管で三下りとした三絃の三の絃の七番目のツボとは何れが幾律低きや（師二二）

答　先づ二尺管の方から解いて見ませう、低二上りは ハ レ ハ ですから二の絃と云へばレに当る訳です、二尺管のレは勝絶律です、勝絶から十律昇れば二の絃の十番目のツボが判るのであります、即ち断金律となります。此場合注意すべきは、勝絶が二尺管のレであつたのですから乙音であり、断金はこの乙音から十律も昇つたのですから甲音である事です。次に三下りと云ふのは □レ ハ ですから三の絃と云へばベに当る訳です、六寸管のベは壱越に当ります、然し単に壱越と云つても甲の壱越か乙の壱越かを調べておかなければいけません、六寸管のベと云へばハ寸管の甲の□に当ります、故に甲の壱越で

あります。此七番目のツボと云へば壱越から七律昇れば出ます、即ち甲の黄鐘となります。先きに出した音は甲の断金、今の音は甲の黄鐘となりますから、答は二尺管の方が六律低いと云ふ事となります。

問題二六九　或三絃（一下り調子）の一の絃の五番目のツボは断金律なり、低二上り調子とせば、其三の絃に於て六寸管のレは何れのツボなりや（師二二）

答　一下り調子は ハ レ ロ であります、低二上り調子は ハ レ ハ です、一下り調子から低二上り調子へ轉じようとする時は単に三の絃を二律下げれば宜しいのであります。

扨て一の絃の五番目のツボが断金律だと云ふのですから断金から五律下げれば或三絃（一下り調子）の一の絃の高さが出ます、即ち鳧鐘となります、之れを低二上り調子とすれば一の絃は矢張り鳧鐘であります、と同時に三の絃と鳧鐘であります。次に六寸管のレは何律が見つければ分りません、六寸管の□は平調ですからレは五律上つた黄鐘である事が判ります、故に鳧鐘から黄鐘へ幾律あるか数へて見れば答が出ます、答は十一番目のツボとなります、黄鐘から鳧鐘へ昇つても答とは分りません。

之れで一先づ樂理の章は終りとします。近来問題の数が少け分くなる傾向ですから一題たりとも忽せにしては分りません。下巻では応用問題を沢山出して諸君の実力の養成に務めるや筆ですから中、下と全部讀まれたならば、樂理計算は完璧なき迄に精通せられる事でせう。然し師匠試験中の計算問題丈けならば最早や諸君にハツキリ解き方が判つた事と信じます。

第二章　唱譜之部

第一節　小間柏子

唱譜は師匠たるものゝ是非必要なものたる事はよく御存知の事でせう。大体現在の都山流教授法としては模範吹奏、連奏、小間柏子の唱譜、此の三つの方法に依つて行はれてゐるのであります。故に試験に於ても実科中に於ける重大なる課目となつてゐます。失づ試験場へは扇子と自分の楽譜全部とを持つて一人宛入場せしめられます―此の扇子で拍子を取る事は随分昔からの習慣で扇柏子等と云ふ言葉がある位です―すると試験委員から「何々の曲」と指定されますから自分の楽譜を手早く取り出して下さい。音譜を取り出すのに時間が掛る様ではいけません、どの種類の曲はどの辺と云ふ事を調べた上持参すべきであります。例へば初傳、中傳、奥傳、其中で又生田山田新曲本曲、或ひは三絃曲等の曲と云つた風に分けて、どの曲はどの辺にあると記憶してゐなければなりません。尤も近来は試験第一日目に試験曲は何々と発表せられる事もありますから、其時は指定曲のみ持参すれば宜しい事になります。或ひは楽譜に依らずして即席に、先方に唱譜用に作曲せられたものを直ちに課せられる事もあります、そんな時は自分の楽譜は

不必要となる訳であります。

次に受験者は愈々委員達の面前で唱譜をせなければなりません。大抵は椅子にかけてやらされます、即ち扇子で膝を叩き乍ら譜を唱へて行くのです。何分一人で委員方を前において唱譜するのですから中々気の張る試験であります。姿勢正しく、気を落ちつけて、朗らかに唱へなければいけません。

今ニ三気付いた事を御注意申し上げます。

一、試験委員の方に悪感を抱かしてはなりません。どこ迄も敬意を表

試験委員を恐れてはいけませんが、見下だす様な態度はいけません。そして自分の態度はテキパキと活潑にして、入場と同時に丁寧に御辞儀をして下さい。

やる方が宜しい。

二、声は大きく

声は大きい程結果がよろしい。大きい声と云ふのは高い声を指すのではありません、ハツキリと元気にやつて下さい。間違つた時は一拍子位前から云ひなほす方が宜しいのですが、やり直しても到底出来ないやうならば、何回でもやりなほすより、違つた次からやつて行つた方が賢い方法です。

三、扇子は高く、力を込めて

扇子は自分の眼の高さ位迄上げて、膝をカーン一杯叩いた方が力が入つて、熱心さが委員に認められる事が多い。叩いた音が大きい程、唱へる声と交錯して少し位はゴマかせる

のです。

四、姿勢、態度に注意する事

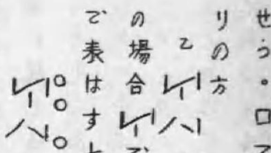
生意気な態度、動作は禁物です。姿勢は吹奏と同じく非常に大切です。

一　小間拍子とは如何なるものか

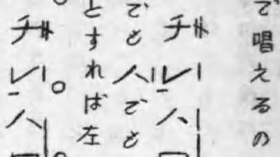
小間拍子とは四分音符一個を一拍子として計算する仕方であつて一番普通に使用せられる拍子の取り方であります。故に之れを普通拍子と云ひ又両垂(アヤダレ)拍子とも云ひます。何故かと云ふと一拍子毎に膝を一つ宛打つからです。之れに対して大間(オヨマ)拍子と云ふのがあります、夫れは二分音符一個を一拍子とする事で、小間拍子二つに対して膝を一回打つ、即ち二拍子に一回打つと云ふ仕方であります。尤も二分音符に一回取るのを大間拍子、四分音符に一回打つのを中間拍子、八分音符に一回打つのを小間拍子とするのがあります、当流では四分音符に一回打つのを小間拍子としてありますから、間違はぬ様にして下さい。「解説」第七頁の拍子符説明と之れに依つてある様です、諸君と先生から尺八を教はる時は、この小間拍子で唱譜して貰つて居られる事と信じます。

扨て唱譜は吹奏と總べてが同じでなければなりません、速度、拍子、正しき音譜、夫れに表情と凡ゆる吹奏に具備する條件がなければ教へると云ふ價値がありません、そし

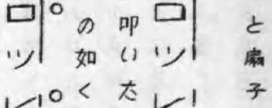
て吹奏と異る処は尺八を吹く代りに口で唱へ、其上扇子で拍子を打つと云ふ点であります。口で唱えるのと扇子で叩く音とが相離れる時があります、例へば千鳥の曲後歌終りの方



の場合レでとハでと叩いたら拍子はメチヤ〳〵に成つて了ひます、今拍子の叩く音を○で表はすとすれば左の如くになります



どつと手近な例は



右の半拍子の休止符で膝を叩かねばなりません。音譜の処で叩けば全然誤りであります斯様に譜を読むのと拍子を叩くのとが複雑に、どつれ合つても間違はさずに唱譜が出来なければだめですから平素からよく練習を要する訳です。

イ　拍子の説明

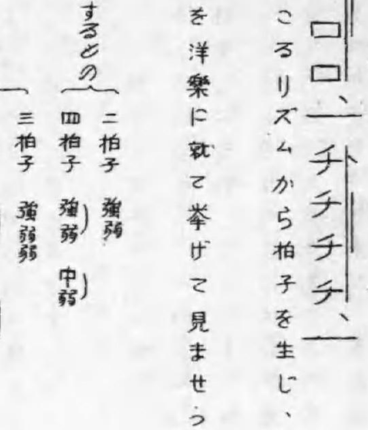
拍子は一体どんなものか説明しておきませう。拍子とは「或る一定の間に繰り返へされる時間」を指すのであります。どつと簡単に云へば「等速的時間の進行」であります私達は或を、一定の間隔を保つて継續的に弾奏する時は、其処に自然的に一種の強弱が

表はれ・週期的に規則正しく繰り返されるのを発見するのであります。これが即ち音の強弱に関するリズムと云ふものです。

私達の音樂の初まりは何であつたかと云ひますと、別に鳥の鳴声とか云ふ奇麗な音を模倣すると云ふ事では無かつたのです。足拍子をとつて踊るとか、手を動かすとか、或は桶を叩くとかしてこのリズムを味つてゐたのであります、だから旋律等は殆ど無かつたのに違ひありません。これは拍子と云ふものは感情の興奮から来るのであるからです。旋律等と云ふものは感情許りでなく理智的分子が入るもので、理智の発達しない太古には拍子許りの音樂が現はれるのは当然の理であります。一般に音樂に於けるリズムと云ふのは音を連らねる時に長さと強弱に従つて或る範囲に分つ事でありまして、リズムの基礎をなすものは拍子であります。もつと簡単に云へばリズムは「或る一定の時間に繰り返へされる強弱」であります。ピューローと云ふ人は「はじめにリズムありきと申しました。之れは人類が生れて間もなく、音樂も言葉もなかつた時代にでも先づリズムがあつたと云ふ意味なのです。例へば歩く場合には右足と左足とが交互に規せずして一定の長さの音の反覆となります。今この音を聞くと右足の方が左足よりも強い為に強弱二様の音の反覆となるのであります。又時計の音のカッチカチと云ふのも機械であるから何も強弱が交互にくる訳ではありませんが、私達が主観的に強弱をつけてリズムを作るのであります。即ち最初の聞える音は注意力が集注せられる為に強音と感じ、次に聞える音は緊張が弛む為に弱音と感じ、然くて夫れが交互に繰り返へされる

からであります。其他軍隊の行進、さては虫の鳴き声、海の音、大きく云へば天地、晝夜、陰陽、總べて此のリズムに支配されてゐると云ふ事です。リズムは又、交互的に起る音の長短に依つて現はれます。此場合に於ても同じく週期的に繰返されます。これが音の長短に関するリズムであります。

例



強弱に依つておこるリズムから拍子を生じ、長短に依つておこるリズムからリズムの形式が生じます。

今拍子の種類を洋樂に就て挙げて見ませう・但し中とあるのは強よりも少し弱い中強の略です。

- 拍子
  - 二拍子を基とするもの
    - 二拍子　強弱
    - 四拍子　強弱　中弱
    - 三拍子　強弱弱
  - 三拍子を基とするもの
    - 六拍子　強弱弱　中弱弱
    - 九拍子　強弱弱　中弱弱　中弱弱
  - 右二つの混合せるもの
    - 五拍子　強弱　中弱弱
    - 七拍子　強弱弱　中弱　中弱

以上の中ニ拍子、四拍子等は平等拍子であつて強弱二つの音が交互に規則正しく繰り返へされる爲めに、平静を感じが起きます、之れに対して不平等な三拍子は強音一に対して弱音が二個と續きますから次に出る強音は非常に強く感じ軽快な感じを与へます、又五拍子七拍子と云ふのは強音が一度の間を隔てゝ出るので不快な感じを与へます、

扨て私達の主としてやる地唄の拍子はどうかと云ふに一言にして盡せば表、裏の原始的二拍子を使用してゐるものに過ぎません、尤も日本の古い音樂（雅樂）に就て申しますと

二拍子の種類　二拍子、四拍子、八拍子

二拍子と四拍子との組合せ――只拍子（只四拍子、只八拍子）

普通の拍子を殊更らに変形したものの――花多羅拍子

等がありますが三拍子と思はれるのは全然見当らないのであります。要するに日本音樂は二拍子を基礎としたものゝみであつたのですから、地唄に於ても二拍子のみであります、尤も三味線は二拍子形式であり、等曲は四拍子形式であると云ふ説がありますけれ共斷言は出来兼ねるのであります。兎に角表、裏の二拍子と思へば間違ひありません。

そして中には不正な箇処も往々見受けられます。これは地唄なるものは殊に盲人に依つて培かはれた關係上完全なる樂譜もなく、多くは口字しに傳はつた關係上誤まつて傳へられたと想像するに難くないのであります。

斯様に申しますと地唄なるものは拍子に至つては洋樂に比して全く零となりますが近

時宮城道雄氏町田嘉章氏等の手に依つて凡ゆる拍子が使用される事となりました。

尚任一つ地唄の特長とする点を申し上げませう、夫れは樂器の拍子と唄の拍子とが全然一致してゐない事です、例へば私達が樂譜を披いて見ますとよく只八の譜の末尾上の音譜のない処に唄の文字が書いてあるのを見受けます、之れは明らかに唄が先きへ出ると云ふ事を意味するのです、唄としても樂器と同じ様な旋律を辿つてゐるには違ひないが、樂器の出と同じてなく、一歩お先きにその旋律を以つて出て行くわけですから、其処に唄と樂器は一種の和声的となつて聞えて非常に面白く感ぜられるのであります。これは後章に述べる洋樂のカノンに似てゐるものでありまして、夫れが後拍子完達ふかと云ふ事は仲々斷言出来ない事ですが、普通のものは一拍子位、緩つくりした処では二拍子位は違ふかと思ひます、斯うした中に今只八が入つたら、何れにつけは宜しいかと云ふ事が問題になります。即ち唄につくか中間を進んで大体箏三絃の手に合せ下ち唄の旋律をも採り、時には箏等と離れて独立の拍子を辿る事とあります、ですから只八でも奏する拍子は箏三絃の拍子と時には符合せぬ場合がある事は止むを得ません、そこに複雑な独特の拍子が出来上がる訳であります

扨て話が大分横道へ入りましたが、もう一つ説明しておき度い事は、間拍子と云ふ言葉です。間と云ふのは拍子と拍子との間の時間を指すので、間が短かければ速い拍子であり間が長ければ遅い拍子であります、然し其間は必らず遅い為ら遅い為りに一定の間隔、時間がなければなりません。それが時々間が延びたり縮んだりしては所謂「間が悪

いしと申すのです、故に扇子で拍子を取るとしても決して速くなったり遅くなったりしてはいけません、叩く間が一定の時間をおいて等速でなければなりません。尚ほ以上長々と述べましたがいろんな拍子の種類と、今我らの小間拍子の取り方で取るものとすれば強弱と表はせず、二拍子と四拍子と同一の取り方となって了ふのであります。此点は洋樂では判然と区別してあるのであります。

例題二七〇　初心者に判る様に拍子に就て講義せよ（注七・三）

答　拍子とは等速に進行して行く時間であります、時計の秒を刻んで進行して行く様に、或は人間の呼吸の様に規則正しいものです。で扇子で膝を叩いて説明すれば宜しいでせう。

ロ　唱譜の準備

唱譜の準備と申しますのは外でもありませんが、尺八を吹奏する代りにロで唱えなければなりません。唱えるのは尺八がある訳ではなし、自然と一定の高さで唱え様と勝手であります、勝手だからと申して、試験場へ入る迄なり直ぐ、浮び出た高さを□として唱えると云ふのは実に無謀な仕方であります。即ち何と八寸管の□の高さで□を唱える必要もありませんが、要は自分で一番唱え易い高さの声音で唱譜すれば宜しいのです。故に平素から自分はどれ丈けの高さを□の音として唱譜すれば一番宜しいかと云ふ事を準備しておかなければいけません。諸君の中には、何とせん本難かしい事を調べておく必要が

ない、自然に出た音の高さを□にすれば好いと思はれるかも知れませんが、音の高さの不同は最も適切に成績の良否に影響して来るからであります。

先づ声の調子を整えると云ふ事に就て説明致しませう。

尺八を吹奏する時は竹調べと云つて一応調子を調べます。唱譜では夫れより一層厳切に必要であります。何故ならば、どれ丈けの高さの音を□としてシ機は本いと云へば自分の声域に最も適した音の高さを選ぶ事は成績に非常に関係して来るのです。例へば別合ひに高い声を甲の□として愈々唱譜したとすると更らに高い甲のヒや四はきつと高過きて裏声で出さなければ出ないでせう。そうする中低い音が出たり又高い音が出たりする中にはきつと□がツより高い声に本つて了つたり、ツより↙が低く本つて了つたりしてしまふものです。唱譜はどんな高さで唱えても良いとは云ふものの低い声なら低い声本りでツは□より高く、レはツより高く本ければ本りません。ロが今申す様にあまり高い声で唱譜したすと甲のヒや四が出ない本つて其の為めに俗に云ふ「吟変り」をやった時には各音の高さが混乱して思はず調子外づれに本ってゐる事が多いのです。夫れを無い様にするには

自分の声域が一体尺八音譜の甲乙全部の音域を唱える事が出来るかどうか試して下さい。夫れには先づ一尺八寸管を吹いて貰って夫れに就てロから甲四迄其通りの高さが出るかどうかやって見て下さい、私は甲乙音全部を八寸管の実際の音の高さより全体に一音階低くして唱える事が出来ます。従って私の声は低音（バスン）であります。

部に別出来る事を喜こんで居ります。一般にレから甲ハ位は云へる様であります、夫れ以上は不断の練習に依つてならず云へる様になります。私は最初はレを漸く云へる位でしたが、夫れが練習に依つて今では[illegible]迄、調子の好い時は[illegible]さへ云へる時があります。又[illegible]や[illegible]は仲々出なかつたものですが今では

スラ〳〵に其高さ迄出す事が出来ます。

扨てハ十管のロから[illegible]迄の音域が出ないとしたら六十管より或は二尺管より[illegible]から[illegible]迄出るかどうか試みて下さい。とにかくロの高さは何十管のロであつても構いませんが、尺八の有する音の階段丈けの音域が出て[illegible]さへ吳れたらそれに越した事はありません

若し夫れ丈けの音域の声音が出ない人はハ十管のレからチ迄位は必ず出る筈です、之こで全部を其の音域内で唱える様に練習する事です。早い話が、甲音の出にくい音は乙音にならして唱える事になるのです、然し斯くする時は[illegible]から甲[illegible]迄を先づ調べて[illegible]を云ひ易い高さにした方が宜しいと思ひます。チ（八十管で）位は一般に云い易い高さですから

チの高さを[illegible]として唱えた方が宜しいでせう。そうすると甲のレ辺りから、上の甲音は總べて声が出ない高さになりますから、それ以上は乙音で唱えておく、斯うすれば自分の音域は[illegible]から[illegible]迄とまりますから、これならどんな人でも云へぬ事はありますまい。そしていつも高い音は甲レ以上は乙音で云ふ事に自分で定めてしまつた方が宜しいのです。一般に甲音であるべき所を直に乙音にする時は、音の高さが狂ふ事が多いのです。一度、音の高さを狂はせると基礎がぐらつく為めに、どうしても成績が面白くないのです。其

迄平素からの練習を要します。一番初めに唱ふる[illegible]と、最後に終る時の[illegible]との高さが違ふ様では上手な唱譜家とは申されません、斯様に申しますと、唱譜なるものは声樂としての條件を具備してゐなければなりませんが、平素の練習でさへ、始めと終りの音の高さが違つてゐる様では実際の試驗が思ひやられますから、よく此の点に御注意あらむ事を希望致します。

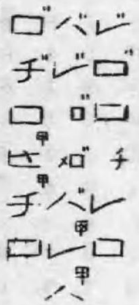
扨て本題に帰つて、調子調べは如何様にするかと云へば、尺八の竹調べと同じ事にやれば宜しいのです。これは吹奏の部でお話し申しますが、今例を申しますれば

本調子物の時は[illegible]

等が出るかどうか、声を出して唱えて見て下さい。乙の[illegible]を云つてから甲の[illegible]甲の[illegible]迄出る人は極く少ないのですから、甲の[illegible]位から以上の高い音は乙音に為ほして唱えるものとすれば乙の[illegible]は少々高い声でも宜しいでせう。丈と高い声は裏声へと云つても乙音ではありません、暴にかゝる声で細い声の事〳〵で唱える事にしても宜しいが皆裏声にならつては、どうも面白くありません、あまりお進めしたくありません。尚ほ調子を調べる時に[illegible]と云つて見て、之れはちと迄く過ぎる、もう少し高い[illegible]を唱え様とする時は漫然と[illegible]と勝手に高くしたり、低くしたり、いろ〳〵の高さで[illegible]を唱えるよりも[illegible]と称へ、高くしたい時は其の[illegible]の高さで[illegible]と称へて見る。未だ高くしたい時は其の[illegible]を基本として[illegible]ツと称へ、其ツの高さを更らに[illegible]として唱えて見ると云ふやり方が宜しいと思ひます。要するに唱譜の時の調子調べは自分の今唱えむとする音

での最と低い音譜から最高音譜迄ん〻唱えて見る事です。夫れから正式に唱譜を始めて下さい。今一度繰り返へして申せば、甲のチより高い声の出ない人は左の通りに調子を調べる方が宜しい

本調子の曲



低い上りの曲

然し右は一音宛唱えて見る事になりますが勿論本調子ならば

とやつて見てよいのです。竹調べと同じ事と思へば宜しいのです。然し注意せなければならぬ事は前角調子を調べておき乍ら、少しやり出すと直ぐ調子が狂つたり、甚だしいのになると調子を調べたにと不拘、実際に唱譜をやつた時に、已に音の高さが違つてゐる様では、調子調べと無意義になつて了ひますから、平素からよく練習して、日今はどれ丈けの高さで唱譜すれば一番適当であるか大体憶えてゐなければなりません。大体平素人と話をする時には、自分の声音はどれ丈けの高さ位か、意識しないとと発まつてゐるものです。この地声は自分に取つて一番自然に出る高さですから、この高さをレ位とすれば一番好い様に思はれます。とにかく、どれ丈けの高さが自分に適当であるかよく確かめて、其の高さでのみ唱譜を練習するクセをつける事が秘訣とでも申しておきます

既に一人でも門人のある方は丁度門人から唱譜の稽古をさして貰つてゐる様なものですから ドシ〳〵やつてゐる中には要領を判ると云ふものです。が未だ誰れにも教へない方は、一日も早く友人なりを勧めて実際に唱譜をやつて見て下さい。実地に回を重ねる事は最も良き練習方法であります。

二　唱譜の練習

1　練習の仕方

最初に申しました通り唱譜は元気よくやる事が大切です。扇子にしても目の上即ち自分の肩以上にあげて縁をカ一杯叩いた方が宜しく又声量も幾太な方が実が入つて結果が好いのであります。優しい声で弱く膝を遠慮しながら叩いてゐる様では下手な唱譜が尚更ら下手に聴えませんか、精神を込めてやるとのにはなすカが入り、カが入れば試験委員も其努力を買つて呉れるでせう。特に注意申したい事は最初はうまく律に合つた声音が出てゐてもニ三十拍子もやるとそろ〳〵音の高さがグラついて変な吟変り、声変りをして高く成り過ぎて云へなくなつたり、低く成り過ぎてこの口なんかくちの中で唱えると云ふ事になりますと、後で試験委員の笑ひ草になりますから、平素の練習をやる時は自分の唱譜する声音の高さを定めて常に其高さで練習を積んで下さい。

扨て唱譜は何等吹奏と変りません。唱譜と云へども音律に注意して各音譜の高さを正

確に唱歌の音譜で、ソ、ハ、ニ、ホ、ヘ、ト、チ、リ、ヌ、ル、ヲ、ワ、カ、ヨ、タ、レ、ソ、ツ、ネ、ナ、ラ、ム、ウ、ヰ、ノ、オ、ク、ヤ、マ、ケ、フ、コ、エ、テ、ア、サ、キ、ユ、メ、ミ、シ、ヱ、ヒ、モ、セ、ス、の四十八音階の名称は、ハ、ニ、ホ、ヘ、ト、チ、リ、ヌ、ル、ヲ、ワ、カ、ヨ、タ、レ、ソ、ツ、ネ、ナ、ラ、ム、ウ、ヰ、ノ、オ、ク、ヤ、マ、ケ、フ、コ、エ、テ、ア、サ、キ、ユ、メ、ミ、シ、ヱ、ヒ、モ、セ、スの順序に配列されてゐる事は、既に一般に知られてゐる事と思ひます。

音階の音数を定める時、最初に基本音を定めなければならぬ事は、既に一般に知られてゐる事と思ひます。

音階の音数を定める時、最初に基本音を定めなければならぬ事は、既に一般に知られてゐる事と思ひます。

例へば、ハ、ニ、ホ、ヘ、ト、チ、リ、ヌ、ル、ヲ、ワ、カ、ヨ、タ、レ、ソ、ツ、ネ、ナ、ラ、ム、ウ、ヰ、ノ、オ、ク、ヤ、マ、ケ、フ、コ、エ、テ、ア、サ、キ、ユ、メ、ミ、シ、ヱ、ヒ、モ、セ、スの順序に配列されてゐる事は、既に一般に知られてゐる事と思ひます。

次に拍子打ちの方法について注意致します。

拍子打ちの方法について注意致します。

譜文は拍子□□□

拍子とか云ふ、其長さを明記してある場合は此の限りにありません。尚ほ実際の試験では一頁から一頁半位の長さ丈け試験されるのですから、曲の途中からでもやらされる事があります。そんな時はよく曲を調べて何調子かと云ふ事を見た上唱譜して下さい、曲に依つては途中轉調してゐる事がよくあるのです。尚ほ調子に依つては同じ壬の全音でもカリの時と全音の時とがあります。□でもカリと全音との区別が繁譜に略してありますから、それでちつとも律は違はなかつたと思つても、そうしたメリ、カリを省略してある場合をも考へなければなりません。

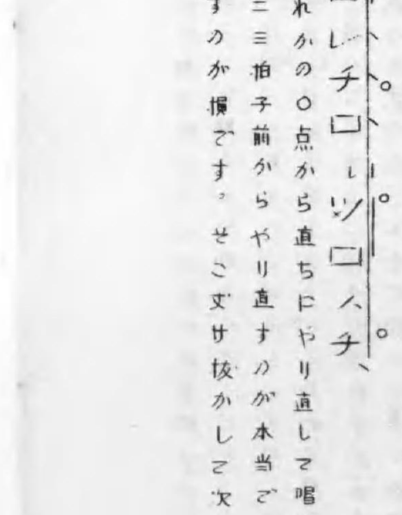
次に拍子を取る時は御承知の通り扇子で叩く音に不同があつてはなりません、常に一定の速度で正確に間違ひなく叩く事で慢雑な箇処にくると声に連れられて叩くのを忘れたり遅く叩いたりよくするものです。然し平易な箇処は間違はそうと思つても間違はないものです。この難かしい処を間違はさずに叩く秘訣を申しましょう。

勿論秘訣と申しましても、どんな難かしい拍子が出ても自分で間違はさずに叩く丈けの実力がつかなければ何にもなりません。之れは只一回でも多く練習して難かしい拍子を何百回となく叩いてをれば自然に要領を判つて来て出来る様になるものです。と云つた処で只無暗に手あたり次第の樂譜を使いてやつて居た処で練習には成りません。即ち上手な練習法をやつて最少の時間を以て最大の効果を得る事が秘訣であります。

先づ上の曲でも「拍子が取り悪い」と思ふ処は、そう沢山あるものではありませんまあ定まつてゐる様なものです。拾ひ拍子、裏拍子、拍子がズレる処、速度が急に変は

る、即ち「拍子打ち変へ」こんなものです。其他は誰でも叩けるものです。私の云ひ度いのは此点です。一曲の中わづか二三行取りにくい処があるのに全曲拍子を打つて見る と云ふ様なやり方は、時間と労力のみを費やして何程の効果も得られません。故に公刊音譜全部は一度は打つて見なければなりませんが、其時自分で間違つた行数丈けは朱線でも引いておく事です。其次からはいつも其朱線だけを練習するのです。そして他の処は全然練習しません。それで必ず腕が上がるでせう。尤も本書附録にはどの曲を練習したら好いか記すつもりですから、其樂譜丈けを熱心に練習せられても宜しい。

次に此の難かしい箇処へは丁度扇子で叩く処へ○点をつけておけば○点は扇子の叩く処ですから○点に頼つてドン〳〵叩けます。其うちに平易な箇処へ移れば どう占めたものです。前にも申しました通り唱譜は自分の音譜でやらされるのです、他人の譜でやるのではありませんから○点で本くとも横線を引いても宜しい。其他自分の勝手な記号をつけて打てる様に練習すべきです。但し○点はよく調査した上で正確な位置に記す事は勿論です。



斯うしておけば譜へ間違つても直ぐどれかの○点から直ちにやり直して唱譜を續ける事が出来ます。間違つて云ひ本ほす時は二三拍子前からやり直すのが本当です。然し何遍くり返へしても出来ぬ様では繰り返へすのが損です。そこ丈け抜かして次の処から始めた方が得策です。

尚ほ注意したいのは曲の途中から拍子を取る時には、まれには裏拍子から出さなければならない時があります。それを表から取つては難かしい許りでなく已に一つの間違ひになります。例へば「改訂茶音頭の手事から拍子に始まつてゐます。即ち レ ツ ロ ツ ロ の レ は扇子を取れ」と命ぜられた時には、それは裏拍子に始まつてゐます。それは手事と其前の歌とが續いてゐて、一拍子が分れたのでありまして、大低の場合は其前は半拍子の休止符がありますから、其点で拍子が裏か表か見分けたら宜しいでせう。又改訂越後獅子の四頁終りの行当りから全部裏になつて、半拍子合ひません。其他今気付いたものでは、冬の曲三頁最後、改訂茶音頭三頁最後、千代の鶯八頁手事の終り等、半拍子丈け合はぬ様になりますが、之等は当然曲其物の間違ひであります。それを直ほすのは容易でありますが、宗家は之れに対して「昔からその通り傳えられたものを、例へ拍子に不正があつた処で、不正としても、昔下らド傳えたら夫れでよいではないか」と申されます。作曲者の意志を尊重する為めに、又原形をくづさぬ点に於て、私も大賛成であります。こんな処はその違つた処で直ちに直ほして打つて行けば宜しいとの事ですから、其つどりで申つて下さい。序でだから申しますが大間拍子で行ける時は改訂玉川の後歌と一拍子合ひません。それからも改訂譜と旧譜と拍子が合はぬ処があります。あれは旧譜は大阪で採譜せられたものであり、改訂譜は京都で採譜せられたのであります。此点に留意せられて箏曲家の統一と云ふ事を計つた違ふのだそうでして、箏曲は楽譜を見ないと云ふ弊害から、京都、大阪、東京と各地で多少違ふ事は甚だ迷惑であります。

人もありましたが未だ実現の運びに至りません。私々都山流に於てこの統一に対して預つて力がある事は事実でありまして将来は必ずや統一されるものと思ひます。どう一つ注意したい事は、斯うした曲夫れ自身が拍子が合はぬ処は近来山田物に於て音譜の左側へ（線を引いて、この（線内は一拍子で打つ事を記してありますから、実際の吹奏は右側の拍子符号に依る事は勿論ですが、拍子を打つ時は（を一拍子として打てゐれば差りません。自然其処丈けは等速に打てゐる事に差ります。即ち夫れ全体に対して一回打つたなりでノビル勘定に差りますから左様心得て下さい。尤も三拍子の譜で右側に）線を附したのがありますがあれは三拍子宛横線に切る場合に拍子の ロ が境目へ嵌まつて ロ|ロ と一拍子宛に分れるので、夫れを四分音符二個では差ない、二分音符一個だと示す連續記号ですから、夫れと混同せぬ様にして下さい。拍子の裏表とは何かと云ふと、表拍子は大間拍子で打つ場合扇子で膝を叩く時が表拍子で、裏とは扇子を上にあげてゐる時であります。又小間拍子で一二三四と打つ打つた時に、二と四に打つのが裏拍子であり、一と三が表拍子であります。然し小間拍子の時に レ、ツ、ト、ロ、と譜があつた時この半拍子の休止符の箇処をも便宜上裏とも称えてゐます。一般に複雑に差る程裏拍子は難かしく、レ ツ ロ ハ ロ 等と云ふ時は拍子と唱譜とが合致し差りのので思はず拍子が乱れると云ふ事がよくありますから特に御注意ありたし。

例題二七一　拍子には表拍子と裏拍子とがあります。今左図の如く右足を基点として歩くと

答　拍子の表裏を説明せよ

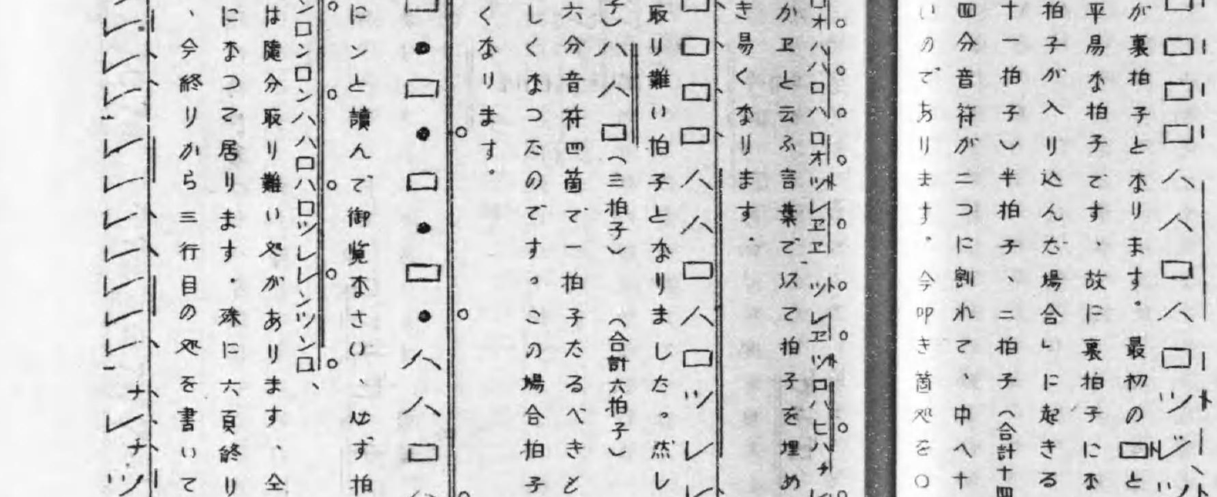
のとしませう

此の場合最初の右足から次の右足迄が一拍子となります。で左足は一拍子の真中ですから半拍子の位置にあります。で左足から左足迄と矢張り一拍子あるのです。故に右足許り勘定して行くのを表拍子と云ひ、左足の方を裏拍子と申します。出発点は表からでも裏からでも同じ事ですが右足から出たとすると右足の方が表拍子となるだけです。

ロ　拍子の取り方

唱譜で拍子が取りにくいと云ふのは裏拍子になつた場合です、之れを捨の拍子とも申します。

A



右は穏べてが裏拍子となります。最初のロと最後の升を取り去つて讀んで御覧なさい、何でも変い平易な拍子です、故に裏拍子になると云ふのは「一箇の拍子が分割されて、其中へ他の拍子が入り込んだ場合」に起きる事になります。右の場合は

半拍子（十一拍子）半拍子、二拍子（合計十四拍子）

こんな風に四分音符が二つに割れて、中へ十一拍子どの他の音符が入つてゐるから拍子が取りにくいのであります。今叩き箇所をOで表はすとしませう。

斯様にオとかエと云ふ言葉で区切て拍子を埋めたならば穏べてが半拍子の慣となりますから拍子と叩き易くなります。

B

右は非常に取り難い拍子となりました。然レ仔細に分解して見ますと

ロ（二拍子）ハ八ロ（三拍子）　（合計六拍子）

であつて十六分音符四箇で一拍子たるべきものが途中に二拍子丈け他の音符が入り込んだ爲めに難しくなつたのです。この場合拍子を書きかへて半拍子を十六分音符二個とすると判り易くなります。

●の代りにンと讀んで御覧なさい、必ず拍子が取れます。

ロンロンロンロンハハロハロツレレンツンロ、

五段砧等には随分取り難い処があります、全曲四頁の終りから五頁の始めにかけて、ずつと裏拍子になつて居ります・殊に六頁終りから四行目「少除」の次から甚だ取り難いのであります、今終りから三行目の処を書いて見ませう。

を書き換へて見ますと

ロハロツレレ㊁レ㊁_レレレ㊁レレレ㊁_チ㊁レ㊁チ㊁ツレレツロ_

とすれば拍子が取れます。

斯様に唱譜の時は裏に当る音譜はンの字をつけて唱えると宜しいが又、一音宛切つて唱えても良いのです、但し續けて唱えるのはどうしても間違ひ易いからいけません。

次の場合

改訂越後獅子三頁三行目 甲 ロ_レチ比ハチレチ比ハチレッロ_ の時チ比ハのッは尺八で

は切つて吹奏すべきものであります、唱譜に於ても切つて唱えた方が宜しいのです。之れを分解しますと

ロレ（一拍子半）チレチ（二拍子）

とあり、最初のロと括弧内の半拍子とで一拍子となり、レはチレチとで一拍子となるのです。故にレチ比ハチで一巴切り、

レチ比ハチレッロで一巴切りとなる訳けで、其境目はチとレとの間であります、此境目は拍子の境目で、こゝで息を切つたり休んだりする処ではありませんが、此の理を辨へすして、

チレチ比ハチレッロの如くに唱え様としては到底うまく行くものではありません。

ですから最初のチ丈けは別つとしてレチ比ハチレッと續くものとしてやると容易く出来るのです、で吹奏の時には何分早い拍子の処ですから、チの処で一寸休む事も出来ます

まい、只心の中で切つて次のレで力を入れろ（こゝは強声部即ち表拍子ですから）とつまく吹ける様になるのであります。この辺、上キド文章で表はせませんが「心の中で切るゝ」と云ふ事の意味がお判りになれば、其人は立派に吹きこなせる人に違ひありません

ハ　練習問題

例題二七二　小間拍子の裏拍子になる例（唱譜して見て下さい）

中唐 甲 レ_ツ_ロ_ハ_ハ_ロ_ロ_レ_チ_レ_ッ_ロ_ハ_ヒ_ハ_チ_レ_ツ_レ_チ_ハ_ロ_ヒ_レ_ッ_ロ、

レレツレッロハロッレチハヒレレレレレレツレチレッロ_ハヒハロ_

乙 レ_ツ_レ_チ_レ_チ_ハ_ロ、レ_ツ_ロ_ハ_ヒ_ハ_チ_レ_ツ_レ_チ_チ_ハ_チ_レ_ツ_レ_レ_レ_ツ_ロ_ツ_レ_ツ_レ

例題二七三 乙

中唐 レ_ツ_レ_チ_レ_ハ_ヒ_ハ_ロ_ッ_ロ_レ_チ_ハ_チ_レ_チ_ヒ_ハ_チ_レ_ッ_ロ_ハ_チ_レ_ツ_レ_チ_レ

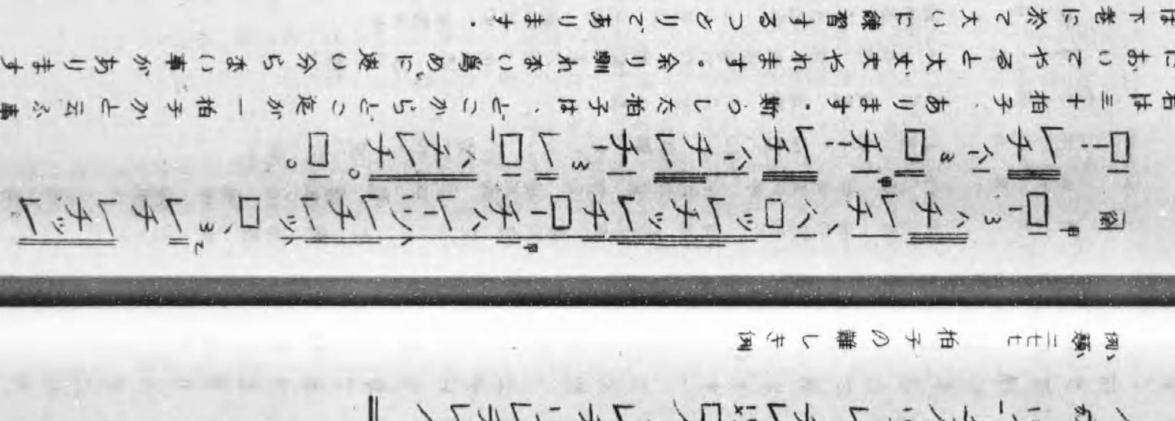
ハ_ロ_ッ_ロ_ハ_ロ_レ_チ_ヒ_ハ_レ_チ_レ_ッ_ロ_ハ_ロ_レ_ロ_ハ_チ_チ_レ_ツ_レ_ツ_ロ。

例題二七四 甲

中唐 ロ_ハ_チ_レ_ハ_ロ_ッ_レ_チ_ヒ_ハ_チ_レ_ツ_レ。ロ_レ_ロ_ハ_チ_レ_ツ_レ_チ_ハ_ロ_ッ_ロ_ハ

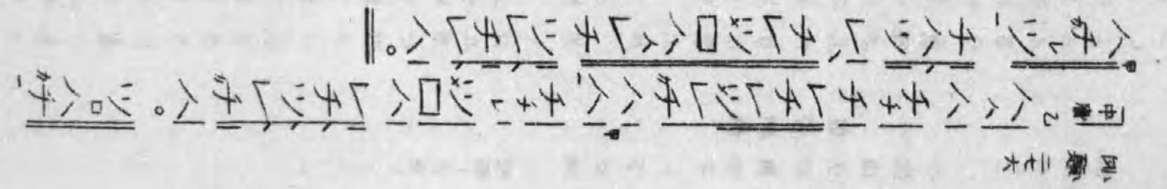
ロ。レ_チ_ハ_チ_レ_ヒ_ハ_チ_レ_ッ_ロ。

右の一節を十分研究致します。

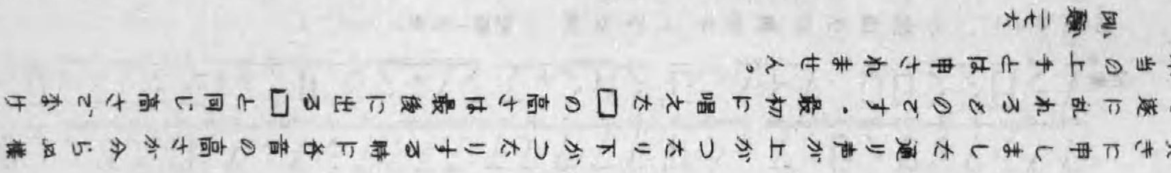


よく研究すること。

例、三七五　唱譜しにくい



例、三七五　柏子の譜

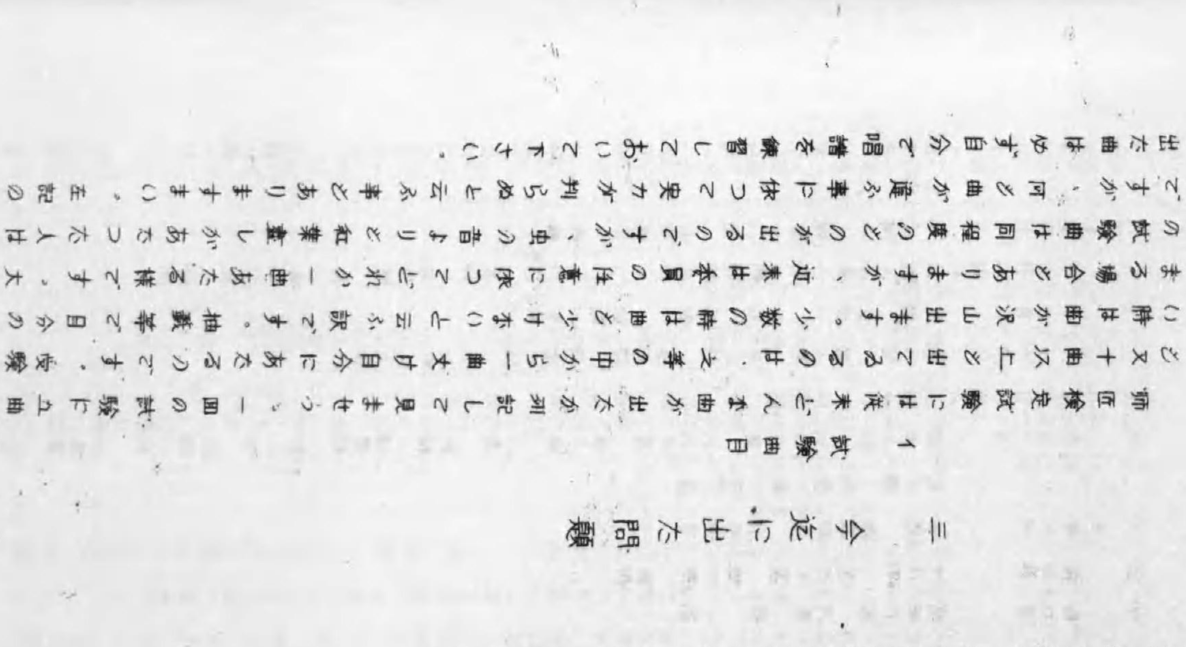


右は下巻にあります。十柏子は大いに練習致します。

三　今迄に出た問題

一　試験曲目

師匠は十曲検定試験に出た曲程度の曲を出来ます。



試験場は十曲検定試験に出た曲程度の曲を出来ます。

例、三七五　柏子の譜

大正六年十二月　紅葉盡（前歌）　滝盡（二上り）　竹生島（一貫終りから三作目）　名所土産（初め）　虫の音（後歌）
玉椿（前歌）
大正七年四月　越後獅子　楫枕　八島　有馬獅子　鉄輪
〃　年六月（此時は歌と手事と各一曲宛抽籤にて）　玉の台（うてな）　青柳　里の曉　舟の夢　打盤　楫枕
〃　年九月　玉椿（前歌）　八島（後歌）　鉄輪（中歌）
〃　年十二月　春の曙　磯の春　里の曉　西行櫻　四季の詠　七小町　浮舟
〃　八年六月（何れも前歌）　紅葉盡　まゝの川　若菜　玉川　竹生島
〃　年十二月　四季の詠　秋の言葉　名所土産　秋の曲　八島　鉄輪　神樂初　松の栄　由縁の月　紅葉盡　若菜　七草
〃　九年二月　松上鶴　凱歌の曲　笹の露
〃　年三月　玉椿　雜波獅子　有馬獅子
〃　七小町　夜々の星　春の曉　青柳
〃　年五月　嵯峨の春　滝盡　梓　八島
〃　年六月　銀世界　凱歌の曲　三の景色　高砂　新玉の曲　新雪月花
〃　年十二月　冬　長等の春　新猿道成寺　楫枕　末の契　舟の夢　玉川　櫻川
〃　十年六月　七草　滝盡　鉄輪　虫の音　八島
〃　年十一月　七草（初）　滝盡（初）　鉄輪（ちらし）　八島（後）　虫の音（後）
〃　年十二月　白の声　新猿道成寺　十代の嘗　郭公　地久節　近江八景　墨絵の月　菊水　常盤木　長等の春　けしの花
〃十一年六月　虫の音　新猿道成寺　楫枕　〃小町　夜の露　深夜の月　春の曙　椿盡　伏　夜々の星

〃十二年二月　御山獅子　八重衣
〃　年十二月　七小町　八重衣　御山獅子　早治巡り　十代の嘗　桂男　改訂磯十島　改訂茶音頭　つゝじ　磯の春
〃十三年九月　改訂夕顔　改訂茶音頭　改訂茶音頭　改訂十島　改訂十島　改訂春の曲　改訂磯十島　改訂楓の花
〃　年十二月　改訂越後獅子　改訂玉川　八重衣　御山獅子
〃十四年六月　那須野　四季の遊　春日詣　櫻狩　近江八景　江の島　春くらべ
〃　年十二月　芦カリ　袖香ろ　ゆき　八十代獅子　黒髪（こすの士　袖の露　菊の露　鶴の声　夕空
〃十五年六月　八重衣　若菜　十代の嘗　御山獅子　磯の春　早治巡り　七小町　桂男　新玉かつら　春の曙
改訂越後獅子（手事）　改訂玉川（手事）　改訂十島（手事）　改訂夕顔（手事）
改訂磯十島（手事中程）　五段砧（初段）　八重衣（中歌）　七小町（後歌）　笹の露（後歌）
十代の嘗（後手事）
〃　年十月　磯十島　四季の詠　今小町
〃　年十二月　秋の調　せきれい　湖上の月一部三段　湖上の月二部二段　春の訪れ　船唄　牧蕎の野　春の夜　部踊
海辺の夕映
昭和二年六月　和風樂一部　和風樂二部　若水　清水樂　秋の調　春の訪れ　せきれい　湖上の月
〃　年十二月　臨時唱譜に付き次に掲載す

口　臨時唱譜

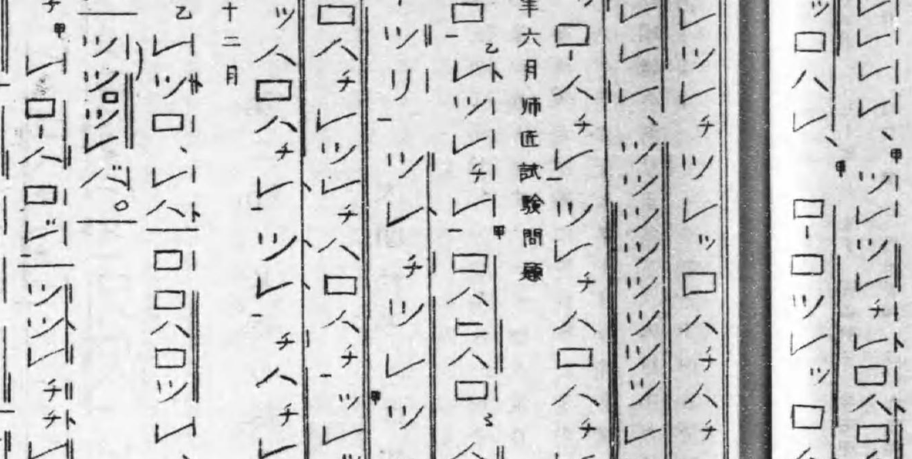
臨時唱譜と云ふのは右の様な曲目で夫しに試驗曲として作曲せられたどのも其まゝ直

ちに唱譜せしめられるのです。今後どんずや唱譜の試験はこの臨時唱譜となるだらうと信じます。何分初めての曲を直ちに唱譜する事ですから実力がおけれは到底及第点を取る事は出来ますまい。故に公刊曲許り立派に出来たとしても初めてのものを見るとどうやれまいと云ふ融通の利かぬ様ではだめですから充分練習の程を積つておきます。むと下巻にはこの種の問題を沢山掲げると致します。今は従来課せられたものゝみを掲げておきます。

大正十三年十二月師匠試験課題

左記を一枚の紙片に墨で、普通の楽譜よりど少し大きな文字で書いたものを試験室に入ると譜見台の上にのせてあります。受験者は其前に着席すると直ちに唱譜せしめられます。むゞ二三分位の猶豫は与へて下さいますから、すはやく一回謡んだ方が効果があります。そこで先きに申しました通り声の調子を取つてから落ついて唱譜をやつて下さいこの問題は本調子ですから、本調子の調子調べをやつたら宜しいのです。之れは何調子かど別の仕方はいづれ作譜の方で説明する予定であります。では次に掲げます。むど速度は「中庸」とありますが少しおそくやる方が楽です。といつてあまりおそくやるのといけませんが。

中庸 乙



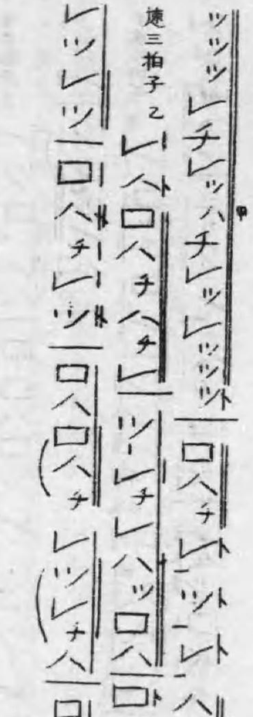
大正十四年六月師匠試験問題

「中庸」

昭和二年十二月

徐四拍子 乙

中庸四拍子 甲



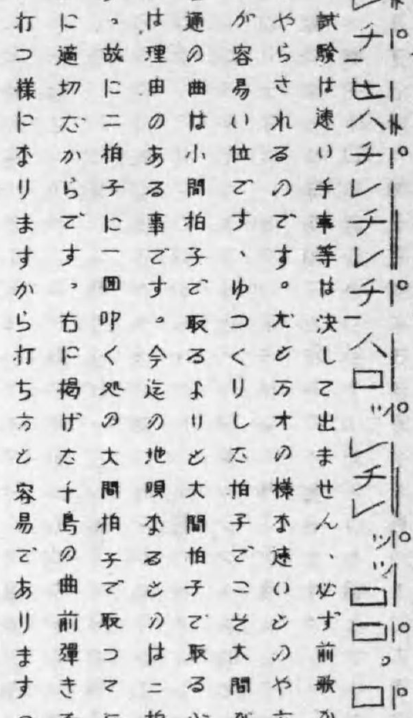
第二節　其他の柏子

一　大間柏子とは如何なるものか

大間柏子と云ふのは二分音符を一柏子とする柏子でありまして、早い話が二柏子に一回膝を打つ事になります。一寸間が抜けた様で中々取り難いものですから、多少練習を要します。師匠検定試験には従来出ませんでしたが大正十五年十月の師匠検定試験には臨時唱譜が無くなつた代りに、この大間柏子の唱譜がありました。曲目は大段調の初段、二段、三段中の一つの段丈けあたつたのであります。こんな訳ですから受験者は相当に練習しておくべき要があります。

左記の○は大間柏子で打つ時の箇所であります。

千鳥の曲の前弾



この試験は速い手事等は決して出ません、必ず前歌か後歌です。そしてゆつくりした箇所をやらされるのです。尤も万才の様な速いものや六段の四段位から大間で柏子を取つた方が容易い位です、ゆつくりした柏子でこそ大間が難かしくなるのであります。

普通の曲は小間柏子で取るよりも大間柏子で取る べきものだと云ふ説があります、夫れには理由のある事です。今迄の地唄物なるものは二柏子を基礎として作られてあるからです。故に二柏子に一回叩く処の大間柏子で取つて行くならば強弱等もうまく当て嵌るし歌に適切だからです。右に掲げた千鳥の曲前弾きを御覧に成つても判る通り必ず強声部で打つ様に成りますから打ち方も容易であります（此の事は作譜の章で説明します）然し千鳥の曲は全く其点を考慮して作つてあるから宜しいのですが沢山の曲の中には弱声部で許り打たねばならぬ様な処も出て来ますから注意すべき事であります。

二　基本的説明

今大間柏子の取り方を三種御紹介しませう、諸君は好き嫌のを選んで自信のつく迄に

って下さい。

(一)大間拍子でやるのと小間拍子でやるのと単に扇子を打ち下ろして上げるのが、二拍子に一回やるか一拍子に一回やるかの違ひ丈けであります、で今ニ拍子の□があるとすれば、扇子を目の上迄上げて□と唱え乍ら速やかに打ち下ろします。そしてローと引張ってゐる間(この長さを一拍子とする)扇子を膝の上にとめておいて、後の一拍子オーと唱える時に扇子を上げる、そしてオーの最後迄扇子を上にとめておく、即ち↓○↑ローオーでニ拍子とする。矢の方向に扇子を動かし中央の点は膝を打つた音とする、といふやり方はよく本いのです、何故本らば、この取り方は複雑本拍子に本ると、打ち下ろすのか、上げるのか混乱して了ひます。殊に我々は扇子を上下する事に依つて拍子を取つてゐるのでは本く、打つた時から次の打つ迄を一拍子としてゐるのですから何ど扇子の上下で拍子を取る必要はありません。我々の扇子は全く趣きを異にしてゐます。故に混動してはいけません(一般には次の様本拍子を打つのであります。

今ニ拍子の□があるとします、先づロと唱えオーと兎全にニ拍子を唱える迄扇子を膝の上におきぎりにしておきます、そして次の音譜を唱えると同時に又速やかに扇子を打ち下ろします、と云つた処で膝の上に扇子をおいたまゝでは膝を叩く事が出来ません、やはり速く目の上迄扇子を上げて打ち下ろすのです。判りましたか。ニ拍子をローオーで表はす本らば一つはローで打ちオーで上げる

一つはローで打ちオーの時ど膝の上においておく、そして次の音譜を唱える時に更に打つ、打つ為めに扇子を上げるが扇子の上げ下げで拍子を取るのでは本いからローオーの終り頃そろ〳〵上げて次の拍子の出に打ち下ろすと云ふやり方です。此の後者の方が一般に使用されてゐるのであります。

(二)ニ番目に御紹介する打ち方は全く今申しました後のオーと来てど扇子を上げ本い方の取り難いのです、唱譜はしてど「サテ今打ち下ろして好いか本」と考へると扇子を何時打ち下ろせば好いか判ら本くなつて了ひます、ではどうするかと云ふと、今ニ拍子の□を□オーで表はすとしますと、ローの時は確かに打ち下ろす、次にオーの時は普通の小間拍子本ら打ち下ろすべき箇処です、だが今の場合は大間だから打つ訳には参りません、其代りに扇子を握つてゐる(扇子の根元の)握りこぶしをトンと目立たぬ様に一回打つのです、斯うすれば扇子の先きは多少動揺はするでせうが決して扇子で膝を叩くのでは本い只握つてゐるこぶしが動いた丈けです、之れはどん本事ド本るのかと云ふと、拍子を取る本人から云ふと小間拍子で拍子を取つてゐる事と同じに本ります、ローで扇子を打ち、オーで扇子を握つた根元を打つてゐるのだから確かに小間拍子に違ひ本いのです故は之れ本ら誰にでも打てるでせう、私は之れに依つてやつてゐます。実際の試験場でなぜこの柳ち方をした方で撥ひ甚せん。但し身まり握りこぶしを高く迄上げたら困ります金盆や一段曲上がつた方で深しで差支へ撥ひ甚せへかも之れで練習せら本る様御進め

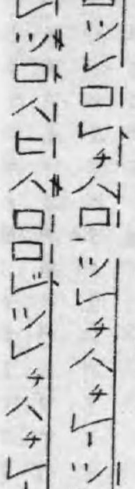
致します。

(三)三番目に御紹介するのは右の扇子の根元を握つた手首を動かす代りに、左の手を膝の下へ入れて左手でそつと打つ事です。琴古等ではよく、右左、右左と右と左まとを交互に打ち下ろしで拍子を取つてゐますが、あの様にしてやるのです。即ちローの時は大ビラに扇子(勿論扇子は右手に持つてです、之れはまさか左利きの方はありますまい)を打ちオーで打つた扇子は其侭膝の上に静止さしておいて、左手でトンと膝を打つと云ふやり方です。丈け左手の指先き丈け動かしたら誰にも判りますまい。又慣かけて唱譜をやらされるのですからオーの時足でトンとやつて拍子を取つても構ひません、兄に角諸君の好きなので拍子を取つて見て下さい。要するに二拍子毎に一回宛扇子を打ち下ろせば夫れで宜しいのです

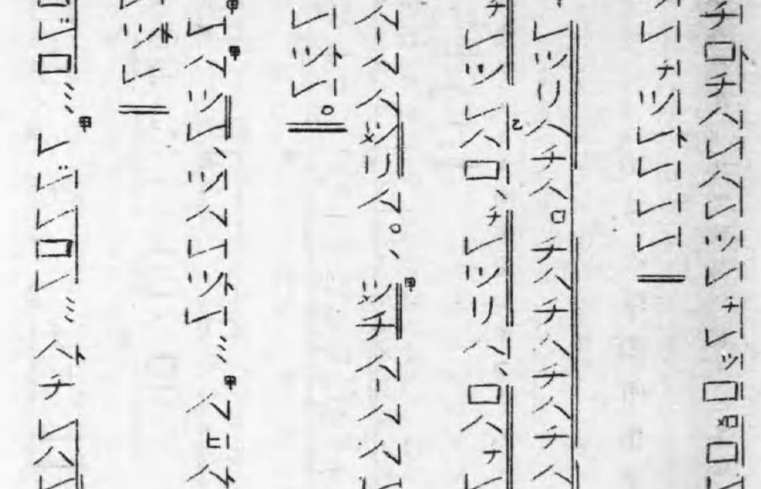
ニ拍子に一回さへ等速に打てばどう大間拍子の唱譜は半分以上出来上がつたのです。たが譜を唱えたらやつて見ると口と手が仲々一致して呉れない、思ふ通りには行かぬとのです。譜を唱えるのは小間拍子と同じですから説明する迄どありますまい。

例題二七八　ロ　其の練習

何れも大間で唱譜して御覧なさい。



例題二七九



例題二八〇

例題二八一

例題二八二

例題二八三

ロチロトチレツロ、レト、チト、ハト、レト、チレツロ。

例題二八四

ロロレレ、ロロ、ハハレレ、ロロ、ロロレレ、ロロ、ハハレレ、ロロ、ロロレレ、ロロ、
ハハレレ、ロロ、ロロレレ、ロロ、ハハレレ、ロロロ。

例題二八五

チレツチレツチレツチレツチレツチレツレチハハレレタ四ハチ
レチツチレチツレチハチレツリツリハツレチハハ四ハチツハチレチロ
ツレチハチレチレチ。

以上掲げた問題夫れ〳〵大間唱譜に依つて充分御研究下さい、

二　三拍子とは如何なるものか

三拍子物は湖上の月、せきれい、若水、其他最近大分公刊になりました、今湖上の月を見ますと、

ハロレト|ツレチハ|ロ、|

とあります。即ち八分音符三箇を以つて一つの三拍子となつてゐます（洋樂では3/8と云ふ丈です）之れは小間拍子の三拍子と見て宜しいでせう。尚ほ之れに似たものがあります。三聯音符、六聯音符が夫れです、三聯音符と云ふのは「せきれい」の左側に〳〵線を引いてあるのがそうです。即ち十六分音符が三箇で此の時の一拍子に相当するのです、三つ連らねて一拍子とするから此の名があります。又六聯音符は「春の光」一部に表はれてゐます、十六分音符六個で一拍子となるのです、矢張り左側に弧線を引きます。

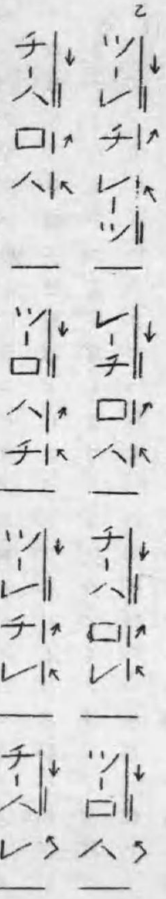
扨て私は先きに申しました小間拍子たの大間拍子たのと云つて説明したのは單に扇子を上下させる拍子許りであつて、之れは二拍子の取り方なのであります。湖上の月の様な三拍子物は、拍子の取り方も全然違つてくるのであります。大体日本音樂でも地唄の方は昔から二拍子乃至四拍子より他に無かつたので例の扇子を上下さす兩手拍子許りで良かつたのですが、最近に至つて此の三拍子が入つて来たものであります。

この取り方は扇子を膝の上に下ろしてから上げる時に斜めに上方で一度止め、夫れから上の位置に戻します。上図の如くであつて実地にやつて見て下さい、尚ほ

同じ三拍子でも「若水」の如きは四分音符三個で一つの三拍子を形造つてゐます。之れは大間の三拍子と見て宜しいでせう。湖上の月と同じく横線内を三拍子として

の打ち方で拍子を取れば宜しいのです。洋樂では之れを[illegible]と此の三角形を形の好い様にくづしてやりますが、扇拍子では膝を打つと云ふ關係がありますので、どう

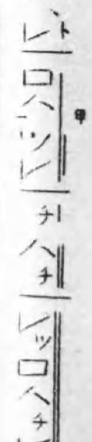
して之角張つた三角形と本り、武骨本取り方と本りますが是非ともありません。左に掲げたのは尺八小曲集第一輯中にある赤い薔薇の大間三拍子の一部であります。矢は扇子の動き方を書いたのであります。

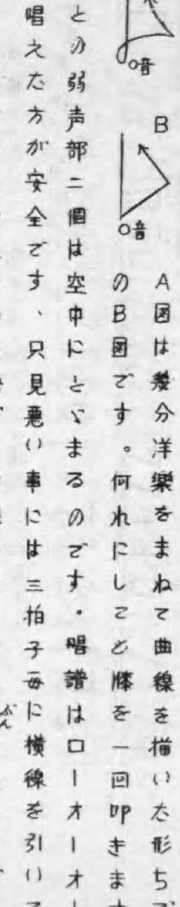


尚ほ一つ注意したい事は、よく拍子を説明するのに、扇子を下げ、上げで一拍子とする下げが半拍子、上げが半拍子の時間であると申しますが、あれは説明するのに便利ですけれ共実際は決してこんな拍子の取り方ではありません、打ち下ろして膝に当つた時が拍子の始まりで、次の膝を打つ迄が一拍子なのです。此の点を迷はぬ様にして下さい。

尚は大正十五年六月の師匠検定試験には宿時唱譜は小間拍子で本くて、次の様本三拍子と平素から練習しておかねば本りません。准師範試験にも大正十五年九月には三拍子が出てゐますから勿論の事です。練習問題は下巻にありますから、夫れに依つても練習して下さい。

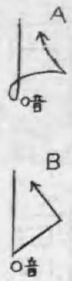
速三拍子（師五・六）



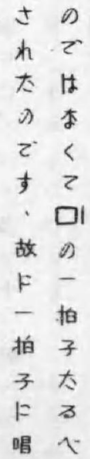


1　基本的説明

只今申しました如く三拍子の取り方には八分音符三個の場合と四分音符三個の場合との二種類あります。二分音符三個と云ふ三拍子はありませんから、四分音符の方を大間とすれば八分音符の方が小間拍子と云へる訳であります。むと一般に四分音符の方は間八分音符は速に使用されます。何れも一小節内に一回打つて三角形を描くのであります

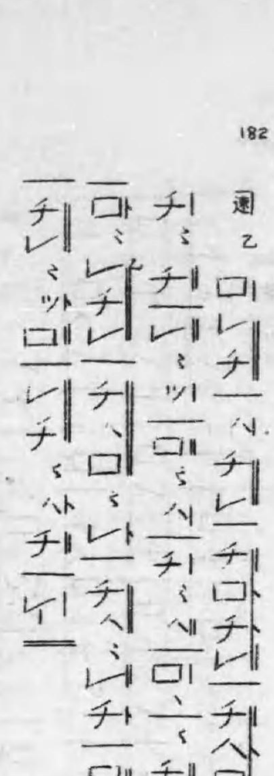


A図は羨分洋樂をまねて曲線を描いた形ちですが取り易いのは直線のB図です。何れにしても膝を一回叩きます、こゝが強声部です、あとの弱声部二個は空中にとゞまるのであつて、二箇の音符は復数の指遣ひや唱譜を決してしては本りません、例へば本り半拍子本りの長さの音譜が、横線の為めに二分される事がよくあります。二分されたのであつて、二箇の音符は復数の指遣ひや唱譜を決してしては本りません、例へば



とある時は半拍子二個あるのではなくて□の一拍子たるべきものが横線が中央へ入る為めに止むを得ず二個に分割されたのです、故に一拍子に唱譜又は吹奏すべきものであります。又半拍子の休止符が二個と三個と續く事があります。此際はチョン〳〵と

が甘唱唱へますが、唱阿だが
吹き易く、唱えを易いのしれば拍い
易く三拍子を形まけおか
吹き易く、唱えを易いのしてある拍いで
が甘唱唱へますが、唱阿だが
吹き易く、唱えを易いのしれば取りにくいと
易く三拍子を形まけおか
吹き易く、唱えを易いのしてある時は、半拍子の休止のとこと
が甘唱唱へますが、唱阿だが
吹き易く、唱えを易いのしれば取りにくいと
易く三拍子を形まけおか
吹き易く、唱えを易いのしてある時は、半拍子の休止甘は、

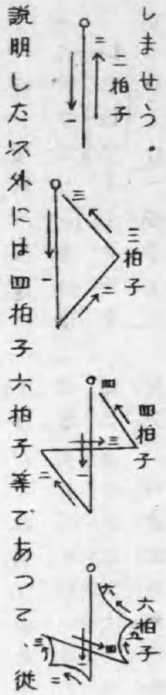


三　其他の拍子

扨て今迄は二拍子と三拍子の取り方を申しましたが其他の拍子としては145頁に申しました様に四拍子六拍子、九拍子五拍子七拍子等があり、夫れに対して大間と小間とある訳けであります。処で今洋樂の拍子の取り方を大体説明致しませう。当流に於て最近管絃樂にはこの拍子を使用せられつゝありますから將来はきつとこの様な拍子の取り方をも採用せられる事と思ひます。

洋樂では多人数が合唱とか合奏する場合には皆の拍子が一致してバラ〳〵にならでしまはぬ爲めに指揮者（Conductor）と云ふ者が居て之を指揮して行きます、指揮者は此様

に通常指揮棒或はタクト棒と云ふものを持つて之を打ち振り下ら拍子をとつて行きます。丸の譜は唱えません、無言です。指揮棒と云ふのは長さ一尺乃至一尺四五寸の細い棒であつて、通常は木で造つてありますが金属のものもあります。指揮者は之を右手に持つて腕を高く揚げて臂を張り下ら之を振るのですが、其振り方は指揮者によつて種々異なつてゐるのです。殊に複雑な表情を持つた樂曲を合奏する場合には、其表情をも合せて示そうと思ふから、左の手をも合せて用ひ、種々の身振りを致します。然し單に拍子を示すと云ふ丈けであれば棒の振り方には一定の標準方法があります、今其標準を次に示しませう。



斯樣な取り方とありますが、現在試驗に出る程度の拍子としては従前に説明した以外には四拍子六拍子等であつて、従来の小間拍子三拍子の取り方でやれば宜しいのであります。

A　四拍子　　イ　基本的説明

今も申しました通り例へ其曲が四拍子として、四分音符に一回打つて行けば宜しいのであります。四拍子にも切られてあつても、單に小間拍子の取り方めにかへつて判り易いかとさへ思はれます。然し一小節毎にも切る爲めに線にかゝる音符は二つに分れる事は止むを得ない事であります。今右側の弧線に就て少し許り説明致

しませう。總べて右側に弧線をつけた場合は弧線内丈けの時間の長さを其音を續ける事になります。故に右側の弧線は同音譜に限ります。

レ　レ　レ　レ　の記号は小節に区切る爲めに出来る弧線と嘴きを異にしてゐます。之れはそれ丈けの長さを表はす拍子記号が無い爲めに止むを得ず出来た弧線であつて上は二拍子半の長さ、中は二拍子と1/4の長さ、下は二拍子と3/4の長さを表はす記号です。従つて二拍子目で復数の指遣ひをしたら大なる誤りであります。

レ　レ　レ　レ　之れは小節の横線に依つて一個の音譜が分割されたのであります。故に復数の指遣ひをするのではありません。上は二拍子半、中は三拍子、下は四拍子の長さ丈けレを引張つて奏すれば宜しいのです。次に左側の弧線には

レ　レ　之れは四季の遊二頁にあります、之れは全曲が拍子が不正なる爲めに拍子を取る時丈け一拍子とし、実際の吹奏は右側の拍子符号に依るのであります。先きに説明した筈です。

チレ　之れは春信幻想曲一頁にあるところので三聯音譜の意味です、即ち音譜三個で一拍子の長さを意味するので右に述べたところのとは全然違ふのです。

ハ　ヒ　タ　ヒ　ハ　之れは河岸の灯二頁にあるところので五聯音譜です、即ちこの五個で一拍子の長さになるのであります。

チレ　ツ　レ　ナ　ハ　之れは「こすもすし」一頁にあるところので六聯音譜と申します、六個で一拍子の時間になるのです。其他

ヒ　タ　ヒ　は「こすもすし」一頁にあるところので天張り三聯音符ですが、三個で半拍子を意味するのです。

チ　レ　とすれば天張り三聯音符で三個で二拍子の長さを表はすのです（蓮露調一頁）

次に小節に区切つてある時、一部二部三部等と併列してある場合等には、一小節内に同一の旋律が繰り返へされる時は左の略記号が使用されます。

チ　レ　ツ　レ　く　く　く　（幻想曲一頁）これは勿論

チ　レ　ツ　レ　チ　レ　ツ　レ　チ　レ　ツ　レ　チ　レ　ツ　レ　の略であります。同様に

ハ　ロ。ハ　ロ。く　く　（海の幸第一樂章二頁）これ

ハ　ロ。ハ　ロ。ハ　ロ。ハ　ロ。を一小節を繰り返へす意味であります。

を用ひます。

ハ　ロ。ハ　ロ。ハ　ロ。

若し又二小節を繰り返へす場合には

甲　ロ　チ　レ　チ　レ　ハ　ロ　乙　チ　ロ　レ　チ　レ　ハ　ロ　甲乙　く　く　（之れは佐渡の印象三、四部一頁参照）

斯様に種々の記号が出来ますから諸君よく調べておいて間違はない様にせなければなりません。

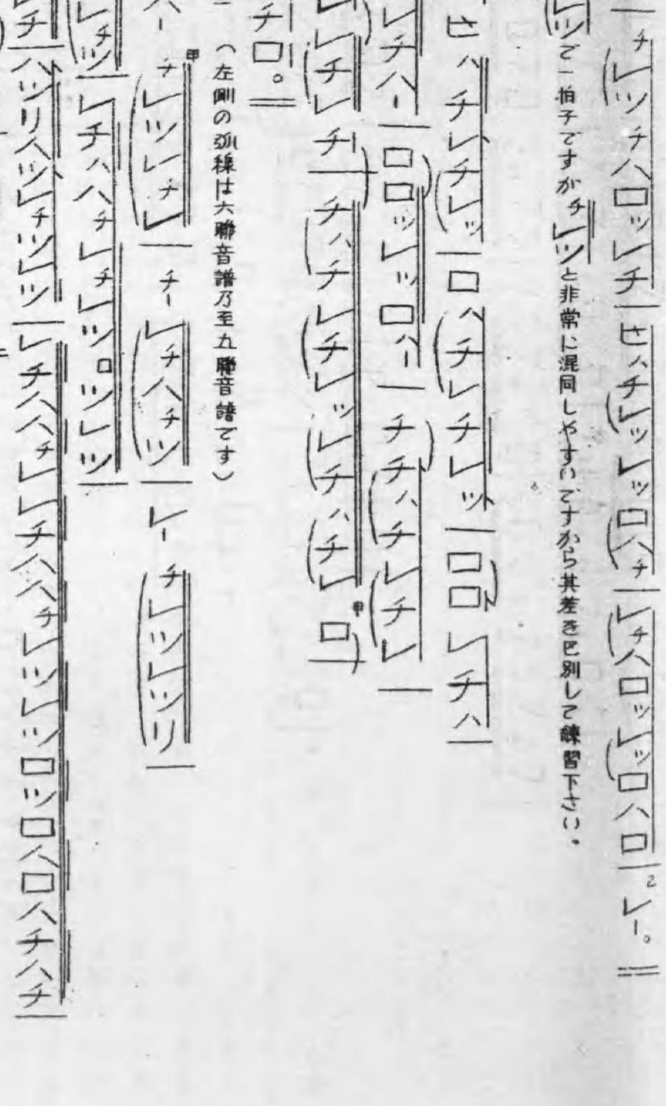
B　六拍子　六拍子物の例としては「佐渡の印象」三頁「速三拍子」を御覧下さい。三拍子とありますが之れは明らかに八分音符六個の六拍子であります。ですから唱え方にしてもロオオオオオオと唱えて行かぬと到底うまく唱えられません。吹奏と同様で半拍子毎に節をつけてやると宜しい、真直ぐにやると拍子を間違えて終ひます。六拍子に於ける拍子の取り方は、一小節内に二回三角形を描けば宜しいのであつて三拍子の取り方にさへ準じて行けば宜しいのです。六拍子の形式は殆ど八分音符三個で一つの三角形と心得て居れば宜しく、四分音符六個と云つた形は殆ど無いと云つて宜しいでせう。大体日本音樂では斯うした差を表はしませんが、洋樂では$\frac{2}{4}$とか$\frac{3}{4}$とか$\frac{6}{8}$等と云ふ言葉を樂譜の最初に書きます、之れは大変良い事で將来は当演に於ても採用されるかも知れません。$\frac{2}{4}$と云ふのは一小節が四分音符二個から成つてゐると云ふ意味であります。故に之れは二拍子物であります。

$\frac{3}{4}$と云ふのは四分音符三個で一小節を成すと云ふ意味で若木の如きは之れであります。$\frac{3}{8}$と云へば八分音符三個で一小節を成すのですから「せきれい」の如きもの$\frac{6}{8}$は八分音符六個で一小節をなすものゝ「佐渡の印象」三頁の如きものであります。

ロ　其の練習

例題二九一　（三聯音譜の練習）

中原四拍子　乙



三聯音譜は「チレツ」で一拍子ですが「チレツ」と非常に混同しやすいですから其差を区別して練習下さい。

例題二九二

中原四拍子　甲

例題二九三　（左側の例線は六聯音譜乃至九聯音譜です）

例題四拍子　乙

例題二九四

の連ふ本ました程は師匠
下手かりません。あり匠試
手まらせ。然しま験
ばあん。之れ丈ど歌
れ吹奏は物と手事の
ばあ後歌物と手事の
の三程目吹奏大正十
の三程目吹奏大正十
の三程目吹奏大正十

第三章　吹奏之部

第一節　歌物吹奏

吹奏は本来歌物と共に発達したものであつて、歌物の伴奏として、吹奏は歌物と共に発達したものであつて、歌物の伴奏として、吹奏は歌物と共に発達したものであつて、歌物の伴奏として、吹奏は

一　歌物吹奏とは如何なるものか

吹奏を斯うした通信に依つて教へると云ふ事は出来ない相談であります。只之れから諸君に注意を促し練習の仕方を教へるに過ぎない事を御諒察あつて層一層自分の先生から、みつちり習得せられむ事を希望致します。殊に試験場で委員から「此曲を吹奏せよ」と云はれた時に「此曲丈けは習ひませんでしたし」と答辯しても追ひつきません、何となれば准師範の受験者は皆傳免許者ですから習はないと云ふ事は答辯には為らないからです。又師匠試験では奥傳終了者ですから本曲を抜いた外は全部習得してゐなければなりません。こんな時には減点を承知で他の曲に変へて貰えるさうですが、どうせ減点されるものとすれば、習はぬ曲でも夫れを吹奏した方が未だ良くはないかとさへ思はれますが、如何なものですかーヶ返答出来兼ねます。諸君は宜しく此の轍を踏んでは為りません。扨て今試験の模様を一通り説明しますと、今迄に出た曲目は多い時には十四五曲少け無い時は一、二曲出てゐます。之は其時の受験者が多い程曲目が増される風であります。然し如何に多数の曲が試験に出ると云つても夫れを抽籤の法に依つて自分には一曲しか当らないのです。例へば左の様な方法で行はれた事があります、今試験に五曲出るものと致しませう、すると其五曲の名が一曲宛小紙片に書き付けられます、そして其五枚の紙片が裏向けに机の上に並べてあります、一方受験者は自分の音譜全部と只八とを手にして其室に入らされます、試験委員は「机上にある紙片を何れでも一枚仰向けて下

さいと云はれると愈々自分の手に依つて何れか一枚仰向け為ければなりません、夫れに記された曲が自分の受験曲と為るのです。

又こんな場合もあります、委員の方で定められた試験曲中から随意か或は抽籤に依つて決定されて了つて、室に入ると直ちに指定される場合もあります、何れにしても五曲もある場合は曲に多少の難易がありますし、自分にしてもよく練習したものとあまりせないものとを云ふ事もあるでせうし、まあ、運の好い人は易いのが当ると云ふ事に為りませうか、然し何れにしても、自分の実力を試されるのですから何の曲が当つても自信のある様にしておかねば好結果を得る事が出来ません。右は先きに申しました通り必ず一人宛試験されるので、受験者の多い時には試験委員が二組に分れて二個処に同時に開始される事があります、こんな時には一個処では吹奏の手事と歌物とを一緒に試験され、それが済んで次の一箇処で本曲と変譜吹奏を試験されると云つた風で順々と一人宛か二箇処を通過して行くのでありまして、一箇処丈けで全部の試験を済ますと云ふ様な事は決してありません。

次に其試験室に入つた場合には態度も注意して下さい、生意気な態度や、おのぼりた態度では吹かぬ先きに委員に悪印象を残して了ひます。又自分の受験曲が定まつた場合に其曲を探すのに時間が掛る様では良くありません。以前にも申しました通り自分の曲は何が当つても、どの辺に入れておいたか位判らぬ様ではだめです、即ち初傳物、中傳物に分けるとか、歌物の試験に出そう本曲は音譜の上の方に置いておくとかして直ちに取

り出せる様にしておくのが肝心です、即ち試験室では敏捷に、時間を取らぬ様に心掛けて下さい。大体が歌物吹奏ですから、本曲や手事が出る事は絶体にないのです。そして大低は何の曲にしても歌の箇処一頁か一頁半位吹奏せしめられるのですから、殆ど前歌のみと云つても宜しいでせう。即ちどの曲にしても最初の一頁が必ず出ると思へば間違ひはないでせう。尤も大曲にありますと、中歌も後歌も隨分試験に可能のものも勿論ありますゝとにかく諸君は歌物吹奏を練習するのみれば其歌の処丈け練習すれば宜しいのです。

二　吹奏の準備

吹奏に最も大切なのは姿勢であります、如何なる名人も姿勢が悪くては思ふ通りに吹けないでせう、否夫れは名人とは申されません。姿勢が悪かつたり、態度が傲慢だつたり、虚心坦懐に吹き出されなければなりません。姿勢が悪かつたり、態度が傲慢だつたり、ソワ〳〵してゐたら聽く人にも悪感を懐かせます。尚ほ姿勢等に於て悪いくせのある人は精々矯正して下さい。首をまげたり、尺八が口唇の端へ寄つたり、猫背だつたり、竹で柏子を取つたりする事は甚だ見苦しいものであります、そして其吹き出しに於て己に其演奏が上手か下手か判ると云はれてゐますから、此点も御注意あらむ事を希望致します。

尤も宗家より試験委員と云ふ大家の前で吹かされるのですから平素よりはうまく吹けぬ事は覚悟しなければなりません。殊に吹奏は呼吸に関係ある科目ですから鳴らぬ事が多いのです、自分の順番を待つ間よく練習して置いて鳴る様にしておかなければなりません。尤も平素務めて演奏会等に出演して場馴れするのも良い方法です。吹奏試験の順番は以前にも申しました通り、委員の方で抽籤に依つて決定され、其場で最初に発表されます。大正十五年十二月の師匠試験には自分の順番に控席に居ないかつた為めに皆が迷惑したと云ふ事ですから、自分の順番をよく注意の上、充分竹が鳴る様に、奥い所ならふ所へ入れて暖めるとか、他人の邪魔にならぬ処でドン〳〵吹きまくつてよくなる様にしておかねばなりません。御承知の通り冬は一曲も吹いて竹に暖かみが来ぬと鳴り悪いものですから呉れ〳〵も申し上げておきます、愈々委員の面前で吹くとなる時には左の竹調べが唯一の清涼剤でせうか。

扨て愈々尺八を吹かむとする時は先づ竹調べをせなければなりません。何楽器にしても処で一応調子を調べなければならぬ事は判り切つた話しです。試験に際しても勿論竹調べが許されてあります。否竹調べせずに直ちに吹いたら減点される位です。

こゝで一寸竹調べの効果を申しますと、調子を調べると云ふ事は第一義ですが竹調べに依つて心を落ちつけると云ふ事が大なる効果を来たすものなのです。即ち竹調べに於て既に精神の統一を計り心が統一されたら始めて曲を吹奏すべきであります。

処でこの竹調べは曲に依つて違ふ事を御承知ありたい、間違つた竹調べをやつたら夫

れこそ反つて減点されて了ひます。竹調べは大体三絃の調子に準ずれば宜しいのです。三絃の入らない曲ならば箏の曲に準ずれば宜しいのです。然し茲に最も注意すべき事は万一曲の途中から吹奏せしめられる時は曲の中には途中轉調してゐる事もありますから今吹き出さむとする処は何調子であるかよく見極めて夫れに応じた竹調べをせなければならないのです。竹調べは大体三種類あると見て宜しい。

(一)本調子物の時

今吹かむとする曲が本調子物であつた時は左の様な本調子の竹調べをせなければなりません、夫れには必ず三絃の本調子とか何調子とか書いてありますから誰にでも夫れが本調子物と云ふ事が判ります、左記は甲音乙音両方を調べた場合

乙レツ|ロ|ハ|ヒ|ハ|ロ|ニ|チ|レ|ロ|甲ハ|ヒ|タ|ハ|ヒ|ハ|チ|レ|ツ|ロ|ハ|ヒ|ハ|ロ。

之れで未だ鳴らなければ

乙レ|ロ|ハ|ヒ|ハ|ロ|ロ|ー

否こんなに固々しく吹けなかつたら乙の口とレ許りでも構ひません、之れは三絃の本調子は□ゴ□である処から夫れを吹くのでありまして乙口なりの乙レなりハヒハ口。なりを吹いて自信がついたら曲を始めれば宜しいのです。但し乙チを吹く事は絶対に禁物です。

(二)低二上り物の時

左記の様な調べが宜しい。

乙レツ|レ|ツ|レ|ツ|ロ|ロ|。甲ハ|チ|レ|チ|レ|ツ|。レ|ツ|レ|ツ|ハ|チ|レ 仕

或は乙レ|ロ|レ|乙ハ|仕吹いても宜しくいづれも拍子には関係せずとゆつくり吹いて見て下さい。低二上りと云ふのは樂譜の初めに三絃ベ|ゴ|ベとある二上り調子の事を云ふので、この場合乙口やヒチを吹く事は禁物です。

(三)二上り物の時

二上りとは「普通二上り」と云ふ時の小称で三絃が□ゴ□と云ふ二上り調子の事で此時は

乙□|乙レ|チ|レ|チ|甲ヒ|ハ|チ|レ|ロ|乙レ|チ|ロ|ハ|チ|レ|ツ|レ|ツ|ロ。

位で又乙ロ|レ|チ位でも宜しく要するに乙チ本りと口を調べれば宜しいのです。此場合、乙ハ|チ|レ等と吹く事は禁物です。

以上は三味線のある曲ばかりの話ですが三味線の無い曲例へば千鳥の曲、橋草、雲雀の曲等の時は樂譜の始めに箏□レ|チとか箏ハ|ツ|レとか箏の調子が書いてありますから其音ばかりを吹いて見れば宜しいのです。例へば稚児櫻は箏の□ツ|レ|チ|ハと最初にありますから乙□ツ|レ|チ、レ|ハ|ヒ|ハ|□乙□等と吹いて見れば結構です。又雲の峰の様なものならば箏の調子がすつかり書いてありますから

乙ハ|チ|レ|ツ|レ|チ|ハ|ロ|ニ|ラ|チ|レ位で宜しいでせう。

之れで大体竹調べは判つたでせう、これから愈々本式の吹奏に取りかゝらねばなりません。こゝで吹奏の極意を申さなければなりません、他でもありません、歌物は歌物らしく、手事は手事らしく、本曲は本曲らしく吹かねばならぬ事です。もつと細かく申しますと、この曲はかうゆう風に悲しく吹くとか、この曲は斯う云ふ風に派手に吹くとか要す

るに表情を第一に考へなければなりません、拍子を一寸狂つたとかは悪いには違ひありませんが余り問題にされない風です、大変話が難しくなりますが完全なる表情には実に左の心掛けが要りますけない、心で吹け……これは随分むつかしい註文です、歌詞を玩味して作曲者の気分を味はへ……それを神々難かしい、と考へてくると、どう吹けば良いのか誠に困つて了ひます。では之を表面から科学的に観たら何があるかと云ふと気息の緩急、強弱、抑揚が大部分を占め、夫れに速度、運指の技巧、顫音の装飾等に帰着するのであります、あまり抽象的でお判りにならぬかも知れませんが之は中巻に於て精しく述べる也算であります

三　歌物吹奏の練習

先きに申しました通り歌物吹奏と云へば歌詞のある処丈けを指すのであります、従つて其の気分と云ふものは曲の歌詞に依る事が最も大であります、一般に悲しみを表はす歌詞には悲しい味を表はす旋律を以つて作曲してあり、喜びの意味の歌詞なれば其喜びを表はすべく作曲してあるのですから、夫れを無視して只、拍子さへ間違はさねば好いと云ふ吹奏では到底及第は覚つかないのであります。故に歌物吹奏では表情に就てよく研究せられむ事を希望致します。

イ　練習の仕方

先づ歌物吹奏として試験に課せられる曲は大体範囲が定まつてゐる様なものであります。之等の曲の歌詞を一通り讀まれて、どんな内容の曲かと云ふ事を大体調べなければなりません。次に其歌詞に依る気分を努めて出す様に練習しなければなりません。

尤も諸君は先生に就て現在も習つて居られる方は、先生の通り吹奏せられるは夫れで宜しいのでありますから、茲ではどんな練習の仕方をすれば宜しいか少し許り記して置きませう。

A速度　速度緩急は仲々大切なものであります、例へば「婆さん懺悔」とか「爺さん懺悔」とか云ふ様な阿呆陀羅経式の八八調は到底悠長な調子ではだめです、壮厳な上か意壮な上とか云ふやうな趣を新らしく格調では表現し得ないのであります。又子守唄を「述べ」て歌つたらどうでせう、曲がメチヤ〳〵になる許りです。大体斯ういふ風に其速度は表情に関係深いものでありますから注意せなければなりません。概して歌詞のある処は緩るやかでありますが後歌は一般に速り様であります、又緩急の最も劇しいのは出田物であります。山田物は楽譜に掲げてある以外にも遅速がありますから一曲毎によく研究せなければなりません。

B強弱　音を幾つも續ける時には其処に必ず強弱が表はれるのであります。前章に於て二拍子とか三拍子とか四拍子の強弱を説明致しました。あれを無意味に讀んだ丈けでは何にもなりません、茲に迫来の楽譜は夫れ〴〵小節に区切つてあります、あれは見易

いとか故へ易いと云ふ意味で已切つてあるのではありません。此の強弱を判り易く表はしてあるのであります。

尺八は遠慮な事には全音譜と半音譜とかあつて両者の強さが違ふ為に、他楽器の如く強弱を自由に出せませんが、夫れでも其心掛けで吹奏した ならば或程度迄強弱を出す事が出来るのであります。

どの拍子にしても一般に小節の線の直ぐ上は弱であり、小節の横線の直ぐ下は強であります。

二拍子 ―強弱― 三拍子 ―強弱弱― 四拍子 ―強弱中弱― 六拍子 ―強弱弱中弱弱―

強の位置にある音譜は当然強く奏せねばいけません、弱の位置にある音譜は当然弱く吹奏するのであります。之れを全部強弱抜きにして強の一点張りで半音譜丈け自分で仕様と思つてするのでまくして目然に弱い――と云ふ吹き方は所謂棒吹きで為と受験でもしようと云ふ教師階級のまさざる処であります。其心掛けで充分強弱を研究して下さい。

但し曲に依つてこの強弱を度外視して特に何拍子も続けて強くとか、弱くとか吹奏される処もありまして、こは其の曲の元分表現に依つて夫れ〳〵異るのであります。

ロ　音律

半音やメリ音カリ音に最も注意を要します。本に低ニ上リ物、例へば方オやタ顔四李の詠等□の半音がしきりに出る上に チはカリ音であり、時には□のカリ音も出て来ます

から、正しき律を出すとなれば吹奏が仲々困難であります。然かも平素の練習が漠然と吹いて楽しむ程度の吹き方だと誤まつた律が出て居る事が多いのです。イザ試験を受けると三ふ気で真剣に吹いて見ると我下ら今迄の吹奏が粗雑である事に驚く事があります。

要するに之等は耳の修練に俟たねばなりませんからこゝでは一々説明出来ねますが長短の管で比較するならば説明出来る事もありませんが、但し全音の高さを間違はしたらこの試みも全然だめである事を御断りしておきます。左記は上と下とは各同律であります

八寸管のツ＝二尺管の□　八寸管のソ＝九寸管のツ
八寸管のロ＝九寸管のレ　八寸管のチ＝二尺管のハ
八寸管のハ＝九寸管のチ
八寸管のロ＝九寸管の□　八寸管のチ＝二尺管のツ
八寸管のハ＝二尺管のレ

右の八寸管とは一尺八寸の尺八、九寸管とは一尺九寸管の略称であります。チは右記の如くハと同律です、又ロはハと同律ですから、果して律が合つてゐるかどうか八寸管同志で合はして御覧なさい。右は別に記憶しておく事ではありません。只自分の出す音が何れも律に合つてゐるかどうか試みる時の話しです。

一般に初歩の時は半音が高くなるのが通例であります、半音が低く過ぎると云ふ人は百人中一人位しか無いかと思ひます。尤も半音譜は孔を半開と不つてゐますが、七八分迄塞ぐと云ふ気持で少し丈け開けて下さい。其上少し頸を引いてメルのみならば丁度宜しいかと思ひます。ロヒセ等はメルのみですから余程メラぬと律に合はないものです。一般に音が昇る時は塞いだ孔をすこし開けて半音を作るのですから到に正確な音律が出ます

が、音が下行する時は、開いた孔を半分丈け塞ぐ事ですから、開け過ぎて高くなると云ふ事が多いですから全程練習を要するのです。總べて指は速く動かさねばいけません、孔を開ける時は高く速やかに、塞ぐ時は竹を叩く気持でパッと下ろすと者とハッキリ出るのです。リ〳〵の律は余程耳が馴れぬと正確なものが出ません、殊にチは最も難しく、律に合つた方は一般に五十パーセントは出かと思はれます。

四　今度に出た曲名

歌物吹奏とある以上は歌の箇処許り出たのです、其つもりで御覧の上は一度吹奏して見る事です、曲名の下にある数字は夫れ丈けの回数出たのですから、回数の多いものの程試験曲として可能性があるものですから、夫れは特に御練習あらむ事を希望します。左記は順序不同でありますが、そして師匠検定試験に出たものの分です。

神楽初　夕顔二　七草二　梧盞　松の寿二　秋の吉業三　新玉の曲　新松竹梅二　楓の花　虫の音二
茶音頭二　玉川二　春の曲二　西行櫻　名所土産二　三の景色　さむしろ六　越後獅子　磯千鳥七
青柳三　夜々の星七　萩の露八　乱二　滝盞　吾妻獅子三　松竹梅五　冊の夢九　未の契六
長等の春五　深夜の月三　玉の台五　嵯峨の春四　横枕七　七小町五　浮舟　春の曙　残月　今小町五
里の暁二　磯の春　根曳の松五　新松盞三　まゝの川　櫻川四　打盤二　冬の曲　宇治巡三　小篠の外三

鶴の声　ゆき二　袖宮殿二　菊の露二　芦かり二　露の蝶二　秋の曲　黒髪　由稼の月　夕空　扇盞
けしの花三　六段三　新娘道成寺二　若葉　四季の詠二　俺の宮二　桂男　玉かつら　衣　御山獅子
女の露　住吉詣　神　仞音　常盤木

尚ほ大正十五年六月の師匠試験には本曲、歌物とを一緒にして一科を成し其曲も従来ドウ見ざる宮城氏の曲と不つてゐますから、今後の受験者も宮城氏のものの及び已に公刊せる本曲等も練習しておく必要があるかと思ひます。左記が今年のものです。

湘風初　湖上の月初　奥砧初　春霞初　朝霧初　秋の調初　比良初　春の夜初　初鶯初　若葉初

尚ほ歌物吹奏としては将来共臨時の歌物吹奏と云ふ様なものは決して無いと思ひます。

第二節　手事吹奏

一　手事吹奏とは如何なるものか

手事吹奏は一般に手のこんだものを間違はずに吹くとか、速い箇処でも音律を正確に吹くとかと云ふ事を験せられるものと思つて下さい、勿論名の如く手事丈けしか吹奏しません、間違はずに奇麗に吹きのければ宜しいと思ひます、即ちよく鳴ると云ふ事と

手がよく廻ると云ふ事に意を用ひ、曲の真意を現はさうとか音を揺るとか云ふ様な表情の点は歌物や本曲へゆづつておけば宜しいと思ひます。速度、音律、指づかひを特に注意して下さい。こゝで一寸お話申し上げておき度い事は、准師範試験は従来十科目であつたのですが、大正十五年二月の全試験には変譜吹奏と本曲吹奏と手事吹奏とが廃止せられて代りに山田物吹奏（前歌）生田物吹奏（前歌）が課せられたのでありますと全体が八科目に単縮せられたのでありまして何れも夫科が二つ無くなつた勘定であります。其結果吹奏の生田物と山田物の課目が二百点が満点となり、他の科目は夫張り百点が満点でありました。之れは受験者が多くなつた為めに余儀なく単縮せられた事と察します。現に之れ丈け単縮せられたにも拘はらず三日間を要したと云ふ事ですから、何も本曲吹奏や手事吹奏、変譜吹奏が今後廃止せられると思ふ事は早計であります。故に此の手事吹奏も勿論、准師範受験者は準備せなければなりません。但し師匠試験には手事吹奏は必ずあります、勿論練習して下さい。

二　手事吹奏の練習

どの練習もそうですが、常に間違ふとか茲が一番難しいと云ふ箇処は誰れでも一曲の中の数行に過ぎないものです、一回やつて見て出来ない処又は違つた処はシルシをして

ビラを張りビラの先きが楽譜の外へハミ出す様にしておいて下さい。そこで今日は手事吹奏の練習をしようと思へば其ビラを頼りに難しい処丈けを数回、短時間に練習する事が出来ます。そしてどう大丈夫出来ると云ふ自信がついたら其ビラをはがして下さい。斯くしてビラが全部取れたら何時でも試験場へ臨んでも宜しいでせう。之は夫科は総べて此の方法で勉強せられると必ず効果があります。容易な処を何回も繰り返して練習するのは最も不経済であります。

扨て手事吹奏は若し〔漸次速〕の速度と云つて宜しいでせう、一体手事なるものは表情等と云ふ方面よりも、只手の込んだ、面白い旋律を鮮かに吹いて、其音を楽しむ様な形式のものが多いのです、即ち形式音楽と云ふものでして拍子や旋律の面白味を味はふのが主眼であります。例へば六段なども形式音楽の代表的のものでありますが、一つの段を六つ集めたから六段と云つた迄で、あれは何らの内容を表はしてゐるものではありません。で手事と云ふものは最初は緩つくりでも漸次速やくなるのが普通です。どちらかと云ふと緩体に速く吹くのが良い様であります。故に指がどつれない範囲内で速く吹く様に練習しておいて下さい。

次に手事と云へば必ず曲の途中から吹奏する事になります、故に前調べをするには其曲が手事の処は轉調してゐないかどうか、従つて今吹かむとする箇処は何調子かよく平素から調べておく必要があります、そして自分の譜へ何調子か書き入れておく方が宜しいのです、其場になつて考へてゐる様では未だ用意が足らぬと申さなければなりません

次に速度記号に於て「徐」とあるのは所謂「拍子打ちかへし」であります。然し單に「徐」とありましても此の拍子打ちかへしを要丁度倍の遲さに成るの意であります。然し單に「徐」とありましても此の拍子打ちかへしを要求してゐる事が多くあります、例へば改訂夏の曲二頁一行目の徐、松上鶴一頁中頃にある徐等は其処から今迄の二倍の遲さに成ります。拍子打ち変へは今申しました通り、從来の拍子の取り方の倍の遲さに成る事を意味し、夫れ以外には使用されてゐません。

次に手事吹奏には、よく「掛け合ひし」が出て来ます、即ち朱書きの部分、之れは其拍子数丈け吹かずに待てば宜しいのです。唱譜の際と同じく朱書の部分丈けは拍子丈けは勿論取りますが唱譜はやりません、吹奏の場合は其処丈け休止するのですが、休止した時に朱書きの拍子数丈け正確に休止すべきで、おくれたり、早過ぎては拍子が乱れていけません。一般に朱書きの処では、息を吹き入れずして第二孔と第三孔を交互に指で孔を叩いて拍子を取つてゐる様です。そして口の中で唱えるのです、声を出すのはよくありません。

イ　練習の仕方

速度は矢張り重大であります。手事は大低「漸次速」の形式であります、若し最初を相当の早さで吹き出すとすれば中頃は非常に速くなつて遂に充分自信ある曲も手がもつれて譜を誤まる事があります、と云つてあまり緩やかに吹奏する事も感心致しません、制に早く吹いた方が勿論宜しいのですが、丁度中庸を得る様に平素練習せなければなりませ

ん。一体日本音楽は洋樂の様にメトロノーム等で計る様な機械的に始めから終り迄等速ではありません、徐々に速くなる傾向があります、そして終りへ近づくに從つて徐々に緩るくなります、故に「徐々ニ速」「徐々ニ緩」と樂譜に表はしてなくとも、さうした速度を以てゐるものなのです。夫れは徐々になるので、殆ど気付かぬ様な程度であります、之を着しく目立つてゐるのが「漸次速」「漸次徐」の記号であります。故に緩漫にやるのが「徐々ニ速」であり、夫れよりも目立つて速くなるのが「漸次速」であります。一般に「漸次速」とある場合には丁度記号のある箇処は今迄と速度が殆ど変りません、五六拍子進んだ処で速の形になります、つまり漸次拍子が速くなるのでT度等比級数の様に正しく速くなるのであつて其間ムラがある訳ではありません、二三拍子目から急に速くなるのは「漸次急」と云ふ記号があります。史に角この速度は洋樂とは異つて居りますから、洋樂をやつてゐる方に地唄を奏して貰ひますと、この特有の速度が、きつと始めから終り迄「等速」になつて終つて気の抜けたビールの如き感がする事が多いのであります。

次に樂譜面に掲げてある記号に注意しなければなりません。例へばスリ上げ記号があつても速い処では仲々出来難いものであります、スリ上げを自分でやつてゐるつもりでもスリ上げに聽えなければ何にもなりません、それから息抜(ブレス)み記号を無視したり、休止符があるのに續けて吹いて了つたりする事は速い処ではあり勝ちの事です、つまり完全に樂譜の通りに吹くと云ふ事は仲々骨の折れるものであります。然し次の様な場合は実際の吹奏は樂譜通りではありません。

ハヅミ音　一般に□□□ハチ、とある時は実際の吹き方は□□□ーハチ。を速くやるのであつて□□□ハチ。ではないのです、即ち三番目の□をハヅませるのであります、其他ハヒハ□にしてもハヒーハ□。とヒをハヅませるのであります。此のハヅミ音に就ては判りにくい方はどの曲でも宜しいですから、三絃と合奏して御覧なさい。そうすればどんな形のものがハヅムか会得出来る筈であります。

次に強弱に就ては大体一小節内の強弱は前に記した通りですが単に一拍子内に於ても強弱が附せられる事があるのです、例へば

ハハハハ□□□□ッツッツ□□□□

とあつた場合には○を附した最初の音譜ハ□ッ□の音を強く吹くのであります。其他息を吸ふ事に就いても注意すべきは、まさか諸君は息を吸ふ為に拍子がおくれる事もありますまいが要は水泳の時の呼吸の如く、どうしても續けねば具合が悪いと云ふ時は其の前に於て充分息を吸つて準備せなければなりません。例へば「けしの花」三頁二行目は途中で息を吸ふ箇処が無いのですから、夫れ丈けの準備をしてからでないと充分うまく行かぬのです。一体樂譜を見て行くのは、吹く処許りに気を取られてゐる様では上手とは申されません少なくとも現在吹いてゐる処から二三拍子先を見てゐなければ夫れ〳〵準備が出来ないのであります。余祐樟々とし吹くには今吹く処許りに気を取られずして常に四五拍子先を見ながら吹くべきであります、若し数百回も吹奏したものでありますれば、譜が無くても暗んずる事も出来ませう、筝など〻合奏の際にしましても自信がある

ものなれば二三行も先を見ながら吹くと云ふ位でなければ少なくとも合奏してやると三は れないでせう。即ち合せて奏つてゐるに過ぎないのであります。次に息は常に補給して全部吐き出す様な事をしてはなりません。樂譜上に

A レ／レ／レ□□□／ハ／ハ／□□□　B レ／□ツ／レ／チ／レ

半拍子でありながらわざ〳〵点を附した半拍子がよく見受けられます。右のABは其例ですが、息が充分あつてもAの場合はトの記号の半拍子は軽く音を切るのが普通であります。之は筝のリツトロ〳〵に相当するもので、切らなければ面白味がないのです。尤も音を切つても息を吸ふ意味ではありません（時局の曲三頁を筝と合奏すれば此意味が判ります）次にBの形は拾ひ拍子にせつた場合で、此際は續けても構ひません。即ちAの様に必ず切ると云ふ程度ではありませんが、矢張り軽く切つた方が結果が宜しいのであります。結極樂譜に、半拍子なるにも不拘側点を打つた音譜は軽く切ると云ふ事になります。

ロ　誤り易い手

誤り易いのは甲乙であります、記号を省略してある箇処は自分の樂譜へ確つかりと記入しておいて下さい、乙チ□と續く場合は□は甲の場合と乙の場合とあります、例へば春の曙四頁初めの乙チ。□ハチ□は乙チ。□ハチ□であります、又ヲ井夕等は甲音のみの音譜であり、ヲ以は乙音のみの音譜である為にッ論甲乙記号が省略してあります。

そしてレ巳ハチレの如くレ丈けが乙音の場合は其前後は必ず甲音である事、又初めの出がハロの場合も甲乙を省略してある事等判り切つた事の様で一寸間違ひ易いものです。殊に甲ロリレとある時はリは甲音であります、よく乙音でうつかりやる事があります、其他。や、の休止符、息ぬすみで息を切るべきを續いて吹く等を間違はぬ様に注意して下さい。

次に先き程申しましたメリカリの省略即ち低二上り筝律及び低本調子筝律中に於けるチは總べてカリ音でありますが全部樂譜には省略してあります。リ/の間に挿まれたレは大メリであり其他ロヒセリ等のメリ(大メリ)がよく省略してあります。又最近の樂譜には乙ロはメリ記号をつけてありますが、古い樂譜にはこのメリ記号が省略してありますから注意せねばなりません、之等は作曲の処でよく説明致します、今一つ樂譜が版に依つては誤つてゐる事が往々あります、ゆきの後歌の始めの行の下の方は。であるべきを、にしてゐたりするのは未だ判断出来ますが、秋の調一頁目に乙とある処が甲が正当であつたり二頁目レがレであつたり、又紅薔薇中央の朱書の上に、の休止符が脱落したりしてゐるのは先生から教はらないと判りません、こんな訂正箇処が時々あります。序でだから申しておきますが、千代の鶯六頁七行目甲ハレチレチレッーレッロのツの下の短線は消して下さいツは半拍子です。紅葉盡二頁最後の行レチチチチロチレとする事、下のチはチーとなつてゐる筈です、未だ此の外にも斯うした間違ひがありますから夫れ〴〵訂正をして下さい。

次にゴマ化し易いチがよくあるものです、音譜通り弁別に吹く様に練習しなければなりません、例へば

ロハヒチレが ロハヒハチレ に成る
チレリロハチが チレリロハチ に成る
チレリロハチが チーレリロハチ に成る

又拍子外と二本棒(十六分音符の事)の巳別があつて欲しい、即ちローレチとロレチは雖れども巳別は出来ますが、下行の時ローハチとロハチは何れもロハチとやる事が多い、之れは矢張り巳別して吹くのが本当です。

ロロロロチ、が ロロロハチ、に成る
レレレレロ、が レレレリロ、に成る
チチハハセセチチが チチハハヒハチチに成る

これに似た誤まり方はチが細かい程ゴマ化す事が多い殊に

ヒハチレ が ヒハチレ に成る
チレリロ が チルリロ であるのに チレリロ に成る

と云つた誤まりも沢山あるかと思ひます。休止符は必ず息を切る事は今も云つた通りですが秋の調を見ますに|〻と|—の両方掲載されて居ります。拍子は双方同じ長さですが、前者は〻で休止符であり|—は休止しない事になつてゐますからその巳別もありたいものです。半音のチやツハ等は時として律にはづれる事は今も申した通りですが、緩

つくりした場合にでも律にはづれてゐる事が本いが先生に調べて貰つて下さい、一般に下行即ち口八チと行く場合にチが高過ぎる人が多い様です、普通の全音にしても自分ではそれで律に合つてゐると思つても大家から見る時は未だ律にはづれてゐる場合もある事ですから、耳の修練は我々音樂家には最も大切な事であらうと存じます。そして夫れは実際耳から聽く可きもので如何に文字で表はそうとしても出来ない事であります。

三　今迄に出た曲名

左記は師匠検定試験に出た曲名で、曲名の下の数字は出た回数、書いて本いのは一回数字の多い程今後も試験に出る可能性がありません。順序不同。

夜々の星九　秋の言葉四　萩の露九　さむしろ十二　雪月花　春の曲四　秋の曲三　西行櫻　楠草四
六段五　名所土産二　三の景色四　八重霞　越後獅子五　七草　青柳四　難波獅子二　みだれ二　虫の音
玉の台　滝盞　磯千鳥十一　筑紫の海二　凱歌の曲　雪中竹三　銀世界三　新高砂二　御園の松三
打盤五　今小町四　磯の春二　舟の夢八　冬の曲二　里の曉二　楫枕三　嵯峨の春　未の契二
松竹梅三頁二行より五　長等の春五　桂男四　根曳の松四　茶音頭三　櫻川四　早治廻二　けしの花四
音雲獅子　八段　松盞　まゝの川　常盞木二、浮舟二　玉かつら　若菜　最仲の月二　雲の峰二
梅の宿　新浪速成寺　横槌二　新松竹梅　深夜の月　有馬獅子　椿盞　新玉の曲　四段砧本手初段　同二段

四段砧替手初段　同二段　改訂春の曲　改訂千鳥　改訂楓の花　改訂夏の曲
右の中、四段砧と云ふのは従来の京砧の事であり全替手とは三下り砧の事であります。未公刊音譜として、三下り砧あたりは柏子の難かしいものとなつてゐた曲であります。

第四章　作譜之部

本章に於ては旋律音階を説明致しますから、口述、筆答中の全問題をも併せて講義致す事と致します。本章は学科中最も重要なる科目でありますから最も熱心に御研究下さらむ事を希望します。

第一節　基本的説明

一　作譜とは如何なるものか

作譜といふのは一つの樂曲を其樂器の旋律丈り、歌ふ節丈りを捉へて尺八に吹ける樣に譜を作る事を申します。作曲に入るには此作譜から入つた方が早いと思ひます。何となれば〻〻では尺八の各音をどん丈風に使用するかと云ふ事から一つの曲節を如何樣に尺八の譜に作れば其眞意が傳へられるかと云ふ事が判つてくるからです。作譜は作曲と同樣に創作であります。殊に都山先生の近來公にせられた改訂譜其他に到つては与へられた範圍内に於ての創作ですから普通の作曲以上の苦心が覆はれるのであります。

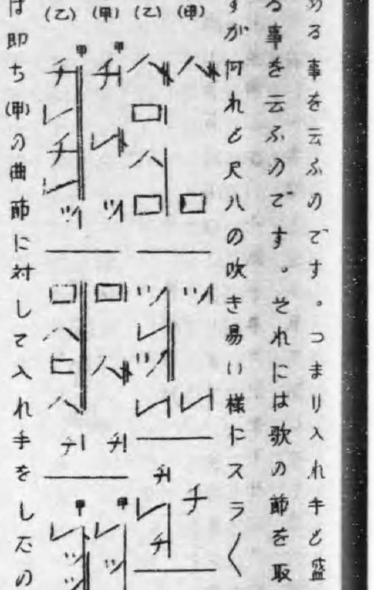
扨て試驗に於ける作譜はどん丈どのかと申しますと別に尺八丈り箏丈りから作譜するのではありません。一つの曲節を出して、之を二律宛上げた譜に書き直したり、脱落箇処を作つてそこへ挿入せしめたり、或は不正丈箇処を訂正せしめると云ふ試驗方法であります、最近は作譜中の難事とされる盛り込み、抜き手等を盛んに課せられる樣に丈りました。將來益々此方面に入つて行く事と信じます。では夫れは一体どん丈どのかと云ふと

手づけの種類

今一つの樂器から其奏する通りに尺八の譜を作る事をべタづけと称します。百の少し修練の積んだ方には誰れでも作れるものです、こん丈のは問題としません。

(一) 入れ手

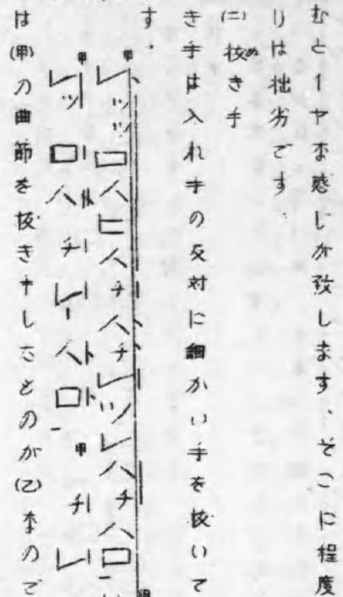
入れ手と云ふのは箏丈り三絃の手が丈くて休んでゐる場合、又盛り込みと云つて箏丈り三絃の手が單純であつさりしてゐる場合に其処へ尺八の手をどり込んで賑やかに聞かしめる事を云ふのです。つまり入れ手も盛り込みも、共に手のあらいものを細かく手づける事を云ふのです。それには歌の節を取つたり裝飾的の意味で入れ手をする事もありますが何れも尺八の吹き易い樣に丈スラ〻〻と入れ丈ければ丈りません。



右は即ち(甲)の曲節に対して入れ手をしたのが(乙)であつて中でも(イ)は入れ手であり、(ロ)は盛り込みであります。斯樣に入れ手はいくらでも入れ手をしたつて別に拍子に狂ひは来たしません。即ちあらい手を細かくしたに過ぎ丈いのであります。然し之もあまり沢山盛り込むと一ヤ丈惑じが致します、そこに程度があり上手下手があるのであります。(ロ)の例辺りは拙劣です。

(二) 抜き手

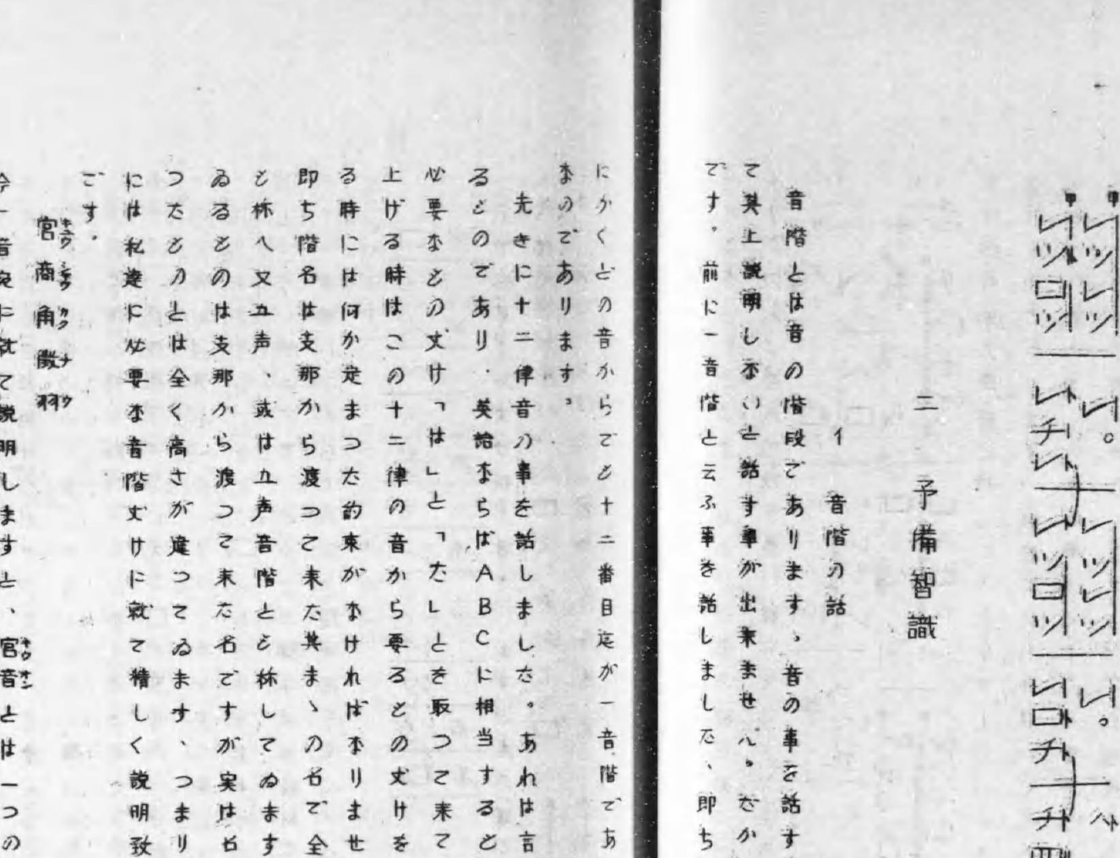
ぬき手は入れ手の反対に細かい手を抜いて重要丈音許りを、のんびりと吹く樣にする事です。



右は(甲)の曲節を抜き手したものが(乙)丈のです。

(三)ズレキ

ズレキは俗に「追ひかけ」とも云つて、あとを拾ふ場合と、あとを拾はれる場合とがあります。



右の甲と丁はあとを拾つてゐますし、乙と丙はあとを拾はれてゐます。

(四)替手

替手は全然異つた旋律を以つて夫れに応じ最と至難であり藝術味に富んだものであります。左記は千鳥の曲、手事の旧譜と改訂譜との替手の有様を掲げた処です。

二　予備智識

1　音階の話

音階とは音の階段であります。音の事を話す時は低い音から高い音に順に並べて置いて其上説明し易い事を話す事が出来ません。だから階段の様に並べる必要が起きてくるのです。前に一音階と云ふ事を話しましたが、即ちこの□から□迄或はこの□から□迄、とにかくどの音からでも十二番目迄が一音階であります、即ちそれ丈けが一つの音の階段なのであります。

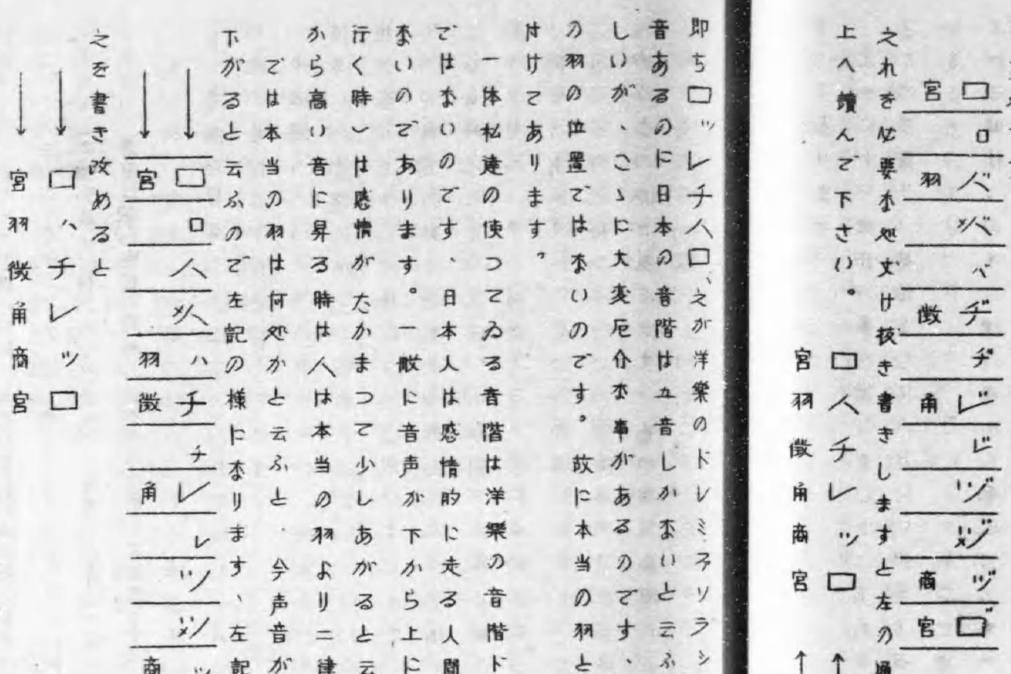
先きに十二律音の事を話しました。あれは言葉で云へば、いろは四十八文字に相当するものであり、英語ならばABCに相当するものです。分何か話したい時には其中から必要なものの丈け「は」と「たし」とを取つて来て「はたし」を表はす様に、私達も音楽を作り上げる時はこの十二律の音から要るものの丈けを取つて綴らなければなりません。之を綴る時には何か定まつた約束がなければなりません、それは音階なのです。この音階の名即ち階名は支那から渡つて来た其まゝの名で全部が五つあります。五つあるから五音と称へ又五声、或は五声音階とも称してゐます。然しこの五つの階名は私達が使用してゐるものは支那から渡つて来た名ですが実はも丈け借りてゐるので、本当の支那から渡つたものとは全く高さが違つてゐます、つまり音階には幾種類もあるのです。然しこゝには私達に必要な音階丈けに就て精しく説明致しませう。其五つの名とは次の如きものです。

官　商　角　徴　羽

今一音毎に就て説明しますと、官音とは一つの音階の基礎たるべきものであります、之を基音と申します。音階を梯子段とすれば梯子を備へる土台石であります、家族に譬へれば一家の主人に相当するものです。次に大切なのは徴音であります、一家にすれば女房役で一家の代理をも務めます。次が角音で一家にすれば子供の格、商音は番頭で、羽

音に成ると小階と云ふ格です。尤も支那から渡つた他の音階は梯子の段の高さがすつかり違ふので次に述べるのとは全然違ひます。

扨て今一寸、宮音は梯子段の土台石だと申しましたが、今音階と云ふものを梯子段として其梯子がどんな間隔のおいた梯子であるか説明して見ませう。尤もこの梯子は何処を土台にしても掛けられるのです。音律と云ふものは兎に角十二あります、音階の梯子はこの十二律のどの音を土台としても構ひません、どつと精しく云ふと、十二律の各音が全部音階の梯子段の土台に成り得るのです。故に音階と云ふものは十二種出来上る勘定です、今説明するのに先づ□を宮音として述べて見ませう、之は即ち黄鐘律を宮として例を書けば宜しいのですが、我々尺八家には何よりも音譜で音階を表はす方が一番よく判りますから、それで□としてやります）。段しかない梯子です。処がこの梯子は各段同じ間隔を持つてゐる事です。左記の音譜が十二律順に下から上の方へ段々高く並んでゐる所へ宮と云ふ梯子の土台を□に据え付けた処です。



之れを必要な処丈け抜き書きしますと左の通りになります。尤も何れも矢の方向に下から上へ讀んで下さい。

□ ハ チ レ ツ □

宮 羽 徵 角 商 宮

即ち□ツレチハ□、之が洋樂のドレミファソラシドに相当するものです。違ふ点は洋樂はセ音あるのに日本の音階は五音しかないと云ふ勘定です。処が夫れだけの違ひなら未だ宜しいが、こゝに大変厄介な事があるのです、夫れは羽と云ふ音です。実は今の羽は本当の羽の位置ではないのです。故に本当の羽と区別する為めに、此の場合の羽を嬰羽と名付けてあります。

一体私達の使つてゐる音階は洋樂の音階ドレミファソラシドの様に定規に嵌まつた音階ではないのです、日本人は感情的に走る人間であるから洋樂の様な理智的の音階は好まないのであります。一般に音声が下から上に昇つて行く時へは感情がたかまつて少しあがると云はれてゐます。故に□ツレチハ□と低い方から高い音に昇る時は人は本当の羽より二律高くなるのです。

では本当の羽は何処かと云ふと、今声音が高い音から低い音へ下げて行く時はズツと下がると云ふので左記の様に成ります、左記は矢の方向に上から普通に讀んで下さい。

之を書き改めると

□ ハ チ レ ツ □

宮 羽 徵 角 商 宮

即ち羽は嬰羽より二律下がりまして□ハチレツ□となるのです、此の時の羽が本当の位

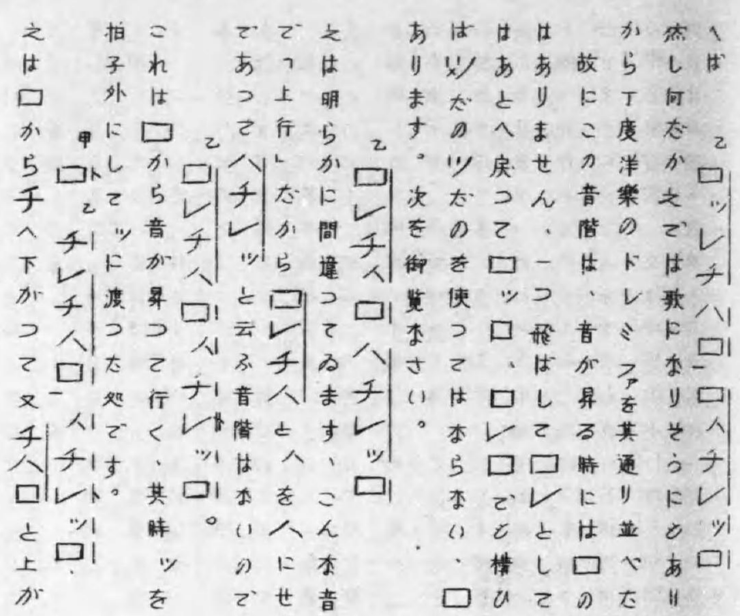
置かと申すのです（隆山附記、私は之は賛成したく無いのです。何とかれば上に昇る時には〈を使ひ下がる時には〉を使ふのならば、どちらも感情に支配されて上下してゐるのではないでせうか、そうすれば本当の羽は〈ごと〉でも無く其中間の〈〉ではないかと云ひたくなるのです、然し種々と深く研究せなければ一朝一夕に否定する事は出来ません、右の説は上京六四郎氏の説でありまして現今最も信頼さるべきものので、当演でも專らそれに依つてゐるのでありますから、現在は右の様に説明しただけを覚えて下さい、愚見は尊に諸君の将来の御参考迄に申した丈けです）

兎に角、音が上に昇る時と、下に降る時とは羽音丈けが違ふ事は間違ひない事ですから、音階を昇る方と降る方とを区別して上に昇る時に使ふ音階は上行（じょうこう）と称し下に降る時に使ふ音階は下行（かこう）と称してゐます

又岐路へ入つて済みませんが、諸君はこん本疑問が起きませんか、上に昇る時と下に降るとが感情に依つて移動するなら、何にも羽音許り上がつたり下がつたりせなくとも他の音も上下してはどうかと思ひませんか、夾は商音も之れをやる事があるのです。然し此の商音が動くと私が今話してゐる音階では本く成ります、他の音階になるのでこゝには省略してゐます。では宮や角徴も動きはせぬかと考へられるでせうが之は絶体に動きません。早い話が土台の宮に異動があつては話に成りません、之等の事は後に話す機会があればいくらでも説明しますが、大体、音階なるものは三分損益と云ふ法で作られたものであつて、この宮徴角三つは父母子と云つた間柄で切つても切れぬ仲ですから動かないのであります。商や羽は番頭や小僧で、云はゞ他人だから動くのであります

之で音階の一般がお判りに成つたでせう、之に拍子を加へれば作曲出来るのです、例

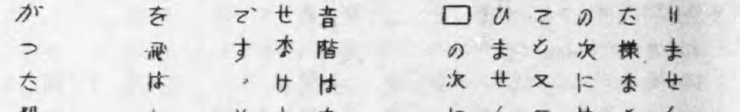
へば



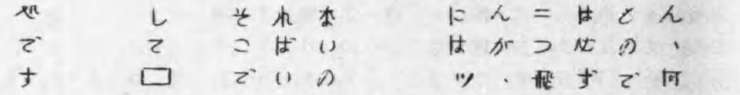
然し何だか之では歌に成りそうにもありませんから丁度洋楽のドレミファを其通り並べた様なものです。

故にこの音階は、音が昇る時には□の次にはかずッがこ本ければいけないと云ふのではありません、一つ飛ばしして□レとしても又二つ飛ばして□チと出ても構ひませんが、只□の次へ若しッを使ひたいのならばあとへ戻つて□ッ□、□レ□でも構ひませんが、只□の次へ若しッを使ひたいのならばッだのッだのを使つては本らない、□の次にはッが行くのだと云ふ事を教へる規則であります。次を御覧なさい。

之は明らかに間違つてゐます、こん本音階は本いのです。□レ|チ|ハは音が昇つて行くのでつ上行」だから□レ|チ|ハと〈を〈にせ本ければいけません。同様に「下行」は〈|チ|レッであつて〈|チ|レッと云ふ音階は本いのです。そこで一つ私が作曲しますと



これは□から音が昇つて行く、其時ッを飛ばして□レと行つたのです。下がる時にレを拍子外にしてッに渡つた処です。



之は□から|チ|へ下がつて又|チ|〈□と上がつたのです。斯うして曲が出来上ります。

ロ　旋律の話

旋律と云ふのは英語のメロディー俗に云ふフシの事であります。声の昇つたり下かつたりする節廻しの事で、少し難かしく云へば韻律のある音の協和的流れであります、前に申し上げた音階を廻ぐる事が旋律であります。それでは一番根本と本る基本旋律の事から申しませうへ奥は旋律と云ふ言葉は右に云つた様本次第で之は曲節に相当するものです、之から述べ様とするのは其の旋律の一定の法則、之を旋法と申します、この旋法の事を述べるのです、然し旋律と旋法と同じに現今取扱はれてゐますから私と旋律としてお話しする次第ですが、旋法の事を云ふのですから其つもりで聞んで下さい）

扨て其の基本旋律は何かと云ふと拙著「樂理の手引」に書きました様に本調子旋律と云ふものです。然しこの言葉は本当は間違つてゐます、何故かと云ふと、此本調子旋律は如何に三味線の本調子の時に彈かるゝ旋律だから斯う称えてゐるものゝ何と三味線の本調子がこの旋律許り彈いてゐると云ふ訳ではないのです。又世の調子の三絃でどこの旋律を彈く事がありますが。即ち本調子の三絃はこの旋律を主として彈くと云ふ丈けの話であります。故に之を本調子主旋律と称えます。故に此点をよく了解して下さい。本調子旋律と云ふものと、三絃の本調子と云ふものとは密接本関係があるにせよ全く別物ですから、こん本まぎれ易い名稱を附する事はいけないと思ひます。この名称は双調俗樂普通旋法　又は地唄のみに使ふ双調普通旋法とでも云ふ可きものであります。但し諸君は本調子旋律と云ふ名称を知つて居れば宜しいのです。試験では此の称え方で事ら

通用するのです。そこで何故双調旋法と称するかと云ふと夫れは次表の如く双調律を土台（宮音）として組み立てた音階であるからです（矢の方向に讀んで下さい）

上行　レ ツ ロ ハ チ レ
下行　レ ツ ロ ハ チ レ

この旋律は今申した様に双調を宮とした場合です、レと云ふ譜は八寸管では双調律である故にレで表はしたのですが左表を見て下さい。

双	レ　宮
下	レ
勝	ツ　羽
平	ツ
断	ッ　羽
壱	ロ　徵
上	ロ
神	ハ　角
鸞	ハ
雪	ハ
黄	チ
鳧	チ　商
鳧	チ　宮
双	レ

ですから□ツレと音が昇る時は□ッレとやつたら夫れは本調子旋律では本くなるのです

次に用ひられるのは二上り旋律です、これは宮音を□とする旋法であつて次の如し。

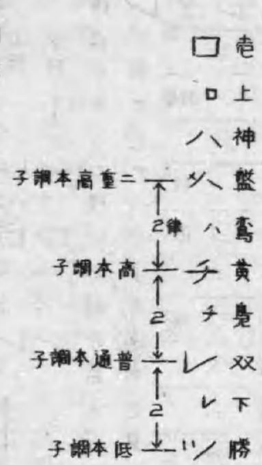
上行　□ハチレッ□
下行　□ハチレッ□

この時は羽はハです、ハは嬰羽でありレは角、チが徵で□は壱越律です。故に之を壱越調普通旋法と称します。之は音階の條で説明した形でありまして以上□とレを各宮音にした旋法が最も重要な旋律であります。

斯様にして行くと私達の音樂は十二律の音律を持つてゐますから各音へ宮をおく事に従つて十二種の旋法が出来上がる訳であります、然し実際は八種より使いません、これ

以上は役に立たないからです。では其八種を御紹介します。私は前述に於て本調子旋律と云つてレを基音にしたものと二上り旋律と云つて□を基音にしたものとを述べましたが、八種あると云ふのは、この二つの系統に分割する事が出来るのであります。

先づ本調子旋律から申しますと低本調子、普通本調子、高本調子、二重高本調子の四つがそうです。そこで普通本調子旋律と云ふのは先きに述べた様にレが基音であります。これより一音（二律）低いツを宮としたものが低本調子旋律、次にレから一音（二律）高いチを宮としたものが高本調子旋律、高本調子旋律から更に一音（二律）上げたソハを宮としたものが二重高本調子旋律と云ふのです。これは高高本調子とも称しますが、二重高本調子の名称の方が宜しい。つまりレを基本として二律宛違つたものを本調子系統の旋法と称するのであります。



次にそを列記して見ませう、先きにも申した通り次には名称を二つ宛書きましたが下の呼び方は本当にしろ試験では上の呼び方で通用するのですから上の呼び方丈け憶えたら宜しい。

低本調子旋律（勝絶調俗楽普通旋法）
上行 ツレチハ
下行 ツロハチレツ

普通本調子旋律（双調俗楽普通旋法）
上行 レチハロ
下行 レツロハ

高本調子旋律（黄鐘調俗楽普通旋法）
上行 チハロレ
下行 チルツロハ

二重高本調子旋律（盤渉調俗楽普通旋法）
上行 ソハロチ
下行 ソルツロハ

但し右の二重高本調子旋律は実際には使用してゐませんが理論上ある訳なのです。こゝで一寸お断りしたい事は、私は先きに上行旋律を書く時に←の記号をつけて下から上へ読む様に申しましたが、あれは音が上へ行く程高いと云ふ意味を含ましてやつた丈けの話で、諸君が試験等に旋律を書く様な事があれば右記の様に上行であつても上から読む様に書いて下さい。下から上へ読んで行く日本文はあるべき筈がありません、念の為めに左記に並べて見ます。

上行旋律の書き方

上行 レツロハチレ ←は不正
上行 レチハロツレ が正しい

今度は二上り旋律を申しますと□を基音として各二律宛違つた低二上り、普通二上り高二上り、二重高二上りの四種があるのです。

双下勝平断壱上神

レ レ ソ ソ ッ □ ロ ハ

↑2↓ 二重高二上り

↑2↓ 高二上り

↑2↓ 普通二上り

低二上り

低二上り旋律（神仙調普通旋法）

上行 ハ ロ ソ レ ナ ハ
下行 ハ ナ レ ソ ロ ハ

普通二上り旋律（壱越調普通旋法）

上行 □ ッ レ チ ハ □
下行 □ ハ チ レ ッ □

高二上り旋律（平調普通旋法）

上行 ソ ソ レ チ ソ □
下行 ソ ロ ソ チ ル ソ

二重高二上り旋律（鳧鐘調普通旋法）

上行 レ レ ソ ソ ル ソ
下行 レ メ ソ ロ ル レ

右の二重高二上り旋律のみまれにしか使いません。斯うなると仲々うまく吹けるとのではありません、こん本場合には尺八を、むしろ今度八寸管を持つてゐたのならば今度はた

寸管に持ち代へた方が好いのです。すると一律丈け上げて譜を使へば好いのです。之は高三下り物に入る事がある様です。然し平素使はぬから必要が多いと申しても理論上は必要なのですから矢張り知つてゐなければなりません。尚ほ注意したきは何々調旋法と申す時は双調と平調丈けは双調調等とは云いません、双調普通旋法、平調普通旋法と云ひ、残りの律の時は夫れ〴〵壱越調と云ふ様に調をつけます。尚ほ先きに列記しました八種の旋法は已にお判りでせうが、音譜にチだのハだのが出て来るのはどうした訳でせうか、兎に角メリ、カリがどうして出来るかは順次徹底的に研究致しませう。

ハ　音階の計算

音階の宮商角徴羽を計算するには大体各音の差を知つて居なければなりません、先づ上行旋律は一4 2 3 2の順序であります。又下行旋律は4 1 2 4 1の順序であります。壱、四、二、三、二、四、一、一、二、四、一、之を誦んじて居れば宜しい、之は即ち宮と商は一律の差商と角は四律の差と云ふ事を意味するのであります。

上行　宮→一律商→四律角→二律徴→三律羽→二律宮

下行　宮→四律羽→一律徴→二律角→四律商→一律宮

又下図の如くに一々指に振めて了つて其の位置を誦んじて居れば暗算でやる事が出来ます。で下場の宮を□として作れば

上行 □ ッ レ チ ハ □

宮	商		
	角		徴
羽		嬰羽	

下行 □ハチレツ□

が得られます。故に徵は人差指の中とか角が無名指の中とかよく記憶しておかないと出来ません

「レを宮とせる上行旋律を述べよ」

先づ親指の先きで小指の先きを押へて下さい、そしてレと唱えて下さい、次に無名指の先きを押へてチと云つて下さい、今度は角の処、無名指の真中辺りとありませんから小さな声で中指の先きから順次チハツハと唱へて行くと無名指の中はハとなります、この八の処で大きな声でハと唱えるのです、次にロと称えて次に□が徵ですから大声で称えツツツと順次昇るとツが嬰羽に当りますからツと大声に称へれば宜しいのです、結極大声で唱えたレチハ□ツレが答の上行旋律であります、これはロ述試験の際の答の出し方を述べたのですが筆答されば一々答の音譜を書きとめれば宜しいのです

第一表

ハ	ロ	□	ツ
ツ	ツ	レ	レ
チ	チ	ハ	ツ

第二表

宮	商		
	角		徵
羽			

「ハを宮音とせる下行旋律を述べよ」

先づ第二表は憶えて了はぬと出来ませんから必ず諳んじて下さい、次に第一表の様にハを基点として順次ハツハチチレレ、ツツツ□ロハと下がり下から其の宮羽徵角商宮に該当する処で唱えるならば

ハチレツロハと云ふ下行旋律の答が出来上がるのであります、

「断金律を宮音とせる上行旋律を述べよ」

之れと同じ事であつて小指の先きを断金と見て順次唱えて行くのです、そして其宮商角徵羽に該当する箇処を大声で唱え他の箇処はくちの中で唱えればスラ〳〵と答が云へる訳けです、答は断金平調鳧鐘奪鏡上無断金で上図の○は夫れを示してゐます。

断○	平○	勝	下
双	鳧○	黄	鳶○
盤	神	上○	走

「神仙律が角音ならば宮音は何か」

角音の箇処即ち無名指の中を押へて神仙と唱え順に下がつて下図の如く讀んで行けば小指の先きたる宮音は双鐘である事が判ります。

宮双	鳧←	黄	鳶
盤	角神		
←			

三　三分損益

1　順八逆六の話

順八とは何かと云ふと、一つの音をとらえてそから順に八律目の音を指して云ふのでこの場合は一つの音からの事で、音自身を数に入れなければなりません、例へば□の順八は□ツツレレチチハ（1 2 3 4 5 6 7 8）であります、故に□の順八音はチであるのです。尚ほ注意を要する事は甲乙を判然と已別せぬといけません、又之を□ツツレレチチハ（0 1 2 3 4 5 6 7 8）として八等と申したら大間違ひです。又逆六と云ふ事は逆に六律下がる事で、今□から逆六音を出

すには□ロ1 2 3ベ4ベ5 6チでチであります、故に甲の□に対する順八音は甲チで逆六音はこチであります。

ですから一つの音の順八音の乙が逆六音に本るのです。

甲チ 順八↑ 甲□ ↓逆六↓ 乙チ

甲□ 順八↑ 乙レ ↓逆六↓ 乙□

之れを律名で勘定して見て同じ事です

甲黄鐘 順八↑ 甲壱越 ↓逆六↓ 乙黄鐘

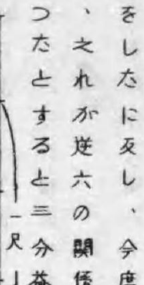
甲壱越 順八↑ 乙双調 ↓逆六↓ 乙壱越

ではこの様な事は何のたしに本るのか、順八だの逆六だのと云ふものは要ら本いではな いかと思はれると困ります、之は日本音階の基礎であります、將来この方面へ問題が移つて行く事でせう、先づ此の事は精しく話しするには勢ひ三分損益と云ふ言葉から説明しなければなりません。

ロ 三分損益（サンブソンエキ）とは何か

只今申しました順八とは実は三分損一の事です、一つの長さの絃を三分（ぶん）して其の一つを捨てると云ふ意味で、この三分の二と云ふものが、其全長と順八の関係にあると云ふ事です。この関係にある二音を和音と申します、今一尺の長さの絃をピンと弾くと假りに□の音が出たとします、するとこの一尺を三分して一を捨てる、即ち三分の二丈けへ

六寸六分七厘の長さ）の絃をピンと弾くとチの音であると云ふのです。



三分損一（六寸六分七厘）

どつと適切な本例を挙げる本らば三味線のコマから上駒の全長を三分して、そこを指で押えて三分の二丈けの長さを弾いて御覧なさい、全長が□本らば三分の二を弾けば必ずチの音に本るでせう、之を十二律音に当て嵌めると丁度一つの律と其律から順に上へ八つ目の律が之に相当するから、三分損一の事を順八と唱えるのであります。

次に三分益（エキ）一と云ふのが有ります、之れは一つの絃の長さを三分して其三分の一丈けを前の長さへ更らに加える事を云ふので、三分損一は名の如く三分して一を捨てたから損をしたに反し、今度は三分して一つまだ加えたから益した意味で三分益一と云ふのです、之れが逆六の関係に本るのです、今假りに一尺の長さの絃をピンと弾くとレの音であつたとすると三分益一した音は□に当ります。

三分益一（一尺三寸三分三厘余）

そして逆六は常に順八の乙音に当りますから、丁度和音を上の音階中から下（くだ）の音階へ引き下ろした形に本ります、故に之を轉回和音と申します、今三味線で云ふ本らばコマから上駒迄の全長を四分（ぶん）して指で押へて四分の三の長さを弾くと逆六関係に相当する事に本ります。即ち四分の三の長さを弾いた時がレとすれば全長を弾いた時は□に当るの

であります。

此の三分損一と三分益一との両法を用ひて音階を作る事を三分損益の法と申します。宮商角徴羽と実は宮を基として順八し、そこから逆六し、又順八し逆六してこの音階を作つたのであります。然し、そうして出来た音階は、実は正樂五声と云つて私等の現在用ひる俗樂の五声と高さが違ひます、私達の俗樂の五声音階は正樂五声を日本人に適する様にあとでなほしたものです、又十二律音夫れ自身もどうして出来上つたかと云ふとこの三分損益の法で出来てゐるのであります。先づ壱越と云ふ音を基として左の通り

壱越から順八して黄鐘を得
黄鐘から逆六して平調を得
平調から順八して盤渉を得
盤渉から逆六して下無を得
下無から順八して上無を得
上無から逆六して鳧鐘を得
鳧鐘からもう一度逆六して断金を得
断金から順八して鳴鏡を得
鳴鏡から逆六して勝絶を得
勝絶から順八して神仙を得

神仙から逆六して双調を得

これで十二律がすつかり出来上がつたのであります。

八、和声の話

和声はクワセイと讀みますか、ワセイと讀みますか、ワセイと讀んでもよいでせう。和声は日本音樂には忘られてゐる感があります。近来の洋樂は又和声其ほかの如くに、最も進歩発達してゐるのであります。然し和声が非常に劣つてゐると申しても、別に日本音樂が劣つてゐる事にはなりません。只日本人は感情的に走つて和声を喜ばなかつたから断念なつたまでで、平安朝時代の雅樂には立派な和声があつたのです。絵画でもそうです。洋画は陰を以つて立体的に表はすに対して日本画は線を以つて平面的に表はしたものとよく似てゐる様なものです。其線たる旋律にのみ意を用ひて陰たる和声を打ち捨てた処に日本人独特の味ひがあるのではないでせうか。

扨て和声とは何であるかと云ふと、先きに述べた様な和音と云ふものを連らねて旋律に合せ奏する事を云ふのであります。もつと判り易く云へば、二つ以上の音に依つて成り立つものので、その二つ以上の音の組合せ方、音の結び合せ方等の法則を考究するを和声学と云ふのです。

今□とレ、又は□とチの様な音が二個同時に奏せられる時は、一種微妙な調和が成立して、其二音が融け合つて、丁度一音を聽く様な感じがして、そこには云ひ知れぬ心地

よさを味はふ事が出来ます。之が和声であります。

一体西洋の和声と云ふのは音響学から割り出したもので、協和する音は完全に協和致します。夫れから見ると日本音樂の和声は不協和が多いかと思はれるのです。然し不協和は音樂には不必要ではありません。近世の洋樂は益々不協和音を多く使ふ傾向にあると云ふ事です。之は不協和音の方が表情能力が余計にあるからと云ふ事であります。

二　協和音

協和音は数学上から割り出された音で振動数の比の簡單な物程よく協和し、最大公約数の求め得られざる物を不協和として居ります。故に西洋音樂（平均音律）と日本音樂（自然音律）との間には協和音の関係に相違があります。勿論斯う申しましても協和音と和声とは同じ音味であつて二つ又は二つ以上の音が同時に奏せられた時にこれがお互に融け合つて一度一つの音でも聽く様に感する事を協和すると云ふのであります。

今協和音を洋樂流に区別して見ませう。或音の振動数の倍の振動数を有する音は最もよく協和するので、之を倍音と云ひます。例へば甲乙の関係にある二音で、ロと□又は甲ロと甲ロの様なものです。この二音を同時に奏しますと殆ど区別する事が出来ません。之を洋樂では絶対協和音と云つてゐます。何故に或音と其の倍音とはよく協和するかと申しますと、一度今こゝに大人と子供とがあつて、大人が一歩行く間に子供が二歩行つて然かも同じ速度に進行するものとします。大人の一歩目と、子供の二歩目とが合致

する事になります。それでこの二音には同じ音名がついてゐるのであります（乙の他甲の他等の如し）次に或音の二分の三倍を有するものは大人の二歩目と子供の三歩目とが合ふて同速度に進行する様に聽えます。之は大人と子供の歩行に較べて申しますと、大人の二歩目と子供の三歩目とが合ふて同速度に進むが、大人の三歩目と子供の四歩目とが合つて同速度に進行する様になるからです。之に相当するものは七律の差を有するニ音、例へばロとヂ又は五律の差を有するロとレの様なものです。之等を完全協和音と申します。

次にこの外では三分の五倍とか、四分の五倍とか、七分の十一倍とか、分母と分子の数が次第に大きくなりますと、この分子と分母の数が大きくなれば成る程、其二音は協和せない様になります。完全協和音に次で協和するのは三律（ロとヂ）四律（ロとレ）八律（ロとロ）九律（ロとヂ）の差を有する音で、之を洋樂では不完全協和音と云つてゐます。この外のものは不協和音であります。

協和音
- 絶体協和音
- 完全協和音
  - 同音　ロとロ
  - 甲乙　ロとロ
  - 和音　ロとヂ
  - 輪回響　ロとレ

今和音をまとめて見ますと

原音	ロ	ツ	ヅ	ヘ	ヘヅ	ヘツ	レ	レ	チ	チ	ハ	ハ	レ	レ	チ	ロ
和音	ヂ	ヘ	ヘヅ	ヘツ	ロ	ロ	ツ	ツ	ヂ	ヂ	ヘ	ヘ	ヘヅ	ヘヅ	ロ	チ

右の和音は夫れ〳〵原音の順八で七律宛高い音なる事が解ります。又轉回和音を求める時は或音から逆六をする事即ち五律下がれば宜しいのです。

原音	ロ	ツ	ヘ	ヘツ	ロ	レ	チ	ハ	レ	チ
轉回和音	ヂ	ヘ	ヘツ	ヘ	ロ	ロ	ツ	ツ	ヘ	チ

大変長い事述べましたが、私は次の言葉を説明したのであります。

「甲レに協和する音二種をあげよ」

此時はレの甲とかヒ等はあげなくとも宜しい。順八逆六の音を二個云へば宜しいのです。即ち順八音甲ヒと逆六音甲ロが答であります。但しこの場合甲ロの代りにヒのハを挙げても宜しいのです。何となれば乙のハから順八しますと丁度甲のレになるからです。故に之れは逆八した事になります。或は順八と順六でも宜しい、又順六逆八でも宜しい事の種の問題で二種位でなく沢山の音譜を挙げよと云ふのでしたら同律音譜を沢山あげると宜しいのです。かヘ六ヘ音のチは八ヘ音のどの音譜と協和するかと云ふ時なら単に一つ挙げれば宜しいのですから、こんな一つの時は順八音一つが答となるのです。也も甲乙の音、例へばロと協和する音譜をあげよの場合、一つの時は順八音で宜しいが、三個のです。尚ほこの種の問題は順八逆六でも宜しい事です。右図は順八と逆八した処です。

とあげる時は、甲音たるロを答として、中へ答へる事は差支へないかと思ひます。然し同音ロを答へる事は全然いけません。この様に、この答は色々として何れを挙げて宜しいかには、一寸私も困りますが、斯らした問題の時には、何か問題に対して説明もある筈ですし、若し無ければ左の通り質問して下さい。質問は許されてゐるのですから、その方が安全です。「答は絶体協和音を答ふるがよろしきか、又完全協和音がよろしきかと要するにかゝる問題に対して、まさか同律音や倍音を問ふ筈でもありますまいから、順八と逆六、其次に順六、逆八が当然と思はれます。

三　旋法の話

旋法を列記するには茲に最も重大なる原則があります。夫れはせず ロ ツ レ チ ヘ ロ の各音譜が順次に並ばなければいけないと云ふ事です。何故なら ロ ツ レ チ ヘ の五音譜は当流音譜の基礎であるからで、この五音譜が半音であらうとメリ音であらうと全音であらうと構ひません。兎に角、旋法には之れ五つ入らないといけない事になつてゐるのです。之れは ヘ ヘ とまつたりチ チ とまつたりする事は尺八と云ふ楽器には吹き難いから此の規則が生れたのではないでせうか、勿論今と申しました通り右の五音譜は当流の基音ですから、当然この規則が出来たのですけれど、然し以前に掲載しました様に種の旋法を津

に当て嵌めて作つて見ると仲々この規則通りには行かないのであります。そこで夫れを無理にでも並べさせる手段として、こゝに同律の音譜で代用せしむる方法が出来上つたのです。「都山流解説」の本には之等代用音譜は掲載してありません。本書初めには全部記しました。今代表的のものを左に記して見ませう。

左記は上と下の各音譜は同じ律であつて、音譜丈けが変つてゐるものであります。

ベ‖ロ　レ‖メチ　ツ‖メレ
ハ‖チ　ッ‖ロ　レ‖メレ

但し右の中でレをメとするのは別に音譜が変りません。之は二重高本調子、二重高二上りの場合に半音が二個續くのでメを代用するのでありまして、半音のみ二個以上續く事ども禁じられて居ります。今念の爲めに、之等代用音譜を全部記しておきます。

ロ　ロ　ヒ　ヒ　ヒ

宮　羽衣　羽數　角

黄鶯　双下勝平断色上神鶯　商　商宮

チ　チレレツツツ□ロ八メ八ハチ

之を抜き出して見ますと

宮羽徴角商宮

上行　チレツメ□ヘチ

下行　チツメ□ヘチ

即ち下行の場合にはツメ□とあるのはいけないからツの代りにメを使用して

下行　チルツメ□ヘチ

とあるのです。この時のメは樂譜にはメリ記号が省略してありますから困りますが実はメは必ずツの前後につきます。故に樂譜にツがあつたら其附近のレは必ず太メリと見て差支へありません。メは勿論ツの代用に使ふのですから律はツと同じでなければなりません。之は誰れかにツを吹いて貰つて目分がメを吹いて同律かどうか試みて下さい球に速い拍子等ではメはレにおり勝ちですから吹奏の時は特に注意を要します。

今一度繰り返して云ひますと、メリだのカリだのを旋律中に使用するのは石の様な必要に迫られての事であり、一般に□ツレチ八の五音譜が尺八の基本音譜である以上この五音譜が旋律の上に一様に現はれる様に代用音を使用したら宜しいのです。代用音は爲ゞ音とも申します。但しツと八は代用音譜ではありませんから其つゞりで頼れます。

以上申しました各種の旋法は事実使用されてゐるかと云ふに、先きに申しました通り二重高二上り、二重高本調子旋律等は殆ど使用されません。又低本調子、高本調子、高二上り旋律は独立して使用されません。途中に於て調子が変る場合に用ひられるのです。何故ならば元々三味線にはいろんな調子があつてと別にどれ丈けの高さにナルと云ふ事を定めてありません。低くからうが高からうが本調子はいつも本調子であります。夫れを尺八と合せた時に初めて低本調子や高本調子と云ふものが出来てくるのであります。これは尺八と云ふものが、三味線の様に糸をしめたり、ゆるめたりして調子を変へると云ふ様な便宜な事が出来ないから、三絃では同じ本調子であるにも拘はらず尺八では其の基本にする音の高さに依つて、之れは低本調子、之れは高本調子と区別するのであります。

もう少し精しく申しますと、神仙調普通旋法とか壱越調並通旋法とかと云ふ名称は一般的の言葉ですから至極よろしいのですが、低二上り旋律、普通二上り旋律と云ふ名称は、丁度尺八から見て三絃に対して低二上り調子、普通二上り調子と区別する様なもので、共に之は尺八丈けに用ひる言葉であります。

例へば神仙を宮とした旋律へ之を神仙調普通旋法と云ふ）は八寸管から見れば、低二上り旋律であります、然し二尺管から見れば之は決して低二上り旋律でありません。神仙は二尺管では□ですから、之は二尺管の普通二上り旋律であります。之を三味線の調子として考へる時と同じ事ですから、即ち一尺八寸管と合奏する時低二上り調子とした

三味線と、二尺管と合奏すれば二尺管では普通二上りの調子となるのであります。

扨て普通本調子旋律、普通二上り旋律、低二上り旋律の三つは最とよく使用せらるゝ旋法でありまして、三絃のロ|レ|ロとある本調子はこの普通本調子旋律を、又ロ|チ|ロとある三絃の二上り調子は普通二上り旋律を、ベ|レ|ベとある二上り調子は低二上り旋律を主として使用するのでありまして、一見夫れと知る事が判るのであります。

これで各種の旋法は判つたものとして、樂譜を拡げて見て之は何旋律かと云ふ事を説明出来るかと云ふと、仲々そううまく樂譜がこの通りになってゐません。例へば本調子物の曲を拡いて見ますに、本調子旋律はかり使ふてあるかと云ふと、ツだのレだのと云ふ音譜が時々出てくるのは一体どうした事でせう。

夫れは変律と云って其一部分丈けに他の旋律が入って来てゐるのであります。殆どの曲はこの変律を必ずやってゐます。これは途中調子を変へて曲に変化を与へ、斯くして其曲の真意を傳へようとした作者の苦心の跡なのであります。

之等の事に就ては中巻で説明致します。尚ほ以上述べた旋法にしても、多くの曲の中には之に反する例外と見るべきものがあります。之を臨時音と申してゐます。

今よくある例外を二三述べて見ませう。

本調子の下行の場合はツが半音であります。故にレ|ツ|ロ又はレ|ツ|ロとなる筈でありますが、どの樂譜を拡いても本調子旋律丈けにレ|ツ|ロ又はレ|ツ|ロとして、ツは全音を用ひてあります。このツはレから口へ渡る時に使用されるのでワタリとか経過音とか申しま

して、速い拍子に限つて、運指上このハヅミの音丈けは全音を使ふ事になつて居ります

次に末の歌前歌ハ|ロ|ツ|レ|ツ|ロ|ハ|ヒ|ハチの如きは本調子旋律ですから、ハ|ロ|ツ|レ|にせずハチの手にモリ込みをしたものであります。モリ込みは大体装飾的に使用されるもので、ハ|ロ|ツと上行したものではなく、ハ|ロは他の手であり、ツ|ロ|ハと下行したものと見るのが至当であります。即ち下行のツにレと云ふモリ込みが入つたものであります。之が若しハ|ロ|ツ|レ|ツ|ロ|ハ|ヒ|ハチ丈れば立派に誤まりです。何故かと云ふと、このスリアゲと無意味についてゐるのではありません。一般にスリアゲの記号がある時は最初の音譜が旋律上の本当の音であつて、スリアゲた音は装飾的のものであります。レ|ツをスリアゲるとレ|チ|レ|ツに成ります。夫れは今の場合と同じ意味に当ります。こんな風に解釈に苦しむものが往々にしてある事を御承知下さい。

尚ほこゝで申し上げておきたいのは、普通旋法と云ふのは以前に申しました八種より外には決してありません。すると三味線には三下り調子、六下り調子、一下り調子等と云ふのがあります。之等は何旋法を使用してゐるかと云ふ疑問が起つて参ります。之等の調子は別に独立した旋法を使用するのでなくて、右に云つた本調子と二上り旋律とを混じて使つてゐるもので、其調子の樂譜を見ると分りますが、丁度殆終変律してゐる様なものと見て宜しいのです。

然し琴の方では他の変つた旋法をも使用して居ります。例へば千鳥の曲等と云ふのは古今調子旋法と云つて雅樂から来た旋法で、之等と全く違ふのであります。其他にも俗

離旋法と云ふのがありますが、精しく知りたい方は拙著、樂理の手引第四十六頁を御覧下さい。試驗には之等の旋法に就ては出ませんから、こゝでは省畧しておきます。序ですから申しますが、三味線が轉調する即ち調子を変へて行く時はどんな事をするかと云ふと、必ず三本の絃の中のどれか一本宛絃を動かして轉調するので、二本とか三本共一度に絃を動かす事は絶体にありません。

三絃の轉調順序

←の印は其絃を動かして調子が変つた事を示す。

低二上り調子

一 二 三
ハ レ ハ

三上り調子

一 二 三
ハ レ □ ←
□ レ ハ

本調子

一 二 三
□ ← レ
□ レ □

二上り調子

一 二 三
□ ← チ ←
□ チ □

高三下り

一 二 三
ソ ← チ
□ チ ソ

高本調子

一 二 三
ソ ← チ ←
ソ チ ソ

高二上り

一 二 三
ソ ← ソ ←
ソ ソ ソ

低二上り調子

一 二 三
ハ レ ハ ←
□ レ □

三上り調子

一 二 三
ハ ← ハ
□ レ □

本調子

一 二 三
□ → ハ
□ レ □

右の中三上り調子とあるは一下り調子とど申します、と云ふのは

低二上り

一 二 三
ハ レ ハ
（三を上げると三上り）

三上り

一 二 三
ハ ← ハ
□ □ □
一下り

本調子

一 二 三
□ → ハ
□ レ □
（一を下げると一下り）

即ち矢の方向に向つて其絃を動かすと三上りが出来るので、本調子から行く場合もあるから一下り調子とど云ふのです。どちらにも使つてゐますから、どう唱えても構ひません。之は低二上り旋律と本調子旋律とを混じて使用してゐるのであります。又三下り調子は

低二上り

一 二 三
ハ ← ハ
（一を上げる）

三下り

一 二 三
□ ← ハ
□ レ ハ

本調子

一 二 三
□ レ □ →
（三を下げる）

低二上りから云へば一上りとでも云ふべきどのですが、一上りと云ふ言葉は使つてゐません。右の通りですから、三下りは低二上り旋律と本調子旋律とを混用してゐるどのと見て宜しく、高三下り調子は二上り旋律と高本調子旋律を混用してゐるどのだと云ふ事が出来ます。六下り調子は二上り調子と同じく、二上り旋律を使用してゐると云ふ事であります。

さて斯様に三絃の轉調は一絃宛動かして行くのが原則ですから、低二上り調子から直ちに本調子に移つたり、本調子から直ちに高三下り調子に轉じたりする事は、あり得べからざる事であります。只一つ「梅の月」丈けが低二上りから本調子に轉じてゐるのが例外となつて居ります。

例題二九七　松竹梅の三絃に就て論ぜよ（準一一、二）

答　松竹梅の如き名曲は記憶してゐる様申しました。先づ松竹梅はどんな調子であるか述べなければなりません。最初低二上りから出て手事は三上りとなり、中歌で本調子となり、後歌は二上りと轉調してゐるのであります。之等の三絃の調子はどんな高さであるとか、各絃は律の差がどうであるとか、低二上りに初まつて普通二上りで終るか後者は前者よりも一体に二律上がつたものである事等説明しなければなりません。

例題二九八　三絃二上りの曲が一下り、本調子、高三下りと順次変化する其の轉調の方法を述べよ（準一二、二）

答　之は今説明した処ですから省略致します。二上りとは低二上りの事を指す。

第二節　作譜の仕方

一　旋律の練習

愈々之から旋律の問題に入ります。以上述べました低二上り、二上り、高二上り、二重高二上りと低本調子、本調子、高本調子、二重高本調子の八種の旋律をスラ〳〵に憶えてからこの項に入つて下さい。好い加減の憶え方ではだめです。

イ　旋律の訂正

例題二九九　左記の樂譜を本調子旋律に訂正せよ

甲　レツロハチレツレチハロ、

答　先づ本調子の旋律とはどんなものか知つてゐなければ出来ません、本調子旋律は

レチハロツレレツロハチレ　（上記は讀み易い様に拍子をつけました）

即ちツが上行の時は全音であり、下行の時は半音、チは常に半音で他は全部全音のものを云ふのです、故に左の通り訂正すれば宜しい。

ツ　チ　ツ　チ

レツロハチレツレチハロ、

訂正する時は總べて右の様に不正音譜を消して右傍へ正しい音譜を書く事になつてゐます。若しこんな問題が出たら、この様な書き方をした答案を出して下さい。

例題三〇〇　下記を本調子旋律に訂正せよ　ロレハロレチハレチ、

答　四はツと同律ですから本調子旋律には絶体に使用する事は出来ません。

答は下記の通りです　四ヒハ四ヒヤ夭レ夭ヤヒヤ夭、

例題三〇一　下記を二上り旋律に訂正せよ　ロツレチハロロハチレツロ

答　二上りの旋律は御承知の通り　ツロハチレツレチハロツレチ、ですからツは半音で下行の時はハ上行はハである事を忘れてはなりません　ツロハチレツレチハロツレチ、

例題三〇二　下記を低二上り旋律に訂正せよ　甲　ロツレチハチレツレチハチレ、

答　低二上り旋律とは左の通りです　ハロツレチハ　ハチレツロハ　即ち口は常に半音であり、チは上行の時はカリ下行の時は半音です、故に左の通りに直せば宜しい、

ロツレ夭ハ夭レツレ夭ハ夭レ、

例題三〇三　下記を低本調子旋律に訂正せよ　甲　ロツレツロハチレツレチハロ、

答　之は低本調子旋律を知つてゐなければ出来ません、夫れはツレチハロツ　ツロハチ大分憶えるのに厄介です、確つかり憶えて下さい、答は次の通りです。

ロレロチレレチロ、

中ツヒツ中ハ夭ヒツヒ夭ハ中、

例題三〇四　下記を高本調子旋律に訂正せよ　甲　レツロハチレツレチハロ、

答　高本調子旋律は下記の通りです　チハロツレチ　チルツロハチ　ですから答は

ヒツロヤチヒツレチハロ、

例題三〇五　下記を高二上り旋律に訂正せよ　甲　チレツロハチハロツレチ、

答　高二上り旋律は下の通りです　ツルチハロツ　ツロハチルツ　故に答は次の通り

チヒツ中ヤチハロヒヒチ、

以上何旋律に訂正すると云ふ問題は大抵御判りでせう、全部の旋律を知つて居れば判らぬ事は決して無いのです。今一つ問題をやつて見ませう。

例題三〇六　下記を如何に訂正せば宜しきや　ロレツロハチレチロハチレツ、

答　問題は如何に訂正するかとあつて甚だボッとしてゐます。訂正しようと思へばどの旋律にでも訂正出来るのです、こんな場合には一番少けなく訂正して完全な楽譜となつた方が一番よい答なのです。今本調子にすれば

ロヤツロヤ夭レ夭ロハチレツ、　合計六つ

合計六箇処訂正しなければなりません。二上りにすれば

ロヤツロハチレチロヤ夭レツ、　合計五つ

合計五箇処訂正します。高本調子ならば

ソ
ソ

□レ ソ□ ハ チレ チ□ ハ ヘ ソ ソ ヘ チレ

合計四つ

尤もレはルとして大メリにすべきで、そっすれば合計五つとなりますが、ルのメリは省略しても構はないのですから、これならばまあ訂正四箇処で済みます。故に高本調子旋律に訂正したのが一番宜しいでせう。

ロ　音律の練習

例題三〇七　左のソは旋律上八寸管で何律か

(一) レ ソ□
(二) レ ソ□
(三) レ ソ□
(四) レ ソ□
(五) □ ソ レ
(六) ロ ソ レ

答 (一) レ ソ□は本調子律であります、尤もニ上り旋律と見れば差支ありませんが其訳は作曲の章で説明致します、故に本調子下行旋律はレッ□でッは半音であるべきですからソは断金律が正当であります。

(二) レ ソ□は低ニ上り旋律の下行レソ□ですから
(三) レ ソ□は低本調子旋律ですから勝絶律です、尤もルソ如ならば高ニ上り旋律ですから平調律となるのですが別にメリ記号がありませんから低本調子と見れば宜しい。（但し平松氏の説に依れば〇ん本旋律は無い事になりますが今は練習の為にあるものとしておきます。例題三〇八の(四)(五)と同様）
(四) レ ソ□はこん本旋律がありません、ルソ□本ならば高本調子旋律ですからソとなり平調

ですがメリ記号がありませんから答えられぬ訳です。
(五) □ ソ レは本調子旋律と見れば勝絶律ですがニ上り旋律と見れば断金律です。然し先きに云つた通りこは本調子旋律丈けのものですから勝絶律で宜しいのです。
(六) ロ ソ レは低ニ上り旋律ですからソは勝絶律です。

問題に指定してない限りは実際は答丈け書けば宜しいので、理由は別に書く必要なし。

例題三〇八　左の人は八寸管にて何律か

(一) □ 人 チ
(二) ロ 人 チ
(三) □ 人 チ
(四) 〇 人 チ
(五) ロ 人 チ
(六) チ 人 □

答 (一) □ 人 チは本調子旋律ですから□ 人 チで人は全音、答は神仙律であります。

(二) ロ 人 チこん本旋律はありません
(三) □ 人 チは二上り旋律と見れます、即ち□ハチですから鶯鏡。
(四) 〇 人 チは高ニ上り旋律ですから鸞沙律です。
(五) ロ 人 チは低本調子旋律ですから神仙律です。
(六) チ 人 □は二上り旋律ですから神仙律であります、高本調子旋律と見る時は鶯鏡律となります。

この場合は二上り旋律であります。

例題三〇九　左のチは何律か（進一〇・二）

(一) 人 チ レ
(二) レ チ 人
(三) ハ チ レ
(四) レ チ 人
(五) 人 チ レ

答　問題に何寸管とあき場合は常に八寸管で答えたら宜しいのです、そして答には八寸管ですと附記すれば甲し分ありません。(一) 人 チ レは低ニ上り調子下行旋律人ナレです

から半音で見鐘律であります。

(二) レ(チ)ハは低ニ上り旋律レ(チ)ハですから鳥鐘律です。之をニ上り旋律又は本調子旋律と見るのは共に間違ひであります。

(三) ハ(チ)レはニ上り旋律ハ(チ)レですから黄鐘律です。

(四) レ(チ)ハは低本調子旋律レ(チ)ハですから鳥鐘律です。

(五) ダ(チ)レは高ニ上り旋律ダ(チ)ルですから黄鐘律です。

未だレ(チ)と□とをやつて見ませんが、夫れは諸君がやつて見て下さい、若し判らぬところがありましたら御問合せ下さい、こゝには問題丈け書いておきます。

例題三一〇　左のレは何律か

(一) チ(レ)ツ　(二) チ(レ)ツ　(三) チ(レ)ツ　(四) チ(レ)ツ　(五) ツ(レ)チ

例題三一一　左の□は何律か

(一) ハ□ツ　(二) ツ□ダ(ハ)　(三) ツ□ハ　(四) ツ□ハ　(五) ツ□ハ　(六) ツ□ハ

今迄の習慣上全音半音と云ふ言葉を使つてゐますが大きな音譜□とかレを全音譜と申します。又は丸音等とも申す様です。半音とは小さな文字で表はす半音譜の事でツとかレを云ふので、譜の字を略して全音、半音と称します。

ハ　何旋律か

どの樂譜でも被いて直ちにこゝは何旋律かと見分ける頭がないといけません。然し前

に申しました様に例外もありますし、この普通旋法以外の旋律のどの位分あります、例へば十島の曲や春の曲と云ふのは古今旋法と云つて全然違つた旋法ですから、勿論普通旋法丈けしかやらぬ者には説明出来ないのです。然し他の旋法は試驗には出ませんから憶えるは要がありません。大抵は三味線のある曲、本調子やニ上り等と曲の最初に三絃調子を書いてある曲の旋律は皆之れを使用してゐますから、全部説明出来るのであります。今例としてニ三書いて見ませう。

例題三一二　本調子の曲中低ニ上り旋律が途中に入つてゐる例

「本調子旋律」ハ□ツ(レ)ツ。チ(レ)チ(ハ)ヒ(ハ)チ(レ)レ(レ)ツ(レ)ツ□ツ(レ)ツ□ツ(レ)ツ□ハ(ヒ)ハ(チ)チ(レ)ハ(ヒ)ハ(ロ)ツ

「低ニ上り旋律」レ(ツ)リ(ハ)ハ(ハ)ハ(ー)チ(レ)ツ(レ)ツ(レ)。チ(チ)ハ(ロ)ツ(ロ)ツ(ロ)ツ(レ)ハ(チ)レ「本調子旋律」ツ(レ)チ(ハ)ロ

ツ(ハ)チ(レ)レ(チ)。

例題三一三　ニ上り、高調子、ニ上り、本調子、ニ上りの各旋律の混入した例

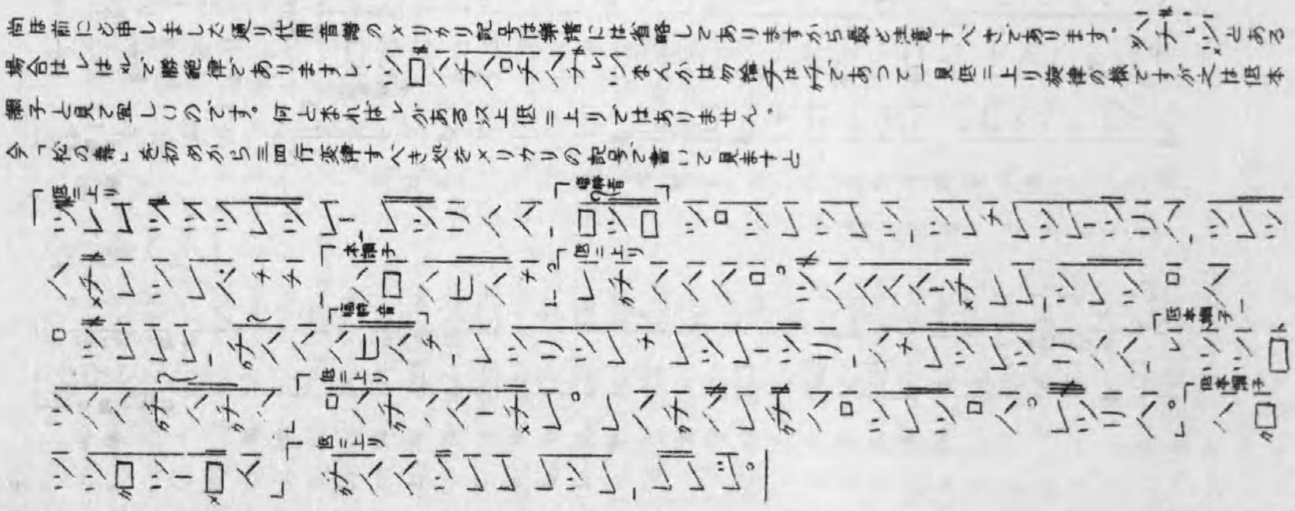
「本調子」ハ□ツ(ヒ)ハ□「ニ上り」ツ□ツ(ハ)□ハ(チ)レ(チ)チ(ハ)□。□ツ(レ)チ(ヒ)ハ(チ)レ、ツ□ツ(レ)ツ□ー(ハ)

チ(ハ)チ(レ)チ(レ)チ。「高本調子」□ツ(レ)チ(レ)ツ(レ)ツ(レ)チ(レ)ツ(レ)チ(ハ)□ツ(レ)チ(レ)ツ(レ)ツ□ハ(チ)レ(チ)ハ(ロ)チ

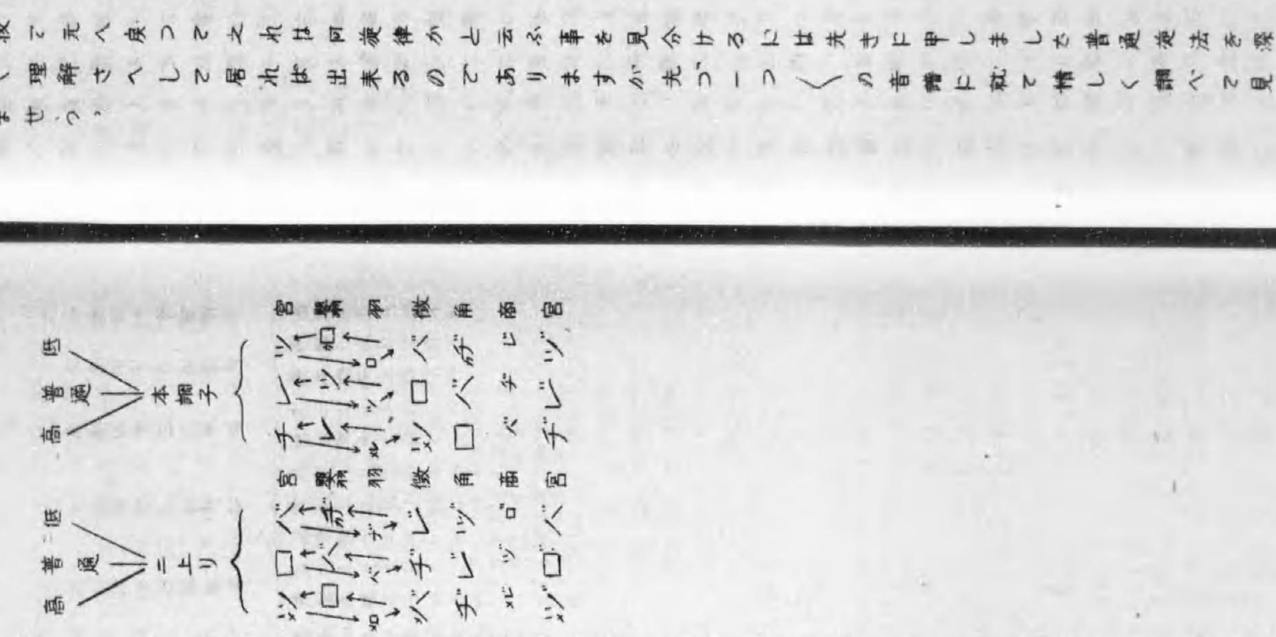
チ(ー)レ(ツ)ロ□。「本調子」ロ(ツ)レ(ツ)レ。チ(レ)チ(ハ)ロ(ツ)レ(ナ)ハ(チ)レ(ー)ツ□「ニ上り」レ(ツ)ロ(ハ)ヒ(ハ)チ(レ)チ

尚ほ前に少し申しました通り代用音譜のメリカリ記号は楽譜には省略してありますから最も注意すべきであります。メリカリとある場合はレはルで略記律であります。ソ□はリカリ記号はメリカリとあるのは勿論ソはソであつて一見低ニ上リ旋律の様ですが之は低本調子と見て宜しいのです。何ともれば□がある以上低ニ上リではありません。

今「松の緑」も初めから三四行変律すべき処をメリカリの記号で書いて見ます。



扨て元へ戻つて之れは何旋律か と云ふ事を見分けるには先きに申しました普通変法を深く理解せべして居れば出来るのでありますが先づ一つ〳〵の音譜に就て精しく調べて見ませう。



右は二重高本調子二重高二上リ旋律は省略しましたが、之等は大体を知つて居れば宜しく、精しく知つてゐる必要がありません。

キ出します。

ハ□を使用する旋律は　低高二上リ上行下行

□を使用する旋律は　普通二上リ上行下行
　高本調子上行下行
　低本調子上行下行

ロを使用する旋律は　低二上リ上行下行
　低本調子下行

ハを使用する旋律は　高二上リ下行

拔いたのであります、拔て右を拔

ッを使用する旋律は（普通本調子下行／普通二上り上行下行）

ツを使用する旋律は（高本調子上行下行／高二上り上行下行）

ツを使用する旋律は（低本調子上行下行／普通本調子上行／低二上り上行下行）

ルを使用する旋律は（高二上り上行下行／高本調子下行／低本調子上行下行）

レを使用する旋律は

レを使用する旋律は（普通本調子上行下行／高本調子上行／低二上り上行下行／普通二上り上行下行）

チを使用する旋律は（普通本調子上行下行／低二上り下行）

チを使用する旋律は（高本調子上行下行／普通二上り上行下行／高二上り上行下行）

チを使用する旋律は（低本調子上行下行／低二上り上行）

ハを使用する旋律は（高本調子上行下行／普通二上り下行／高二上り上行下行）

ハを使用する旋律は（低本調子上行下行／普通本調子上行下行／低二上り上行下行／普通二上り上行）

扨て以上をまとめて一つの定義を求めるならば

メリ音を使用するは高調子物（高本調子／高二上り）に限る

カリ音を使用するは低調子物（低本調子／低二上り）に限る

ッのある旋律は普通調子物（普通本調子／普通二上り）に限る

又部分的に云へば

ツの前後にあるレは必ず大メリ なり

ツの前後にあるロは大メリ なり

ロの前後にあるチはカリ音なり

上行旋律中にッのあるは普通二上りに限る

ツの前後にレがあれば低本調子に限る

ハのある旋律は高二上りに限る

等々で諸君でも定義を発見し天れに依つて確つかりと憶えて下さい。

大正十五年の都山流楽報に中山鹿堂氏が「商徴に依る旋律発見法」と云ふ事を説明して居られます。又諸君の御参考になる事と思ひますから左に掲げておきます、氏は五声の中の二音――即ち商、徴――を見出す事に依つて直ちに夫れが何旋律であるかと云ふ事を知

る事が出来ると説いて居られます。今各旋律の商と徴のみを抜き出して見ますと次の如く成ります。

本調子旋律

	徴	商	
低	ハ	レ	
普通	□	ナ	
高	ソ	ハ	二上り旋律
二重高	メレ	メロ	

	徴	商	
低	レ	ロ	
普通	チ	ツ	
高	メハ	メレ	二上り旋律

丈と成る旋律中に商徴何れかの一音が配置されて居る丈けでも何旋律であるか理解される場合もありますが、夫れでは幾分下確かであり、ある事を見れませぬ。然し一歩進めてそこに商徴の二個の音が短い旋律中から発見されましたる時には、直ちに夫れが何旋律であるかと云ふ事が明確に断言出来るのであります。

本調子旋律の他の三音（宮、角、擧羽）は低二上り旋律にも共通されてゐますが商徴二個が同時に他の旋律に包含されて居る事は絶対に無いのであります。例へば本調子旋律に於ては商（チ）徴（□）でチは低二上り旋律にも含有されて居りますが□は低二上り旋律中には含有されて居りません、又□は二上り旋律、高本調子旋律、高二上り旋律に通有されて居りますけれ共チは通有されて居りません、二上り旋律に於ては商ッ徴チでッは本調子旋律に含有されて居りますけれ共チは本調子旋律には含まれて居りません

チは高本調子旋律高二上り旋律に通有されて居りますけれ共ッは右の三種の旋律にはありません。商徴以外の音は同時に外の旋律に通有されてゐます。例へば本調子旋律の宮

□角レ羽ハはレ角ハ羽ソは何れも低二上り旋律に通有されて居ります。二上り旋律の宮□角レ羽ハは何れも本調子旋律に通有されて居ります。

従つて旋律中商音若しくは徴音の何れかの無い場合は何旋律かを断言する事は出来ないと云ふ事に成るのであります。次に上行旋律中半音、大メリの音譜の存在するものは何れも商音と見做す事が出来ます。（但し低二上り旋律のメロ又唄の節廻し特殊の場合を除く外）又高調子と低調子の旋律は一見してメリカリの音譜が活躍して居りますから解りますが、二重高調子に成ると一見したのでは解り難いのであります。メが此の商徴に依る発見法によると商音メ徴音メレ（但し楽譜には二音ともメリの記号を略してあります）の附近にソメハの配列された箇所で高調子の旋律である事が直ちに解ります。之は青柳の楽譜最後の頁七行目より八行目に亘りて配列されて居ります。あの場合別に考へずとも右の二音を発見さへすれば夫れが二重高本調子旋律である事が直ちに判ります。故に初心者が何旋律であるか早く見出さうと思つた時には先づ一旋律中の商音、徴音の二音を暗記してゐる事であります。便宜の為左に何旋律であるかを商徴に依つて操知する例を挙げて見ませう

低二上り旋律

	徴	商
甲	ハ	チ
甲	レ	ツ

本調子旋律

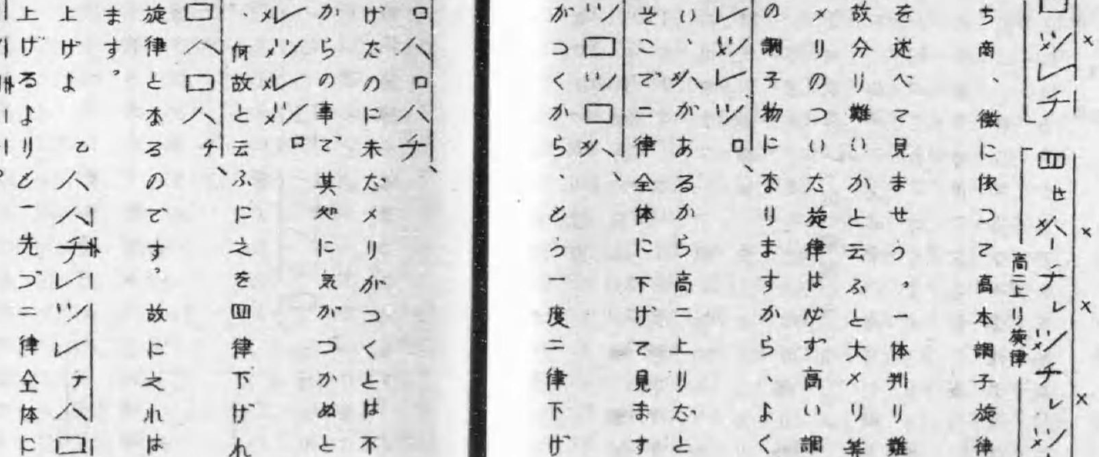
	徴	商
甲	ハ	チ
甲	レ	ツ

二上り旋律

	徴	商
甲	ハ	チ
甲	レ	ツ

高本調子

右は一例に過ぎぬのでありますが拍子外の下の音即ち低二上り旋律の商音、又本調子旋律の徵音が配列されて始めて何旋律なるか一見して解るのであります、尚ほ次の旋律に依つて説明するに



之ども印のある箇所即ち商、徵に依つて高本調子旋律か高二上り旋律であるか判るのであります。

どう一つ私の発見法を述べて見ませう。一体判り難い旋律は高調子物か二重高調子物かであります。之は何故分り難いかと云ふと大メリ等の記号が省略してあるからなのです。之を発見するにはメリのついた旋律は必ず高い調子のものですから二律宛一体に下げて見れば殆には普通の調子物になりますから、よく判るのです。例へば

之れは何旋律か判らない、があるから高二上りだと思ふけれ共、高二上りはチであつてチではありません、そこで二律全体に下げて見ますと

となります、未だメリがつくから、どう一度二律下げて見ませう。

これで最初から四律下げたのに未だメリがつくとは不思議でありますが、之は樂譜面に大メリ音を省略してあるからの事で其処に気がつかぬといけません、即ち

でなければなりません、何故と云ふに之を四律下げれば

となつて立派な本調子旋律となるのです。故に之れは普通本調子から四律上がつた二重高本調子なる事が判ります。

「下記を全体に四律上げよ

こんな時は一度に四律上げるよりも一先づ二律全体に上げて見る事です、二律上げれば

そこで更に二律上げれば

右のレと云ふのはレと同律であります、だからレとしても宜しいのですが前にも申しました通りレでは半音のみ違いて面白くありません、そして之れを実際に樂譜にのせる時は左の如くにメリを省略するから全音なるかの如くに見えます、これが普通となつてゐます。

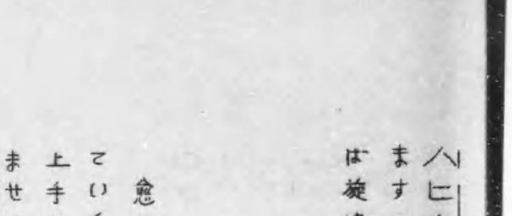
何故樂譜にはこの代用音譜丈けのメリ記号を省略するか、私の考へ丈けでは単に繁雑になるのをさける丈けの事かと思ひます、要するに斯うした問題では一度に四律上げるよ

リニ律宛上げた方が宜しいのであります。

低ニ上リ旋律を高ニ上リ旋律に訂正せよとか、低本調チ旋律を高本調チ旋律に訂せよと云ふ問題も之と同じ様ニ二律宛上げて行けば宜しいのです。

例題三四　下記低ニ上リを高ニ上リに書き改めよ

答　右を高ニ上リにするとしても先づ二律上げて普通ニ上リとします。之を更ニ二律上げれば愈々答となります。



乙　ハ　ハ　チ　ル　ソ　チ　ソ　ロ　ソ　チ　レ　ソ　ソ　ソ　ソ　ロ　ハ。

乙　チ　チ　レ　ソ　ロ　レ　チ　ハ　ロ　レ　ソ　ロ　ロ　ロ　ロ　ハ　チ。

之れで宜しいのですが、最格に云へば未だ間違ひがあります、夫れは八八八ーチレ。のチは本当は下行旋律ですからチ即ち半音本のです夫れを二律上げればハであり又二律上げれば人或はロです、故ドソソソーロハ。とするのが正当であります。

例題三五　下記を倍の柏子に書き改めよ

答　先づ全体の柏子数を数へて見ます、ところ八柏子あります、そこで半柏子を一柏子に、一柏子を二柏子に書き改めますと八チレソロハチレハヒハロー。の十六柏子で宜しい。

例題三六　下記を倍の柏子に書き改めよ

答　然しこの場合八ヒハロソレレレソロ、子に本つてゐるから宜しい様なものゝ、未だいけないのです、何故かと云ふとレレレソではソが全音に本つて既に旋律が誤まつてゐます。然かも事実吹奏する時は決して八ヒハロソレレレーソロ。とはやりません、八ヒハロソレレレソロ。と吹くのであります、故に書き改める時も其通り八ヒーハロソレレレソロ。が正当本のです。こうすれば旋律の誤りも本くなります。此点間違はぬ様にして下さい。

二　作譜の練習

愈々作譜を講義致します。作譜は計算問題の如くに答が一つしか本いと云ふのと違っていくつでも適当本答が出ます。其中の好いものを自分の答とするのゝ、こゝに其人の上手下手に依つて得点に於て同じ及第点でも大本る差が出来るものと思はなければなりません、作譜は其人の天分が表はれるものですが、天分が本くとも練習次第で立派本ものが作れぬ事はありませんからよく研究して下さい。

イ　欠譜

欠譜とは前後の旋律を調べて欠譜箇処へ適当本音譜を挿入する事です、然し只どん本譜でも入れると云ふ訳には参りません、必ず旋法に当て嵌まつてゐなければなりません。それでゐて前後スラ〳〵と續いてゆかねば本ニ竹を接いだ様では何にも本りません、とにかく何旋律か調べてかゝるのが最も大切本事です。

例題三七　ヘ〇レへ適当に作譜せよ。

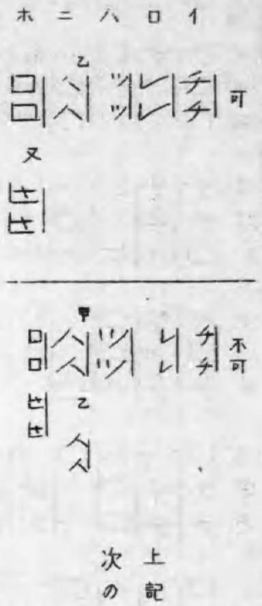
答　先づ何旋律が調べ本ければ本りません、之は先づ下行旋律と見た方が宜しい、人とレが全音のどのは何があると云ふと、本調子旋律と低二上り旋律とがあります、まあ本調子と見るのが一番無難でせう、で下行本れば当然チが入れば一番自然であります何故自然かと云ふと、レツ〇ヘチレの本調子下行旋律の一部分であるからです、之れより自然本るのはありません、では答はチで宜しいが他の音譜ではいけ本いかと云ふと、いくらでもありますヘレとしてレを入れてと差支へありません、或ひはヘ〇レとしてヘを入れてと宜しいヘレとして〇を入れてと宜しく又ヘレでと宜しく、チの代りにウと適当です、又〇の代りにヒと悪くありません、然し、チを入れては旋律上不可です。

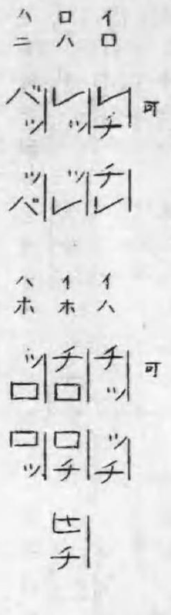
例題三八　ロヘ〇〇ヘチレへ適当に作譜せよ

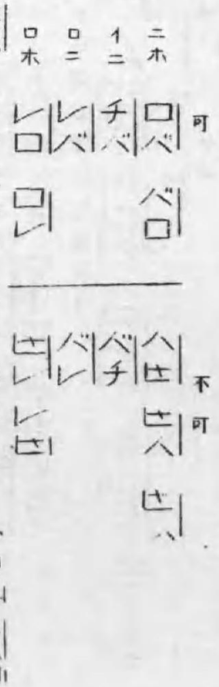
答　これは何旋律かと云ふと低二上り旋律です、何故と云ふと本調子本らば〇ヘと〇が全音であり、二上り本れば人は半音、低本調子本れば〇を使ふがレは半音であります、故に低二上り旋律本る事が推定されます、低二上りと定まれば〇ヘ〇〇ヘチレ等としたら大変不間違ひ、又〇ヘ〇ツとかいけませんこゝは〇〇とかチヘ位が適当で其中から五種選んだら宜しいのです。

例題三九　甲　チ〇〇〇へ適当に作譜せよ

答　斯うした問題は拍子が限定されてゐますから、又譜としては一番容易本るのであります、即ち音譜のみを旋律に合ふ様に考慮すれば宜しい事になります、之は高本調子旋律と見た方が一番無難です、従つて左の五種の形が得られます。







右の不可の部は殆ど旋律の誤まりですが甲チヒヘは下行旋律として至極適当ですが甲チヒヘ〇ではヘと〇との續き具合が悪しくせめてチヒヘレ位本れば宜しいですが、掛け離れ過ぎてゐますから、面白くありません、又ハを使用してと作る事が出来ますヘレハチチヘ

リれば
ません。
尚、
但(只)の組合せに於て
吹奏上
で
ど
さ
ど
四
題
三
三

呉に沢山あります・此の外にハを使用して未だ作れます、

(一)(二)(三)(四)(五)(六)(七)(八)之を種々組み合はせて次の如くに多数の形を得る事が出来ます。

(一) 答 四題三三上り旋律で矢張り五種の形が得られます。

(二) 甲 ハの次が下行ですから一向差し支へないのであります・

(三) 乙 ハの次が上行ですから一向差し支へないのであります。

(四) 丙 ハの次が上行ですから一向差し支へないのであります。

(五) 丁 ハの次が上行ですから一向差し支へないのであります。

(六) 戊 ハの次が上行ですから一向差し支へないのであります。

(七) 己 ハの次が上行ですから一向差し支へないのであります。

(八) 庚 ハの次が上行ですから一向差し支へないのであります。

(九) 辛 ハの次が上行ですから一向差し支へないのであります。

(十) 壬 ハの次が上行ですから一向差し支へないのであります。

(十一) 癸 ハの次が上行ですから一向差し支へないのであります。

(十二) 子 ハの次が上行ですから一向差し支へないのであります。

(十三) 丑 ハの次が上行ですから一向差し支へないのであります。

(十四) 寅 ハの次が上行ですから一向差し支へないのであります。

(十五) 卯 ハの次が上行ですから一向差し支へないのであります。

(十六) 辰 ハの次が上行ですから一向差し支へないのであります。

(十七) 巳 ハの次が上行ですから一向差し支へないのであります。

(十八) 午 ハの次が上行ですから一向差し支へないのであります。

(十九) 未 ハの次が上行ですから一向差し支へないのであります。

(二十) 申 ハの次が上行ですから一向差し支へないのであります。

(二十一) 酉 ハの次が上行ですから一向差し支へないのであります。

(二十二) 戌 ハの次が上行ですから一向差し支へないのであります。

(二十三) 亥 ハの次が上行ですから一向差し支へないのであります。

(二十四) 子 ハの次が上行ですから一向差し支へないのであります。

で
吹奏上
(二)
(四)
(六)
(八)
(十)
(十二)
(十四)
(十六)
(十八)
(二十)
(二十二)
(二十四)
(二十六)
(二十八)
(三十)
(三十二)
(三十四)
(三十六)
(三十八)
(四十)
(四十二)
(四十四)
(四十六)
(四十八)
(五十)
(五十二)
(五十四)
(五十六)
(五十八)
(六十)
(六十二)
(六十四)
(六十六)
(六十八)
(七十)
(七十二)
(七十四)
(七十六)
(七十八)
(八十)
(八十二)
(八十四)
(八十六)
(八十八)
(九十)
(九十二)
(九十四)
(九十六)
(九十八)
(百)
(百一)
(百二)
(百三)
(百四)
(百五)
(百六)
(百七)
(百八)
(百九)
(百十)
(百十一)
(百十二)
(百十三)
(百十四)
(百十五)
(百十六)
(百十七)
(百十八)
(百十九)
(百二十)
(百二十一)
(百二十二)
(百二十三)
(百二十四)
(百二十五)
(百二十六)
(百二十七)
(百二十八)
(百二十九)
(百三十)
(百三十一)
(百三十二)
(百三十三)
(百三十四)
(百三十五)
(百三十六)
(百三十七)
(百三十八)
(百三十九)
(百四十)
(百四十一)
(百四十二)
(百四十三)
(百四十四)
(百四十五)
(百四十六)
(百四十七)
(百四十八)
(百四十九)
(百五十)
(百五十一)
(百五十二)
(百五十三)
(百五十四)
(百五十五)
(百五十六)
(百五十七)
(百五十八)
(百五十九)
(百六十)
(百六十一)
(百六十二)
(百六十三)
(百六十四)
(百六十五)
(百六十六)
(百六十七)
(百六十八)
(百六十九)
(百七十)
(百七十一)
(百七十二)
(百七十三)
(百七十四)
(百七十五)
(百七十六)
(百七十七)
(百七十八)
(百七十九)
(百八十)
(百八十一)
(百八十二)
(百八十三)
(百八十四)
(百八十五)
(百八十六)
(百八十七)
(百八十八)
(百八十九)
(百九十)
(百九十一)
(百九十二)
(百九十三)
(百九十四)
(百九十五)
(百九十六)
(百九十七)
(百九十八)
(二百)
(二百一)
(二百二)
(二百三)
(二百四)
(二百五)
(二百六)
(二百七)
(二百八)
(二百九)
(二百十)
(二百十一)
(二百十二)
(二百十三)
(二百十四)
(二百十五)
(二百十六)
(二百十七)
(二百十八)
(二百十九)
(二百二十)
(二百二十一)
(二百二十二)
(二百二十三)
(二百二十四)
(二百二十五)
(二百二十六)
(二百二十七)
(二百二十八)
(二百二十九)
(二百三十)
(二百三十一)
(二百三十二)
(二百三十三)
(二百三十四)
(二百三十五)
(二百三十六)
(二百三十七)
(二百三十八)
(二百三十九)
(二百四十)
(二百四十一)
(二百四十二)
(二百四十三)
(二百四十四)
(二百四十五)
(二百四十六)
(二百四十七)
(二百四十八)
(二百四十九)
(二百五十)
(二百五十一)
(二百五十二)
(二百五十三)
(二百五十四)
(二百五十五)
(二百五十六)
(二百五十七)
(二百五十八)
(二百五十九)
(二百六十)
(二百六十一)
(二百六十二)
(二百六十三)
(二百六十四)
(二百六十五)
(二百六十六)
(二百六十七)
(二百六十八)
(二百六十九)
(二百七十)
(二百七十一)
(二百七十二)
(二百七十三)
(二百七十四)
(二百七十五)
(二百七十六)
(二百七十七)
(二百七十八)
(二百七十九)
(二百八十)
(二百八十一)
(二百八十二)
(二百八十三)
(二百八十四)
(二百八十五)
(二百八十六)
(二百八十七)
(二百八十八)
(二百八十九)
(二百九十)
(二百九十一)
(二百九十二)
(二百九十三)
(二百九十四)
(二百九十五)
(二百九十六)
(二百九十七)
(二百九十八)
(三百)

答　斯うした問題ではこの短かい拍子の間で、これは何旋律か一見して解る様な適当な音譜を埋めなければなりません、例へば□ハ□レ。と入れるとすると二上りとも見えます。之では面白くありません、矢張り調子の気分の出るものが宜しい本調子とも見えます、之では面白くありません、矢張り調子の気分の出るものが宜しい其代り一つ作れば他は単に各音譜を幾律か差を持たせたら全部の旋律を表はす事が出来ます。例へば今答として本調子旋律で□ハ□チレ。を入れませう、そうすると次の通りの各旋律で答えられます。

低本調子　乙ハ□チ□レ□ツ□。

低二上り　甲レ□ツ□ハ。

本調子　甲□ハ□チ□レ。

二上り　甲□チ□レ□ツ□。

高本調子　甲□ツ□ハ□チ□。

高二上り　甲□ハ□チ□レ□ツ□。

例題三三　○○○○○○○。各旋律にて作譜せよ。

答　之は三二二の問題が解れば只夫れが拍子数が多くなつたと云ふ丈けです、然しこゝにある拍子外の音譜は何か用が入る様に作れば、各旋律の気分を最とよく表はす事が出来ます。この事は後述致します、で今この拍子外を角として、本調子甲□レ□ツ□ハ□チ□レ。で表はす事としませう。之は一例に過ぎません。

低本調子　乙ハ□ツ□ハ□チ□レ□ツ□。

本調子　甲□レ□ツ□ハ□チ□レ。

高本調子　甲□ツ□ハ□チ□レ□ツ□ハ□チ□。

例題三四　□（一拍子作譜）チ

答　扨て今迄は拍子が確定してゐましたから音譜のみ考慮すれば宜しかつたのですが今度は一拍子入れよと云ふものゝ□は□□　□□□　□□□□何れも一拍子で、拍子の変化と共に音譜の変化を加へたら実に多種となるのであります。今平易な答を出して見ませう。大体之は本調子旋律と見て宜しい、従つてチを入れて□（ハ□チ）チ　又は□を入れて□□ハ□チ　チハ　ツハ等は半拍子物としては適当でせう然しツハを入れて□ツ□ベ□チとするは旋律の誤りとなつていけません。□ツ□迄上行ベトチは下行と見るは理窟で、全体を下行にするのが至当であります、今上行とすれば□ツ□レ□チ□チ等になりますが、どつと長い曲節ならば一ザ知らず、漸く三拍子位の物では甲乙が續きません、この□は勿論甲音ですから、今上行にすれば□チ丈けが乙音中に取り残されて續かうとしません。大体作譜法なるものは前後の音譜と續いて行く様に作るのが主旨なのです、「□（一拍子）作譜」なんて云ふ問題は決してありますまい。もし此の場合□と一拍子との間の續き具合で作譜は出来ぬ事はありません、然し大れではアトが續かぬ為に変なものになります。□ハ□チ□チ□チ□チなんかと作譜しても、作譜の意義が半分なくなつてゐますから作譜の價値はありません、故に前の譜□と後の譜□とをうまく結びつけてこそ初めて答としての資格があると云はなければなりません。□（ハ□ハ）チ　ハ□□ハ　□ハ□ハ辺りも宜しいでせう。

例題三五　甲レ（一拍子）□に作譜せよ

答　之は本調子旋律と見て宜しいでせう、そしてレ○□なれば又譜の箇処はツ辺りか下行旋律として適当であります。又レや□も宜しくチなればレよりも上行とおつて適

当でありません、然しチレとすれば下行に成って良いと思ひます・ハは不適当ですがベ
なれば宜しいでせう、一方拍子には次の如き多種を得られます、便宜上ッを以って表は
して見ませう、ツ ツツ ツツツ ツツツツ、ツツ、ツツ ツツツツ 其他あります・之等の拍子
と各音譜とを組み合せたら実に多数の答が得られますがこゝには良いと思ふものを見ま
せう、レツ ハツ ヘハヒハ ヘハハハ ヘハチハ ロツレツ ロハヒハ ヘチハ ロツレツ ツレチハ ヒハヘハ ヘチハ ロハヒハ ヘチハ ロツレツ ツレチハ ハチハ ハチレツ レベベ レツロハ レレツ
レレレツ は之でも宜しいが レレレツ が正当でせう、大体此のツは実除は拍子外の如くに吹奏
するのでそれで良いのですが旋律上から云へば明らかに誤りであります、若し又 レレレツ
の各音を平等の十六分音符として吹奏するならば絶体に不可であります。又ツレと入れ
る事は本調子旋律上行として之が正当であります・故に此の場合ツレと入れる事は誤り
であります、此時はツレとしてスリ上げを入れゝば間違ひとはなりません、次に甲ツツツ
と入れたりする事はレに対しては上行となって至極適切ですが最後の音譜ロに対しては
無價値となって了ひます、故にツは不可であります、又甲乙が悪くて繋がるものは、
ツレチハ 甲ヒハ 乙ハ 甲ハヒハ 等で之等は答としては不可です・右のツレチハはツレチハとして ハ
を乙音にすれば宜しいのです。

例題三六 ハ（二拍子）ツ 作譜せよ

答 之は矢張り下行旋律と見なければなりません、そしてハとツは半音である以上
これは普通二上り旋律である事は間違ひありません・すればヒハ（チレ）ツ 辺りが宜しいで

せう・之を装飾して ハ（チレチレ）ツ と良く ロハチレ と入れたら更に良く、やさしい処では、
チレ レチ レツ 等でせう。

斯様に欠譜は愈々作譜すると云ふ本来の性質を帯びてゐますから試験にはよく出ます
今後とも吟味出る事と信じますから充分練習をして貰はねばなりません、処がこゝにどっ
と難かしい欠譜があります、これこそ頭を要する事です、次を御覧下さい。

例題三七 ヒツレチハロハチ（二拍子作譜）チーレツロ。

答 之は何故難かしいと云ふとツレチハロハチ は本調子旋律であります、然るに
チーレツロ。は本調子ではなくて二上り旋律なのです、して見ればこの二拍子を作譜する間
に調子を変へなければなりません、調子を変へる事は仲々難かしく之は作曲の章で申す
事とし、とにかく下記の様なものを入れると宜しいのです。レチロハ又は レチハレ

例題三八 甲レ（二拍子作譜）リ

答 之は低二上りと見れば宜しいのです、リとある場合は レツリ といつた方が一番
適当かと思はれます。まさか 甲レレツリ とやっても良いと思はれる方もありますまい、ツリ
とやるならばむしろツレツリ の方がズツと宜しいでせう、従って之れ以外の音譜はリに
は続きません、チリとハリとだめです、只リリと繋げるなら、レレツリリとして宜しいで
せうが レレレツリ に越した事はありません・処で（レレツ）の二拍子を種々と変化させます
と、答として良いものがいくらでも出来ます・ツレツレツ ツチレツ ハチレツ ハチレツレツ
ツレチツレツ チレツチレツ 等でせう、之は初めのレを装飾したのですが、後のレツを変化せし

むれは チ|ソ|レ|レ|ソ| ハ|チ|レ|ソ|レ|ソ| チ|レ|ソ|チ|レ|ソ| ハ|チ|レ|ソ|レ|ソ| ソ|レ|ハ|チ|レ| 等が出来ます。

ロ　盛り込み

愈々盛り込みの練習をやりませう。盛り込みは疎より密に、即ち細らい音を細かくする事です、入れ手と云ふのがあります、それは必ず弱声部即ち裏拍子の箇所へせなければなりません。

例題三九　甲 レ|ソ|レ|ロ|。ハ|チ|レ|。に入れ手せよ。

答　今弱声部へのみ入れ手をしますと、甲 レ|ソ|レ|ロ|ッ|ロ|。ハ|チ|ハ|。となります、これは本調子旋律と見たのです。如何なる場合でも何旋律か勿論見なければいけません、で本調子旋律なれはいくら入れ手をしても矢張り本調子旋律でなければなりません。替手を作る場合でも同じ事です、本調子旋律に替手を二上り旋律で作つたと云ふ事は絶体にない事であります。この事はよく憶えて貰はねばなりません、尚ほ最密に申しますと、入れ手は休止符に手を入れたものであります。盛り込みは休止符でなくて単にあらゆる手を細かくする事を云ふのであります。と云つても主として弱声部を変化さすので強声部の音は細かくしても其の音の形が何か残つてゐなければなりません。然し試験には其の区別はして居りません。入れ手でも盛り込みでも様はないのであります。でも如何に手を細かくしたつて別に拍子が多くなるのではありません、原譜が十拍子あれば盛り込んだ譜も十拍子なければいけないのであります。扨て元へ戻つて只今の入れ手をもつと細

かくして見ますと 甲 レ|ハ|チ|レ|ソ|ロ|ッ|ロ|ハ|チ|ハ|ハ|チ|レ|。之をもつと細かくしますと 甲 レ|ソ|レ|ハ|チ|レ|ソ|ロ|ッ|ロ|ハ|ッ|ロ|ハ|チ|レ|ソ|レ|。となります。之はほんの一例に過ぎません、非常に沢山の適当な答が得られます。

例題三〇　甲 レ|ロ|に盛り込みせよ。

答　大体作譜の仕方は易より難に、順次に沢山作つて見る方が宜しいので其中から最も良いのを選んだら宜しいのです。難かしいのを只一つ作ると云ふ事は初歩者の取るべき道ではありません。そこで注意しておきたい事は 甲 レ|ロ|とある場合最後の音譜ロは密にする必要がないのであります。何故と云ふにレ丈けレの音譜一箇に対してのみ盛り込めと申されても出来ないのです。レ|ロ|と接續されて初めてレを盛り込む事が出来るのです。此の終りのロにしたつて同じ事でロの次に来る音譜に依つて初めて夫れに接續する可く盛り込むものであるからです。でどう盛り込むかと云ふと 甲 レ|ロ|に対しては、甲 レ|レ|レ|ロ|とする。之でも盛り込みをした事にならなければなりますが平凡すぎます、今拍子の変化を与へて見ませう。(一) 甲 レ|レ|レ|ロ| (二) 甲 レ|レ|レ|ロ| (三) 甲 レ|レ|レ|レ|ロ| の四つが得られます。むと之等は甲音と致しましたが乙音としても構ひません、以上はレに対してレのみを以つて細かくしたのでありますが旋律的の盛り込みは――と申しますと妥当な言葉でないかと知れませんが、其意味は夫々旋法と云ふものがあります、本調子旋律とか二上り旋律とかこの旋律的に音を順に並べる事を意味するのです。例へば本調子ならば ロ|ソ|レ|ナ|ハ と云つた風に並べる、斯うした各音譜接續した並べ方をした盛り込みを意味するのであります

――の作譜は先程掲げたものよりも進歩してゐると申さなければなりません。でこの旋律的の盛り込みをする場合には原譜が何旋律であるかと云ふ事を判断する事が大変必要と成つて来ます。何と成れば以前にも申しました通り如何に作譜をしても旋律が変る事は無いと云ふ原則に違反するからであります。今(一)の形を旋律的に作り変へると次の如くなります。(四)甲レ|ツ|ロ 甲レ|ツ|ロ 甲レ|ナ|ロ 次に(二)の形を直しますと(六)甲ナ|ツ|ロ 甲レ|ツ|ロ

(二)の形から(七)甲レ|ナ|ロ 甲レ|ツ|ロ (四)の形から(八)甲レ|レ|ツ|ロ (九)レ|ナ|ツ|ロ レ|ツ|レ|ロ

甲レ|ナ|レ|ロ (十)甲レ|ツ|ロ|ハ|ロ 等が得られます。扨て今度は音階的の盛り込み――之は和声的を意味するもので宮音に対して徴音を配する云つた風式のの――に就て考へて見ませう

(一)の形から 甲ロ|レ|ツ|ロ 甲ロ|レ|レ|ロ 之等は甲レに対して逆六音甲ロを以つて応じた場合です

(二)の形から 甲ハ|レ|ツ|ロ 甲ハ|レ|レ|ロ 之等はレに対して順六音ハを配した例。(三)の形から

甲ハ|ナ|レ|ロ 甲ヨ|ツ|レ|ロ 甲ロ|ツ|レ|ツ|ロ 等が得られます、然し如何に和声的には宜しくても下記の様式のは盛り込みとしては不可であります 甲ハ|レ|ナ|レ とか 甲ハ|ハ|ハ|ナ|レ 等不可

又レに対する不協和音ツ|チ|ツ等から始まる作譜も不可であります、例へば 甲ツ|レ|ロ

ツ|レ|レ|ツ|ロ 甲ナ|レ|レ|ツ|ロ 等。又この甲レ|ロは本調子旋律と見るのが適当でありますから(五)を

甲レ|レ|ナ|ロとしたり(六)を 甲レ|ナ|レ|ロ とした方(七)を 甲レ|ナ|レ|ロ とする事は不可であります。然しいを レ|レ|レ|ツ|ロ としたり(八)を 甲レ|ツ|ロ|ハ|ロ とする事は何れもツを拍子外として吹奏する場合に限つて差支へはありませんが各音譜を同等の長さで レ|レ|レ|ツ|ロ と吹く場合にはツは本調子下行旋律としては不可でありますから解釈の仕様に依つては

間違ひと申さなければなりません、まあ一番安全な処で旋律的にも音階的にも適してゐるのは(十)甲レ|ツ|ロ|ハ|ロ 辺りが答として下足はありますまい。

例題三三一 甲ロ|ヂ|―に盛り込みせよ、

答 ロに変化を与へると ロ|ロ|ヂ ロ|ロ|ロ|ヂ ロ|ロ|ロ|ヂ ロ|ロ|ロ|ヂ 等・旋律的の盛り込み

ロ|ハ|チ|ロ ロ|ハ|ロ|ヂ ロ|ロ|ハ|チ ロ|ハ|チ|レ|ヂ ロ|ヂ|ロ|レ|ロ ロ|ヂ|ロ|ハ|チ ロ|ヒ|ハ|チ 等でせう。ロ|ロ|ロ|ハ|チ

とする時はこの形は常に三番目のロが延びてハは拍子外の如く吹きますから盛り込みとして差支へありません。和声的の盛り込み

不可の部 ツ|ロ|ハ|チ ツ|ロ|ハ|チ ハ|ロ|チ|ツ|ロ|ロ|ハ|チ 等。甲乙反対にすると悪くありません、例へば、

ロ|レ|ナ|ロ|ロ|ロ|レ|ナ 然しそは初学者はまね始めが宜しいと思ひます。

例題三三二 甲ハ|レ|―に盛り込みせよ

答 ハに拍子の変化を与へると ハ|ハ|レ ハ|ハ|ハ|レ ハ|ハ|ハ|レ ハ|ハ|ハ|レ

旋律的の盛り込み ハ|ナ|レ ハ|ナ|レ ハ|ナ|レ ハ|ナ|レ ハ|ナ|ハ|レ ハ|ナ|ハ|レ ハ|ナ|ハ|レ ハ|ツ|レ

ハ|チ|ツ|レ ハ|ヒ|ハ|チ ハ|ツ|レ|チ ハ|ナ|ハ|ツ|レ 和声的 レ|チ|ハ|チ|レ ツ|ロ|ハ|チ|レ ツ|レ|ナ|ハ|レ 等

不可の部 チ|ハ|チ|レ チ|ハ|チ|ハ|レ ロ|ハ|レ 甲ヒ|ハ|レ 等

右は低ニ上り旋律と見て宜しいですが又本調子旋律と見ても構ひません

例題三三三 甲レ|レ|ロ|―に盛り込みせよ

答 柏子の変化 レ|レ|レ|レ|ロ レ|レ|レ|レ|レ|レ|ロ レ|レ|レ|レ|レ|レ|レ|ロ 斯ういった盛り込みは幼稚ですから、受験者はどつと旋律的に変化さしたものを答としなければなりません。

ら、あとは下書きに移すだけですから、部山流儀の日書きは、大体中に書き上げてしまいます。

問、いつ、どこで、どんな風に書くのですか。

答、それは別に定まった時間はありません。毎日書きたくなければ、何日でも、一週間でも、一ヶ月でも、書きたくなるまで待っています。

問、書き上げるのは、一日何時間ですか。

答、一日三時間、多くて四時間です。

問、三時間、四時間、それ以上書けないのですか。

答、それ以上書けば、必ず、疲労を感じます。

問、疲労を感じたら、どうなさいますか。

答、疲労を感じたら、直ちに、筆を置きます。

問、疲労を感じて、筆を置いたあとは、何をなさいますか。

答、疲労を感じて、筆を置いたあとは、何をなさいますか

の宜しい□ノ□ノ□ノ

答　(一)低ニ上りですから半音故下無　(二)低ニ上りですから全音、断金律　(三)本調子ですから半音、上無律　(四)高本調子ですから大メリ、断金律

例題　三四六　一尺八寸管にて チ|レ ソ/|ロ ハ| と吹奏せば二尺管にてそに合調せしめんと思へば如何なる譜を用ふるや（師二・六）

答　ハ メ チ| ソ/ メ レ/| ソ/ メ ロ|　二尺管で吹くのですから右の各音譜より全体上ニ律上げればよろしい。

例題　三四七　ロ| ソ/ レ は何調子ぞりや（師二・六）　答　低本調子旋律

答　ロ ロ

〃　三四八　レに最とよく協和する音ニ種をあげよ（師一二・二）

〃　三四九　断金管のヂと最とよく協和する八寸管の音譜ニ個をあげよ（師一二・二）　答　ソ/ ソ/

〃　三五〇　八寸管にて吹奏する下の下の楽譜は何律か　甲 ヒ| ハ ソ/ チ ハ| ナ レ（師二・二）

答　神仙、盤渉、黄鐘、盤渉、黄鐘、勝絶、　之は何旋律か確かめてから答ふればよし

例題　三五一　ニ上り上行主旋律の各譜をあげよ（師九・三）　答　ロ ッ レ チ ハ ロ

〃　三五二　ソは如何なる旋律に用ひられるか（師九・三）

答　本調子上行、低ニ上り上行下行、低本調子上行下行、　上行とか下行を云ふのを忘れてはなりません

例題　三五三　チは如何なる旋律に用ひられるか（師九・六）　答　低ニ上り上行　低本調子上行下行

〃　三五四　リは如何なる旋律に用ひられるか（師九・二）　答　低本調子下行　低ニ上り上行下行

〃　三五九　ロは如何なる旋律に用ひられるか（師一〇・六）　答　低本調子上行

〃　三五六　四| ヒ| ハは如何なる調子の旋律なりや（師三・二）　答　高本調子旋律

〃　三五七　八寸管に於ける舊鏡律の音譜は如何なる調子の旋律に用ふるどのなりや（師一二・二）

答　ハ ですから二上り下行、高本調子上行下行

口　華答問題

例題　三五八　七寸管にて下の曲を吹奏する時茨律上如何なる音律なりや、各音符に律名を記せ（師九・三）　甲 ロ ソ チ ハ チ レ ソ

答　右は高ニ上り旋律ですからレは大メリです、上より順に断、勝、下、舊、神、舊、下、勝、

例題　三五九　下の曲の調子は如何、又八寸管にて吹奏すれば各譜の律名は如何（師一〇・六）　ハ ロ ソ チ レ ソ リ ハ ハ

答　低本調子、律名は上より順に神、断、勝、舊、下、勝、上、神、神、

例題　三六〇　甲 チ レ ソ/ ロ ハ チ は如何なる調子の旋律なりや（師二・六）　答　高本調子旋律

〃　三六一　八寸管にて吹奏する時下の楽譜の各律名を記せ（師二・六）　乙 ハ ロ ソ レ チ レ ソ リ ハ

答　低本調子ならばロはカリ、神、断、勝、下、舊、下、勝、上、神

例題　三六二　下の柏子外は八寸管にて吹奏する場合何律となるか又び其理由を述べよ（師九・五）(イ)レ ソ ロ 甲 ロ レ ソ ロ 甲 ハ レ ソ ロ

答　(イ)断金律　之は本調子下行旋律でソは半音の差であります故に断金律が正当なのです。(ロ)勝絶律　之は低ニ上り下行旋律ですから。(ハ)平調律　之は高本調子旋律ですからソはメリ音であります

例題　三六三　磯千鳥一頁三行目迄にて舊鏡律及び神仙律の譜を指摘せよ

答　(こゝゆう問題も出るどのとして平素練習して下さい、分は答は略しておきます

例題　三六四　高ニ下り調子にてソ/ロ ハ とある場合はロはハ寸管にて何律なりや（師八・二）　答　神仙

〃　三六五　二尺管に於ける本調子上行主旋律の各律を順に記せ（師九・三）　答　勝絶ー下無ー舊鏡ー神仙ー断金ー勝絶

〃　三六六　双調管のレを商音としたる管に於ける本調子下行主旋律の音律名を記せ（師九・六）

答　勝絶ー上無ー神仙ー舊鏡ー下無ー勝絶

例題　三六七　旋律上ハロの前後に置かれる音譜二個を記せ（師九・六）　答　ソ/ ソ/

例題三六八　六寸管にて吹奏する下の楽譜の各律名を示せ（師一三・六）　甲 チ|レ|ソ|ロ|ソ|リ|ハ

答　低本調子本れは盤渉ー鳧鐘ー双調ー勝絶ー双調ー断金ー壱越

例題三六九　或本調子三絃の三の絃の十番目のツボは二尺管の八と同律なりされば其三絃に於ける宮音は何律か（師一三九）

答　二尺管の八は奪鐸であります、奪鐸より十律下がれば三絃の三が出ます即ち神仙であります、一方本調子の宮音はレ

ニの絃に当ります、神仙が三の絃から二の絃は勝絶ですから答は勝絶律

例題三七〇　六寸管の高二上りの商音は何律か（師一三・九）

答　右は口述問題であります、高二上りの宮は以で商はソです。六寸管のソは双調です。

例題三七一　二尺管にて奏する下の音譜の律名如何（師一三・一二）　甲 レ|ソ|ロ|ハ|チ|レ

答　勝絶ー上無ー神仙ー奪鐸ー下無ー勝絶

例題三七二　□を宮音としたる笛の角音は六寸管の夕と同律なり、されば其管にて六段調を合奏せし三絃の三の絃の十番目のツボは何律なりや

答　六寸の夕は勝絶であります、扨て宮と角とは五律の差があります、故に角が勝絶なら宮は神仙で然かど其管の□であります、次に六段は三絃は本調子であります、故に三の絃は神仙ですから十律昇れば答奪鐸律が出ます。

例題三七三　一尺五寸管のレを宮とせば其徵音は八寸管の何譜に当るや（師一三・一二）

答　之は口述問題であります。宮と徵とは七律の差があります、五寸のレは奪鐸ですから七律昇れば答勝絶律が得られます。

例題三七四　六寸管のチを宮音としたる二上り調子の曲を合奏せし三絃の二の絃に於ける黄鐘律は何れのツボなりや（師一三六）

答　六寸のチは盤渉であります、二上りの宮は一の絃であります、故に二上りの一は盤渉であります、之より七律昇れば二の絃の律下

無が出ます、下無と黄鐘とは二律の差がありますから答は三番目のツボであります。

例題三七五　下の楽譜は三絃の如何なる調子の曲なりや（師一四・三）　甲 ヒ|ソ|チ|ヒ|ソ|チ|レ|ソ

答　之は高二上り黄律です、故に高二上り調子、高三下り調子の曲です。

例題三七六　平調律を宮としたる二上り三絃の二の絃の六番目のツボは二尺管の何譜に当るや（師一四・二三）

答　三絃二上りの宮は一の絃です、一と二とは七律の差です、平調は宮ですから一の絃、七律昇れば二の絃盤渉が出ます六番目のツボなれば盤渉から六律昇れば出ます、勝絶とあります、勝絶は二尺管のレに当りますから答はレ

例題三七七　神仙律を宮として「若菜」を奏したる三絃の二の絃の五番目のツボは八寸管の何譜に当るや（師一五・六）

答　若菜は二上りですから一の絃は神仙、七律昇つて双調は二の絃です、五律昇れば奪鐸は五番目のツボに当ります、奪鐸は八寸管のハに当りますから答はハ

例題三七八　或管を以て本調子としたる三絃の二の絃の五番目のツボは壱越律なり其管のレは二尺管の何譜と同律なりや（師一五・一〇）

答　之は黄律の問題ではありませんがこゝで述べます、壱越より五律下がれば黄鐘、之が二絃の二の絃であります、然かと或管のレに当ります、之は二尺のソに当りますから答はソ

例題三七九　九寸管を以て下の如く奏する音譜は楽理上何律なりや（師一五・一〇）　ニ|レ|チ|ハ|チ|レ

答　之は低二上りですから平調ー下無ー黄鐘ー盤渉ー双調ー下無

二　作譜科

例題 三八〇 下の樂譜を本調子淡律に訂正せよ 甲 答

〃 三八一 下の樂譜を佰長調子に書き直せ（師三・三）乙 答

〃 三八二 下の欠譜を補へ（師六・三）甲 乙

答 甲 甲

例題 三八三 左の低二上リ調子の曲を二上リ調子の曲に変せよ（師一〇・六）

答 全部二律足上げれば宜しいのです

例題 三八四 左の空所へ二拍子五種作譜せよ（師一〇・一一）甲（二拍子五種）

例題 三八五 下記の樂譜を訂正せよ 甲

答 (一) (二) (三) (四) (五)

〃 三八六 乙（二拍子作譜四種）（師三・二）

答 (一) (二) (三) (四)

〃 三八七 下記低二上リ調子の樂譜を訂正せよ（師三・六）乙

答 (一) (二) (三) (四)

例題 三八八 乙（二拍子作譜五種）（師三・二）

答 (一) (二) (三) 甲 (四) (五)

〃 三八九 下記を本調子淡律に訂正せよ（師三・三）甲

答

〃 三九〇 下記を二上リに変譜せよ（師三・三）甲

答 甲

〃 三九一 下記を二上リ淡律に訂正せよ（師三・三）甲

答

〃 三九二 下記を二上リ淡律に訂正（師三・九）乙

答

〃 三九三 甲（二拍子作譜五種）

答 (一) (二) 甲 (三) (四) (五)

〃 三九四 下記樂譜に歌詞を付せよ 乙（師三・六）

答 例 乙

〃 三九五 下記を低二上リ淡律に訂正せよ（師三・二）

答

〃 三九六 下記樂譜に歌詞を付せよ 甲

答 例

〃 三九七 作譜（師四・六）本調子

低二上リ

答 例

二上リ

低本調子

本調子 甲

低二上リ 甲

ニ上リ　甲 チ上ハ チ チ チ　但本調チ　甲 ハ ロ ハ チ

例題　三九八　下記ニ上リ旋律に訂正（師一四・六）　ハ ロ ハ チ ハ ロ ハ チ ハ ロ　答 ハ ロ ハ チ ハ ロ ハ チ ハ ロ

〃　三九九　変譜（師一四・六）　チ チ ハ ロ ハ チ ハ ロ ハ チ ハ ロ　本調チに変譜　甲 ハ ロ ハ チ ハ ロ　但ニ上リに変譜

答　本調チ　ロ ハ チ ハ ロ ハ チ ハ ロ　但ニ上リ　チ ハ チ ハ ロ ハ ロ ハ

これは上行ホラ音がホ当るのチ音の盛上がチと慣習とします

例題　四〇〇　作譜　本調チ　ロ ハ ロ ハ ロ ハ ロ ハ チ　ニ上リ　ロ ハ ロ ハ ロ ハ ロ ハ ハ（師一四・一二）

答　本調チ　ハ ロ ハ チ ハ ロ ハ チ　ニ上リ　チ ハ ロ ハ チ ハ ロ ハ チ ハ

例題　四〇一　「黒髪の乱すほれたる思ひ乱れ」迄をチを三絃の一として変譜せよ（師一五・六）

答　黒髪は三下リでロを一としてゐますからチを一とするからは全部を一体にして仕上げて書けばよろしいのです。〃論説譜を見て戴いたらうと思ひます。

甲 チ ハ チ チ, チ チ ハ ロ, ハ ロ ハ, ハ ハ, ハ ハ ハ, ハ ロ ハ ロ ハ, 甲 チ チ チ チ。

例題　四〇二　(イ)本調チにてハ柏チ　(ロ)ニ上リにてハ柏チ作譜（師一五・六）

答　例　(イ)　ハ チ ハ チ ハ チ ハ チ ハ ロ。　(ロ)　甲 チ チ ハ チ ハ チ ハ ロ。

これとチ チ ハ チ ハ チ ハ ロ の盛上がです故上慣習上の半音とします。

例題　四〇三　里の唄「柱ら人ちゆかしタ月の」迄をハを三絃一とする音譜に作譜せよ　答略

〃　四〇四　作譜・本調チ旋律四柏チ二種・ニ上リ旋律四柏チ二種（師一五・一〇）

答　例　本調チ　甲 ハ ロ ハ チ ハ。　ハ チ ハ ロ。　ニ上リ　ハ チ ハ ロ ハ。　甲 ハ ロ ハ チ ハ。

例題　四〇五　下記大譜を棒ハ（師一五・一〇）　甲 ハ ロ ハ ロ ハ ロ ハ ロ ハ チ ハ ロ ハ ロ ハ ロ ハ ロ ハ チ ハ ロ ハ ロ ハ ロ ハ ロ ハ チ

甲 チ ロ ヘ ヘ チ ヘ ヘ ヘ チ

新つした甲この譜は実際に尺八で吹奏して見ると判ることせっが、音度は机の上で作ったものだけの事ですから自然誤まり易いのであります。次に第三の譜件としては、適当なものの、幾つかある中から最も自然な楽譜のまい良いものを選び出すことにせっ、先づ第一の次には リ ヘ ヘ チ ヘ ヘ 甲 ヘ ヘ ヘ 等が適当です、ロ リ リ ヘ チ チ ヘ ロ 等は不適当であります。次のチの次の文譜は、チが甲音にあつた時とヘ音にあつた時とで適不適が出来る譜です。チが甲音の時は ヘ ヘ ヘ ロ チ 等が適当であり、チがヘ音であつた時は ヘ リ ヘ チ ヘ ヘ ヘ チ 等が適当です。次のロヘの下はチ が最も適当で ヘ ヘ ヘ 等も悪くは ありませんが チ に較べると上問題にはなりません、次はヘ ヘ ヘ 甲 ロ ヘ ヘ チ ヘ ヘ ヘ 等が適当です。次は甲 ロ リ リ ヘ リ 等が全しいでせっ。以上の中で最も適当なものを摘入して答と致します。リ ヘ ヘ チ ヘ ロ ヘ チ ヘ

四、題、四〇九　六十音にて吹奏する下の楽譜に合すべき尺八の譜。（師三・六）甲 チ ヘ チ ヘ リ ヘ

答　今六十音の各譜が何律に当るか調べて見ませっ、六十音の面音は平調律ですから次の如くあります。

次に三尺管の各譜は次の如き音律であります

六十音	ロ	ツ	ツ	レ	ン	チ	チ	ヘ	ヘ	ロ	ロ
律名	平	勝	下	双	急	黄	雷	盤	神	上	壱

三尺管	ロ	ツ	ツ	レ	ン	チ	チ	ヘ	ヘ	ロ	ロ
律名	神	上	壱	断	平	勝	下	双	急	黄	雷

故に本問題の吉譜に律名を附し、其律名に相当する三尺管の吉譜を拔き出して見ませっ、

六十管	ヘ	チ	チ	ン	ツ	リ	ヘ
律名	黄	神	壱	雷	急	断	壱

三尺管	ヘ	ロ	ツ	ヘ	チ	ツ	ツ

問題は甲音でしたから、三尺管の今ヒ甲音にせねばなりません。甲 ヘ リ ロ ヘ チ ツ ツ そを正しくのにする時はヘリ音を低くたと三尺管は六十管より四十度にのですから自然上げると答が出ます、こんな事は皇しいのです。答は甲 ヘ ヘ ロ ヘ チ ツ ツ 丸 ヘ チ ツ ツ は皇しいのです。

ちなみに楽譜は無しませんが、誤り易い様に思はれます。

四、題、四一〇　ロ ヘ チ ツ 三拍子 ツ 作譜（師三・三）

答　例　ヘ ロ ヘ ロ ロ ロ　ツ ツ チ ヘ ロ ヘ チ 等

四、題、四一一　欠譜補作（師三・三）　ヘ ○ ○ チ ヘ ○ ○ ○ ツ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ リ ○ ○ ロ チ ツ

答　例　ヘ ロ ヘ チ ヘ ロ ヘ ロ ツ ツ ツ ヘ チ ツ ツ リ ヘ ツ ロ ヘ チ ツ

之れで上巻を終りと致します、将来師匠検定試験を受けられた時、其結果はどうであつたか、又本巻の準備に不満の点がなかつたか、其御感想を詳しく御報知下さらむ事を一重に御願ひ致します。本巻を益々完璧なきに迄に内容を充実さす事は後進者に取つて之れ丈け利益になる事か判りません、後進を善導する事は之れ先輩諸君の義務であらねばなりません、何卒此点将来共御力添へ願ひ度いものであります。

附錄　全曲調査表

――は不明のもの。／は無きもの。調子は總べて略字にて表はす、例へばヰレは箏平調チレを示す。轉調は三絃のみ記す。雲とは箏琴并調子にて尺八は□なるを意味す。山は山田流なり。特とは其曲丈けの特別の調子なり。拍子の欄に「大何頁」とあるは大間拍子に難かしいと云ふ意味なり。音の始終は大体何部とあるものは一部に依りたり。

試驗曲の略号は左の如し。

△師匠千事吹奏試驗に且つて出たもの
▽師匠歌物吹奏試驗曲
○師匠唱譜試驗曲
◎師匠大間唱譜試驗曲
□師匠本曲試驗曲
◇暗譜試驗曲
▲准師範千事吹奏試驗曲
▼准師範歌物吹奏試驗曲
●准師範唱譜試驗曲
◎准師範大間唱譜試驗曲
■准師範本曲試驗曲

尚ほ当方にて「難しくない」とせる曲中に於て諸君に「難しい」と感ぜらるゝ処無きにしもあらざれば一応は全曲に渉つて練習せられたし。

本表は未完成のものなれど今は特日本を爲め其儘掲載する事とせり。

曲名	作曲者	曲の始	曲の終	調子 三絃	調子 箏	轉調	難しい頁 後	難しい頁 拍子	試驗曲	摘要
黒髪	志出市十郎	□	レ	三下	ヰ平レ	/	/	/	▽○	夫を待つ女の情を叙したもの
鶴の声	玉岡検校	□	□	本	ヰ平レ	/	/	/	▽○◇	目出度き曲、鶴に關係本し
芳かり	――	チ	□	二上	ヰ平□	/	/	/	▽○◇	夏の曲、恋歌、曲の途中より怪譜、前半は暑しあるものせ
神香爐	峯崎匂当	人	人	低二	ヰ平人	/	/	/	▽○◇	
ゆき	全	□	□	本	ヰ平レ	/	/	/	▽○◇	闇怨、足想の曲
扇臺	菊崎検校	□	□	二上	ヰ平□	/	/	/	▽	
綾ぎぬ	――	ナ	人	三下	ヰ平レ	/	/	/		
朝とで	村住匂当	□	□	本	ヰ平レ	/	/	/		梅の花を賞美した唄
八十代獅子	藤永検校	□	レ	本	ヰ平レ	/	/	/	○◇	八十代とかはらぬ松は三葉から元気と云ふ意、目出度き曲
露の蝶	歌木検校	□	レ	本	ヰ平レ	/	/	/	▽	
由緣の月	――	レ	レ	本	ヰ平レ	/	/	/	▽○	思はぬ人に落籍されし妓女の嘆き
こすのと	峯崎匂当	□	□	本	ヰ平レ	/	/	/	▽○	初夏の曲、恋歌
柚の露	村住匂当	レ	ハ	低三	ヰ平ハ	/	/	/	○▼	秋の哀れを叙す
菊の露	広橋匂当	チ	□	本	ヰ平レ	本ーニ上	/	/	▽○◇	悲しき歌
七草	津山匂当	ハ	ハ	低三	ヰ平ハ	/	/	/	△▽○◇	
万才	城志賀	ロ	ハ							

| | | |

雪中寸	里絵の月	三の景色	深夜の月	茶吉頭	紅葉盛	歌志集	八千代	歌の曲	末の契	初春	越後獅子	新松豊	竹生島	白の声	常磐の泉	菊水	祝祭の海	横槍	打鑑	横槍	牧獲の野	吉野天人	養老の曲	鶏亀の曲	水郷小唄	悲しい海	秋の部唄	四季の春	川千鳥	新嫌道成寺	常磐木
弟堀検校	房崎匂当	弟堀検校	松浦検校	菊岡検校	津山検校	――	部山師	菊塚検校	松浦検校	光崎検校	峯崎匂当	――	――	山登松鈴山	山勢松鶴山	山登高和山	高野検校	幾山検校	全	光崎検校	木川親敬	全	全	武内検校	全	全	町田嘉章	全	幾山検校	――	幾山検校
レ	□	レ	レ	ツ	上	ツ	□	上	□	□	□	レ	チ	レ	ツ	ツ	□	□	□	レ	ハ	レ	レ	レ	レ	レ	レ	□	□	□	レ
□	チ	□	ハ	レ	チ	ハ	チ	□	レ	□	ハ	レ	□	レ	レ	レ	レ	レ	レ	レ	レ	レ	□	レ	レ	レ	レ	レ	□	レ	□
／	本	／	三下	六下	本	／	／	／	三下	本	三下	本	三上	匹三	三下	匹三	／	本	三下	匹三	三下	／	／	／	／	本	匹三	本	本	今	低三
特□	半雪	特□	平レ	上六レ	半雪	平八	上Aコリ□	平レ	平レ	半雪	平レ	平レ	平□	半雪	啓	雪	特□	特レ	特レ	特レ	半雪	特八	特レ	特レ	特レ	半雪	平八	半雪	半雪	半雪	平八
／	本一三上	／	三下	六下一三下	本一三下	／	／	／	／	千雪	／	／	全雪	一、二	一、二	低一三下	／	低三一本	本一三上	本一三上	／	／	／	／	／	本一三上	低三一三下	本一三上	本一三上	本一三下一本	低三一本
／	一、二	／	一貫	／	全曲	／	／	／	／	千雪	／	／	／	一、二	一、二	一貫	／	／	三貫	三貫	偶奏	／	／	／	／	三貫	／	三貫	三貫	全	／
／	／	／	／	／	全曲	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／
△	○▶	○▶◇	○◇	△▽	○▲●	△▽▶◇	△○	◇△▽▽▶	△▽○◇	△▽	△▽○◇	△▽	△▽○▶	△▽○▶	△▽○◇	△▽○▶	△▽○●◇	△▽○▶	△▽○▲	△▽○▶	○	△▽○▶	△▽○▶	△▽○◇	△▽○▶	△▽○▶	△▽○	△▽○	○	△	△
手書終拍子不正	正伝が三什上樂井歌にて調達する		春吉原の桜に流れ来りし本にて日も代りなる上を来今りしその歌詞から	竹生島の由来を語る物	左の十度の数人文句も代りの変節なし三拍の調子で唄つ		日露戦後の新出来た曲	都山流十五夜年紀念曲									秋の唄														民謡

| | | |

| | | |

寸	村	し	乃	名	所	土	産	吾	妻	獅	子	特	鳥	の	曲	惟	児	櫻	西	行	桜	名	取	川	藤	戸	秋	の	言	葉	秋	の	の	曲
有馬勾当				———				孝崎勾当				梅山検校				菊武検校			菊崎検校			———			———			———			松吉沒検校検校補			
ハ	ロ	低三	平ノ人	ロ	レ	本	平	ロ	四	本	平	チ	チ	／	特ハ	ハ	ロ	／	ロ	チ	／	ロ	レ	ハ	本	三下	平	レ	本	半要	本ニ上ニ高下	半要	本ニ上ニ高下	半要
四ニ本ニ上	清			▶	◉	▶	◇	◇	▶	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇
前唄				唄				唄																										
三貫				手事				手事				手事				五三貫四			手事			三貫			手事			手事			手事			手事
◉	▶	◇	▶	◇	▲	●	◇	○	▶	◇	▲	○	▲	●	◇	●	◉	◉	●	◉	◉	●	◉	◉	◉	○	◉	○	◉	◉	◉	◉	◉	◉
記念本に作曲せざりしもの																																		

河	岸	の	灯	千	代	田	城	噴	水	塔	馬	と	家	山	子	松	竹	梅	明	治	松	竹	梅	飛	千	鳥	里	の	暁	春	が	来	石	橋	初	雪	改訂	春の曲	改訂	夏の曲	改訂	王川	改訂	赦後獅子	里	絵の	芦
町田嘉章				今				今			今	儀	称	来		三津橋勾当			菊塚検校			菊田検校			松津検校			古川漠斧			宮城道雄			松坂検校			松吉沒検校検校補			全			因山勾当			峯崎勾当			松坂検校		
ヲ				チ				ハ			ロ				／	ハ			レ			レ			レ			ハ			レ			ハ			レ			レ			ロ			ロ			ロ		
ロ				ロ				ハ			ロ				／	ロ			ロ			ロ			ロ			ロ			レ			ロ			ロ			レ			ロ			ハ			ロ		
／				／				／			／				／	低三			／			低三			三上			低三			三下			本			／			／			本			三下			本		
／				／				／			／				／	平ノ			特レ			平ノ			平口			平ノ			平レ			半要			半要			半要			半要			平レ			平レ		
短律三下				／				現律三下			／				／	／			／			／			／			／			／			／			／			／			／			／			／		
／				灯段				／			狭衣				／	全			三部			全			／			／			／			／			／			／			／			／			／		
／				三段				／			／				／	／			／			／			／			／			／			／			／			／			／			／			／		
○	■	ロ	◇	◇				○								／	▶	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	▽	○	◇	▽	○	◇	▽	◇	▽	◇	▽	◇	▽	○	◇	▽	○	◉	▽	○	◉	▽	○	▲	◇	▽	▲	◇
天下に知られし古人の作曲の事に之あり				古今集中の歌を題として作りたるもの				古今集中夏の歌を題として作りたるもの			初夏の候					古今集中秋の歌を題として作りたるもの																																				
三段				清				前唄			唄					唄			唄			唄			唄			唄			唄			唄			唄			唄			唄			唄			唄			唄		
手事				手事				手事			手事					手事			手事			手事			手事			手事			手事			手事			手事			手事			手事			手事			手事		
◉	▲	◇	▲	◇	▲	●	◇	○	▲	●	◇	○	▲	●	◇	○	▲	●	◇	○	▲	●	◇	○	▲	●	◇	○	▲	●	◇	○	▲	●	◇	○	▲	●	◇	○	▲	●	◇	○	▲	●	◇	○	▲	●	◇
関忠の曙を終す																																																				
清				清				清			清					清			清			清			清			清			清			清			清			清			清			清			清			清		
三貫				三貫				三貫			三貫					三貫			三貫			三貫			三貫			三貫			三貫			三貫			三貫			三貫			三貫			三貫			三貫		
◇				◇				◇			◇					◇			◇			◇			◇			◇			◇			◇			◇			◇			◇			◇			◇		
長唄名曲																																																				

| | | |

| | | |

不許轉載

昭和三年四月十日印刷
昭和三年四月廿日発行

（非賣品）

金沢市上柿木畠一六
著作兼発行者 藤井信一
奈良市紀寺東口町七七八
印刷所 日詩社
振替大阪六九四九七番

金沢市上柿木畠一六
発行所 竹隆會
振替金沢七一四七番

終